The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー : 同性間の会話からみる日韓差とジェンダー
Author(s)	張, 允娥
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61398
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2016（平成 28）年度
大阪大学大学院　博士学位申請論文

友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー

―同性間の会話からみる日韓差とジェンダー―

大阪大学大学院文学研究科
文化表現論専攻
専門分野　日本語学

学籍番号　20B14811

張　允　娥

要旨

本研究は、ポライトネスを相互行為というレベルから捉え、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士の日常的な自由会話におけるポライトネスのあり方の類似性と多様性を分析するものである。従来のポライトネス、対照研究、ジェンダー差を探った多くの研究では、特定の場面（勧誘、断りなどの言語行動や話題）を設定して、それらの言語行動に見られるストラテジーを分析したり、ポライトネスをある特定の言語形式に結び付けられたものと捉えて分析したりすることが多かった。しかし、ポライトネスの研究において重要なのは、それぞれの相互行為においてどのような装置が、参加者の関係構築に寄与しているかという人間関係に果たす影響であると考える。そこで、本研究では、日韓男女のそれぞれの日常的な自由会話で、どのような相互行為が繰り返し観察され、友人との親密な関係構築に貢献しており、どのようなFTAが許されているのかを明らかすることで、いかなる行為が日韓の同性間の相互行為において親密な関係を構築する装置となっているかというポライトネスのあり方を実証的に探求し、ポライトネスのあり方に日韓という異なる言語・文化、およびジェンダーという要因がどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とした。

本研究で扱った会話データは、日韓の親しい間柄の男性同士と女性同士の日常的な自由会話（約500分）である（日韓それぞれ男性4組、女性4組、計16組の会話、それぞれ約30分～35分を文字化したデータ）。会話の協力者は、日本と韓国の20代の男女で、日本人は関西地方の話者を対象とし、韓国人は京畿地方の話者を対象とした。そして、日韓また男女の友人同士の自由会話でいかなる装置が、親密な関係を構築するストラテジーとして繰り返し観察されるかを探った。相互行為におけるポライトネスのあり方を明らかにするためには、一つの発話やごく短い発話のみの分析だけではなく、会話の全体的構造と会話の局所的に見られる相互行為との関連性に注目する必要があると考え、具体的には、会話の全体的な構造の観点からは、A. 会話展開の仕方と「語り」連鎖、B. 話題構成のあり方と話題管理、局所的な相互行為の観点からは、C. 直接話法、D. ＜理解＞、＜感情・感想＞の発話、E. ＜同意・共感＞の発話、F. ＜不同意＞、＜否定的評価＞の発話に注目して分析を行った。分析の結果、日韓差またはジェンダー差が観察された場合、ポライトネ

スのあり方に差が見られた理由は何かについて考察を行った。

本研究は、5部構成になっている。第Ⅰ部は序論とし、議論の前提となる先行研究を概観し、会話と話題区分調査の概要を述べ、本研究の分析の枠組みと注目する現象について述べた。まず、第1章では、Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論とインポライトネスについて説明した後、ポライトネス理論の観点から日韓差を探った研究と相互行為における男女差を探った研究を概観し、相互行為におけるポライトネスのあり方を分析する意義について述べ、本研究の分析の立場と課題を提示した。第2章では、本研究の議論と関わる日韓の対人関係の捉え方と、ジェンダー役割の社会化に関する研究について述べた。第3章では、本研究で扱う会話データと話題区分調査の概要と文字化資料に用いる記号について説明し、第4章では、本研究の分析の枠組み（内容と会話の参加形式の面から）と本研究で注目する現象について述べた。

第Ⅱ部から第Ⅳ部は各論であるが、それぞれ、日韓差が顕著なもの（第Ⅱ部）、日韓同様なジェンダー差が観察されるもの（第Ⅲ部）、日韓差とジェンダー差両者が認められるもの（第Ⅳ部）にわけて分析を行った。

まず、第Ⅱ部の第5章では、話題管理の観点から話題の情報源と「語り」の開始方法に注目し、日韓の会話に見られる特徴を分析した。その結果、話題構成のあり方と「語り」開始の仕方には、日韓差が見られ、話題が一人の会話の参加者の「語り」によって構成された場合、日本語の会話の場合、自己開始が圧倒的に多く観察されるのに対し、韓国語の会話では、他者開始がより多く観察された。このような相違は、日韓の自己呈示の程度の差と相手に踏み込む度合の相違から生じると考えられることを論じた。

第6章では、関心を表示するPPSに着目し、主に聞き手によって用いられる＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話が日韓の会話でどのように用いられているかについて述べ、それぞれの表現と発話様態との相関関係にはどのような日韓差が見られたのかを分析した。その結果、日本語の会話で聞き手は、話し手が語りやすい環境を作り上げることに重点をおいて相互行為に参加するのに対し、韓国語の会話において聞き手は、話し手の「語り」をじっと聞いてあげることが期待されるため、日本語の会話に比べ、＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話の相対使用頻度が低いことが明らかになった。第6章の分析結果は、第5章の結果と大きく関連しており、日韓の友人同士の会話に見られる配慮の仕方の背景には、

日本と韓国という異なる言語・文化で聞き手に期待される役割が異なっていることが要因として考えられることについて論じた。

次に、第Ⅲ部の第7章では、日韓ともに同様のジェンダー差が観察された会話展開の仕方と後続「語り」に注目し、女性同士の会話と男性同士の会話に見られる特徴について述べた。まず、男性同士の会話の場合、会話の参加者の役割関係が相対的に明確なソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで親密な関係を作り上げていくのに対し、女性同士の会話は参加者の役割関係が明確ではないデュオパートが中心となり、共同で何かについて話し合うという相互行為を通じて親密な人間関係を構築していることについて論じた。また、このような特徴は、後続「語り」がいかなるストラテジーとして用いられているかという面にも表れ、男性同士の会話で、後続「語り」は話題と関連する情報を提供し、会話展開に貢献するストラテジーとして用いられる傾向が強いのに対し、女性同士の会話で後続「語り」は、類似した経験談の語り合いによるバランスのストラテジーと共通点を主張するストラテジーが男性同士の会話に比べ高い割合で用いられる傾向があることが明らかになった。男性同士の会話では、むしろ不同意や反論を表す後続「語り」が多く観察されるが、FTAとして解釈されるよりは、新情報として捉えられているような相互行為が見られ、これは、女性同士の会話と男性同士の会話で用いられるポライトネス・ストラテジーに相違点が見られる可能性があることを示唆していることについて述べた。

第8章では、相手に共通の意見や感情を主張する＜同意・共感＞がそれぞれのパートでどのように用いられており、発話様態の使用割合の面から、男性同士の会話と女性同士の会話にどのような特徴が見られるかを分析した。その結果、ソロパートが中心で新情報を伝えることに重点をおく男性同士の会話では、相手の＜同意・共感＞の発話を新情報として捉えているため、それを大げさに強調することはなく、＜同意・共感＞を表す発話は単発的に用いられることが多いが、共通性に重点をおいて会話を展開させる女性同士の会話においては、相手の＜同意・共感＞の発話は、単なる新情報ではなく、互いの共通の意見や感情を強調できるポイントとして捉えられ、＜同意・共感＞の発話を互いに積み重ねて強調することで親密な関係を強めていた。その結果、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で＜同意・共感＞の相対使用頻度が高い結果が得られていると考えられるが、この結果は、女性同士の会話と男性同士の会話でどのような装置がポライトネスとして捉えられ

ているかが異なっていることを意味する可能性があることについて述べた。

第Ⅳ部では、日韓差とジェンダー差両者が認められる直接話法と＜不同意＞と＜否定的評価＞を分析した。

まず、第9章では、話し手と聞き手が用いる直接話法と、仮想フレームを構築する直接話法を分析した。その結果、日韓男女に関わらず、直接話法は自らの情報や経験談を相手と上手に共有し合うために用いられ、参加者の間主観性の構築に大きく寄与しているが、どのような人物の声を目立たせて語っていくかには日韓差が見られた。日本の友人同士の会話では、＜第三者＞の発話を直接話法で用いる割合が高く、「物語」の主人公として＜第三者＞を取り上げ、聞き手を楽しませ、笑いを生み出すストラテジーとして直接話法を用いる傾向があり、お互いに笑い合えるような経験談を共有し合うことで親密な関係を構築する傾向が強い。一方、韓国の友人同士の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられる割合が高く、話し手が主人公になり、聞き手の共感を導くストラテジーとして直接話法を用いる傾向が強く、韓国の友人同士は、相手と共感し合える側面を直接話法で強調することで、お互いの考えや感情を分かち合える自己呈示を行う傾向が強いことが分かった。このような差は、どのような自己呈示が友人同士の会話で適切とされているかということが日韓で異なっていることが要因としてあることについて述べた。また、聞き手の直接話法の使用傾向と仮想フレーム構築にはジェンダー差が見られ、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で、聞き手は直接話法を用いて話し手の「語り」に共感を示したり、「語り」をより具体化させることで話し手を支持していたり、「語り」の展開に貢献したりすることが多く、協力的に仮想フレームを構築していく相互行為を通じて、共通基盤を確認しつつ親密な関係を構築していく傾向が見られた。これは、女性同士の会話では、協力し合って共通の意味を作り上げることが親密な関係構築に重要な装置として用いられていることを示唆していることについて論じた。

第10章では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が「対立」関係を形成する場合と「冗談」として用いられている場合の相互行為、および「冗談」の種類と「冗談」フレームの構築プロセスを分析した。その結果、まず、コンテキスト化の合図の使用と「冗談」フレーム構築プロセスには、日韓差が見られた。日本の友人同士の会話で「冗談」を言う側は、自らの＜不同意＞や＜否定的評価＞が明確に「冗談」であることを表すが、韓国の友人同

士の会話では、真面目に発話される場合があり、その発話をどのように受け入れるかは聞き手の解釈に任せているような相互行為が観察された。また、日本の友人同士の会話では、相手の話につっこみを入れるような「冗談」が主に観察されるのに対し、韓国の友人同士の会話では、相手の本質的な事柄に触れる度合いが高い事柄が対象となる「冗談」が多く観察された。これは、日韓の親密な関係の間柄で、フェイスを侵害する行為に対する許容度の違いから生じていると考えられることについて述べた。また、＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話は、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察され、これらの発話が「対立」関係を形成する場合の相互行為と「冗談」として用いられている場合の相互行為にジェンダーによる違いが見られた。これらの違いは、親密な関係を構築あるいは維持するための装置が男性同士の会話と女性同士の会話で異なっていることから生じており、男性同士の会話では、＜不同意＞や＜否定的評価＞を用いた言い争いのような「冗談」の相互行為が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていることについて論じた。

第Ⅴ部の第11章では、各章で明らかになったそれぞれの分析結果をまとめ、日本と韓国、女性同士と男性同士の会話に見られるポライトネスのあり方が、日韓の対人関係の捉え方、ジェンダー役割とどのように関連しているのかについて総合的な考察を行った。また、異なる言語・文化とジェンダーという要因が、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのかについて考察を加えた。日韓男女の友人同士の会話に見られるポライトネスのあり方は、次のように考えられる。まず、友人という対人関係をどのように捉えるか、友人とどのような関係になろうとするかということの違いが、日本と韓国の友人同士の会話にみられるポライトネスのあり方の相違の背景にあると考えられる。日韓差は、会話で期待される役割、自己呈示の種類、話題の内容、特定の発話の対象になりやすい事柄、伝達やフレーム構築の仕方という異文化コミュニケーションの場面で誤解を招きやすい会話のマクロ的な部分に大きな影響を与えていた。同時に、それぞれの文化内で期待されるジェンダー役割の類似性が、日韓の男性と女性の相互行為におけるポライトネスのあり方に影響を与えており、その結果、日韓の女性同士の会話と、日韓の男性同士の会話に見られるポライトネス装置は、ジェンダー化された形で表れていると思われる。一方、ジェンダー差は、どのようなパートを主に展開させているか、どのような「語り」と発話を連鎖して親密な関係であることを強調しているのかという会話のミクロ的な発話連鎖の

仕方に著しく表れていた。このことから、日韓の女性同士の会話と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方には、日韓のそれぞれの言語・文化における対人関係の捉え方の違いというマクロ的な文化差と、文化的集団内に見られるミクロ的なジェンダー差が同時に影響を及ぼしており、日韓の男女は、マクロとミクロの部分への対応をしながら、それぞれ特有のやり方で友人とコミュニケーションを行うことで、親密な人間関係を維持また構築していることについて論じた。

本研究では、日本の関西地方の20代の男女と、韓国の京畿地方の20代の男女の親密な間柄の同性間の自由会話といったごく一部の地域の男女の会話を分析データとして扱っているが、全ての日本と韓国の男女が本研究の結果と同様なふるまいをしているとは限らない。しかし、本研究は、日韓差とジェンダー差の観点から日韓男女のそれぞれの自由会話に繰り返し観察されるポライトネスのあり方を探ることで、人との関わり方とポライトネスのあり方の多様性を理解する一歩として意味があると考えている。

目次

はじめに..... 1

第Ⅰ部　序論..... 4

第1章　ポライトネスと相互行為 5

1. はじめに.....5

2. ポライトネスとインポライトネス.....5

2.1 Brown & Levinson のポライトネス理論.....6

2.1.1 フェイスとストラテジー.....6

2.1.2 フェイス侵害度とストラテジー.....7

2.2 インポライトネス.....8

3. 日韓・ジェンダーとポライトネス.....10

3.1 日韓対照研究とポライトネス.....10

3.2 ジェンダーとポライトネス.....12

4. 相互行為におけるポライトネス.....14

5. 本稿の分析の立場.....17

6. 本研究の課題.....20

第2章　日韓の対人関係とジェンダー 23

1. はじめに.....23

2. 友人という対人関係.....23

2.1 関係構築と自己呈示.....23

2.2 日本と韓国における親密な関係 25

3. 社会とジェンダー.....27

3.1 ジェンダーとは.....27

3.2 ジェンダー役割の社会化.....28

４．本章のまとめ.....30

第3章　調査概要と文字化表記 31

1. はじめに.....31

2. 調査概要.....31
2.1 会話データの調査概要.....31
2.2 話題区分調査.....33
3. 文字化の表記.....34
4. 本章のまとめ.....34

第4章 本研究の分析の枠組み.....35
1. はじめに.....35
2. 内容の面からの単位.....36
2.1 話題.....36
2.2 物語と描写と評価.....37
2.2.1 物語.....37
2.2.2 描写.....39
2.2.3 評価.....41
3. 会話の参加形式の面からの単位.....42
3.1 話し手と聞き手、ターン.....42
3.2 発話.....44
3.3 会話の参加形式：ソロとデュオ.....46
4. 内容と参加形式.....49
5. 本研究で注目する現象.....51
5.1 会話の全体的な構造.....52
5.2 会話の局所的な相互行為.....53
6. 本章のまとめ.....56

第Ⅱ部 日韓差が顕著なもの.....59

第5章 話題構成と話題管理からみるポライトネス.....60
1. はじめに.....60
2. 先行研究と研究目的.....60
2.1 先行研究.....60
2.2 研究目的.....61
3. 分析方法.....62

4.　話題内の話し手交替からみる話題管理.....62
4.1　話題の情報源.....62
4.1.1　共通知識を基盤とした話題.....63
4.1.2　個人に関わる話題.....65
4.2　自己開始と他者開始と語り連鎖.....66
4.2.1　日韓の会話における自己開始と他者開始.....66
4.2.2　自己開始：話し手による話題管理.....67
4.2.3　他者開始：聞き手の話題管理.....70
4.3　分析のまとめ.....72
5.　話題管理と日韓の踏み込み度合.....72
6.　本章のまとめ.....76

第6章　関心の表示とポライトネス.....78
1.　はじめに.....78
2.　先行研究と研究目的.....79
2.1　先行研究.....80
2.2　研究目的.....81
3.　分析方法.....81
4.　＜理解＞と＜感情・感想＞とストラテジー.....83
4.1　＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度.....84
4.2　＜理解＞と＜感情・感想＞による関心の表示.....85
4.2.1　＜理解＞と聞き手の役割.....85
4.2.2　＜感情・感想＞の受け入れの仕方.....90
4.3　関心を表すストラテジーと発話様態.....93
4.4　分析のまとめ.....96
5.　日韓の良き聞き手.....97
6.　本章のまとめ.....98

第Ⅲ部　ジェンダー差が顕著なもの.....100

第7章　会話展開の仕方と語り連鎖からみるポライトネス.....101
1.　はじめに.....101

2. 先行研究と研究目的.....102
2.1 先行研究.....102
2.2 研究目的.....103
3. 分析方法.....104
4. 分析結果.....104
4.1 会話展開の仕方と参加形式.....104
4.1.1 「描写」の展開.....105
4.1.2 「評価」の展開.....108
4.2 「語り」連鎖とストラテジー.....111
4.2.1 「語り」連鎖のタイプと使用傾向.....111
4.2.2 関連する語りの提示と寄与：＜関連＞.....112
4.2.3 バランスと共有としての連鎖：＜類似＞.....114
4.2.4 共通基盤の主張としての連鎖：＜共通＞.....115
4.3 分析のまとめ.....119
5. レポートトークとラポールトーク.....119
6. 本章のまとめ.....122

第8章 同意・共感と共通基盤の主張 123
1. はじめに.....123
2. 先行研究と研究目的.....124
2.1 先行研究.....124
2.2 研究目的.....124
3. 分析方法.....125
4. ＜同意・共感＞とストラテジー.....126
4.1 ＜同意・共感＞の相対使用頻度.....126
4.2 ＜同意・共感＞による共通基盤の主張.....127
4.2.1 単発的な＜同意・共感＞.....127
4.2.1.1 ソロパートにおける単発的な＜同意・共感＞.....127
4.2.1.2 デュオパートにおける単発的な＜同意・共感＞.....128
4.2.2 ＜同意・共感＞の連鎖.....130
4.2.2.1 ソロパートにおける連鎖的な＜同意・共感＞.....130
4.2.2.2 デュオパートにおける＜同意・共感＞の積み重ね.....132

4.3　＜同意・共感＞と発話様態.....134
4.4　分析のまとめ.....137
5.　一致と関係構築.....138
6.　本章のまとめ.....139

第IV部　日韓差・ジェンダー差の両者が認められるもの..... 140

第9章　直接話法による共有と協力 141
1.　はじめに.....141
2.　先行研究と研究目的.....143
2.1　相互行為における直接話法.....143
2.2　研究目的.....145
3. 分析の対象.....146
3.1　直接話法の定義と分類基準.....146
3.2　直接話法の対象.....148
4.　日韓男女の会話における直接話法の使用実態.....149
5.　日韓差：話し手の直接話法とポライトネス.....149
5.1　直接話法の対象と割合.....150
5.2　直接話法とストラテジー.....150
5.2.1　日韓差（1）：＜第三者＞を目立たせた笑い合い 153
5.2.2　日韓差（2）：＜自己発話＞を目立たせた情緒的共感 159
5.2.3　日韓の類似点：＜自己心内＞と共感の場.....165
6.　ジェンダー差：直接話法による協力とポライトネス 168
6.1　聞き手の直接話法と共同作業.....168
6.1.1　聞き手が話し手の心内発話として発話する場合：推論による共感 169
6.1.2　聞き手が登場人物の発話として発話する場合：語りの具体化 170
6.1.3　聞き手が話し手として発話する場合：推論による展開 172
6.2　仮想フレーム.....173
6.2.1　一人による仮想フレーム構築.....174
6.2.2　二人による仮想のフレーム構築.....175
7.　分析のまとめ.....179

8. 考察.....180
8.1 日韓差：自己呈示の相違.....180
8.2 ジェンダー差：協力関係の構築.....182
9. 本章のまとめ.....183
第10章 対立と冗談からみるポライトネス.....185
1. はじめに.....185
2. 先行研究と研究目的.....187
2.1 先行研究.....187
2.1.1 会話における対立.....188
2.1.2 対立が冗談になる場合の要因.....189
2.2 研究目的.....191
3. 分析の対象.....192
3.1 ＜不同意＞と＜否定的評価＞の定義と分類基準.....192
3.2 ＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象.....194
3.3 「対立」と「冗談」の認定.....195
4. ＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の使用実態.....195
5. 日韓差：冗談フレーム構築と冗談の種類.....196
5.1 冗談フレーム構築：日韓による相違.....197
5.1.1 冗談とコンテキスト化の合図.....197
5.1.1.1 日本語の会話における「冗談」の合図.....197
5.1.1.2 韓国語の会話における「冗談」の合図.....199
5.1.2 フレーム構築プロセス.....200
5.1.2.1 日本語の場合：明確な合図の使用による構築.....201
5.1.2.2 韓国語の場合：曖昧な合図と受け手からの構築.....202
5.2 冗談の対象とフェイス侵害度.....205
5.2.1 日韓の類似点.....206
5.2.2 日韓差（1）：つっこみとしての冗談.....207
5.2.3 日韓差（2）：本質に触れる冗談.....208
6. ジェンダー差：「対立」と「冗談」の相互行為.....211
6.1 対立後の相互行為.....212
6.1.1 女性同士の会話の場合：交渉による展開と一致.....212

6.1.2　男性同士の会話の場合：交渉の失敗と展開.....214
6.1.2.1　曖昧な反応：同意も不同意もしない.....214
6.1.2.2　一方的な展開：不同意に触れない.....217
6.2　冗談の相互行為.....219
6.2.1　一方的な冗談：からかい.....219
6.2.2　相互的な冗談：言い争い.....222
7. 分析のまとめ.....225
8. 考察.....226
8.1　日韓差：フェイス侵害の許容度.....226
8.2　ジェンダー差：冗談関係の構築.....228
9. 本章のまとめ.....230

第Ⅴ部　総括.....232

第11章　日韓男女の会話におけるポライトネスのあり方.....233
1. はじめに.....233
2.　日韓の友人という対人関係とポライトネス.....234
2.1　日韓の友人同士の会話に見られる特徴.....234
2.2　日韓の友人同士という関係とポライトネス.....238
3.　ジェンダーとポライトネス.....239
3.1　男女の会話に見られる特徴.....239
3.2　ジェンダー役割とポライトネス装置.....243
4. 友人同士の会話に見られる日韓差とジェンダー差.....246
5. 本章のまとめ.....249
6. 今後の課題.....250

参考文献.....253

はじめに

人は常に人とのコミュニケーションを行う。コミュニケーションには、様々な種類があり、その目的も多様である。たとえば、我々は依頼や勧誘をするため、あるいは謝罪をするため人と会話を行う。しかし、我々は、依頼や勧誘などのように明確な目的がなくても、知り合いに会うと、あいさつをしたり、会話を行ったりする。人は、人とコミュニケーションを行うことで人間関係を構築していくが、様々な人とのかかわりの中で、我々は会話を行うこと自体を目的として人に会う場合がある。それは、親しい友人である。我々は、日常的に友人に会って様々なことについて楽しく話し合うが、我々が友人に会い楽しく会話ができる理由は、気楽に自分のことや世間話などができるからであろう。そして、それが可能であるのは、今まで互いに信頼関係や共通基盤を構築してきたからであると言える。

しかし、『親しい仲にも礼儀あり』のようなことわざもあるように、友人同士でも一定の配慮は必要である。では、人は様々な人間関係の中で、親しい友人をどのように捉えており、相互行為の中で親密な人間関係を維持あるいは構築するため、友人にどのように配慮しているのであろうか。そして、人は皆同様な方法で配慮していることを示しているのだろうか。

従来、コミュニケーション上の配慮に関する研究は、ポライトネス理論の観点から多く研究されてきた。特に、文化による配慮の仕方の相違点を探った対照研究の分野では、勧誘や断りなどといった特定の場面における言語行動が中心に分析されてきた。その結果、異なる言語文化によって配慮の仕方が異なっていることが指摘されている（任 2004、鄭 2009、金 2006）。一方、同様な言語・文化を共有する男女の配慮の仕方にも大きな相違が見られることが指摘されてきた。その中で、相互行為における男女の言語使用とポライトネスに着目し、量的に分析を行ったHolmes（1995）は、男性に比べ女性の方がよりポライトな話し方をしていると結論付けている。言語使用とジェンダー差について、宇佐美（2006a）は、ジェンダーと言語使用に関する多くの研究を取り上げ、それらの研究に見られるジェンダーと言語使用の関係には類似点が多いと述べ、言語文化は異なっても、男性に比べ、女性は柔らかく、丁寧に、あまり断定しないで、同意を求めるような話し方をすると指摘している。

以上のように、ポライトネスのあり方は、異なる言語・文化という要因とジェンダーという要因が大きく関わっていると考えられる。日本語と韓国語を対象として、それぞれの

言語における配慮の仕方やポライトネスを対照した研究では、異なる言語文化による相違点は明らかにしているものの、ポライトネスと関連性の高いジェンダーの観点を取り入れた研究は殆ど行われておらず、日韓の男性、日韓の女性の間に見られる類似点についてはまだ指摘されていない。また、特定の言語行動に見られる配慮の仕方の異同は明らかにしているが、自由会話のやりとりの相互行為に見られる配慮の仕方に注目した研究は行われておらず、親密な人間関係を構築してきた友人同士の自由会話にみられるポライトネスのあり方に注目した研究は見られない。また、ジェンダーとポライトネスに関する研究は、Holmes（1995）のように、ある言語的な項目やストラテジーが丁寧なものであると分類して量的な分析を行い、女性が男性よりポライトであるかどうかを判断したものが多いが、特定の言語上のふるまいがポライトであるかどうかを判断するのは、それぞれの会話の参加者であり、特定の言語項目や機能に固定的に備わっているものではないと考える。

本研究は、以上のような問題意識を出発点とし、日本と韓国の母語話者同士の女性同士と男性同士の日常的な自由会話に注目し、日本人同士と韓国人同士、女性同士と男性同士が相互行為の中で親密な人間関係を維持あるいは構築するため、互いにどのように配慮しているのかをポライトネス理論の観点から明らかにすることを目的とする。以下に、本研究の概要を提示する。

本稿の第Ⅱ部から第Ⅳ部では、以下の点に注目し分析を行う。

ⅰ．日本人と韓国人の、それぞれ友人同士の会話におけるポライトネスのあり方にはどのような類似点と相違点があるのか。

ⅱ．女性同士と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方にはどのような類似点と相違点が観察されるのか

以上の観点から分析した結果、各章では以下のような問題点について考察を行う。

ⅲ．日本人と韓国人の友人同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

ⅳ．女性同士の会話と男性同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

第Ⅴ部の総括では、各章で述べたことをまとめ、第2章で述べる日韓の友人という対人関係の捉え方とジェンダー役割の観点から総合的な考察を行い、以下の点について考察を加える。

ｖ．異なる言語・文化とジェンダーという要因は、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのか。

本研究では、上述したことを明らかにすることを目的とする。本稿は、次のような構成で成り立っている。まず、第Ⅰ部の序論では、第1章で、（イン）ポライトネスに関する先行研究、日韓差とジェンダー差に関する研究をまとめ、相互行為におけるポライトネスを分析する意義について述べ、本研究における分析の立場と課題を提示する。続く第2章では、ポライトネスのあり方に影響を及ぼすと思われる日韓の対人関係の捉え方と、ジェンダー役割の社会化に関する研究について述べる。第3章では、本研究で扱う会話の調査概要と文字化資料に用いる記号について説明する。また、第4章では、本研究の分析の枠組みと本研究で注目する現象について述べる。

第Ⅱ部から第Ⅳ部では、それぞれ、日韓差が顕著なもの（第Ⅱ部）、日韓同様なジェンダー差が観察されるもの（第Ⅲ部）、日韓差とジェンダー差両者が認められるもの（第Ⅳ部）にわけて分析を行う。

第Ⅴ部の総括では、 第Ⅱ部から第Ⅳ部で述べたことを総括的にまとめて考察を行い、ｖ．異なる言語・文化とジェンダーという要因は、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのかという問題について総合的に考察する。

第Ⅰ部　序論

第Ⅰ部では、具体的な分析に入る前に、第1章で、Brown & Levinson（1987）（以下B&L）のポライトネス理論とインポライトネスについて説明した後、ポライトネス理論の観点から日韓差を探った研究と相互行為における男女差を探った研究を概観し、相互行為におけるポライトネスのあり方を分析する意義について述べ、本研究の分析の立場と課題を提示する。第2章では、本研究の議論と関わる日韓の対人関係の捉え方と、ジェンダー役割の社会化に関する研究について述べる。第3章では、本研究で扱う会話の調査概要と文字化資料に用いる記号について説明し、第4章では、本研究の分析の枠組みと本研究で注目する現象について述べる。

第1章　ポライトネスと相互行為

1. はじめに

人は人との相互行為を通じて人間関係を構築していくが、相手との友好的な関係を構築あるいは維持するために、我々は相互行為の中で常に相手に様々な配慮をする。相互行為における配慮は、どのような言語形式を使うかということをはじめ、どのような話題を取り上げ、どのように会話を展開させるか、相手に好ましい人と思われるためにどのような反応を見せれば良いのかということまで様々な面で表れる。

「円滑なコミュニケーションを維持するためのストラテジー」としてポライトネスを捉えたB&L（1987）は、異文化間の言語行動を比較するに当たって、ポライトネス理論が妥当な予測を与えてくれると述べており、異なる言語・文化による差を分析したClancy（1986）は、「ある文化の中で言語が使用され理解される方法」をコミュニケーション・スタイルとして分析することが妥当であると述べている。ポライトネスのあり方とコミュニケーション・スタイルは、それぞれの文化で人間関係を構築するに当たって、期待され、また適切とされる方法を反映しているものであると言えるが、ミルズ　（2006:192）が「全構成員が丁寧さについて同じ価値と視点を共有しているとする丁寧さを扱う文献では、文化を均一なものとしがちである」と指摘し、また、Tannen（1990）が、男女のコミュニケーション・スタイルには差があることを明らかにしているように、ポライトネスのあり方やコミュニケーション・スタイルは、異なる言語・文化だけではなく、同様な文化内でも地域や年齢またジェンダーなどの要因によって異なった形で表れると考えられる。

その中で、ポライトネスを分析した多くの研究では、異なる言語・文化という要因とジェンダーという要因が大きく関連していることが指摘されている。本章では、まず、§2で、ポライトネスとインポライトネス理論について簡略に説明した後、§3では、ポライトネス理論の観点から日本語と韓国語の対照を行った研究を概観する。§4では、相互行為におけるジェンダー差を探った研究について述べ、§5では、相互行為という会話レベルでポライトネスを分析する意義について述べる。§6では、本研究の分析の立場と課題について述べる。

2.　ポライトネスとインポライトネス

ここでは、B&L（1987）のポライトネス理論とインポライトネスに関する研究について述べる。

2.1 Brown & Levinson のポライトネス理論

B&L（1987）のポライトネス理論では、「円滑なコミュニケーションを維持するためのストラテジー」としてポライトネスを捉え、人がポライトネスを求める重要な動機としてフェイスの概念を用いている。B&L（1987）がいうフェイスは、Goffman（1967）によって提示された概念に基づいたものであり、フェイスとは相互作用によって作られた自己イメージである。B&L（1987）は、フェイスを脅かす恐れのある行為をFTA（Face Threatening Act）と呼び、人は、円滑なコミュニケーションや人間関係を維持するために様々な配慮を行っており、相互作用の中で他者のフェイスを常に配慮しなければならないと述べている。

2.1.1 フェイスとストラテジー

B&L（1987）によると、人は以下のような二つのフェイスを持っている。

(1)ポジティブ・フェイス：他者に理解・共感されたい、好ましく思われたいという欲求

(2)ネガティブ・フェイス：他者に邪魔されたくないという欲求

これらのフェイスを脅かす行為がFTAであり、FTAを行う際には、FTAを軽減したり、FTAを補償したりするために何らかのストラテジーが必要となると述べている。FTAの種類には、次のような2種類がある。

（1）ポジティブ・フェイスに対するFTA

① 話し手のポジティブ・フェイス侵害：謝罪

② 聞き手のポジティブ・フェイス侵害：批判

（2）ネガティブ・フェイスに対するFTA

① 話し手のネガティブ・フェイス侵害：約束

② 聞き手のネガティブ・フェイス侵害：依頼

（B&L 1987:286）

B&L（1987）は、これらのフェイスを脅かさないように配慮する行為をストラテジーと呼んでいる。ストラテジーということばは、戦略という意図的な言葉遣いを思い浮かばせるが、滝浦（2008）も指摘したように、B&L（1987）がいうストラテジーは、慣習的・無意識的な使い分けなどもカバーする広い概念である。B&L（1987）は、ストラテジーを以下のように大きく5つに区別している。

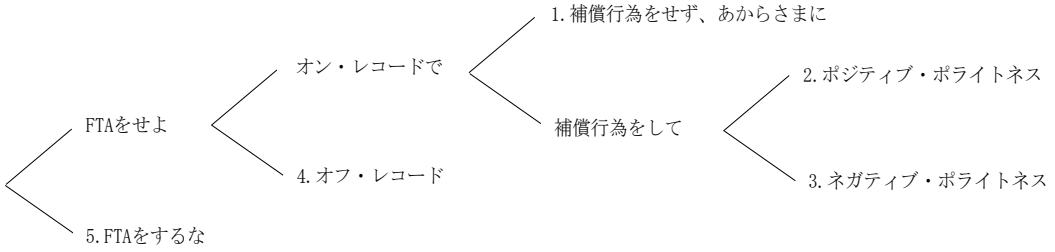

図1　FTAを行うための可能なストラテジー

（B&L 2011:89）

1. ストラテジー不使用：あからさまに言う。
2. ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下PPS）：聞き手のポジティブ・フェイス欲求を満たすストラテジーである。
3. ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下NPS）：聞き手のネガティブ・フェイス欲求を満たすストラテジーである。
4. オフ・レコード：ほのめかす。
5. FTAを行わない：行為を行わない。

以上のように、B&L（1987）は、配慮をしないあからさまな言い方から、最初からFTAの行為をしないというストラテジーまで、5つのストラテジーがあるとしている。

2.1.2　フェイス侵害度とストラテジー

これらのストラテジーの中で、どのようなストラテジーを用いるかには、ある行為がFTAとしてどの程度深刻であるかというフェイス・リスクの度合が関わるが、これは3つの要素が関与する。相手との距離（D）、力関係（P）、事柄の負担度（R）がその要素であるが、FTAの深刻度は、次のように算出されるとしている　（B&L 1987:76）。

$$W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$$

人はFTAを行う際、以上の３つの要素の積算からFTA度を算出し、その度合によってストラテジーを選択すると考えるのである。3つの要素が重くなればなるほど、FTAを行わないというストラテジーを用いる度合が高くなる。たとえば、友人には「おい、ちょっと来い」とあからさまに言うことが可能であるものの、先生に言うのは、ほぼ不可能である

ことを考えれば理解しやすい。また、ある行為自体が相手にとって負担度があまりにも高い場合は、その行為を行うことを求めること自体を放棄することもあり得る。このように、極端にあからさまに言うストラテジーと行わないストラテジーがあるが、その中間にPPSとNPSがある。

他者に理解・共感されたい、好ましく思われたいという欲求を満たすPPSは、B&L（1987）によると、主に親密な人間関係同士の間で多く用いられる。PPSは、相手との距離を縮めるストラテジーであり、主に相手に関心や共感を示したり、冗談を言ったり、褒めたりするもので、仲間であることを主張するストラテジーである。これらのストラテジーは、人間関係が近く共通基盤が強いからこそ用いられるストラテジーである。一方、他者に邪魔されたくないという欲求に対するNPSは、相手との距離を取ることで、敬避を示すストラテジーであると言える。NPSは主に慣習的な間接表現や謝罪の表現を用いて、敬意を示す発話である。そのため、上下関係を持つ間柄の会話や初対面の会話などで用いられる場合が多い。しかし、実際の相互行為の中で会話の参加者は固定的にPPSあるいはNPSを用いているわけではなく、話題の内容や場面によって相手との距離を調節しつつ、ストラテジーを選択することが多い。

以上のように、B&L（1987）は、人のフェイスに対する配慮という観点からストラテジーを設けており、いかなるストラテジーを用いるかは、上下関係、社会的距離、負担度と関係があり、異文化間の言語行動を比較するに当たって、これらの要因が妥当な予測を与えてくれると述べている。B&L（1987）が提示した理論の普遍性を基に、ポライトネス・ストラテジーの観点から異文化の対照研究が盛んに行われるようになり、次の§3で述べるように日本語と韓国語を対照した研究も多く行われている。

しかし、B&L（1987）の分析が数回の発話連鎖に留まっていることや、どのように配慮するかを話し手のみが見積もる形でしか示されていないことが問題として指摘されている（生田 1997、宇佐美 2008、三牧 2013、 Eelen 2001）。このような問題点を乗り越えるためには、ポライトネスを特定の発話のみではなく、話し手と受け手の相互行為という観点から分析する必要があるが、これについては、§5でより具体的に述べる。

2.2　インポライトネス

人は相互行為の中で相手に肯定的な反応を見せて支持することもあれば、相手に対して否定的な反応を見せたり批判したりすることもある。一般的に、相手に対する否定的な反応や批判は、相手のフェイスを侵害する行為であるとされるが、これらの発話は、実際の相互行為の中ではインポライトな行為として捉えられることもあるし、そうでないことも

ある。

B&L（1987）がいうFTA つまり相手のフェイスを侵害する行為であるインポライトネスに関する研究は、ポライトネスの研究ほど多くはなされてこなかったが、Culpeper（1996）は、相手のフェイスを気にしない段階から積極的に脅かす段階までその度合はあるものの、相手のフェイスをないがしろにする行為をインポライトネスとして捉え、「ポジティブ・インポライトネス・ストラテジー」のようにB&Lの理論を逆にしたインポライトネスの枠組みを提示している。Culpeper（1996）は、もともとインポライトな発話行為があると想定したLeech（1987）の考えに疑問を唱えており、そのようなものがある可能性もあるが、ごく少ないと述べている。そして、あるインポライトな行為がうそであることを全員が分かっているときの見せかけのインポライトな行為（mock impoliteness）は、社会的親密さを深める機能をすると指摘している。たとえば、親しい間柄では笑いながら「ばかやろう」と発話した場合、状況によって文字通り解釈されるのではなく、むしろ親密さを表す機能を果たすことがある。これは、Leech（1987）が、一見無礼なことが相手との連帯感を作り出す効果があると指摘したことに相当する。Eelen（2001）は、従来のポライトネス研究では、話し手がいかにポライトに発話するかのみに焦点が当てられ、インポライトな言語行動は見逃していると指摘しており、イン/ポライトネスを話し手の視点からではなく、聞き手の視点から捉える必要があると以下のように述べている。

Just as the focus on polite behavior causes impoliteness to disappear from the theoretical view, so the focus on the speaker's behavior causes the hearer's behavior to disappear. The hearer is absent from the theoretical models in the sense that politeness is always seen as behavioural practice with which the speaker tries to achieve something, rather than as a behavioural practice with which the hearer tries to achieve something. (Eelen 2001:104)

Eelen（2001）は、話し手が用いる特定の発話が何を意図して何を達成しようとしているのかだけではなく、聞き手が話し手の特定の発話をどのように評価して何を達成しようとしているかを考える必要があると主張している。つまり、話し手が「ばかやろう」と発話した場合、聞き手がその発話をいかなる行為として捉えて、どのように受け入れており、その行為が話し手と聞き手の関係にどのような影響を及ぼしているかという観点からイン/ポライトネスを捉える必要があると考えるのである。Beebe（1995）は、一見ポライトな発話がインポライトな行為であったり、フェイスを侵害したりする場合もあると指摘しており、インポライトネスがポライトネスの反対であると想定するのは問題があると述べて

いる。また、Keinpoinetner（1997）は、インポライトネスを、ポライトの観点からみた異常で、不合理なものとして扱うような価値的な意味合いをもって解釈すべきではないと述べており、Bousfield（2008）は、インポライトネスの研究を単なる発話レベルではなく、実際の相互作用の談話レベルまでに範囲を広げ、会話参加者間におけるインポライトネス・ストラテジー及びその反応を把握することが大切であると論じている。

以上のように、特定の発話や行為がポライトであるか、インポライトであるかは二極化したものとして簡単に判断できるものではないと考えられる。この点について、ミルズ（2006:185）が、「丁寧さと失礼さは、単一の発話や発話行為からのみでは分析できないし、私たちが話し手の意図だと想定するものだけで判断できないものである。失礼さは、集団や共同体の発話に対する理解や、会話者同士の長期的な談話方策との関わりあいなど、語用論的にしか理解されず、分析されない」と述べているように、特定の発話や行為がポライトであるかインポライトであるかは、発話形式や行為から判断できるものではなく、ある場面において会話者同士が特定の発話や行為をどのように捉えているか、特定の発話や行為がどの程度繰り返し観察されており、それらがもたらす効果がどのようなものであるかを重視すべきである。つまり、それぞれの人間関係や集団の中でどのようなふるまいがポライト/インポライトな行為として捉えられているかという言語使用が対人関係の調整にもたらす効果を話し手と聞き手との相互行為から分析していく必要があると考えられる。

3.　日韓・ジェンダーとポライトネス

§2では、ポライトネスとインポライトネスに関する研究を概観したが、ここでは、ポライトネス理論の観点から日本語と韓国語の対照を行った研究と相互行為の中でジェンダーとポライトネスの関係を探った研究を概観する。

3.1　日韓対照研究とポライトネス

日本語と韓国語におけるポライトネス・ストラテジーを対照し研究の多くは、断り（任 2004）、勧誘（鄭 2009）、依頼（柳 2012）、褒めことば（金 2006）、不満表明（李 2006、朴 2007）、否定的評価（林 2015）などといった特定の言語行動を分析対象とし、日本人と韓国人が同一の場面で用いるストラテジーの相違点を分析している。特定の目的を持った場面で用いられる表現を分析対象とするため、このような研究は、談話完成テスト（鄭 2009、李 2006、朴 2007）やロールプレイ（任 2004）、事前に話題を設定した会話（金 2006、林 2015、柳 2012）などといった方法でデータを収集した研究が多い。

まず、 断りを分析した任（2004）によると、日本に比べ、韓国の方がPPSの使用数が多く、断りの返答の内、対案提示表現の場合、日本語の方は抽象的な表現が多いが、韓国語の方は具体的な表現が多い。類似した結果は、金（2006）でも報告されている。金（2006）によると、韓国人は褒める際、なぜ褒めるのかまで詳しく自らの感想や感情を相手に伝えるのに対し、日本人はこの発話はほめであるとはっきり伝える傾向は強いものの、なぜ褒めるのかという根拠まで説明しない。また、ほめに対する返答にも日韓差が見られ、韓国人の場合、友人に褒められた場合、その発話を繰り返すことが多く、相手のフェイスを優先する謙遜の返答よりは、相手に褒められた自分のことを自ら評価するといった自分のフェイスを優先する返答が多いと指摘している。また、不満表明のストラテジーを分析した李（2006）では、韓国人に比べ、日本人の方がより間接的な表現を用いると指摘しており、朴（2007）によると、韓国人に比べ、日本人の方がFTAの度合が低いストラテジーを用いる。「相手の初対面の印象について、相手のくせについて、相手の性格について」と話題を提示して親しい友人同士の会話に現れた否定的評価を分析した林（2015）では、日本語話者の場合、受け手が自らの非を先に述べ、それに対して、行い手が同調するパターンが多いのに対し、韓国語話者の場合、受け手の発話・行動に対して行い手が否定・批判するパターンが多いことが指摘されている。また、FTA補償ストラテジーとして、日本語話者は、相手の否定的評価の後、自分もそのような側面を持っていることを述べる行為が多く、韓国語話者の場合、相手の他の側面を褒めることが多いと述べている。

一方、特定の場面を設定せずに日常的な自由会話で用いられるストラテジーを分析した研究は多くないが、その中で日韓のポライトネス・ストラテジーを対照した研究には、奥山（2005）、林（2010）がある。まず、奥山（2005）は、日韓の初対面の大学生同士の自由談話をデータとし、話題導入における質問と自己開始を分析対象としている。その結果として、韓国人の方はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、日本人はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが優勢であるという結果が得られている。次に、話者交替の際に生じる重なり発話に注目し、日韓両言語の友人同士の会話における重なり発話をポライトネス理論の観点から分析した林（2010）によると、日本人同士の会話における重なりの頻度は韓国人より2倍以上高い。そして、その重なりを分析した結果、日本人は「あいづちが重なる系」が韓国人より多いことから、重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多く注意を払うポライトネス・ストラテジーを用いると述べている。それに対し、韓国人は、「実質発話が重なる系」が日本人より多いことから、重ね手が発話を継続する場合が多いと指摘している。このことから韓国人は重ね手のポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジーをとっていると述べている。

以上、ポライトネス理論の観点から日本語と韓国語を対照した研究で共通する点は、日本人の会話がネガティブ・フェイスに対する配慮が優勢であるのに対し、韓国人の会話は、ポジティブ・フェイスに対する配慮が優勢であることである。しかし、対照を行った殆どの研究は、談話完成テストやロールプレイあるいは勧誘や初対面の会話など特定の場面を設定した実験的な会話をテータとした研究が多い。アンケートやロールプレイが、ある特定のタイプの発話を引き出すのには有効な方法であるものの、これらはインフォーマントが実際に用いることばというよりも、インフォーマントのステレオタイプ的な信念やことばを引き出そうとするものであることが指摘されている（ミルズ 2006）。§2で述べたように、実際、ある発話や行為がポライトであるかインポライトであるかは、研究者が判断できるものではないため、会話の参加者の相互行為からポライトネスを捉える必要があると考えられる。

また、B&L（2011）は、日本語版で「世界中の様々な言語・文化の中に観察されるポライトな語法に関する共通性を説明できる」と、ポライトネス理論の普遍性を強調しながら、「理論の動機となった言語・文化を超える類似性にはあまり注意が払われてこなかった」と指摘している。つまり、異なる言語・文化を超えた基底にあるフェイスに対する配慮の共通性にも注目していくべきであるということであるが、従来の対照研究の分野では、異なる言語文化を超えた人のフェイスに対する普遍性は見逃していることを意味する。確かに、上述した対照研究の殆どは、それぞれの言語文化に見られる相違点のみに注目してしまい、異なる言語文化を超えた人のフェイスに対する配慮の普遍性は、明らかにされていないことが多い。このような問題点を乗り越えるために、まずは、実験的な会話ではなく、日常的な自由会話に見られるポライトネスのあり方を詳細に探求していく必要がある。また、日韓男女という観点から、ポライトネスのあり方の多様性にも注目しつつ、普遍的な側面も明らかにしていく必要があると考える。

3.2　ジェンダーとポライトネス

上述したポライトネス・ストラテジーの文化差について、ミルズ（2006:192）は、「全構成員が丁寧さについて同じ価値と視点を共有しているとする丁寧さを扱う文献では、文化を均一なものとしがちである」と指摘しており、Okamoto（1995）の研究を取り上げ、日本の若者の、特に女性たちの話し方は年配の人とはかなりことなっていて、共同体全体における話し方のパターンを特徴づけるのは難しいと述べている。ミルズ（2006）が指摘したように、文化的集団内に見られるポライトネスのあり方は多様であるが、言語とジェンダーの関係を探った多くの研究では、ジェンダーという要因がポライトネスと大きく関

わっていることが指摘されており、ジェンダー差は、多くの言語・文化で同様な特徴を見せることが報告されている。まず、益岡・田窪（1992:222）は「一般に、女性的な表現は、断定を避け、命令的でなく、自分の考えを相手に押しつけない言い方をする、といった特徴を持つとし、これに対して、男性的な表現は、断定や命令を含み、主張・説得をするための表現を多く持つ」と指摘している。また、宇佐美（2006a）は、ジェンダーと言語使用に関する研究を取り上げ、それらの研究に見られるジェンダーと言語使用の関係には類似点が多いと述べ、言語文化は異なっても、男性に比べ、女性は柔らかく、丁寧に、あまり断定しないで、同意を求めるような話し方をすると指摘しており、多くの文化圏で、少なくとも表面上の言語行動を捉えた範囲では、女性は、男性より、より丁寧・ポライトであると述べている。

言語とジェンダーの関係を探った多くの研究の中で、ポライトネス理論の観点からジェンダー差を探った研究にはHolmes（1995）がある。Holmes（1995）は、インタビュー、会話、コーパスなど様々なデータを用い、発話権、質問、遮り、あいづちなどといった相互行為とヘッジや付加疑問文といった言語形式、また、褒めと謝罪といった言語行動まで様々な場面における男女の言語使用をポライトネス理論の観点から分析した。その結果、言語使用には様々な要因が関わっており、複雑な様相が見られるものの、女性の方がPPSの使用が多く、よりポライトな話し方をしていると結論づけている。

また、ポライトネス理論の観点を取り入れてはないが、女性同士の会話と男性同士の会話をデータとしたPilkington（1998）は、女性同士の会話は一人一人のターンが短く共同で話すことが多く、表面的には割り込みに見える形式は共同生産である場合が多いのに対し、男性の場合は、ポーズと、一人のターンが長く、反論を行うことも多い。また、話し手に対する聞き手の反応は女性に比べ少ないことと、場合によっては反応をしない時もあると指摘している。Coates（1989）は、女性同士の会話における話題展開、あいづち、発話の重なり、認識・様態モダリティ（Epistemic modal）のヘッジ（hedge）表現とブースター（booster）表現を分析した結果、女性同士の会話における発話の重なりやヘッジとブースターは相互協力的に話題を進め、皆で話し合うための機能を果たしていると述べており、ヘッジの場合、自分の主張を和らげるために用いられることが多いことが指摘されている。Coates（1996）は、女性同士の談話の特徴として、女性は協力して一つの発話を完成させたり、協力して言葉探しをしたりすることを挙げている。そして、女性同士の談話では、同時発話、未完成の発話、重なり発話が多く見られることから、女性の談話は共同のフロア（a collaborative floor）であると指摘している。

以上のような特徴から、女性同士は、協力的に会話を進めているのに対し、男性同士は

競争的に会話を進めていると指摘されている。これらの研究は、男性に比べ、女性が丁寧であることや女性同士と男性同士は会話を行う目的や仕方が異なることを明らかにしようとした研究である。しかし、このような女性同士、男性同士の会話の特徴は、協力的あるいは競争的というよりは、親密さを表す仕方が異なっているだけであることが指摘されている。たとえば、Kuiper（1991）はニュージーランドの男性は俗語などを用いて相手のフェイスを侵害することが親密さを表すストラテジーとして用いられていると述べている。このような男性の無礼や俗語の使用による親密さの表現は、Pilkington（1998）の研究でも報告されている。Pilkington（1998）は、男女に関わらず友人同士の会話の目的は連帯を築くことであると述べ、男性は競争や紛争を通じて相手と親密な関係を築いているとしている。そして、女性と男性は互いに異なるストラテジーを用いて、親密さを表していると指摘している。

以上のように、女性は協力的で男性は競争的であるとか、男性に比べ女性は丁寧であるという観点からのアプローチではなく、男女両方とも友人同士の会話では親密さを表しており、互いの親密な人間関係を維持するために配慮をしているが、どのような配慮やストラテジーが日韓男女のそれぞれの相互行為の中で有効な装置として用いられているかという観点からのアプローチが必要であると考えられる。これは、上述したように、 様々な言語使用を解釈するに当たって、それぞれの会話の参加者の解釈を重視すべきであることと同様である。つまり、日韓男女のそれぞれの会話の参加者の関係において、どのような行為がPPSやNPSまたはFTAとして捉えられ、どのような装置がそれぞれの会話の参加者の関係において適切だと捉えられているのかという観点から分析していく必要があると考えられる。このような観点を取り入れるためには、ポライトネスを会話という大きいレベルで捉える必要がある。以下の§4では、ポライトネスと相互行為の関連性について述べる。

4. 相互行為におけるポライトネス

人が人とコミュニケーションを行う際、相手に配慮するのは普遍的なことである。このような人間の配慮の普遍性に関する理論を立てたのが、上述した B&L（1987）のポライトネス理論であるが、B&L（1987）が提示したポライトネス理論は、どの言語社会においてもみられる配慮の仕方としての枠組みである。つまり、普遍的な配慮の仕方の枠組みを提示したのであるが、上述したように、何に対してどのように配慮するかという度合は、それぞれの言語文化において異なる。しかし、B&Lが扱った用例の殆どは一つの発話であり、多くても数回の発話連鎖に留まっていることやどのように配慮するかを話し手のみが

見積もる形でしか示されていないことが問題点として指摘されている。宇佐美（2008）は、話題導入やあいづちの使用頻度やスピーチレベルシフトなどの談話レベルでしか捉えられない語用論的なポライトネスにも注目する必要があると指摘しており、三牧（2013）は、初対面の会話から話題選択、スピーチレベルシフト、自己開示など談話レベルにおけるポライトネスのふるまいを実証的に分析している。また、生田（1997）も、前置きや謝罪が行われるかどうかは、言語行為の内容、相手への負担の度合、自己の利益度に影響され、その結果、相互行為の構成が異なっていると指摘している。このように、文や複数の発話連鎖だけではなく、より大きい単位のレベルから、ポライトネスを捉える必要があることが指摘されている。

一方、ポライトネス理論の観点からの研究ではないが、実際の相互行為に注目して、コミュニケーション・スタイルや会話のルールと構造を明らかにした研究も盛んに行われてきた。 人の相互行為に注目したこれらの研究は、研究の目的に応じて、様々な場面や人間関係における会話をデータとして用いているため、ポライトネスと関連するところが多い。

まず、異文化コミュニケーションに注目した研究では、それぞれの文化で好まれるコミュニケーション・スタイルには相違があることが指摘されてきた。Clancy（1986）によると、スタイルとは、文化の中で人々や人々のかかわり合い方に関して共有される信条から生じるものであり、コミュニケーション・スタイルとは「ある文化の中で言語が使用され理解される方法」である。コミュニケーション・スタイルは、日韓で異なることも指摘されており、初対面の会話における疑問表現を分析した 任・井出（2004）によると、日本人は「待ち」手法を好むのに対し、韓国人は「攻め」手法を好むという。このように、コミュニケーション・スタイルが異なるとミスコミュニケーションが起こることもあるが、Scollon & Scollon（1995）は、基本的にメッセージをどのように受けとってほしいのかは、メタ・メッセージで示されていると述べている。コミュニケーションにおいてメタ・メッセージは、話し手が発話意図をどのように伝えるかということから、聞き手が話し手の発話をどのように解釈すればいいかという推論までに関わっている。相互行為の中で、参加者の間に誤解が生じたり、会話が円滑に進行したりする理由は何かを考えたGumperz（1982）は、人の発話は、社会文化的な前提を利用して推論することによって解釈され、その際に用いられるのがコンテキスト化の合図[1] （contextualization cues）であると述べ、どのようなコンテキスト化の合図が用いられるかは、それぞれの社会文化によって異なると指

[1] 「コード・スイッチング」や「韻律的現象」や「定型表現」など

摘している。

発話の意味を解釈するもとになる相互行為的な解釈の枠組をフレームと定義したTannen & Wallat（1993：60）によると、発話を理解するために聞き手（話し手）はいかなるフレームが意図されたかを理解する必要があり、どのようなフレームで発話されたかを解釈することでコミュニケーションは進行していると述べている。また、相互行為に見られる話者の会話の特徴を、対人関与（involvement）の程度の観点から「会話スタイル」を「高関与スタイル[2]（high-involvement style）」と「高配慮スタイル（high-considerateness style）」に二分類したTannen（1984）は、次々と質問をする話し方（machine-gun question）は「高関与スタイル」の特徴であるとし、これらの話し方は情熱的な話し方であると述べており、控えめな話し方を「高配慮スタイル」としている。そして、共通の文化的背景を持つ話者同士は、話題管理の仕方や聞き手の言語行動など相互行為の中のコンテキスト化の合図の意味の解釈に問題が殆どないが、異文化の話者同士の会話では、解釈の基準が異なるため誤解が起こる場合があると指摘している[3]。

次に、日常的な会話の構造やルールを見出す会話分析の分野では、ターン交替、行為の構成、連鎖組織、トラブル、語彙の選択、全体的な構造という6つが主なテーマとして挙げられている（Schegloff 2007）。Schegloff（2007）が取り上げたこれらの6つはどのような会話でも見られる一般的な特徴であるが、今田（2015）によると、これらは、会話の参加者の対人関係の構築に関わる装置である。その一つとして、Sacks et al.（1974）が明らかにした会話の基本的な構造である隣接ペアは、「質問―応答」や「勧誘―受け入れ」のように基本的に二つの発話からなる類型のことであるが、 会話は基本的に「質問 - 応答」「依頼 - 受諾/拒否」などのような第1ペアと第2ペアという「隣接ペア（adjacency pair）」によって構成される（Schegloff & Sacks 1973）。第1ペア部分に対する第2ペア部分のあり方は一つではない場合が多く、たとえば、「依頼−受諾」と「依頼−拒否」という二つの連鎖があり得る。この場合、「受諾」は選好（preferred）される応答であるのに対し、「拒否」は選好されない（dispreferred）応答である（Levinson 1983）。Levinson（1983）によると、選好されない応答が発話される場合に見られる特徴には、沈黙や前置き、なぜ選好されない応答をするのかに関する説明、第1ペアに応じた間接的な拒否がある。

選好される応答の際には見られないこのような特徴は、相手のフェイスを侵害する行為に付随するという面でポライトネスとの関係が深い。また、会話の中で「物語」がどのよ

---

[2] 「高関与スタイル」と「 高配慮スタイル」は、三牧（2013）の訳。

[3] Tannen（1984）によると、高関与スタイルは、ニューヨーク市ユダヤ系の話者に多く見られるが、 高配慮スタイルはカリフォルニア出身の話者とイギリス人に多く観察される。

うに連鎖されているのかを分析したSacks（1992）は、先立つ「第1物語」との類似性を明示して語られる「第2物語（second story）」は、偶然なものではなく、「第2物語」の話し手が「第1物語」」を分析して聞き、自らの「第2物語」を産出していると指摘しており、Coates（1996）によると、会話の参加者が次々と自らの類似した経験談を語ることは、互いの繋がりを強め、連帯感を高める行為である。また、会話でしか観察されないあいづちや繰り返し、重なりや先取りの発話は、会話の参加者が会話に協力的であることを表していることも多く（Coates 1996）、丁寧ではないとされる攻撃的な態度や否定的な評価の発話は、会話においては親密な人間関係の構築に大きな寄与をする冗談として用いられることもある（大津 2004、2007、Straehle 1993、Norrick 1993）。また、「物語」を語る際、多く観察される直接話法は、聞き手の関心を引き、話し手と聞き手の感情的なかかわりを強化することを可能としたり（Tannen 1989）、特定の出来事に聞き手がアクセスすることを可能にしたりする（Holt 1999）。このように、会話レベルでしか観察されない様々なふるまいは、相手に対する配慮のあり方を反映しており、我々は、日常的な人との相互行為の中で、相手に配慮しつつ人間関係を構築していると言える。

以上のように、一つの発話や言語項目または特定の言語行動に焦点を当てポライトネスを分析するのではなく、会話の参加者が互いに話題を探り、協力して会話を展開させていく日常的な自由会話に焦点を当て、対人関係構築という観点からポライトネスのあり方を探求にしていく必要があると考えられる。

5. 本稿の分析の立場

以上、ポライトネスとインポライトネスに関する研究、ポライトネス理論の観点からの日韓対照研究、ジェンダーとポライトネスに関する研究と、相互行為を分析した研究を概観し、日常的な相互行為に焦点を当てポライトネスの様相を詳細に分析していく必要があることについて述べた。日韓差の観点であれ、ジェンダー差の観点であれ、論争になることの一つはデータの解釈である。特に、会話の参加者の属性、人間関係、場面という変数をどのように扱うかが問題になる。たとえば、親密な人間関係を構築してきた日韓の同性間の相互行為で繰り返して観察されるパターンが、日韓またジェンダーによって異なっている場合、そのパターンが意味することをどのように説明すればよいのかということが問題になる。

この点について、会話や談話を分析するアプローチには、たとえば会話分析や批判的談話分析があるが、変数やデータの解釈に関して、これらの二つのアプローチは違った観点を持っている。これらの二つのアプローチの特徴を以下に挙げる。

・会話分析（以下CA）[4] では、

(a) 変数がすでにあるものとして会話を分析するのは、分析上適切ではないという立場にとる。

(b) 日常的な相互行為のデータに見られる発話連鎖のパターンを記述し、会話のルール（秩序）を考察する

(c) 研究者の判断はできるだけ排除し、発話が適切であるかどうかは、会話の参加者のやりとりから分かるものであるとしている。たとえば、質問という発話は、その発話の次に応答という行為があることで、会話の参加者がその発話を質問として理解していると解釈できることになる

・批判的談話分析（以下CDA）[5] では、

(a) 文脈は、背景的な前提や共有した習慣、さらにジェンダー、人種、階層、民族などの変数から成り立っていると一般的に想定する（ミルズ 2006:63）。つまり、社会の支配的なイデオロギーが人々のふるまいに影響を与えるという考え方であると言える。

(b) 話し言葉、書き言葉両方に適応できる理論であり、組織化（制度的）された談話が主に分析され、特にメディアの言語に関心を示しており、これはイデオロギー的側面に対する CDA の関心の反映である（カメロン 2012:181）。

(c) 特定のテクストの中に規則的なパターンを見つけ、次にそのパターンの解釈、つまりその意味とイデオロギー的重要性の説明を提示する（カメロン 2012:204）

まず、エスノメソドロジーからの影響を受けたCAは、性急な理論構築は避け、自然に交わされた会話のデータを対象とし、繰り返し起こるパターンを考察する（Levinson 1983）。そして、会話そのものから読みとることができないかぎり、変数は考慮に入れないことが多く、会話データに見られる発話連鎖のパターンの記述が中核になる。確かに、人種や階層またジェンダーのような変数は、人の評価に依存したものであり、人の評価というのはステレオタイプに依存したものである。しかし、すべての変数を完全に排除することによって、これらの研究は、それぞれの言語・文化や地域に見られる特徴を見逃し、単なる実態を報告する実証的な分析に留まってしまう恐れがある。これは、社会的な動物である人は、ステレオタイプや支配的なイデオロギーから完全に自由であるとは言えず、常

---

[4] Sacks（1992）やSechegloff（2007）などのようなCAの原則を厳密に適応した研究を指す。

[5] Fairclough（1995）やVan Dijk（1993）などCDAの立場を明確に提示した研究を指す。

に影響されていると考えられるためである。たとえば、会話分析の手法を用いて、割り込みと力関係（男性支配）を分析したZimmerman & West（1975）やFishman（1983）と、女性の同時発話（重なり）が協力的な機能を果たしているとしたCoates（1996）の研究は、会話の参加者の属性（ジェンダー）や参加者の力関係が、発話権やターン交替のシステムに影響を及ぼしていることの証明であると言える。

一方、構築主義を具体的に言語分析に生かした枠組である（中村 2001）CDAの変数の解釈に対して、Cameron（1998）は、構造的で政治的な言葉でしっかり根拠づけられていても、男性支配と女性従属という前提は、漠然としていて、それぞれの文脈から特定の推論を引き出すことはできないと指摘している。Sechegloff（1997）でも、人種や階層またはジェンダーといった変数の解釈に対して、単に議論になっている主題をめぐり、自分たちの態度を参加者におしつけているにすぎないと論じている。Cameron（1998）やSechegloff（1997）が、CDAで主張される解釈に問題があると指摘したのは、特定の発話や表現を受け手がどのように理解しているかについての証拠が示されていないためである。

以上のように、CAのアプローチは、変数を完全に排除してしまうことによって実証的な研究にとどまることが問題点として指摘できる。一方、CDAの場合、変数の解釈に証拠がないことが問題として指摘されている。しかし、これらの二つのアプローチには、それぞれ良いところがある。まず、CAの立場について、串田（2006）は、主流の社会学が社会構造は局所的な相互行為をこえた「外部」にあるものと見なしてきたのに対し、会話分析ではそれを相互行為の「内部」において表示され、構成されるものとして理解するのであると述べている。CA のアプローチでは、社会文化的な文脈で、会話の参加者にとって特定の発話が適切であるかどうかということは、相互行為のうちに現れており、その相互行為から判断できるものであるという立場をとるが、CAの観点から相互行為を詳細に分析することで、主観的な判断を避けることができる。一方、CDAの良いところは、繰り返し観察できる特定のパターンと社会のイデオロギーの関連性を明らかにすることによって、当たり前とされている物事の裏に隠された関係や前提を明らかにすることを目指している点で、言語とジェンダー研究に有益な枠組みであることである（中村 2001）。

ミルズ（2006）は、変数や人種、階層、ジェンダーのステレオタイプは、他者が私たちのことを考えたり、私たちの会話を判断したりする方法を決定づけるかもしれないと述べ、階層、人種、ジェンダーは、身につける談話スタイルのタイプに影響を与えるような、ある種の資源への接近可能性をも決定していくと指摘している。そして、変数を、やりとりに関わる方向づけをするものとみなし（CA）、談話の産出と解釈に実質的な影響を与えるものとみなす（CDA）アプローチ、つまり、CAとCDAを融合する分析が必要であると

指摘している。類似した見解は、宇佐美（2006b）でも指摘されている。宇佐美（2006b）は、会話内の文脈などの要因を考慮に入れながらも、あくまで会話というやりとりの中における発話機能を分析する「ローカル分析」と、発話のやりとりに影響する当該会話外の要因（話者の年齢・社会的地位・性等）を考慮に入れた「グロ―パル分析」双方の観点から総合的に分析することが重要であると論じている。

本研究でも、日韓男女の会話データを解釈するに当たって、両方の観点を取り入れた分析が必要であると考える。これは、本章で強調してきたように、ポライトネスは、研究者の判断ではなく、相互行為における参加者のやりとりからどのような装置がPPS、NPSまたはFTAとして捉えられているかを重視すべきであるという点でCAの観点から詳細に分析を行う必要があると考えるためである。一方、CA手法で明らかにされた日韓またジェンダーに見られる典型的なパターンを解釈するに当たっては、次章で述べる日韓の対人関係の捉え方やジェンダー役割という社会的なイデオロギーが会話にみられる特定のルールに影響を与えることを視野に入れることが重要である点でCDAの観点が有効であると考えるためである。これらの二つのアプローチからデータの分析や解釈を行うことによって、日韓男女の自由会話におけるポライトネスの普遍性と多様性を詳細に記述することが可能であり、次章で述べる日韓の対人関係の捉え方の違いと、ジェンダーに関するイデオロギーが相互行為にどのような形で表れているかを探求していくことができると考えられる。

6. 本研究の課題

以上、本章では、ポライトネスとインポライトネスに関する理論と、日韓対照研究、さらにジェンダーと相互行為に関する研究を概観し、本研究の分析の立場について述べた。それぞれの節で指摘したように、従来の研究には次のようないくつかの問題点が存在する。

ⅰ．ポライトネス、対照研究、ジェンダーに関する多くの研究では、ポライトネスをある特定の言語形式に結び付けたものとして捉えている。

ⅱ．ポライトネスを対照した研究では、特定の発話を引き出すためアンケートや実験的な会話がデータとして用いられることが多く、特定の言語行動のみに焦点を当て、一部のストラテジーを分析した研究が殆どであるため、実際の相互行為に見られるポライトネスのあり方はまだ明らかにされていない。

ⅲ．対照研究では、それぞれの言語文化に見られる相違点のみが注目されてきた。その

ため、フェイスに対する配慮の仕方の普遍性は明らかにされていないところが多く、日韓の男性、日韓の女性の間に見られる類似点に見過ごされている。

ⅳ．ジェンダーとポライトネスに関する多くの研究では、女性は協力的で男性は競争的であるとか、男性に比べ女性は丁寧であるという観点から分析されてきたため（Ⅰの問題とも関わる）、実際、男女が親密な人間関係を構築あるいは維持するために、どのような装置をポライトネス・ストラテジーとして捉えているのかは、まだ明らかではない。

ポライトネス、日韓対照研究、ジェンダー差に関する研究では、以上のような問題点があると思われるが、強調してきたように、これらの問題点を乗り越えるためには、以下のような分析が必要である。

Ⅰ．会話の参加者が互いに話題を探り、協力して会話を展開させていく日常的な自由会話に焦点を当て会話レベルからポライトネスのあり方を探求していく必要があると考えられる（ⅰとⅱ）。

Ⅱ．ポライトネスをそれぞれの会話の参加者の判断によるものとして捉え、日韓男女の会話でどのような装置がPPSやNPSまたはFTAとして受け入れられるのか、どのような発話や装置がそれぞれの会話の参加者によって適切だと考えられているのかという対人関係構築という観点からポライトネスのあり方を詳細に分析する必要があると思われる（ⅰとⅳ）。

Ⅲ．文化的集団内に見られるポライトネスの多様性にも焦点を当てる必要があると考えられる。その出発点として、本研究では異なる言語文化に見られる相違点と、日韓同様に観察されるジェンダー差に注目し、ポライトネスのあり方の多様性を探っていく必要がある（ⅲ）。

Ⅳ．日韓また男女の会話に見られた典型的パターンの解釈においては、日韓というそれぞれの文化的背景と社会的な産物であるジェンダーという要因が、会話の参加者の相互行為に影響を与えている可能性について考察を行い、ポライトネスのあり方と社会との関係を明らかにしていく必要があると考えられる。

以上のように、本研究は、ポライトネスを相互行為というレベルから捉え、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士の自由会話におけるポライトネスのあり方の類似性と多様性を分析するものである。しかし、本研究では、日本はNPSが優勢で、韓国はPPSが優勢であるとか、男性に比べ、女性の方がポライトであるなどのような一般化した主張をするつもりはない。というのは、まず、本研究では、非常に限られた地域の少数の日本語話者の友人同士の会話と韓国語話者の友人同士の会話（日本の関西地方の20代の男女と、韓国のソウルと京畿地方の20代の男女）を分析データとして用いているため、全ての日本と韓国の男女が本研究の結果と同様なふるまいをしているとは言い難いためである。これは、上述してきたように、同一の文化内にも多様なポライトネスのあり方が存在するとともにどのような発話や装置が、それぞれの会話の参加者によって適切または親密さを表す装置であると判断されているかは異なっており、相互行為に見られる様々なポライトネスの様相は、簡単に比較できるものではないと考えるためである。また、ポライトネスの研究において、むしろ重要なのは、それぞれの会話においてどのような装置が参加者の関係構築に寄与しているかという人間関係に果たす影響であると考えるからである。本研究では、日韓男女のそれぞれの相互行為の中で、どのような行動や装置が繰り返し観察され、友人との親密な関係構築に貢献しており、どのようなFTAが許されているのかを明らかすることで、いかなる行為が日韓の同性間の相互行為において親密な関係を構築する装置となっているかというポライトネスのあり方を実証的に探求し、ポライトネスのあり方に日韓という異なる言語・文化やジェンダーがどのような形で表れているのかを考えていきたい。

本研究は、以上のような問題意識を出発点とする。次章では、本研究の議論に関わる日韓における対人関係の捉え方とジェンダー・イデオロギーに関する研究を概観する。

第2章　日韓の対人関係とジェンダー

1. はじめに

本研究では、親密な人間関係を構築している20代の男女について、日本と韓国それぞれの同性間の会話を分析データとして扱う（本研究で分析を行う会話の情報については第3章で詳しく述べる）。本章では、本研究の議論にかかわる日韓の対人関係の捉え方とジェンダー役割について述べる。まず、§2では、友人という対人関係はどのようなものであり、日韓で親密な人間関係を構築してきた友人という対人関係はどのように捉えられているかについて述べた後、§3では、ジェンダーとはどのようなものであり、ジェンダー役割はどのように習得されているかについて述べる。

2.　友人という対人関係

相手をどのように配慮するかということは、相手との対人関係が大きく関わる。B&L（1987）のポライトネス理論は、基本的に相手との距離、力関係、事柄の負担度という三つの要素が配慮の仕方に関わるとしている。言い換えると、相手との親疎関係や上下関係といった人間関係、および特定の行為が相手にどのくらい負担になるかということであるが、これらの要因が配慮の仕方にどのくらい影響するのかは、もちろんそれぞれの言語文化によって異なる。

日本と韓国において「親密な関係」という対人関係の捉え方は異なっていることが指摘されているが、以下では、まず、様々な人間関係の中で、友人同士という関係はどのように構築されたものであるかについて述べた後（§2.1）、日本と韓国における対人関係の捉え方に関する研究を取り上げる（§2.2）。

2.1　関係構築と自己呈示

様々な人間関係の中で、友人同士という親密な人間関係はどのように構築されたものであろうか。人間関係を重視して談話を分析したSvennevig（1999）は、次の表1のように、連帯感、親密さ、好感という3つの次元から社会的な距離を捉えている。

表1　Relational dimensions involved in different interpersonal relationships

対人関係 (Relationship)	連帯感 (Solidarity)	親密さ・親しさ (Familiarity)	好感 (Affect)
知り合い(Acquaintance)	＋	＋	＋/－
友人(Friendship)	＋＋	＋＋	＋
恋愛関係(Romantic partners)	＋＋（＋）	＋＋	＋＋

（Svennevig 1999:36）

Svennevig（1999）によると、まず、知り合いではない場合、挨拶をする義務はない。しかし、知り合いの関係である場合は、互いに挨拶し、話す資格がある。連帯感と親密さ・親しさと好感という3つの要素は、関連し合うことが多いが必ず共起する必要はない。たとえば、連帯感の関係は、同じ会社の同僚の間でも生まれるが、親密さと好感が必ず必要なわけではなく、権利や義務を規範的に要求する関係である。一方、親密さや親しさに結びついた関係は、互いに関する個人的な事柄を共有し合う関係である。好感で結びついた関係は、互いに魅力を感じている関係であり、恋愛関係にとって好感は大事な要素になる。このように、これらの3つの要素は深く関連し合うことが多いが必ず共起する必要はない。

今田（2015）が指摘したように、友人と知人との違いを測る明確な尺度は存在せず、この人は友人、この人は知人という漠然としたイメージでしか捉えることができないが、西田（2004）によると、人間関係は不確実性を減少したところから生まれる。つまり、互いの情報を知り合うことが人間関係の構築に重要な要素であるということであるが、心理学の分野では、自らの態度や意見などの個人的な情報を他者に示す自己開示（self-disclosure）が対人関係に大きく関わるとしている。一方、親しさとは、一体性を指すとしているBrown & Rogers（1991）によれば、素直な自己開示は違いを生み出し、一体性を妨げる。このように、自分の情報を言語的に伝える自己開示は、不確実性を減少させ、親密な人間関係の構築に必然的なものであると同時に、相手との違いを生み出し一体性を妨げることもある。

自己開示と類似した概念として社会学の分野では、自己呈示（self-presentation）という用語があるが、ゴッフマン（1974）によると、我々は相互行為をスムーズに進行させるために、様々な自己の側面の中でそれぞれの場にふさわしい印象を造り上げるために、意図的・非意図的に他者に与える自己のイメージを操作している。Svennevig（1999）も自己というのは、他者との相互行為の中で社会的に創造されたイメージであるため、開示と

いうよりは呈示また構築（constructed）というべきであると述べている。

自らの情報を相手に提供する行為が、親密な人間関係構築に大きな寄与をすることには異論がないものの、個人的な情報を提供することを巡る用語は、研究の立場によって異なる。初対面の会話における個人的な情報の提供を分析した研究は、それぞれの文化における自己紹介のパターンの違いやどのくらいの情報を提供するかということに注目しているため、自己開示という用語を用いることが多く、初対面の会話を分析した三牧（2013）は、自己呈示は、「印象操作」という意味でも使用されることが多いため、自己開示という用語を採用すると述べている。一方、留学生と日本人学生の会話から、友人関係に至る関係構築のプロセスを分析した今田（2015）は、自己紹介場面において、彼らがその場の状況やメンバーとの相互行為のかかわりの中でいかに自己を呈示し、いかなる関係を構築しようとしているのかという観点から、自己呈示という用語を採用している。

本研究では、日韓の女性同士と男性同士の友人という親密な人間関係のもとでの相互行為において、自らの情報提供が、親密な人間関係の構築に寄与するストラテジーとしてどのように用いられているかという立場に立って分析を行うため、 自己呈示という用語を用いることにする、これは、友人同士の相互行為において、どのように自らの事を語るかというのは、自己イメージとの関わりが強く、相手との関係の構築のために操作する側面があると考えるためである。

以上から、友人と知人との違いを測る明確な尺度はないものの、「友人」とは知り合いに比べ、連帯感、親密さ・親しさ、好感の度合が高く（Svennevig 1999）、自らの情報を打ち明けることが可能な人間関係のことをいうと考えられる。以下では、日本と韓国で、親密な人間関係とはどのように捉えられているかについて述べる。

2.2　日本と韓国における親密な関係

人類学者のHall（1959）によると、個人間の距離の遠近には型があり、その距離は民族や言語社会によって異なる。齊藤（2005）は、対人距離に関するさまざまな研究からデータを拾ってみると、日常的な会話をする際の日本人同士の距離は約1メートル、韓国人は片腕を伸ばした長さ（70センチメートル前後）が相場のようであると述べている。それでは、日本と韓国における友人同士という親密な人間関係はどのようなものであろうか。

任・井出（2004）は、日韓の対人関係の違いがあると指摘し、以下の図1と図2を提示している。図1は、任・井出（2004）によるものであり、図2は、三宅（1994）によるものであるが、任・井出（2004）は、三宅（1994）の図2と比較し、韓国の우리を強調する意図から、図1と図2を提示している。

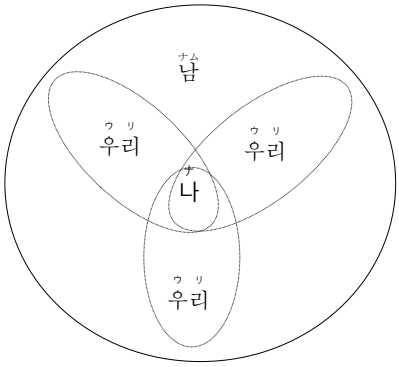

図1　韓国の＜우리＞と＜남＞
任・井出（2004）

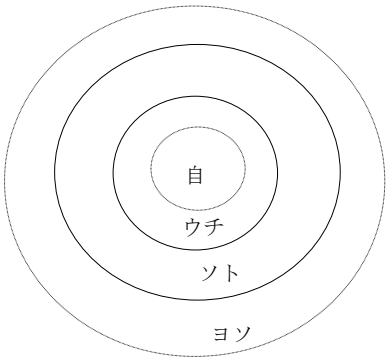

図2　日本人の「ウチ・ソト・ヨソ」モデル
三宅（1994）

任・井出（2004）によると、日本の場合、自己とウチの関係は点線で示されるように境界線が曖昧な関係である。一方、自分を取り巻く우리は、いくつもの共同体から成り立っており、自分（나）の拡大組織である。日本人の自己とウチの関係と比較すると、우리世界は、自分が属する共同体の集合として成り立っている傾向が強く、日本に比べ、年齢を基準とし、縦（上下）の関係が厳しく意識される韓国において、仲間としての横のつながりである우리の結束性が強い。

対人関係の捉え方における日韓差は、大崎（1998）でも指摘されている。大崎（1998）は、日本人は親しくなっても、相手に迷惑をかけないことが相手に対する配慮であるのに対し、韓国人は、親しくなると、相手に迷惑をかけることができ、またそれを受け入れることのできる間柄であると述べ、日本人は「親しき仲に礼儀」、韓国人は「親しき仲に迷惑」としている。また、日韓の対人関係行動を分析した서（2012）によると、韓国の場合、親愛的相互協力の行動（気安さ、感情表現、積極的な関与）の面の数値が高く、日本の場合、配慮的相互協力の行動（格式、否定的表現の抑制、自己主張の抑制）の数値が高い。

このように、日本と韓国で人間関係をどのように捉えるかは異なっているようであり、その捉え方の違いが、本研究の分析結果に見られる配慮の仕方の違いにも深く関わっていると考えられる。本研究では、すでに連帯感や親密さを強めてきた女性同士と男性同士の配慮の仕方から親密な関係の維持や構築がどのように行われているかに注目するが、上述したように、親密さを客観的に測る方法はない。しかし、Svennevig（1999）が指摘したように、日韓同様に、互いに連帯感、親密さ・親しさ、好感を持っており、互いに友人であると意識していることや自らのことを打ち明けることができる関係であることが友人同士と言える。本研究では、互いに親しくて、自らの情報を共有し合っている間柄の友人同士の会話をデータとして用いるが（第3章で述べる）、第Ⅱ部から第Ⅳ部では、日韓の友

人同士の会話に見られる配慮の仕方の類似点や相違点を明らかにし、第Ⅴ部では、分析結果をまとめ、日本と韓国でウチと우리に属する友人という人間関係の捉え方の相違が配慮の仕方にどのように表れているかについて考察を行う。

3.　社会とジェンダー

従来、言語とジェンダー差を探った研究では、かなり異なる言語文化においてさえも、男性に比べ、女性の方が、柔らかく、ポライトであると指摘されてきた（Holmes 1995、鈴木 1997、井出 1979、1982、宇佐美 2006、이 2000など）。ジェンダーに関しては、世界的に様々な分野で研究されているが、共通する疑問は、あらゆる面に観察される女性と男性の相違は果たしてどこから生じるのかということである。生物学や脳科学などの分野では、先天的な要因に注目するが、社会学や心理学などでは、後天的な要因に注目する。女性と男性に見られる相違は、先天的な要因と後天的な要因が複雑に絡まっていると思われるが、社会的な動物である人間にとって、社会的な規範や社会から期待される役割を無視することはできないのは確かである。異なる言語文化を超えたジェンダーの類似性は、それぞれの社会において男女の力関係が類似していることや男女に期待される役割の類似性が要因として考えられる。以下の§3.1では、ジェンダーとは何かについて述べ、§3.2では、ジェンダーという役割はどのように習得されるのかについて述べる。

3.1　ジェンダーとは

1970年代、アメリカで起こったフェミニズムの流れが学問および社会を変化させ始め、言語学の分野にもその影響が及んだ。Lakoff（1975）は、女性の言語使用の特徴は、説得力がなく、自信のなさを伝えると述べ、女性が説得力に欠ける話し方をする理由は、女性が社会的に地位の低い「非権力者」であるためだと指摘した。そして、言語そのものが抑圧（oppression）の道具であると述べ、説得力や自信がない話し方をした結果、女性はいつまでも弱者の立場でいるのだと主張した。その後、Lakoff（1975）の主張を検証する形で行われた研究も多く、言語とジェンダーに関する研究は盛んに行われるようになった。フェミニズムの影響は、日本と韓国の社会にも大きな影響を与え、男女平等の思想が社会に広がり、女性が社会に進出することになると共に、女性の地位も向上しつつある。その流れの中で、ジェンダーと言語使用の関連性を探る研究も多くなされるようになり、言語とジェンダー差の関係を説明するため、様々な理論が提案されるようになった。それとともに、男性と女性という性に関する考え方も大きく変化してきた。

まず、性（sex）とは、男性と女性を雄か雌かという生物学的な基準で区別する用語で

あるが、ジェンダー（gender）は、社会的、文化的に構築された性別を指す。Bultler（1990）は、ジェンダーは行われ、反復されることであると指摘し、以下のように述べている。

Gender is the repeated stylization of the body, a set of repeated acts within a rigid regulatory framework which congeal over time to produce the appearance of substance, of a ‘natural’kind of being.

(Bultler 1990:33)

Bultler（1990）が指摘しているように、ジェンダーというのは、男女を固定された性と捉えた概念ではなく、相互行為の中で作り上げられるものとして捉える概念である。この観点は、言語使用とジェンダーの関係を探る多くの研究者に採用されるようになり、言語とジェンダーの研究は、性（sex）とある特定の言語形式の相関関係を探る研究から、具体的な場面で話者がどのように会話を進めているか、そして、どのような言語資源を用いてジェンダーを表すのかという観点の研究に移るようになった。

以上のようなジェンダーに関する考え方の変化とともに、なぜ男女の言語使用に相違点があるのかという問いに答えるため、権力差の観点（Zimmerman & West 1975）、文化差の観点（Malt & Borker 1982、Tannen 1991）、社会構築の観点（Eckert & McConnell-Ginet 1992）からの理論が提案されてきた。それでは、社会的な産物であるジェンダーという概念と役割はどのように習得されるのか。

3.2　ジェンダー役割の社会化

Parsons & Bales（1956）は、ジェンダー役割は社会化を通じて習得されると述べ、その過程をフロイトの理論を基に、男児と女児は、同性の親との同一視を通じて役割を獲得すると説明している。しかし、ジェンダー役割の社会化は、親のみではなく、学校や仲間同士のグループやメディアにより、また意識的あるいは無意識的、大人のジェンダー役割メッセージなどの「社会化エージェント」が子供にそれぞれのジェンダー役割を伝達し、子供はそれを内面化することでジェンダー役割を習得していくことが指摘されてきた。たとえば、宮崎（1991）によると、学校の教師が操作や統制の手段として性別カテゴリーを用いた場合であっても、結果的には、ジェンダー役割の社会化をもたらす意味をもつという。また、日本の保育室の先生と子供たちの相互行為を分析したBurdelski & Mitsuhashi（2008、2010）によると、評価を表す「かわいい」と「かっこいい」という形容詞は、それぞれ一方の性別に関連させた形で表情やプロソディなど非言語的な資源が共に活用されて発話され、ジェンダーの社会化と、ジェンダーと結びついた感情スタンスの社会化を促進さ

せる資源として用いられている。

また、ジェンダーの社会化は仲間との関わりでなされることも指摘されている。ジェンダーの形成過程を分析した作野（2008）は、保育園の2歳児のクラスを10カ月にわたって観察調査を行い、縦断的な変化を追って、保育者の指示に対する順応行動を分析した。その結果、一定の子供たちが指示に順応するようになると、その子供たちが他の子供たちに指示へ順応するように促すような行動が見られると述べている。そして、長いスパンで見れば、自分の性別と関連付けた行動をする幼児の割合は時間の経過とともに増加していることが指摘されている。また、幼稚園の3歳児クラスを半年間にわたって観察調査した大滝（2006）では、性自認[6]は誕生日順でなされるわけではなく、クラス内に同性集団が形成されると、それまでに性自認されていなかった幼児たちが性自認することを明らかにしている。つまり、順応行動や性自認は子ども集団の影響も多く受けてなされているのである。また、ジェンダー役割の習得また構築に大きな影響を与える集団の遊びに差が見られることも指摘されている。

まず、韓国の幼児の遊びを観察した배（1986）では、ボール、軍人役割遊び、機械部品操作遊び、運転遊び、自動車遊びには男児の参加率が著しく高いが、楽器、料理、人形、踊りなどの遊びには女児の参加率が高いことが指摘されている。類似した結果は日本の小学校の児童を対象にアンケート調査を行った粟原・熊澤（2002）でも見られる。粟原・熊澤（2002）よると、男性に好まれやすい遊びは、ゲーム遊びとつりに偏りが見られるのに対し、おしゃべりやお絵かきは女児のみに偏っている。粟原・熊澤（2002）は、男児は、達成感、勝負に勝つなどの遊びにおける目的が明確で、その目的によって遊びそのものが決定されるタイプの遊びが中心であるのに対し、女児は、人形遊び、虫草花遊びなどを中心とした遊びが多いと指摘している。

男児と女児に見られる遊び以外に、ジェンダー差は相互行為にも見られることが指摘されている。Maccoby（1990）は、男児は相互作用の中でより競争的であるのに対し、女児は社会的な関係を維持するため、協力と親密さに基づいた行動をすると述べており、アメリカの子供の遊びを観察したGoodwin（1980）は、女児と男児の言語行動には相違点があることを指摘している。特に命令形の使用において大きな差が見られ、男児同士では命令形を用いて相手に何かをさせるのに対し、女児同士は提案をしながら、遊びを決める過程に全員が参加していることが観察されている。

---

[6] 教師の「男の子と女の子」という呼びかけに対して適切に反応すること。

このように、男女の相違は児童期から観察されるが、ジェンダーという役割の社会化は、Burdelski & Mitsuhashi（2008、2010）と宮崎（1991）が指摘したように、 大人からのメッセージが大きく影響しており、作野（2008）と大滝（2006）が指摘したように、集団内の相互行為の中でも進んでいく。Keenan & Shaw（1997）によると、社会化の過程で親と教師また同年の集団は、男児には攻撃的な行動を、女性には恥ずかしさや依存的な行動により受容的な態度を見せることで、ジェンダー役割の類型化された行動が調整また強化される。つまり、男児と女児は、社会が期待しているジェンダー役割に一致する方向に態度と行動を調節していくのである。

以上のように、ジェンダーという知識や役割というジェンダーに関するイデオロギーは、幼児期から社会化の過程で習得されつつ、相互行為の中で子供たちが有効な行為者として互いに構築していくものであると言える。それでは、ジェンダー・イデオロギーは、すでに成人になり、親密な関係を構築してきた女性同士と男性同士の相互行為にどのような影響を及ぼしており、ポライトネスのあり方にどのように表れているのであろうか。本研究の第Ⅲ部と第Ⅳ部では、日韓同様に見られるジェンダー差を明らかにし、第Ⅴ部では、ジェンダー役割が、男女のポライトネスのあり方にどのような形で表れているかについて考察を行う。

４．本章のまとめ

本章では、本研究の議論に関わる友人同士という対人関係の捉え方と、ジェンダー役割の社会化について述べた。本章で取り上げた日韓の親密な人間関係の捉え方の相違とジェンダー役割は、日韓男女それぞれの相互行為に見られるポライトネスの多様性を解釈するのに有効であると考えられる。第Ⅴ部では、本章で述べたことに触れつつ考察を行う。

第3章　調査概要と文字化表記

1. はじめに

本章では、本研究で扱う会話データの調査概要と話題区分調査について述べる。話題区分調査とは第 4 章で述べる本研究の分析の枠組みの設定のために行ったもので、主に第 5 章と第 7 章でその結果を分析する。

2.　調査概要

本研究では、日本と韓国の男性同士と女性同士の自由会話をデータとして用いる。会話データの調査概要を§2. 1 で述べ、続いて話題区分調査の概要を§2. 2 で述べる。

2.1　会話データの調査概要

本研究の目的は、ポライトネスを相互行為というレベルから捉え、日韓の親しい間柄の友人同士の日常的な自由会話におけるポライトネスのあり方の多様性を探ることであるが、第 1 章で述べたように、文化的集団内に見られるポライトネスの多様性にも焦点を当てる必要があると考える。本研究では異なる言語文化に見られる相違点とともに、多くの言語・文化で同様な特徴が見られているジェンダー差にも注目し（宇佐美 2006b）、ポライトネスのあり方の多様性を探っていくことを目的とする。ポライトネスのあり方には、ジェンダー差以外に年齢などの要因が大きく関わっているが、本研究では、年齢差の要因を排除するために日韓同様に 20 代の男女の会話を分析データとして用いることにする。また、地域差も同様に排除するため、日本人は関西地方の話者を対象とし、韓国人は京畿地方[7]の話者を対象とする。第 2 章の表 1 に示したように、異性の友人の場合、友人関係から恋愛関係に発展する可能性も高く、日本の協力者の場合、同性の友人のように親しい異性の友人はいないと答える人も多い。また、韓国の男性の場合、女性とは友人になれないと答える人も多い。したがって異性間の会話はとりあげない。本研究では、日常的に二人でお喋りすることが多く、お互い親しい友人として認識している同性間の日常的な自由会話を分析対象とする。日本語の調査の詳しい協力者の情報などを表 1 に、韓国語の調

[7] ソウル市、仁川廣域市、京畿道を示す。

査情報を表 2 にまとめる[8]。

表1　日本語調査の情報

会話	話者	年齢	性別	出身地	場所	録音時間	調査年･月
FJ1	JOF1	24	女	兵庫	空室	50分10秒	2012年12月
	JAF2	24	女	兵庫			
FJ2	JSF3	27	女	兵庫	カフェ	48分15秒	2012年09月
	JKF4	28	女	大阪			
FJ3	JDF5	21	女	兵庫	カフェ	56分24秒	2016年03月
	JGF6	22	女	大坂			
FJ4	JMF7	28	女	兵庫	カフェ	54分10秒	2013年02月
	JTF8	28	女	兵庫			
MJ1	JAM1	22	男	大阪	空室	55分50秒	2012年11月
	JBM2	22	男	大阪			
MJ2	JTM3	25	男	大阪	カフェ	52分10秒	2013年05月
	JSM4	26	男	大阪			
MJ3	JKM5	22	男	京都	空室	60分22秒	2015年11月
	JNM6	20	男	兵庫			
MJ4	JDM7	22	男	大阪	空室	53分10秒	2012年12月
	JYM8	22	男	大阪			

表2　韓国語調査の情報

会話	話者	年齢	性別	出身地	場所	録音時間	調査年･月
FK1	KAF1	22	女	仁川	カフェ	66分40秒	2013年02月
	KBF2	23	女	ソウル			
FK2	KSF3	28	女	ソウル	カフェ	51分40秒	2012年08月
	KHF4	27	女	ソウル			
FK3	KYF5	28	女	高陽	カフェ	90分47秒	2014年11月
	KKF6	28	女	ソウル			
FK4	KCF7	24	女	ソウル	カフェ	49分54秒	2013年07月
	KDF8	24	女	ソウル			
MK1	KGM1	23	男	ソウル	カフェ	50分13秒	2012年10月
	KAM2	23	男	ソウル			
MK2	KHM3	27	男	ソウル	カフェ	56分30秒	2012年12月
	KDM4	28	男	ソウル			
MK3	KBM5	22	男	安山	食堂	59分48秒	2015年11月
	KCM6	22	男	安山			
MK4	KJM7	23	男	ソウル	カフェ	70分30秒	2015年05月
	KKM8	23	男	ソウル			

[8] 会話IDは、左から（1）性別、（2）国籍、（3）会話を区別するための数字であり、話者IDは、左から（1）国籍、（2）話者の個人文字、（3）性別、（4）話者を区別するための数字である。

会話の参加者は、日本と韓国の 20 代の男女で、日本人は関西地方の話者を対象とし、韓国人は、京畿地方の話者を対象とした。韓国の場合、いくら親しくても相手との年齢差が言語行動に大きく関わるため、小学校の入学年度が同様な友人との会話を依頼した[9]。協力者には、普段から親しくて、自らのことを打ち明けることができる友人と自由に話す会話を 50 分くらい収録したいと前もって伝え、研究の詳細は知らせず、日本語と韓国語の対照を行うために日常的な会話データを収集していると伝えた。

会話の収録は、2012 年から 2016 年にかけて、日本語の会話は大阪で、韓国語の会話はソウルと京畿道で行った。収録は、①筆者が直接協力者に会い、データの扱いなどを説明して承諾を得た後、録音を行ったものと[10]、②筆者の知人に、自分の友達と会った時に会話を録音してくれるように依頼したものがある。②の場合、データの扱いなどの説明は、紙で知人に渡し、友人の承諾を得るように依頼した（付録参照）。

録音の場所は、協力者に普段どこでおしゃべりするかを尋ね、自然な状態でデータを収録することを優先したが、どこでも良いと答えた場合は、できるだけ静かな場所で収録を行った。

本研究では、以上のような方法で女性同士と男性同士の親しい間柄の会話を各々約 50～90 分ずつ録音し、会話のうち発話が自然ではないと思われる最初の部分と最後の部分を除いたそれぞれの 30 分～35 分くらいを文字化し分析対象とする[11]。

2.2　話題区分調査

次に、本研究では、鈴木（1995）と河内（2003）を参考に、文字化した資料を用いて話題区分調査を行った。話題区分調査に協力してくれた協力者は、日本語母語話者と韓国語母語話者それぞれ 4 人である。具体的には、会話データの収録に参加していない日本語母語話者と韓国語母語話者それぞれ 4 人の協力を得て、文字化の資料から、話題が大きく変わったと思われる箇所と、話題は変わっていないが内容が少し変わったと思われる箇所を区切ってもらった。本研究では、著者を含め 5 人の内 3 人が、話題が大きく変わったと認定した箇所を話題として認定した。そして、話題が少し変わったとされた箇所は、本研究で分析の枠組みを設定する際の参考とした。話題の認定と分析の枠組みについては、第 4 章で詳しく述べる。

---

[9] FK1、FK2、MK2の会話の参加者の年齢に差がある理由は、KAF1、KHF4、KHM3が早生まれでためである。

[10] 録音の際には、二人が自然に話せるように、筆者はICレコーダーを設置した後、席を外した。

[11] データの文字化は筆者が行った後、日本語の文字化のデータは日本語母語話者のチェックを受けた。

3. 文字化の表記

本研究で、会話例で用いる文字化表記は以下のとおりである[12]。

会話例の文字化表記

:	音の伸ばし	@	笑い
…	強勢がおかれた音の部分	＜@. . . @＞	笑いながら
°…°	声が小さくなった発話	＃＃	個人情報
？	疑問表現	「. . . . 」	直接話法
＞. . . . ＜	発話のスピードが速くなる部分	X	聞き取り不明
＝	途切れなく密着した発話	---------	話題やパートの区分
［ ］	重なり	（（. . . ））	筆者のコメント
(数)	ポーズの秒数	［…］	省略
→	注目		

4. 本章のまとめ

以上、本章では、本研究で分析する会話データの調査概要と話題区分調査について述べ、会話例に用いる文字化表記について述べた。次章の第 4 章では、本研究の分析の枠組みについて説明する。

---

[12] 会話データの文字化表記は、西坂・串田・熊谷（2008）とDu Bois et al（1993）を参考に作成したものである。

第4章　本研究の分析の枠組み

1.　はじめに

本章では、本研究の分析の枠組みについて述べる。本研究では、日韓の親しい友人同士の日常会話データから、ポライトネスのあり方の日韓差とジェンダー差を明らかにすることを目的としているが、第 1 章で強調したように、ポライトネスの研究においては、会話の参加者が互いに話題を探り、協力して会話を展開させていく相互行為的なポライトネスのあり方を探求していくことが必要とされる。

さて、言語を分析する際には、音声や語彙あるいは文などといった分析の単位が必要となる。同様に、会話を分析するに当たっても、一定の基準から会話の単位を決める必要がある。特に、異なる言語の会話を比較・対照する場合は両言語に適用できる分析単位が必要となる。

本研究で扱う日本語と韓国語の友人同士の自由会話では、話題が決まっていないため、会話の参加者は、互いに話題を探り、どのような話題についてどのように話すかを常に考えながら会話を進行していく。話題は会話の参加者の複数の発話連鎖で構成され、参加者は話題を展開させるため、特定の事柄について情報を持った人がそれについて説明したり、自らの経験談を物語ったり、未来のことや自らの考えを話したりし、次々と話題を展開させていく。このように、会話は参加者の発話という相対的に小さい単位から、参加者の複数の発話から成り立った話題というより大きな単位が積み重ねられたものであるが、相手に対する配慮もまた発話という小さい単位から、どのような事柄についてどのように語り、話題をどのように管理していくかという大きい単位にまで表れる。しかし、実際に分析するに当たって、会話で展開された複数の話題をどのように認定するか、また、参加者の発話をどのように区切り、一つの発話として認定するかなどといった点が問題になる。

以下では、日本語と韓国語の友人同士の自由会話で展開された「話題」の構成要素には、 内容の観点から 「物語」、「描写」、「評価」があり、 会話の参加形式という観点からはソロパートとデュオパートが認定できることについて述べる、これを、日韓の自由会話を分析する際の枠組みとする。

まず、§2 では内容の面からの分析単位について述べ、§3 では参加形式の面からの分析単位について述べる。§4 では内容と参加形式の関係について述べる。§5 では、本研究で注目する現象について述べ、§6 章をまとめとする。

2. 内容の面からの単位

本節ではまず、内容に関する単位を取り上げる。内容を構成する単位には、「話題」およびその下位単位である「物語」、「描写」、「評価」がある。

2.1　話題

会話の全体的構造や枠組に関する研究はそれほど多くはなされておらず、自由会話の場合はなおさら少ないが、南（1972）は、会話はいくつかの談話からなるものとし、日常会話の全体的構造を区切る基準として、a. その部分の前またはあとのはっきりしたポーズ、b. その部分自身内部の連続性、c. 話し手および聞き手、d. その談話の communication 上の function、e. ことばの調子、f.　話題の性格が一定していることを手掛かりとしている。また、電話の会話における勧誘談話のストラテジーを分析したザトラウスキー（1993）は、南（1981）の「会話」と「談話」という単位に加え、「話段」を設けている。「会話」は、電話会話の始まりから終了までの最も大きい単位で、その会話の中に「勧誘の談話」がある。そして、「勧誘の談話」の構成要素として「勧誘の話段」と「勧誘応答の話段」を設けており、「話段」は、勧誘と応答という目的を達成しようとすることが基準となる単位であるとしている。

一方、日常的な自由会話を分析した研究では、「話題」を最も大きい単位として設ける場合が多い（Coates 1996、筒井 2012）。「話題」は、南（1972）の基準の（f）話題の性格が一定していることに関連すると考えられる。自由会話の研究において「話題」を会話の最も大きい分析の単位に設定するのは、「勧誘―応答」など隣接ペアを成す目的達成のための会話とは異なって、特定の言語行動を手掛かりとして会話の単位を区切ることが困難であるためであろう。また、人間関係を維持あるいは構築することが会話の目的である自由会話の研究において、「話題」は会話の展開のあり方や言語形式と機能またストラテジーの使用にも影響を与える一つの要因として考えられる。以上のことから、自由会話を対象とする本研究においては、内容的な面から「話題」を最も大きい単位として設ける必要があると考える。しかし、実際の会話データの中から「話題」を客観的に区切ることは容易なことではない。これは、どこまで細かく一つの「話題」を区切れるかが人によって異なるためであろう。このような問題を避けるため、本稿では第 3 章で述べたような話題区分調査を通じて得られた結果から「話題」の認定を行い、それぞれの話題のラベルは著者が付けることにする。

2.2　物語と描写と評価

以上のように、「話題」を自由会話の最も大きい単位として設けたが、「話題」という単位は複合的な構造を持っている。筒井（2012）は、「話題」を内容の種類による連鎖組織、第一発話のタイプによる連鎖組織、各連鎖組織に現れる言語形式を分類し、「話題」を構成する連鎖組織を分析しているが、話題区分調査で区切られた「話題」の中では様々な種類の話が語られているため、「話題」のみで日韓あるいは男女の話題展開の仕方を対照することは困難である。たとえば、一つの「話題」の中で、会話の参加者はターンを交替し、次々と自らの経験談を語り合ったり、特定の事柄について説明し合ったりしているため、話題構成のあり方や展開の仕方に見られるストラテジーを探るにはより小さい単位が必要になる。そのため、本稿では「話題」の内部を構成する様々なタイプの話を、以下の三つの観点から、表 1 のように、内容上のまとまりを持った単位として「物語」「描写」「評価」の三つの単位に分類する。表 1 のとおりである。

（A）　過去のことか、現在あるいは未来のことか。
（B）　イベント性があるかないか。
（C）　外的な事柄（外部の物事に関する情報）に関する内容か、内的な事柄（話者の考えや感想）に関する内容か。

表1　「物語・描写・評価」の特徴

	A	B	C	例
物語	過去	あり	外・内的	経験談
描写	過去、現在、未来	なし	外的	映画やドラマなどの内容 特定の事柄に関する情報
評価	現在	なし	内的	先行する話に対する感想 特定の事柄に対する考えや感情

以下では、内容的な単位である表 1 のそれぞれのタイプの「語り」がどのような特徴を持っているかについて詳しく述べる。

2.2.1　物語

会話データを見てみると、会話の参加者は自らの過去の出来事について語っている場合がある。過去の出来事に関して語るという言語行動は多く研究されてきたが、代表的には Labov（1972）の研究がある。Labov（1972）は（1）を「ナラティブ」の例として挙げている。

(1)　This boy punched me
　　and I punched him
　　and the teacher came in
　　and stopped the fight

（Labov 1972：360）

Labov（1972）は、「ナラティブ」の節は、時系列（temporal sequence）の順になることが特徴であると述べ、This boy punched me/and I punched him と I punched this boy/and he punched me のように、ナラティブの節の順序が逆であれば、本来の意味的な解釈も変わることから、（2）のように、少なくとも二つの節が時系列（ナラティブ節）を持つ場合はナラティブとしている。

(2) I know a boy named Harry.
　　Another boy threw a bottle at him right in the head
　　And he had to get seven stitches.

（Labov 1972：361）

本研究でも、少なくとも二つの節が時系列（ナラティブ節）を持つ場合、その一連の発話連鎖を「物語[13]」とする。実際、友人同士の会話で語られた「物語」の用例を見てみよう。

(3)会話 MJ2【残業について】

01　JTM3：あ　ほんまに　うちね　あの　怒られてるのよ　一回　あの：：　国か何かから
02　JSM4：あ：　なんか　［そゆう］　監査するところから
03　JTM3：　　［あの］　　そそそそ　あの　やっぱ開発
04　　とかってさ：　結構じかん：：：　か　なんてゆうんかな　せっぱつまる時は　もう
05　　むしろ仕事したいってなるから　みんな（JSM4：う：：ん　そらそうやね）平気で残

[13] 「物語」と「語り」は、英語の「narrative」の訳語として用いられることが多いが、§2.2で説明したように、本研究で「物語」、「描写」、「評価」は、「話題」の内部に見られる内容上のまとまりを持った単位として設けたものである。すなわち、三つのタイプの話は「語る行為」と「語られる内容」という両方を表す用語であるが、三つのタイプの話に共通するのは、「語る行為」であるため、本研究では、これらの三つのタイプの話を「語り」と呼ぶことにし、過去の経験談の話は「物語」と呼ぶことにする。

06　　業してたんよ　で　そゆのんが　あるか　引っかかるから（JSM4：うん）もう残業
07　　代　あの　帰ったことにして仕事してたりしてた人が結構いたんよ
08　JSM4：サービス残業って［やつ］
09　JTM3：　　［そそそ］　それは　でも　自分も　あの　あの：：
10　　なんって　いやいやじゃなくて（JSM4：うんうんうん）自らやってたんやけど
11　JSM4：分かる分かる
12　JTM3：でも　なんやろ　監査の団体からやっぱり「帰ってるはずやのにメールとかや
13　　ってるよね」みたいなん指摘されて（JSM4：うん）すっごい怒られてて　そっから
14　　厳しなってて　で　残業代はつく

（3）は、「会社でこっそり残業したことを監視の団体に見つかって怒られ、その後、残業することが厳しくなった」と語っている用例である。（3）を見てみると、まず、「残業してたんよ（06 行）」、「人が結構いたんよ（07 行）」、「やってたん（10 行）」と過去の出来事であることを表す発話が連鎖されていることが確認できる。そして、この話には、以下の（4）のように四つの時間的な順序があり、出来事に開始と終了があることが分かる。

	(4)	(5)
開始	1. 残業した。	1. 残業することが厳しくなった
	2. 調査の団体に見つかった。	2. 怒られた。
	3. 怒られた。	3. 調査の団体に見つかった。
終了	4. 残業することが厳しくなった。	4. 残業した。

このように（3）は、（4）のように四つの時間的な順序があるが、（5）のように、この順序を逆にすると話の内容は成立しない。

以上のように、 本研究では、時間的な順序を逆にすると、その意味に変化が生じる開始と終了を持つ一連の話を「物語」とする。

2.2.2　描写

次に、会話の参加者は、特定の事柄に関する情報を伝えるため、それについて説明する場合がある。特定の事柄に関して説明するという行動が中心になっている部分を本研究では「描写」として認定するが、「描写」は、イベント性のない外的な事柄（状態）に関し

て話す部分である。ここで、外的な事柄とは、内的な考えや感情ではなく、外部の物事に関する情報である。まず、（6）を見てみよう。

(6)会話 MJ2【昇進について 】

01　JTM3：あ　そうゆうの　でも　どっかで　なんかで　成果　評価されたり　すぃへん
02　　の？
03　JSM4：昇進はないもん　ほぼ（JTM3：うんうん（1.0）そうなんや）だって　普通の教
04　　員　ま　先生やから（JTM3：あ：：そうか）担任になるかどうかなんて
05　　別に頑張ったからどうかじゃないし（JTM3：あ：：そっか）　その　上って　もう
06　　教頭やからね@@
07　JTM3：@@　あ　も　いきなり上がるんやね　そこまで
08　JSM4：うん（3.2）　だから（1.0）なんか特別頑張ったからって　なんか　おいしい
09　　（1.9）（JTM3:あ::　そうやな）地位になるわけでもないの（JTM3:あ:::）

（6）で、JSM4の発話を見てみると、JSM4は昇進に関する情報をJTM3に伝えようとしていることが分かる。（6）のように、会話の参加者が昇進という外部的な事柄について情報を伝えるために、説明する発話は、「物語」とは異なって、イベント性がなく、時系列も見られないことが特徴である。 以下の（7）は、（6）のJSM4の発話の一部を逆にしたものである。

（7）その　上って　もう　教頭やからね
　　だって　普通の教員　ま　先生やから 担任になるかどうかなんて別に頑張ったから
　　どうかじゃないし
　　昇進はないもん　ほぼ

（7）で分かるように、JSM4の発話は逆にしても意味的には何の変化もない。このように、イベント性があるかどうかは、時間順序を表す副詞や接続詞の追加なしに、発話の一部を逆にし、意味的に変化があるかどうかで確認できる。意味に変化がない理由は、過去の出来事というイベント性のある内容が中心である「物語」とは異なって、「描写」の場

合、特定の状態に関する情報を相手に伝えるという行動が中心だからである。しかし、特定の外的な事柄が時系列を持っている場合もある。たとえば、映画やドラマの内容を説明する場合である。映画やドラマの内容には時系列があり、「物語」と類似した特徴を持っているが、自らの経験談ではない点と、事柄の内容という外部的な状態の説明という点で、「物語」とは性格が異なっているため「描写」として分類する。

2.2.3　評価

最後に、 会話のデータを見てみると、参加者は特定の事柄について自らの考えや感情を表す発話を用いて会話を展開させる場合がある。本研究では、このような部分を「評価」とする。「評価」は、イベント性がなく、内的な事柄に関して話している部分である。ここで、内的とは、外的とは反対に、自らの考えや感情などといった内面的な事柄を指す。まず、その用例として（8）を見てみよう。

(8)会話MJ2【残業について 】

01　JSM4:つらい話やんね　だって
02　JTM3:そ［う］
03　JSM4:　［絶］対にこなさなあかん仕事の量があるのに
04　JTM3:そそそそ＝
05　JSM4:　　＝時間内に終われへんのに残業もしてはいけない
06　JTM3:そやねん　［きつい］
07　JSM4:　　［じゃあ］　朝早く来るかってゆっても限界があるし
08　JTM3:そそ　あ　あ　朝早く　は　来たら　来たで　早出っていう
09　JSM4:うんうんうん
10　JTM3:残業になるし
11　JSM4:うんうんうん
12　JTM3:だからね::　効率のいい業務を意識してってゆうのをめっちゃ言われる
13　JSM4:あ　それはそうやろうね　うちら　そのタイムカードとかもないからさ

（8）でJTM3とJSM4は、残業に関して話している。（3）の残業に関する「物語」とは異なって、（8）で、二人は「仕事は多いのに、残業してはいけないということは大変で

ある」ということについて話していることが分かる。「評価」も「描写」と同様に、イベント性がないが、「評価」の部分では、自らの考えや感情を相手に共感されるため、そのように考えたあるいは感じた理由を表す発話が見られることが特徴である。このことから、「評価」は、自らの考えや感情を相手に伝え、共有しようとする行動が行われている部分であると言える。このように、事柄に対する会話の参加者の考えや感情が話の中心になっている部分を「評価」とする。

3. 会話の参加形式の面からの単位

次に、会話の参加形式について説明する。会話は、参加している人が互いに話し手になったり聞き手になったりすることを繰り返すことで成立する。会話の参加形式を明らかにするためには、ターンと発話という単位が必要になる。また、話し手と聞き手という会話における役割の概念も整理しておく必要がある。

以下では、本稿における話し手と聞き手、ターン（§3.1）、発話（§3.2）とは何かについて述べ、会話の参加形式の観点から、ソロパートとデュオパート（§3.3）が認定できることについて述べる。

3.1 話し手と聞き手、ターン

会話におけるターン交替を分析したSacks et al.（1974）は、ターンを「一人の話し手が始めてから他者が発話権を受けるまでのすべての発話である」と定義している。Sacks et al.（1974）の定義は、ターンを物理的に捉えているため、あいづちや短いコメントもターンとして認め、ターン交替として認定するものである。しかし、ターン交替とフロア（誰が話す権利を持っているか）を分析したEdelsky（1981）は、ターン交替が行なわれても会話の参加者がその場で誰がフロアを持っているのかという共通の認識によってフロアの所有者が決定されるとし、ターン交替が行なわれてもフロアは取っていない場合もあると指摘している。友人同士の自由会話を分析したCoates（1996）は、Edelsky（1981）のフロアという観点から「話題」の中には一人の話者が発話権を維持し過去の出来事などについて物語る部分（Story）と会話の参加者が一緒に話し合う部分（Discussion）があるとしている。また、聞き手の言語行動や発話順番を分析した多くの研究では、あいづちや短

いコメントはターンとして認めていない（堀口 1997、李 1999など）。これらの研究は、ターンを会話における役割関係から捉えているためであり、木暮（2002）が指摘したように、ターン交替と会話における役割の交替は必ずしも一致するわけではない。

以上の議論をふまえ、本研究では、話し手と聞き手を役割関係の観点から、またターンを物理的な観点から捉えることとする。以下に、本研究における話し手と聞き手、ターンの定義と会話例 を示す。

・話し手

特定の事柄に関して情報を持ち、それに関して発話権を維持しながら、語るという行動を行っている会話の参加者。（以下の（9）では、JTM3が話し手である）

・聞き手

話し手が語る際、聞くことを優先とし、発話権を得るためではない発話をする会話の参加者。（（9）では、JSM4が聞き手である。）

・ターン

ターンとは、相手の物理的な発話によって区切られるものとする。（（9）は、5つ（JTM3:3つ、JSM4:2つ）のターンで構成されている。）

(9) JTM3：あの　もう回りにしてみたら　こいつ何も分かってないなって思われていると思うわ　ほんまに　高校生の知識やからさ　みんな　電気の専門の大学院まで　（JSM4：うんうん）　行ってるような人ばかりやから　ま　そら：：　回路図も読めるし（JSM4：うんうん）　まあ　ある程度の意味も分かってるからさ

以上、本稿における話し手と聞き手の定義、そして、ターンの認定法について述べた。しかし、自由会話においては、話し手と聞き手の区分が比較的に明確である場合もあれば、その区分が明確ではない場合もある。これに関しては、§3. 3でより詳しく述べることにし、まず、§3. 3では、発話の認定基準について説明する。

3.2　発話

会話における発話という単位をどのような基準で認定するかは、研究によって異なるが、イントネーションやポーズという音声的な特徴、またはターン交替によって区切られる一つのまとまりを一つの発話として認定することが多い。たとえば、日本語と英語を対照したメイナード（1992）は、日本語に適切な発話の細分化を調べるため、PPU（Pause-bounded Pharasal Unit）というポーズによって区切られる語句を一つの単位として設けている。一方、日本語と韓国語の対照を行った金（2013）は、音声的条件、形態的条件、統語的条件という三つの条件で文を同定している。金（2013）がいう文は、本稿の発話とほぼ同様なことを指す。金（2013）は、これらの三つの観点から文という単位を設けることで、会話では多く観察される中途終了発話文（述語がない文）も、一つの文として判断することができると述べ、余韻を残すような表現の文でも、そこで発話が終わったとするなら、余韻を残す機能を果たす文であり、ポーズの後、まだ発話が続いているのなら三つの条件から文の完結如何を決定できると指摘している。このように、会話における発話あるいは文をどのように認定するかはそれぞれの研究目的によって異なる。金（2013）も指摘したように、日本語と韓国語は、文末に述語が立つという統辞論的構造が類似していることが一つの区切りの基準になり得ること、会話では中途了発話文が多く見られること、一人の話者の繰り返し（「わかるわかる」などのような発話）は、音声的な面からは一つの発話として認められることから、本研究では、金（2013）を参考に、次のような基準で発話を認定する。

◎発話として認定するもの

A. 連体修飾節と補足節を除いた述語が含まれる節は一つの発話として認定する。

「から」「ので」「ために」「たら」「なら」「ても」「けど」などの節。

（10）JGF6 :全員がさ　全員頑張らんかったら　→≪発話数:1≫

B. 語の発話を含め、節の形はなしていないが、相手の実質的な発話でターン交替があったものと2秒以上のポーズがあったものは、一つの発話として認定する。

（11）JSF3:行きたいところ ま［た 移動］　　→≪発話数:1≫

JKF4:　　［第に　うん］　第二空港　→≪発話数:1≫

C. 文末が省略されて言い切られた発話は、一つの発話として認める。

（12）　JGF6:今はやりっていうか　→≪発話数:1≫

JDF5:（0.6）院はやりやし

D. 語順を変更させた倒置は、倒置された部分と述部を含め一つの発話として認定する。

（13）JDF5:とんでもないことになるのを一回経験してるから　私は →≪発話数:1≫

E. 疑問表現に対する返答、「うん」「そう」「なるほど」などのあいづちは一つの発話として認定する。

（14）JGF6:長距離ってゆうのはスイムの？

JDF5:あ　うん　→≪発話数:1≫

F. 直接話法で表現される発話は、上述した基準で認定する。

（15）　JGF6:「頑張って受かれば」　　→≪発話数:1≫

なんやろ　「でも管理職なられんな」みたいな　　→≪発話数:1≫

◎発話として認定しないもの

G. 名詞を修飾する連体修飾節と名詞として役割を果たす補足節（「こと、の、ということ」などによって名詞化した発話）は一つの発話として認定しない（直接話法は例外）。

（16）JGF6 :みんな入ることがゴールやと思うんちゃう　→≪全体で発話数:1≫

H. 一人の話者の繰り返しは、何回繰り返されても一つの発話とする。

（17）JGF6 :そうそうそう　→≪発話数:1≫

I. フィラー的なものと語の言い間違いによる言葉探しや言い淀みは発話として認定しない。

（18）JSF3：あの：：なんか　チェックするのってその会社によって違うん　→≪全体で発話数：1≫

以上、本稿における話し手と聞き手、ターン、発話とは何かについて述べた。以上の認定基準をふまえ、次の§3.3では会話の参加形式について具体的に述べる。

3.3　会話の参加形式：ソロとデュオ

友人同士は会話を展開させるため、どのように会話に参加しているのか。会話は会話の参加者の相互行為であるため、一人の話者が一方的に話題を展開させることは、まずあり得ないことである。しかし 会話の参加者の発話数とターン交替の観点から会話を観察してみると、会話の参加形式から、話し手と聞き手の区分が相対的に明確で、一人の話者が話を続けていくパートと、話し手と聞き手の区分が曖昧で、二人が共同的に会話を進めていくパートがあることが分かる。本稿では、それぞれのパートをソロパートとデュオパートとし、以下のような基準で認定及び定義する。

A. ソロパートとは、特定の事柄について情報を持っている一人の話者が話し手になり、複数の発話を用いて語る部分で、話し手と聞き手の役割関係が相対的に明確である部分とする。ソロパートは、次のような基準で認定を行う。

（ア）話し手は、特定の事柄に関して5つ以上の発話を用いて語る。

（イ）話し手の発話数に比べ、聞き手の発話数が少ない。

（ウ）ターン交替は、主に聞き手のあいづちや短い発話によって行われる。

ソロパートの認定において、発話数とターン交替のあり方を認定基準としたのは、会話の中から話し手と聞き手の区分が相対的に明確な部分を取り出すためである。

B. デュオパートとは、話し手と聞き手の役割関係の区分が明確ではない部分で、会話の

参加者の特定の事柄に関する実質的な発話数に大きな差が見られない部分であるとする。デュオパートの認定においては、話題区分調査で話の内容が少し変わったと判断されて区切られた箇所を参考にし、次のような基準で認定を行う。

（ア） 特定の事柄に関する会話の参加者の発話数に大きな差が見られない。

（イ） 特定の事柄に関する会話の参加者のターン交替が4回以上行われる。

デュオパートの認定において、発話数とターン交替を基準として設けた理由は、まず、話し手と聞き手の役割関係が明確ではない部分を取り出すためである（以下の表2と（21）を参照されたい）。また、ターン交替を基準とした理由は、（19）のように「問い」－「答え」などのような隣接ペアによるターン交替は行われているものの、その事柄に関する内容がそれ以上展開されない部分を除くためである。

(19)会話FK3

01 KYF5: 쪼꼬렛 안 먹어? 내가 먹을까?（チョコ食べないの？私が食べようか？）

02 KKF6: 어（うん）

以上のように、会話の参加形式の観点から日韓の自由会話をソロパートとデュオパートに分類するが、上述してきた内容の面からの分類と参加形式の面からの分類を基に、日本の男性同士の会話（MJ2）に見られる一つの話題内構造を整理して示すと表4のようになる。

表2　話題内構造と発話数とターン

話題	語り	内容	話し手の発話数		聞き手の発話数		ターン	パート
仕事		職場の人について	両者	JTM3:5　JSM4:2	-		5	デゥオ
	描写	会社が求める人材について	JTM3	13	JSM4	1(5)	12	ソロ
		仕事の大変さについて	両者	JTM3:10　JSM4:8	-		12	デゥオ
	物語	残業したことについて	JTM3	16	JSM4	3(5)	16	ソロ
		残業について	両者	JSM4:16　JTM3:15	-		22	デゥオ
	描写	昇進について	JSM4	11	JTM3	1(8)	16	ソロ
	描写	業務について	JSM4	7	JTM3	0(6)	12	ソロ
	描写	一日の動きについて	JSM4	57	JTM3	6(38)	88	ソロ
		問題が起こることについて	両者	JTM3:5　JSM4:2	-		5	デゥオ
	物語	今日の仕事について	JSM4	15	JTM3	4(7)	22	ソロ

*聞き手の発話数：() 内の数はあいづちの数である。

表2は、一つの話題内に見られる構成要素を内容と会話参加形式の面から整理したものであるが、ここでは、表2のパート、話し手の発話数、聞き手の発話数（括弧内の数はあいづちの数である）、ターン数に注目されたい。まず、表2で分かるように、デュオパートで二人の会話の参加者の発話数に大きな差はないのに対し、ソロパートは、話し手の発話数に比べ、聞き手の実質的な発話数は極めて少なく、あいづちの使用が多い。表2の話題で展開されたソロパートの一部を見てみよう。

(20)会話MJ2【ソロパート：一日の動きについて】

01　JSM4:ある一日の動き（JTM3:うん）っていうの例えばどんな動きしてるみたいな
02　　話をしてて（JTM3:はいはい）例えばぼくやったら　朝　ま　6 時半に起きて
03　　（JTM3:うん）　で　7 時ぐらいに家を出て　で　学校行って（JTM3:あ::）7 時 40
04　　分には　も　職員室にいて　なんか　朝　なんか
05　JTM3:はやいな
06　JSM4:ウォーター　ウォーターサーバーの水替えたりとか(JTM3:おお)なんか　いろ
07　　んなスイッチ入れたりとか（JTM3:うんうんうん）したりとかして（JTM3:うんう
08　　ん）で　子供らが　だって　もう　7 時 50 分ぐらいには　もう　早い子は登校して
09　　くるわけ（JTM3:お::）で　本当は 8 時 20 分から就業のはず（JTM3:お::はい
10　　はいはい）やけど　子供 7 時 50 分から来てんのに誰も先生おらんかったら　成り
11　　立てへんから　誰かは絶対きとかないといけないってなって　（JTM3:はいはい）
12　　誰か絶対おる　特に教頭先生なんかは絶対おる

（20）を見てみると、ターン交替は、聞き手としての役割を果たしている話者（JTM3）のあいづちの使用によるものが多く、話し手（JSM4）に比べ、 聞き手（JTM3）の 実質的な発話は極めて少ないことが分かる。

一方、デュオパートでは、（21）のように二人の会話の参加者の発話数に大きな差が見られない。

(21)会話MJ2【デュオパート：職場の人について】

01　JTM3：回りの人結構いい人やから楽しくやってる

02　JSM4：それはいいよね

03　JTM3：うん　そこはほんまに助かったわ

04　JSM4：やっぱ人やね＝

05　JTM3：　　＝ほんまに

二人の発話数に差がないということは、話し手と聞き手の区分が明確ではないことを意味すると同時に、二人は特定の事柄について話し合っていることを意味する。以上のように、会話は、話し手と聞き手の区分が相対的に明確で、一人の話者が話を続けていくソロパートと話し手と聞き手の区分が曖昧で、二人が共同的に会話を進めていくデュオパートという二つの要素で構成されていると考えることができる。

4.　内容と参加形式

§2では、自由会話には、最も大きい単位として「話題」があり、「話題」を構成する内容は「物語」、「描写」、「評価」（以下では、便宜上、この三つのタイプを総称して「語り」と呼ぶことにする（注12を参照されたい））に分類することができることについて述べ、§3では、参加形式からソロパートとデュオパートがあることについて述べた。ここでは、パートと「語り」の相関関係について述べる。上述したように、パートは、会話の参加者のターン交替と発話数を基準とし、相互行為がどのような形になっているのかに注目した分類である。一方、三つの「語り」は、会話の参加者が話している内容がどのようなものであるかに注目した分類であり、パートと「語り」は、次元の違う観点からの

分類であるが、「物語」と「描写」と「評価」が、どのようなパートで語られるかは、話し手が語る情報が新情報か旧情報かに大きく影響する。

まず、実際、会話データを見てみると、開始と終了がある自らの経験談を語る「物語」は、ソロパートでしか観察されない。「物語」がソロパートで語られるのは、聞き手にとって話し手の経験談が新情報であるため、聞き手はあいづちを打ったり、質問したりし、協力的な支持は見せながらも、実質的な発話は、話し手に比べ圧倒的に少なくなるためである。では、二人がすでに共有している出来事の場合はどうであろうか。まず、二者間の会話においては、相手がすでに知っている出来事を複数の発話を用いて語る必要性がない。また、会話の中で、二人がすでに知っている出来事を語ることの目的は、その出来事に関して何等かの評価を行うためである場合が多い。相手が知らない自らの経験談として「物語」を語る場合は、相手に面白いあるいは大変だった経験を話し、その出来事を共有し合うことが目的であるが、二人がすでに知っている出来事を話す場合は、その出来事の一部を取り出し、それに関してなんらかの評価をし合うことが目的になる。そのため、相互行為は、話し手と聞き手の役割が明確ではないデュオパートになる。

一方、「描写」はソロパートで、また、「評価」はデュオパートで、多く見られる傾向はあるものの、必ずしもそうであるわけではない[14]。たとえば、ソロパートで「描写」が語られた場合、聞き手は、話し手が提供する情報を初めて聞くため、聞き手という役割を果たすようになる。つまり、聞き手にとって、新情報である場合は、ソロパートのような参加形式が見られるのである。一方、デュオパートで語られた場合は、二人の会話の参加者が、特定の事柄に関してすでに情報を持っているため、お互いに情報を交換し合ったり、すぐ特定の事柄について評価的な発話を交換し合う「評価」に展開される場合が多い。最後に、「評価」の場合、先行する「語り」に関して二人の会話の参加者がお互いに評価し合うことで展開させることが多いが、評価の対象が個人的な悩みである場合や聞き手が話し手に不同意な場合などは、ソロパートで展開される場合もある。

以上、「語り」とパートとの相関関係について述べたが、一人の会話の参加者が話し手になり、新情報を伝え、会話の内容的な流れに実質的な貢献をするソロパートとは異な

[14] 会話の参加形式と内容の結びつきに関しては、第7章で具体的に述べる。

って、二人の参加者の発話によって展開されるデュオパートの場合、二人の参加者によって「描写」と「評価」が混合する場合が多い。これは、ソロパートが主に情報の伝達が目的となるのとは違って、デュオパートは、主に特定の事柄に関して二人の参加者が話し合うことが目的になるためであるが、デュオパートでは、主に先行する「語り」に関して意見を交換し合ったり、冗談を言い合ったり、次の「語り」や「話題」を探ったりする複数の相互行為が行われる。そのため、デュオパートにおいては、内容的な面からの分類は有効ではないと考え、内容的な面からの分類は行わず、それぞれのデュオパートで会話の参加者がどのような相互行為をしているかに注目し分析を行うことにする。

5. 本研究で注目する現象

最後に、上述してきた分析の枠組みを用いて本研究ではどのような現象に注目して分析を行うかについてまとめておく。本研究では、日韓男女の親密な間柄の同性間の自由会話に見られるポライトネスのあり方を明らかにすることを目的とするが、上述したように会話は参加者の発話という相対的に小さい単位から、参加者の複数の発話から成り立った話題というより大きな単位が積み重ねられたものであると言える。相互行為の中で、ポライトネス・ストラテジーも、一つの発話や複数のやりとりといった比較的小さい単位から、相手の経験談に対して類似した経験談を語るという語り連鎖や話題管理という、より大きい単位まで、あらゆる面で表れているが、双方は深く関連し合っている。本研究では、会話参加形式と話題という大きい単位から特定の発話の相互行為というより小さい単位まで分析を行うが、これは、第1章と第2章で述べたように、相互行為におけるポライトネスのあり方を明らかにするためには、一つの発話やごく短い発話のみの分析だけではなく、会話の全体的構造と会話の局所的に見られる相互行為との関連性に注目する必要があると考えるためである。このような問題意識を出発点として、本研究では、日韓男女の自由会話におけるポライトネスのあり方を明らかにするため、次のような会話の全体的な構造と局所的な相互行為に注目して分析を行う。

ⅰ．会話の全体的な構造

A. 会話展開の仕方と「語り」連鎖

B. 話題構成のあり方と話題管理

ⅱ．会話の局所的な相互行為

C. 直接話法

D. ＜理解＞、＜感情・感想＞の発話

E. ＜同意・共感＞の発話

F. ＜不同意＞、＜否定的評価＞の発話

これらの現象を選択したのは理由がある。主な理由として、友人同士の自由会話という日常的な相互行為の中で、相手との親密な関係を構築するためのポライトネスのあり方が以上の現象に表れていることと、また、そこに日韓また男女という異なる文化とジェンダーによる相違が認められるからである。それぞれの分析項目と研究目的は、関連各章で改めて詳細に説明するが、以下では、§2と§3で述べた分析枠と関連させながら、本研究で注目する現象について簡略に説明する

5.1　会話の全体的な構造

まず、本研究では、§2と§3で設けた単位を用いて会話の全体的構造と関わる以下の点を明らかにし、日韓男女のそれぞれの会話の全体的な構造を把握する。

A. 会話展開の仕方と「語り」連鎖

ソロパートとデュオパートの発話数から、日韓男女の会話でどのようなパートの展開が主に観察されており、「語り」の内容とはどのような関連性があるかを探り、会話展開に見られる特徴を明らかにする。また、話題内に見られる「語り」連鎖に注目し、相手の先行する「語りa」に後続する「語りb」がどのようなストラテジーとして用いられているかに注目し、日韓男女の会話に見られる特徴を明らかにする。

B. 話題構成のあり方と話題管理

話題管理の観点から話題構成のあり方と「語り」開始の仕方[15]に注目し、日韓男女の話題管理に見られる類似点と相違点を探り、友人同士がどのように自己呈示を行い、親密な人間関係を構築していくのかを明らかにする

5.2 会話の局所的な相互行為

次に、それぞれのパートにおける局所的な相互行為に注目し、以下の点を明らかにする。

C. 直接話法

直接話法とは、（22）のように、今、ここの発話ではない発話をあたかも今、ここでの発話や音であるかのように表現する発話である。

(22) JOF1:スカイプしてる時に　あ　「ローゼンメイデンまたアニメ化するらしいで」
　　ってゆったら

日韓の友人同士の会話で、直接話法は、ソロパートで、①話し手によって用いられたり、②聞き手によって用いられたり、③デュオパートで仮想フレーム[16]を構築したりする。B&L（1987）によると、過去から現在への時制を転換する迫真的現在時制（vivid present）は、描写される話の中に聞き手を引っ張り込むことができるPPSであるが、日韓男女の会話で、これらの発話が、どのような人物の声を活き活きさせるために発話されており（第9章で説明する）、ポライトネス・ストラテジーとしてどのように用いられているかを分析する。

---

[15] 「語り」がどのように開始されているかという開始の仕方は会話の局所的な部分であるが、話題構成のあり方と話題がどのような役割(話し手と聞き手)を果たす参加者によって管理されているかという話題管理の仕方は大きく関連しており、話題構成や話題管理の仕方は会話の全体的な展開の仕方に密接に関わっていると考えられる。

[16] 現実に起こっていない出来事の中で成立する発話が、まさか今ここで発話されているかのように演技に直接話法で用いられ、フレームが構築される場合がある。

D. ＜理解＞と＜感情・感想＞の発話

＜理解＞を表現する発話とは、（23）のように相互作用の中で会話の参加者が相手の話を聞いて、相手の話を理解していることを表現する発話であり、話者の意見や感情は含まれておらず、相手の話を理解していることを表す発話機能を果たすものである。

(23)会話FJ2【飛行機の事故について】

01　JSF3:今日なんかヤフーニュースに乗ってたけど

02→JKF4:うん

03　JSF3:アシアナ航空が

04→JKF4:うん

＜感情・感想＞を表現する発話とは、（24）のように相手の話を聞いて、その発話を理解していることを表すと同時に、相手の話に対して驚きや面白いなどのような自らの感情や感想を表現している発話である。

(24)会話MJ2【休みの日について】

01　JSM4:だから　今日来れた

02　JTM3:なるほど

03　JSM4:だから　月一の二連休

04→JTM3:え::::　きついな

＜理解＞と＜感情・感想＞の発話は、ソロパートで聞き手によって使用されることが多く、これらの発話は、相手の話に関心を持っていることを表すPPSとして捉えられる。これらの発話が、日韓男女の相互行為の中でどのように用いられており、あいづち、繰り返し、言い換え、先取りなどのような発話様態　（第6章で説明する）との関連性にはどのような特徴が見られるのかを明らかし、日韓男女の聞き手の言語行為について考察する。

E. ＜同意・共感＞の発話

＜同意・共感＞を表現する発話とは、（25）のように相手の話を聞いてそれを理解したことを表すと同時に、それに加えて相手の意見や感情が自らの意見や感情と同様であるこ

とを言語化してはっきり表す発話である。

(25)会話FJ2【旅行先で買い物ができなかったことについて】

01　JSF3:お金ないし　貧乏旅行=

02　JKF4:　　=一切何も買わんかった？

03　JSF3:もったいない

04→JKF4:もったい　もったいない

＜同意・共感＞の発話は、「語り」が終了した時に、先行する「語り」について二人が共同で会話を展開させるデュオパートで多く観察されるが、日韓男女の相互行為の中で、これらの発話がどのように捉えられており、発話様態（第8章で説明する）の面からはどのような特徴が見られるかに注目し、＜同意・共感＞が相手との共通基盤を主張するストラテジーとしてどのように用いられているかを分析する。

F.　＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話

＜不同意＞の発話とは、相手の先行発話について、同様な意見あるいは感情を持っておらず、反対あるいは納得していないことを表す発話である。＜不同意＞は、先行する相手の発話に対するものであるため、＜不同意＞の対象になる相手の先行発話が必ず必要になる。（（26）の不同意の02行目の発話は、先行する01行目の発話に対するものである）。

(26)会話FJ1【ドラマのセリフについて】

01 →JAF2:かっこいい:

02 →JOF1:＜@かっこよくないよ　別に@＞　@　＞＜@好きなの?@＞＜

03　JAF2:＜@決めゼリフ?@＞

次に、＜否定的評価＞の発話とは、相手の思考や行動あるいは所有物などについて、マイナス評価を表す発話である。＜不同意＞とは異なって＜否定的評価＞の対象になるのは、相手の考えや発想あるいは行動や所有物などである。（（27）は、相手の行動（寝たという行動）に対する否定的評価の発話である。）

(27)会話FJ2【映画について】

01　JKF4:アメリ　アメ［リとか見た］ことないん?

02　JSF3:　　［あ　アメリ］　　アメリ見たけど寝た

03 →JKF4:@@　＜@あ::　本当あかんな@＞

04　JSF3:@@　アメリって　あれ　＜@声　あんまない感じだけ?@＞

＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は、相手のフェイスを侵害する行為として捉えられるが、友人同士の発話では、これらの発話が、一時的な「対立」関係を形成する場合と、「冗談」として用いられる場合とがある。これらの発話は、それぞれのパートでどのように用いられているかを明らかにしつつ、これらの発話が「冗談」として用いられる場合のコンテキスト化の合図の使用を分析し、日韓男女の会話に見られる特徴は何かを明らかにする。また、＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になっている事柄（第10章で説明する）にはどのような特徴が見られるかを明らかにし、「対立」と「冗談」の相互行為と、その対象になる事柄に見られる特徴から、日韓男女の「対立」と「冗談」の相互行為におけるポライトネスのあり方を探る。

本研究では、以上のような現象に注目して日韓の親しい間柄の同性間の自由会話に見られるポライトネスのあり方を探求しつつ、日韓差とジェンダー差の観点から次のことを明らかにすることを目的とする。

ⅰ．日本人と韓国人の、それぞれ友人同士の会話におけるポライトネスのあり方にはどのような類似点と相違点があるのか。

ⅱ．女性同士と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方にはどのような類似点と相違点が観察されるのか

以上の分析結果から、各章では以下のような問題点について考察を行う。

ⅲ．日本人と韓国人の友人同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

ⅳ．女性同士の会話と男性同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

6.　本章のまとめ

本章では、本研究における分析の枠組みと注目する現象について述べた。本章で提示し

た枠組みと本研究で注目する現象をまとめて図1に示す。

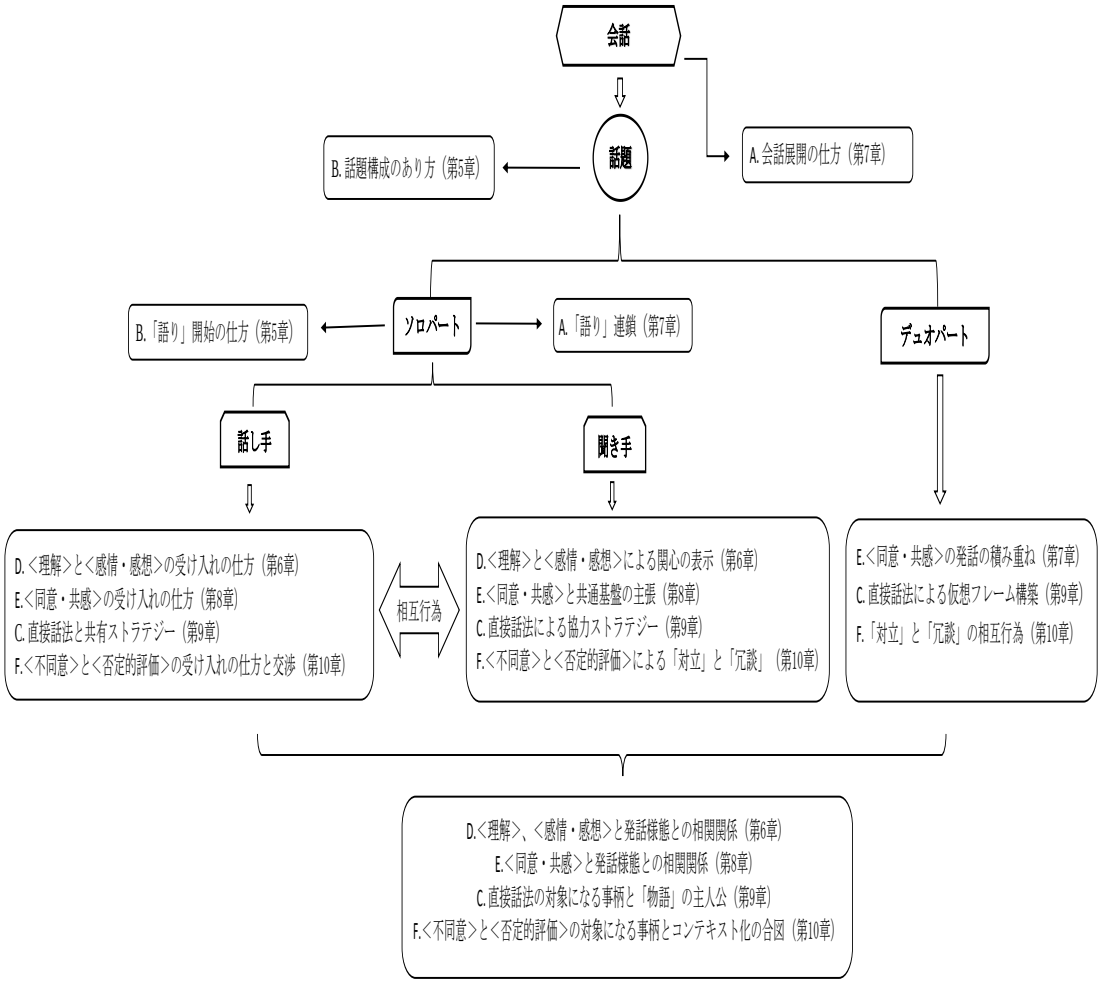

図1　本研究の枠組みと注目する現象

第Ⅱ部から第Ⅳ部では、それぞれ、§5と 図１に示した現象のうち、日韓差が顕著なもの（第Ⅱ部）、日韓同様にジェンダー差が観察されるもの（第Ⅲ部）、日韓差とジェンダー差両者が認められるもの（第Ⅳ部）にわけて分析を行う。具体的には、次のとおりである。

第Ⅱ部　日韓差が顕著なもの

・ 話題構成のあり方と話題管理（第5章）

・＜理解＞、＜感情・感想＞の発話（第6章）

第Ⅲ部　ジェンダー差が顕著なもの

・ 会話展開の仕方と「語り」連鎖（第7章）

・ ＜同意・共感＞の発話（第8章）

第Ⅳ部　日韓差・ジェンダー差の両者が認められるもの

・ 直接話法（第9章）

・＜不同意＞、＜否定的評価＞の発話（第10章）

以上のような構成にする理由は、本研究ではいかなる行為が日韓男女の相互行為において親密な関係を構築する装置となっているかというポライトネスのあり方を実証的に探求し、日韓という異なる言語・文化やジェンダーがポライトネスのあり方にどのような形で表れているのかを考えていくことを目的としているため、日韓差とジェンダー差がどのような装置に表れているかという観点から分析結果をまとめていく必要があると考えたからである。

また、日韓差とジェンダー差は、会話の全体的な構造と局所的な相互行為の両者に表れている。第Ⅴ部の総括では、第Ⅱ部から第Ⅳ部の分析結果と考察を踏まえ、第2章で論じた日韓の友人という対人関係の捉え方とジェンダー役割の観点から総合的な考察を行い、以下の点について考察を加える。

ｖ．異なる言語・文化とジェンダーという要因は、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのか。

第Ⅱ部　日韓差が顕著なもの

第Ⅱ部では、日韓差が顕著に見られた話題構成のあり方と話題管理（第5章）、および、＜理解＞、＜感情・感想＞の発話（第6章）を分析した結果について述べ、日本人と韓国人の友人同士の会話に相違点が見られる理由は何かについて考察を行う。

第5章　話題構成と話題管理からみるポライトネス

1. はじめに

友人との日常的な相互行為の中で、我々は、お互いを分かち合うため、相手の近況や考えなどを聞いたり、自らの経験談や情報あるいは考えや感情を自発的に語ったりする。第2章で述べたように、自己呈示または自己開示（以下、自己呈示とする）という自らの情報を相手に提供する行為は、親密な人間関係構築に大きな寄与をするが、相互行為の中で、我々は自らのことを知らせるため、あるいは、友人のことを知りたいため、いきなり語り出したり、相手に質問したりするわけではなく、いつ、何について、どのように語り、語ることで友人に何を伝えたいのか、また、相手のことについて聞くことで何を伝えているのかを考えながら会話を進行していく。

しかし、それぞれの文化でどの程度の自己呈示が適切とされるかは異なっており（Barnlund 1994）、どのような事柄について話すかという話題選択や開始の仕方にも日韓差があることが指摘されている（奥山　2000、三牧、難波　2009、金 2010）。本章では、本研究で設けた分析の枠組みを分析単位とし、話題管理の観点から、日韓の友人同士の話題構成のあり方にどのような類似点と相違点が見られるのか、話題内に見られる「語り」はどのように開始されているのかに注目して分析を行った結果について述べる。

本章の構成としては、まず、§2では先行研究と研究目的について述べ、§3では分析方法について述べる。そして、§4では分析結果について述べ、§5で考察を行い、§6をまとめとする。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、§2.1で先行研究について述べ、§2.2で本章の研究目的について述べる。

2.1　先行研究

従来の研究では、日本人と韓国人がどのような事柄を話題として取り上げて自己に関する情報を交換しつつ、会話を進行させるかという面に違いが観察されることが指摘されて

きた。

まず、日本人と韓国人にアンケート調査と面接調査を行い、会話における話題選択に対する意識調査を行った熊谷・石井（2005）では、出身地や自宅の場所、宗教といった話題については、日韓で意味づけにやや異なる面があると指摘されている。また、日韓の初対面の会話を分析した金（2010）では、日本語母語話者に比べ、韓国語母語話者の方が初対面の相手に対し、より多くの自己呈示を行っており、自分の感情・感想・評価などに関する自己呈示を行う割合が高いと指摘されている。

相互行為の中で、自己呈示は、自発的にまたは他者の要求によって開始されるが、自己呈示が会話の中でどのように開始されるのかにも日韓差が観察されている。まず、三牧・難波（2009）によると、プライベートな自己に関わる恋愛、結婚、経済状態などの事柄に関わる自己呈示は、日本語の初対面の会話でほぼ自発的に行われるが、韓国語の初対面の会話では、開示を要求される割合と自発的な開示が同程度あるいは要求されることがより頻繁に見られると指摘している。また、初対面の会話を分析した奥山（2000）でも同様な結果が報告されており、任・井出（2004）によると、日本人は相手の自己呈示を待つが、韓国人は積極的に質問をしていくことで会話を進行させる。

以上のように、話題の選択や自己呈示という自らの情報提供の開始方法には、異なる言語・文化による相違点が見られると指摘されているが、多くの研究では、アンケート調査と初対面の会話における自己呈示や開始の仕方を分析しており、親密な人間関係を構築してきた日韓の友人同士の日常的な会話に見られる話題の選択と自己呈示の開始の方法には、どのような類似点と相違点があるのかはまだ明らかにされていないと思われる。そこで、本章では、日本と韓国の友人同士の会話の中で展開されたそれぞれの話題に注目し、話題がどのように構成されており、話題を構成する「語り」はどのように開始されているのかをポライトネス理論の観点から分析する。

2.2　研究目的

本章の目的は、日本と韓国の友人同士の会話における話題構成のあり方と「語り」開始の仕方に注目し、話題管理に見られる日韓の類似点と相違点を探り、日韓の友人同士がどのように自己呈示を行い、親密な人間関係を構築していくのかを明らかにすることである。

具体的には、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

ⅰ．日韓の友人同士の会話に見られる話題構成のあり方にはどのような類似点と相違点があるか。

ⅱ．「語り」はどのように開始されており、日韓の友人同士の会話における類似点と相違点は何か。

ⅲ．話題構成のあり方と「語り」開始の仕方に日韓差が見られる場合、その理由は何か

3. 分析方法

本章では、本研究の枠組みとして設定した話題を最も大きい単位とし、①日韓の会話における話題構成のあり方と、②話題を構成する要素であるそれぞれの「語り」を、話し手が自身で開始する自己開始と、相手の質問などをきかっけとして始める他者開始といった視点から、日韓の会話の特徴を分析することにする。

4. 話題内の話し手交替からみる話題管理

本節では、分析結果について述べる。まず、§4.1では情報源という視点から日韓の会話における話題構成のあり方について述べ、§4.2では、話題を構成する「語り」がどのように開始されているかについて述べる。

4.1 話題の情報源

まず、話題区分調査によると話題数は日本語の会話が59、韓国語の会話が75、合計134の話題が認定された。それらの話題を構成する「語り」を見てみると、それぞれの話題は大きく、三つのタイプに分けられる。まず、①一つの話題に一人の話者による「語り」しか見られない場合（§4.1.2）と、②一つの話題内で話し手交替が行われ、先行する「語りa」に後続する「語りb」が聞き手であった会話の参加者によるものである場合と（§4.1.1）、③話題内に「語り」が観察されず、特定の事柄について二人が共同で話し合うデュオパートによって話題が構成されている場合に分類することができる。日韓の会話で、話題がどのように構成されているかを三つのタイプに分けて整理したものを示すと以下の表１のようである。

表1　日韓の会話における話題構成

	一人の語りによる話題	二人の語りによる話題	デュオ	計
JF	13	14	4	31
JM	14	11	3	28
日本合計	27　**46%**	25　**42%**	7　**12%**	59
KF	21	8	5	34
KM	27	8	6	41
韓国合計	48　**64%**	16　**21%**	11　**15%**	75

表1からは、以下の日韓差が確認できる。

(a)　日本語の会話では、一人の話し手の「語り」によって話題が構成されている割合と二人の話し手によって話題が構成されている割合に大きな差は見られない。

(b)　一方、韓国語の会話で話題は、一人の話し手の「語り」で構成されている話題が占める割合が高い。

以上のような日韓差が観察されるが、話題となった特定の事柄が会話の参加者のどちらに関わる内容であるか、話題を巡る情報をどちらが多く持っているかが話題構成に大きく関わる。話題が特定の参加者に関わるものである場合と、話題になった事柄について一方の参加者がより多くの情報を持っている場合、話題は一人の参加者の「語り」によって構成されることが多い。一方、会話の参加者の二人が特定の事柄についてすでに知識や経験を持っている場合と、特に一人に関わる話題ではない場合は、二人の「語り」によって話題が構成されることが多い。このように、話題がどちらの参加者によって構成されているかは、情報源と関わっていると考えられるが、以下では、日韓の友人同士の会話で展開された話題にどのような特徴が見られたかについて述べる。

4.1.1　共通知識を基盤とした話題

まず、日本語の会話では、韓国語の会話に比べて共通知識を基盤とした話題の選択が多い。二人によって「語り」が連鎖されている話題を見てみると、たとえば、会話の参加者の共通の悩みである「卒業論文」「就職活動」などが話題になり、二人の会話の参加者が話題構成に積極的に寄与している。また、「花火」「家での出来事」　「中学高校の思い出」「大学の部活」「仕事」「最近の話題」などといった会話参加者の二人が共通して何

等かの経験や情報を持っている可能性の高い話題が多く観察される。

以下の表2と表3に、それぞれ、日本語の会話で「最近の話題」として飛行機の事故と「仕事」という内容が話題として取り上げられ、二人の参加者によって「語り」が連鎖された話題表を示す。

表2 二人による「語り」連鎖話題：日本Ⅰ

話題	語り	内容	パート	話し手
飛行機の事故について	描写Ⅰ	ニュースで見たアシアナの事故について	ソロ	JSF3
	物語Ⅱ	タイの飛行機に乗ったことについて	ソロ	JKF4
	物語Ⅲ	タイの飛行機の安全確認について	ソロ	JSF3
		航空会社の安全確認について	デュオ	両者
	描写Ⅳ	ライアン（航空会社）について	ソロ	JKF4
		飛行機が落ちることについて	デュオ	両者

表3 二人による「語り」連鎖話題：日本Ⅱ

話題	語り	内容	パート	話し手
仕事についてⅠ		職場の人について	デュオ	両者
	描写Ⅰ	会社が求める人材について	ソロ	JTM3
		仕事の大変さについて	デュオ	両者
	物語Ⅱ	残業について	ソロ	JTM3
		残業について	デュオ	両者
	描写Ⅲ	昇進について	ソロ	JSM4
	描写Ⅳ	仕事について	ソロ	JSM4
	描写Ⅴ	一日の動きについて	ソロ	JSM4
		汚いと問題が起こることについて	デュオ	両者
	物語Ⅵ	今日の仕事について	ソロ	JSM4

表2と表3から分かるように、二人の会話の参加者は、「飛行機の事故」と「仕事」というキーワードを巡って、話し手を交替しながら「語り」を次々と連鎖している。表2と表3のような話題の構成は、韓国語の会話でも観察されているが、表1からも分かるように、韓国語の会話に比べ、日本語の会話の方が二人の会話の参加者の「語り」によって話題が構成される割合が高く、この結果は、韓国の友人同士の会話に比べ、二人の共通知識を基盤とした事柄についてお互い語り合うことで話題が構成される傾向があることを示唆すると考えられる。

4.1.2　個人に関わる話題

次に、日韓男女に関わらず、話題が一人の話者の「語り」によって構成されている場合、個人に関わる内容が話題になっている傾向があるが、一人の話者による「語り」で話題が構成されている用例は、表１に示したように韓国語の会話で高い割合で観察されている。韓国語の会話で、一人の話者による「語り」で話題が構成されている場合、「片思いをしている異性」「他人との人間関係」「恋愛ができない理由（家庭の経済的な問題）」「家族の近況」などといった個人に関わる内容が会話の中で一つの話題として構成されている。以下に、一人の話者の「家族」に関わる内容が話題として構成されている話題表を示す。

表4　一人による「語り」連鎖話題：韓国Ⅰ

話題	語り	内容	パート	話し手
妹の留学について	描写Ⅰ	アメリカに行くことについて	ソロ	KGM1
		アメリカの治安について	デュオ	両者
	描写Ⅱ	どのくらいアメリカに行かせるかについて	ソロ	KGM1
		妹がアメリカに行くことについて	デュオ	両者

表5　一人による「語り」連鎖話題：韓国Ⅱ

話題	語り	内容	パート	話し手
母について	物語Ⅰ	KCM6が母と外食に行かなかったことについて	デュオ	両者
		母が入院したことについて	ソロ	KCM6
		母の体調について	デュオ	両者

表4と表5の話題内容を見てみると、表4の話題は、KGM1の妹に関わる内容であり、表5の話題は、KCM6の母に関わる内容であることが分かるが、これらの二つの話題は、それぞれ（1）と（2）のように、KAM2とKBM5の疑問表現によって取り上げられている。

(1)会話MK1【妹の留学について】

01 →KAM2:（4.0)동생은?(（4.0）妹は？)

02　KGM1:아 내 동생 갈꺼 같애 12 월 3 일 아님 4 일

（あ　私の妹行きそうだよ　12 月 3 日か 4 日に）

(2)会話MK3【母について】

01 →KBM5:(9.0)어머니가 갈치조림 좋아하시나? (4.0) 갈치조림이면 씨 안 따라갈 만

02　　하지 갈비도 아니고((9.0) 母親はタチウオ煮つけが好き？ (4.0) タチウオ煮なら　まあ　ついて行かないのも分かる　カルビでもないし((録音の当日 KCM6 は、母と一緒にタチウオ煮つけを食べに行こうとしたが、行っていないと録音をする前に話している)))

03　KCM6:갈치는 원래 안 좋아 해가지고(タチウオはもともと嫌いでね)

以上のように、会話で展開された話題の中で、話題が一人の話者の「語り」によって構成されている場合、話題の内容は、個人に関わる内容が中心である傾向が強く、（1）と（2）のように、韓国語の会話で個人に関わる話題は、相手によって開始される傾向があるが、このような特徴は、次節で述べる「語り」開始の仕方に顕著に表れる。

4.2　自己開始と他者開始と語り連鎖

§4.1では、話題の構成のあり方に日韓差が見られ、韓国の友人同士の会話に比べ、日本の友人同士の会話で、二人の共通知識を基盤とした事柄についてお互い語り合うことで話題が構成される傾向があるが、韓国の友人同士の会話では、相手の疑問表現によって個人に関わる内容が取り上げられ、一人の会話の参加者の「語り」によって話題が構成される用例が多く観察されていることについて述べたが、ここでは、日本と韓国の友人同士の会話における「語り」の開始の方法に注目して分析を行った結果について述べる。

4.2.1　日韓の会話における自己開始と他者開始

まず、一つの話題内に複数の「語り」が展開され、「語りa」の話し手と「語りb」の話し手が同じである場合は一人による連鎖とし、話し手の交代があった場合は二人による連鎖と分類する。そして、「語り」が自ら自発的に語られた自己開始であった場合と相手の質問によって開始される他者開始である場合に分類して、日韓の会話で見られた「語り」の開始の方法を整理して示すと表6のようである。

表6　自己開始と他者開始の出現数

	二人による連鎖		一人による連鎖		計
	他者	自己	他者	自己	
JF	8	30	2	31	71
JM	4	39	1	34	78
日本合計	**12**	**69**	**3**	**65**	**149**
KF	6	22	16	7	51
KM	8	24	15	19	66
韓国合計	**14**	**46**	**31**	**26**	**117**

表6からは、次のような類似点と相違点があることが確認できる。

・日韓の類似点

(c)　二人による連鎖は、自己開始によるものが多い。

・日韓の相違点

(d)　一人の参加者の複数の「語り」によって話題が構成されている場合、韓国語の会話では、他者開始が多い。

(e)　一方、日本語の会話では他者開始は3例しか観察されず自己開始による連鎖が多く観察される。

以上のような類似点と相違点が観察されたが、（c）一つの話題内に二人による「語り」が観察されている場合、「語り」がいかなるストラテジーとして用いられているかという面には日韓差よりジェンダー差が観察されている。この結果については、第7章で述べることにし、以下では、日韓の会話で大きな相違点が見られる（d）と（e）を中心に一人による「語り」連鎖に注目して分析を行った結果について述べる。

4.2.2　自己開始：話し手による話題管理

まず、一つの話題内に複数の「語り」が一人の話し手によって連鎖されたパターンのうち後続する「語り」が自発的に語られた場合について述べる。表7に、日本語の会話の中で話題が一人の複数の「語り」によって構成されている用例を挙げる。

表7　話し手による話題管理「日本」

話題	語り	内容	パート	話し手
学生の親について	物語Ⅰ	医師の子について	ソロ	JSM4
		医師の子を教えることについて	デュオ	両者
	物語Ⅱ	親に教えてもらったことについて	ソロ	JSM4
		骨の数に個人差があることについて	デュオ	両者
	物語Ⅲ	参観日の出来事について	ソロ	JSM4

表7を見てみると、三つの「物語」が一人の会話の参加者（JSM4）によって語られていることが分かる。ここで注目したいのは、「物語Ⅰ」に後続する「物語Ⅱ」と「物語Ⅲ」がどのように開始されているかであるが、表7の話題の内容的な流れを簡略にまとめて示すと次のようである。

「物語Ⅰ」:医者の子に限って生物のテストの点数が低い→　デュオⅠ:医者の子に生物を教えるのは怖い→　「物語Ⅱ」:子供を通じて医者の親に人間の骨の数がいくつかを質問したら、骨の数には個人差があると返事をもらった→　デュオⅡ:どこから個人差が出るか、適当に答えたのではないか→　「物語Ⅲ」:親の参加日に誰かが鼻血が出て医者の親に助けてもらえて便利だ

ここで、この話題のデュオⅠから「物語Ⅲ」にかけての会話の断片を見てみよう。

(3)会話MJ2【学生の親について 】

----------デュオⅠ----------

[…]

01 JSM4:怖いよね　せっかくお父さん開業しててさ　地盤あんのにさ

02 JTM3:その　その子供に動物の内臓の働き教えてる

03 JSM4:うん

04 JTM3:恐ろしさやね＝

05 JSM4:　　＝整形外科の子どもに骨の話とか

06 JTM3:@@

07 JSM4:(2.0)すっごい骨の話

08 JTM3:@@

----------「物語Ⅱ」----------

09 JSM4:（1. 5）逆に　だから　聞いたりするもんね　その　おや　子供を通して親に
10　（JTM3:うん）分からんことあったら聞いたりする[…]「大体　ま　100 個ぐらいな
11　んかな」ってゆう話してて　で　その質問を別の子の親に回答を求めるという
12　じゃ「割と個人差があるよ」みたいな回答が返ってきて「らしいよ」みたいな@@
13　（0.9）っていう

----------デュオⅡ----------

14 JTM3:個人差があるよって@@
15 JSM4:うん　らしいよ::　[…]
16 JTM3:@@なんか　なんか適当に答えたんちゃうん？@@
17 JSM4:@@まじか
18 JTM3:分からんで@@　XXXXXXX　そんなことはないと思うけど
19 JSM4:責任ないもんね
20 JTM3:あ::

----------「物語Ⅲ」----------

21 JSM4:あ　あと　そう　医者の子　親が多いから（JTM3:うん）校医さん（JTM3:は）
22　学校の専属の医者がだれかの(JTM3:はいはいはいはいはい)保護者や　やったりす
23　るから（JTM3:うん）[…]　参観日とかに　誰かが鼻血とか出したら　[…]

（3）のデュオⅠの終了の部分を見てみると、JSM4は「骨の話」を二回繰り返して発話しており、その間に2秒のポーズが生じていることが分かる（07行）。また、JTM3は笑うことで、面白いことを伝えているものの、それ以上の言語的な反応は見せていない。このような相互行為は先行する話題が終了し、次の話題に転換される際、多く観察されるパターンであるが、JSM4は1. 5秒のポーズ後、「物語Ⅱ」を自ら開始することで話題を展開させている（09行）。JSM4の「物語Ⅱ」は、「医者の親に質問したら、骨の数に個人差があるそうだ」という相手を驚かせるような語りで、「物語Ⅱ」の後、デュオパートで二人は「骨の数に個人差がある」ことについて楽しく話し合いを行っている（14～20行）。デュオパートの次の「物語Ⅲ」は、「医者の親が多くて参観日に助けてもらった」という内容であるが、JSM4は「あ　あと　そう」と発話し、先行する話と関連のある話であることを示した後、自発的に「物語Ⅲ」を開始している。

このように、日本語の会話で話題が一人の参加者の「語り」によって構成されている場合、その「語り」のほとんどは、話し手の自発的な開始によって展開され、話し手が話題を管理しつつ「語り」を展開させている。

4.2.3　他者開始：聞き手の話題管理

次に、後続する「語り」が他者開始で始まっている場合について述べる。他者開始による連鎖は、日本語の会話に比べ、韓国語の会話で多く見られるが、まず、表8を見てみよう。

表8　聞き手の話題管理「韓国」

話題	語り	内容	パート	話し手
同性愛者について	描写Ⅰ	サンフランシスコのゲイについて	ソロ	KGM1
	物語Ⅱ	アメリカでレズビアを見たことについて	ソロ	KGM1
		レズビアについて	デュオ	両者
	物語Ⅲ	ゲイに告白されたことについて	ソロ	KGM1
		同性愛について	デュオ	両者

表8の話題は、韓国の男性同士の会話で展開された話題であるが、ゲイに関する話題は、旅行先に関するデュオパートの話し合いの中で、KAM2が「パタヤ　ゲイ天国」と発話したことから始まり、KGM1は、サンフランシスコにゲイが多いということについて描写することで、話題は開始されている。「描写Ⅰ」の後、KGM1はアメリカでレズを目撃したことについて自ら「物語Ⅱ」を語り出し、KGM1の「物語Ⅱ」が終了すると、デュオパートで、二人はレズビアンに対する評価的な発話を用い、話し合いを展開させている。デュオパートで、KGM1はゲイに告白されたことがあると言及しており、デュオパートに後続するKGM1のゲイに告白されたことに関する「物語Ⅲ」は、（4）のように、KAM2がデュオパートで言及されたKGM1の経験談に関して質問することで開始される（01～02行）。

(4)会話MK1【ゲイに告白されたことについて】

01 KAM2：아 근데 잠깐만 그러면 넌 니가 키크고 덩치 있으니까 그럼 너한테 고백한
02　게이는 좀 마르고 좀 왜소한 그런 애들이냐?（あ　でも　ちょっと待って　だったら　あなたに告白したゲイはちょっとやせて小さい　そういう子なの？）

----------「物語Ⅲ」----------

03 KGM1: 아 한명은 남자 남자한테 고백 받았고(KAM2:응) 한 명은 여잔데 여자가
04 동성애자야(あ　一人は男性男性に告白されて（KAM2:うん）一人は女だけど　女が同性愛者だよ)
05 KAM2: 여자가 동성애잔데 왜 너한테 고백을 해?(女が同性愛者なのに何であなたに告白するの？)
06 KGM1:아 동성 아아 양성애자 (KAM2:양성애자 아::) 전 여잔친구가 근까 전
07 이성친구가 여자였구 여자앤데 독일 여자애야 (KAM2:어)그리고 내가 이따가
08 「어? 괜찮은데」 사귈려고 하는데 근데 옆에 친 내가 생각할 시간 좀 달라고
09 그랬었어(あ　同性　ああ 両性愛者（KAM2:両性愛者　あ::）前の彼女が　だから前の恋愛相手が女性で　女性だったけど　ドイツの女の子だよ（KAM2:うん）そして 私が　こう　「えっ？　いいじゃない」と思って付き合おうとしたけど　隣のとも　私が考える時間を少しくれと言った)

ここで注目したいのは、後続するゲイに告白されたことに関する「物語Ⅲ」がどのように開始されたかであるが（4）を見てみると、KGM1の後続「物語」は、KAM2の質問によって開始されていることが分かる。KAM2の「ちょっと待って（01行）」という発話は、相手の注目を引き、次の発話が重要であることを表す発話である。KAM2は、相手の注目を引いた後、相手の出来事に関する内容について具体的に質問することで、KGM1の出来事に興味を持っていることを積極的に表し、KGM1の「物語」を導き出している。

以上のように、韓国語の会話の話題内で「語り」が一人の話者によって連続的に語られた場合、先行する「語り」で聞き手として役割を果たしていた会話の参加者が、話し手に関心や興味を表し「語り」を導き出すことで「語り」が連鎖され、「語り要求」→「応答」の形で話題が聞き手によって管理されている。このように、韓国語の会話で、聞き手は積極的に疑問表現を用いて、相手に自己呈示を要求することで親密さを表していると考えられるが、このような話題管理の仕方は、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では個人に関わる内容が話題になる傾向が強いこととも関連していると言える。

4.3　分析のまとめ

本節では、日韓の友人同士の会話における話題構成のあり方と「語り」開始の仕方に着目し、話題管理の仕方にどのような日韓差が見られたのかについて述べた。本節の分析結果をまとめると以下のようである。

まず、日韓男女に関わらず、友人同士の会話に見られる類似点は次のようである。

① 話題が二人による「語り」によって構成されている場合、「語り」は自己開始によるものが多い。

次に、日本語の会話と韓国語の会話に見られる相違点は以下のようである。

② 韓国語の会話に比べ、日本語の会話では、共通知識を規範とした話題が多く観察されるのに対し、韓国語の会話では個人に関わる内容が話題として取り上げられる傾向が強く、その結果、一人の「語り」による話題構成が多く観察される。

③ 一人の話者の「語り」によって話題が構成されている場合、韓国語の会話では、他者開始が多い。一方、日本語の会話では自己開始による連鎖が多く、日韓で話題管理の仕方が異なる。

以上の分析結果を踏まえ、次節では§2.2で挙げた研究目的ⅲ．話題構成のあり方と「語り」開始の仕方に日韓差が見られる理由は何かについて考察を行う。

5.　話題管理と日韓の踏み込み度合

本章では、日本語と韓国語の会話における話題構成のあり方と「語り」開始の仕方に相違点が観察されることについて述べたが、このような相違はどこから生じているのであろうか。日韓の初対面の会話を分析した奥山（2000）や三牧・難波（2009）では、日本語の会話に比べ韓国語の会話の方が相手への質問数が多いことが指摘されており、任・井出（2004）によると、日本人は相手の自己呈示を待つが、韓国人は積極的に質問をしていく「攻め」の手法で会話を進行させる。しかし、親密な関係を構築してきた友人同士の会話では、話題が二人の「語り」によって構成された場合、日韓同様に「語り」は自発的に開始されることが多く、この場合、「語り」は会話の展開に貢献するPPSとして捉えられる

（第7章で述べる）。一方、話題が一人の参加者の語りによって構成された場合は、日本語の会話では、主に自己開始が観察されているのに対し、韓国語の会話では他者開始がより多く観察されている。つまり、特定の話題が一人の参加者の「語り」で構成されている場合、日本語の会話では話し手が話題を管理し展開させるが、韓国語の会話では聞き手が話題を管理しており、話題は個人に関わる内容が中心になる傾向が強い。このような日韓差はどのように理解すればいいのであろうか。

三牧（2013）によると、自己呈示は、自らのネガティブ・フェイスへのFTAとなるが、自己呈示は自らのポジティブ・フェイス欲求を満たす行為でもある。また、自己呈示要求は相手のネガティブ・フェイスを侵害する行為であると同時に、情報要求によって相手への関心を示すことは相手のポジティブ・フェイス欲求を満たす行為ともなると指摘している。三牧（2013）が指摘したように、語り要求が自己呈示に関わる場合、相手に情報を要求する行為は、相手のフェイスを侵害するリスクが高いが、親密な人間関係である友人同士の会話であればそのリスクは相対的に低い。それにも関わらず、日本の友人同士の会話の場合、聞き手は、話し手のネガティブ・フェイスを優先的に配慮し、話し手が自発的に自らの事を語り出すことを待つという相互行為で話題が展開される。つまり、相手のネガティブ・フェイスを侵害する可能性がある他者開始はできるだけ避け、話し手が自ら語り出すことを待つという配慮の仕方を取っていると考えられる。一方、韓国語の会話では、話し手に興味を持っていることを表し、話し手のポジティブ・フェイスの欲求を満たすストラテジーをより優先的に選択する。韓国語の会話で見られた個人に関わる話題や多くの「語り」要求は、相手のポジティブ・フェイスに配慮したストラテジーとして成功的に用いられていることが多い。このような差は、日本語の会話と韓国語の会話で「誰に投票したか」という政治の話が話題として取り上げられている場合の相互行為にも観察される。

(5)会話MJ1【投票について】

01　JBM2:あ　そや　泉南 の::　選挙どうなったん?

02　JAM1:え　別に　どうなったって［別に］

03　JBM2:　　［誰に］入れた　？@@

04 →JAM1:いや　＜@それは言えない@＞

05　JBM2:それは守秘義務。

06　JAM1:それはちょっと［ＸＸＸ］

07　JBM2:　　［守秘義務］@

日本語の会話の用例（5）を見てみると、 JBM2の「誰に入れた?」という質問に対して JAM1は「それは言えない」と答えている。

(6)会話MK2【投票について】

01　KHM3:아 씨발 투표해?(あ　くそ　投票する？)

02　KDM4:어?（うん？）

03　KHM3:투표해? 투표?（投票する？投票?)

04 →KDM4：(0. 7)해야지 나 #### 할건데

（（0. 7）するよ　私＃＃＃(（政治家の名前）)に投票するけど)

05　KHM3：아 씨발 ＞하지마 하지마＜(あ　くそ　＞するな　するな＜)

一方、（6）のように（5）と同様な場面で、韓国語の会話では、「投票する?」と質問された KDM4は、「＃＃＃（政治家の名前）に投票する」と誰に投票するかという情報まで与えている。この例にも表れているように、日韓でどの程度自己呈示を行うかは異なっていると考えられる。しかし、韓国の親密な友人同士の会話でも「語り」要求は、相手のネガティブ・フェイスを侵害する行為になることもある。この場合、「語り」を要求された参加者は、「語り」要求を回避するために2種類のストラテジーを用いることがある。 一つは要求されたことに関して語りたくないと直接的に相手に表現することで回避するストラテジーであり、もう一つは間接的に曖昧な形で答えることで回避するストラテジーである。以下の用例を見てみよう。

（7）の会話例では、以下のようにそれぞれの発話を示す。

…　:「語り」要求発話、　…　…　:直接的な回避　…　…　：間接的な回避

(7)会話MK1【KGM1に告白した同性愛者について】

01 KAM2：한 명은 또 누군데 한 명은 남자는 누구야?

（一人はまだ誰なの？　一人は　男は誰？）

02 KGM1：남자는 히스패닉이라고 해야되나（男性はヒスパニックっていえばいいか）

03 KAM2：히스패닉? 근데 뭐 좀 이쁘장하게 생겼어? 남자가?

（ヒスパニック？でも　何かちょっときれいな感じなの？男が？ ）

04 KGM1：아니야（違う）

05 KAM2：아니야?（違う？）

06 KGM1：아 몰라 별로 이상 아 씨 그 얘기 하지마

（あ　分からない　別に　変　あ　くそ　その話するな）

07 KAM2：너한테 어디서 매력은 느낀거야 도대체 걔는

（あなたのどこに魅力を感じたんだ　一体　あいつは）

08 KGM1：아 몰라 씨（あ　分からない　くそ）

（7）を見てみると、KGM1は男性の同性愛者に関する話を回避しようとしていることが分かる。（7）で、KAM2は、積極的に質問を用いてKGM1に告白した同性愛者についての話を要求している。しかし、KAM2の質問（01、03行）に対して、KGM1は具体的なことは語らず、最小の応答をしていることが分かる。その答えを聞いたKAM2はKGM1の応答をそのまま繰り返して質問することで（05行）、その話を積極的に導き出そうとしている。しかし、KGM1は「分からない」という間接的な表現と「その話するな」という直接的な表現を用いて、「語り」を回避している。

（7）から分かるように、韓国語の会話でも「語り」要求はネガティブ・フェイスを侵害する行為になることもあり、この場合、「語り」を要求された参加者は、自らのネガティブ・フェイス欲求を満たすため、回避ストラテジーを用いることになる。このように、「語り」要求は、相手のネガティブ・フェイスの侵害とポジティブ・フェイスへの配慮という二面性を持つが、韓国の友人同士は、相手のポジティブ・フェイスへの配慮を優先し、相手に興味を持っていることを積極的に表すことで話題を展開させていく。

以上のように、日本語の友人同士の会話では、相対的にネガティブ・フェイスへの配慮を優先した結果、話し手が話題を管理しつつ展開させるが、韓国語の会話の場合、聞き手は話し手のポジティブ・フェイスへの配慮を優先し、聞き手が次々と語りを要求することで興味を表しながら話題を展開させている。対人関与（involvement ）の程度の観点から

「会話スタイル」を「高関与スタイル[17]（high-involvement style）」と「高配慮スタイル（high-considerateness style）に二分類したTannen（1984）は、次々と質問をする話し方（machine-gun question）は、「高関与スタイル」の特徴であるとし、これらの話し方は情熱的な話し方であると述べている。Tannen（1984）がいう「会話スタイル」の観点から日韓の話題管理と配慮の仕方を見てみると、韓国語の会話は、相手のポジティブ・フェイスに配慮しているため「高関与スタイル」に近く、日本語の会話は、相手のネガティブ・フェイスに配慮した結果「高配慮スタイル」に近いと言える。日韓の会話スタイルの相違は、配慮の仕方の違いが話題管理に影響した結果であると考えられるが、このような配慮の仕方の違いは、相手の領域に踏み込む度合の相違から生じていると考えるこができる。日韓中のあいさつに用いられる表現に着目しポライトネス理論の観点から分析した滝浦（2008、2013）は、日本語のあいさつ習慣と「ご飯食べた？」などの韓国語のあいさつ習慣の間には、相手の領域に踏み込む度合の相違が見られると述べている。つまり、あいさつ習慣という面から見た場合、日本語に比べ韓国語の方が相手の領域に踏み込む度合が高いということである。本章で分析した話題構成のあり方や話題管理の仕方からも、日本人は友人の領域に踏み込むことを避けることで友人のネガティブ・フェイスに配慮するが、韓国人は友人の領域に踏み込み、次々と質問することで興味を持っていることを表すポジティブ・フェイスに配慮する仕方を取っていると言える。このような配慮の仕方の相違は、次章で見ていく日韓の聞き手の役割の相違と、直接話法の使用とも大きく関連する。

6. 本章のまとめ

本章では、話題の情報源と「語り」の開始方法に注目し、日韓の会話に見られる特徴について述べた。 本章の分析結果と考察は、以下のようにまとめられる。

（A）話題構成のあり方と話題管理の仕方には日韓差が見られ、話題が一人の会話の参加者の「語り」によって構成された場合、日本語の会話の場合、自己開始が圧倒的に多く観察されるのに対し、韓国語の会話では、他者開始がより多く見られる。

[17]高関与スタイルと 高配慮スタイルは、三牧（2013）の訳。

（B）このような相違は、日韓の自己呈示の程度の差と相手に踏み込む度合の相違から生じると考えられる。日本人は友人の領域に踏み込むことを避けることで友人のネガティブ・フェイスに配慮するが、韓国人は友人の領域に踏み込み、次々と質問することで興味を持っていることを表すポジティブ・フェイスに配慮する仕方を取っていると言える。

本章の分析結果は、次の章の分析結果と大きく関連する。次章では、本章の分析結果に触れながら考察を行う。

第6章　関心の表示とポライトネス

1. はじめに

対面でのコミュニケーションを行う際には、（1）のように、いくら話者が円滑に話を進めようとしても会話の参加者が何の反応も見せなければ、うまく会話を進めることは難しい。

(1)会話MK2【「ソロ」　KDM4:就職活動について】

01 KDM4:내가 처음에 ##제약 쓰고 그 다음에 ##이형이랑 ##이한테 첨삭 받고 그 다
02　음에 처음에 는 게 ##제약이였어　[…] 자소서도 중요한가봐 그걸 그때 확 느
03　꼈어 듣냐?（私が最初に＃＃製薬に応募して　その後＃＃兄さんと＃＃に添削してもらって　その後　初めて応募したのが##制約だった［…］自己紹介書も大事だよね　それを　あの時　すごく感じた　聞いている？）
04 KHM3:어（うん）
05 KDM4:지금 #######이후로 다 안되다가 첨삭한 이후로 넣은게 되는거야
06 （今＃＃＃＃＃＃＃（（会社名））の後　すべて落ちたけど　添削してもらった後　応募したのが通っている）

（1）の03行目の発話「聞いている？」という発話から分かるように、聞き手の反応が期待される箇所で聞き手が何の反応も見せなかった場合、その反応のなさは話し手のフェイスを侵害する行為として捉えられる。相手の話を聞いて理解したり、面白いと感じたりすることは、内面的な活動の中で起こるものであるが、（2）のように、それを言語で相手に表すことは可能である。

(2)会話MJ4【「ソロ」JYM8:消防局に置いてある服について】

01 JYM8:足出して靴も一緒にぶわ::って脱いで
02 JDM7:うん
03 JYM8:次きた時にもそのままぐ:って着てづつつ［つつって着れるように］
04 JDM7:　　［@　@　@　@］
05 JYM8:あの@@　消防車の横に置いてあんねんやん＝
06 JDM7:　　＝へ［え:］
07 JYM8:　　［いっ］ぱい　服　［いっつも］

08 JDM7:　　［すげ］
09 JYM8:それ見ながら　「うわ::　抜けがらいっぱいあるな::」思て
10 JDM7:@@@＜@脱皮してある@＞＝
11 JYM8:　　＝＜@脱皮してあるねん　もう@＞　たぶん　あ
12　れ　なんか　緊急の時は　もう（0.4）さ：あっ　す::うって着て　もう　行くんや
13　ろうなみたいな

（2）に見られるように、相手の発話に対して＜理解＞を表す発話は、いわゆるあいづちとされる発話様態で表現されることが多いが（02行）、＜理解＞を表したり、相手の話に対して＜感情・感想＞を表出したりすることは（08、10行）、会話の展開に協力的な姿勢を示し、相手の話に関心を持っていることを表すPPSとして捉えられる。相互行為の中で、聞き手が＜感情・感想＞を表出した場合（10行）、話し手は、聞き手の発話を繰り返して＜感情・感想＞を積極的に受け入れたりしながら（11行）、聞き手と協力的に会話を進行させていく。

このように、話し手の発話に対して協力的な姿勢を示す聞き手の言語行動として、従来の研究ではあいづちが多く研究されてきた。メイナード（1992）によると、聞き手はあいづちをむやみに用いるのではなく、話し手がいつあいづちを必要とするかを認識して、タイミングよく用いているが、そのタイミングや使用頻度には日韓差が観察されることも指摘されている（任･李 1995、金 2003など）。しかし、実際、日韓の相互行為の中で＜理解＞や＜感情・感想＞を表す発話が、日韓の会話の参加者にどのように受け入れられており、これらの発話の相互行為にはどのような日韓差が見られるのかという観点からの分析はまだ行われていないと思われる。

本章では、日韓の友人同士が会話を協力的に進行させるために、相手の話に関心を示す＜理解＞や肯定的な＜感情・感想＞を表す発話に着目し、日韓の友人同士の会話で、相手手に関心を表すPPSがどのくらい用いられており、それぞれの発話の相互行為にどのような類似点と相違点があるかを分析する。そして、それぞれの発話とあいづち、繰り返し、言い換え、先取りなどの発話様態との相関関係にはどのような日韓差が見られるかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、先行研究をまとめた後、本章の目的について述べる。

2.1　先行研究

従来の研究では、会話を円滑に進行させる働きをする発話としてあいづちが多く分析されてきた。あいづちの定義は、研究によって相違点が見られるが、水谷（1988:4）は「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入るもの」とあいづちを定義しており、堀口（1997:42）はあいづちの基本的な機能を、「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義している。堀口（1988、1997）では、その機能として①聞いている信号、②理解している信号、③同意の信号、④否定の信号、⑤感情の表出を挙げている。そして、あいづち、繰り返し、言い換え、先取りあいづち、先取り発話を聞き手の言語行動としている。

メイナード（1992）によると、聞き手はあいづちをむやみに用いるのではなく、話し手がいつあいづちを必要とするかを認識して、タイミングよく用いており、あいづちは話し手と聞き手の共同作業の過程を表す大切なストラテジーであるが、あいづちの使用傾向には、異なる言語・文化による相違があることが指摘されている。まず、日本語と英語の対照を行った水谷（1993）は、日本語の会話では、あいづちに加え、繰り返しや言い換えなどが会話の途中に頻繁に用いられていることから、日本語の会話は対話ではなく共話と呼ぶべきであると論じている。日韓のシナリオを用いて日韓のあいづちの使用頻度を分析した박（2005）によると、韓国語のシナリオでのあいづちの頻度より日本語のシナリオでのあいづち頻度が高いとされる。また、日韓のテレビとラジオ番組の談話とアンケート調査から、様々な場面におけるあいづち、繰り返し、言い換え、先取りなどの使用頻度を分析した任･李（1995）でも、韓国語の会話に比べ、日本語の会話の方があいづちの使用が多いことが指摘されている。また、あいづちとターンの関係を考察した金（2003）は韓国語と日本語における初対面、二者間の会話をデータとし、あいづち発話をターンとして位置づけて分析を行なっている。結果として、日本語の場合「相手のターンと共存しているあいづち発話」が多く、「相手のターンと独立しているあいづち発話」は韓国語と日本語が同等の比率を示していると述べている。

以上のように、従来の研究では、会話を円滑に進行させる働きをする発話としてあいづちの使用が多く研究されており、あいづちの表現形式とその使用頻度、あいづちとターンとの関係に見られる日韓差は明らかにされている。しかし、実際、日韓の友人同士の相互行為を観察してみると、あいづちのみが会話の進行を助けているわけではなく、（2）の08行の「すげ」のような＜感情・感想＞を表す実質的な発話も話し手の話をサポートする機能を果たしている。相互行為の中では、（1）のように、＜理解＞を表す発話が期待される箇所で聞き手が反応を見せていないために会話が円滑に進まない場合があれば、逆に

§4で詳しく述べるように、頻繁に＜理解＞を表したり、相手が言おうとしている事柄への＜理解＞を積極的に表現したりする行為が、話し手の話を妨げるFTAとして捉えられている場合もある。また、（2）に示したように、聞き手が＜感情・感想＞を表出した場合、話し手は、聞き手の発話を繰り返して＜感情・感想＞を積極的に受け入れたりすることもある一方で（11行）、時には、何の反応も見せず、自らの話を続けていく場合もある。しかし、従来の研究では、＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話が、日韓の友人同士の会話でどのように用いられており、これらの発話が、会話の参加者にどのように受け入れられているのかという相互行為の観点からの分析はまだ行われていないと思われる。そこで、本章では、会話を協力的に進行させるために関心を示すPPSとして相手の発話に＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話に注目し、日韓の友人同士の会話の中でこれらの発話がどのように用いられているかを分析する。

2.2　研究目的

本章では、会話を協力的に進行させるために関心を示す PPS として、相手の発話に＜理解＞、＜感情・感想＞を表す発話に着目する。そして、それぞれが日韓の親しい間柄の自由会話でどのように用いられており、＜理解＞と＜感情・感想＞の使用傾向と発話様態の相関にはどのような類似点と相違点があるかを日韓差の観点から分析する。具体的には、次の 4 点を明らかにすることを目的とする。

ⅰ．日本と韓国の会話における＜理解＞、＜感情・感想＞の相対使用頻度にはどのような類似点と相違点が見られるのか。
ⅱ．日本と韓国の会話で、＜理解＞、＜感情・感想＞は、どのように用いられているのか。
ⅲ．＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態にはどのような関連性があるのか。
ⅳ．＜理解＞と＜感情・感想＞表現の相対使用頻度や相互行為の日韓差はどこから生じるのか。

3. 分析方法

＜理解＞、＜感情・感想＞の発話が会話を協力的に進行させるために関心を示すPPSとして、日韓の会話でどのように用いられているかの詳細は§4で具体的に述べることにし、

ここでは、＜理解＞、＜感情・感想＞の発話と発話様態の分類基準について説明する。まず、本稿では、＜理解＞と＜感情・感想＞を次のように定義する。

・＜理解＞

＜理解＞を表現する発話は、相互作用の中で会話の参加者が相手の話を聞いて、相手の話を理解していることを表現する発話である。話者の意見や感情は含まれておらず、相手の話を理解していることを表す発話機能を果たすものであるとする。

・＜感情・感想＞

＜感情・感想＞を表現する発話は、相手の話を聞いて、その発話を理解していることを表すと同時に、相手の話に対して驚きや面白いなどといった自らの肯定的な感情や感想を表現している発話であるとする。

次に、＜理解＞、＜感情・感想＞を表現するために用いられた発話は、発話様態の面から、［あいづち］、［繰り返し］、［言い換え］、［先取り］、［実質発話］、［あいづち＋α］に分類することができるが、それぞれの発話様態の分類基準を示すと以下のようである。

・［あいづち］

「ええ」「うん」「そう］「ほんとう」、「어(うん)」「그래(そう)」「그러게(そうだよね)」「진짜(本当)」「그러니깐(そうだからね)」などのようにいわゆるあいづちと言われるものを一括して［あいづち］に分類する。

・［繰り返し］

相手の先行発話をそのまま、あるいは発話の一部を繰り返した発話。

・［言い換え］

相手の先行発話と同一の内容を異なる言葉で表現した発話。

・［先取り］

相手の発話を聞き、相手が何を言おうとしているのかを受け手が予測し、一つの文を二

人が共同で完成する発話。

・［実質発話］

動詞や名詞や形容詞あるいは文などといった発話。

・［あいづち＋α］

［あいづち］が発話された後、［繰り返し］や［言い換え］あるいは［実質発話］が追加的に続いた発話。

次の表1に、本章で分析対象とする＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態の対応例を示す。

表1　＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態の対応例

	＜理解＞	＜感情・感想＞
あいづち	JSF3:今日なんかヤフーニュースに乗ってたけど →JKF4:うん JSF3:アシアナ航空が →JKF4:うん JSF3:なんか事故で	JAF2:@@だから　ハンズとかでそんなん売ってるやんか JOF1:うん JAF2:「これ買わへん？」みたいな →JOF1:へ:::::: JAF2:買いません
繰り返し	JAM1:決勝は三桁じゃなくて四桁で行なう →JBM2:四桁　四桁 JAM1:で　まあ　それが一つ	JBM2:何かね　大学でオタクアピールすると JAM1:うん JBM2:古い →JAM1:@@@＜@古い@＞ JBM2:古い@　ってか　何か　多いねん
言い換え	KAM2:난 제발 아시아 좀 벗어났음 좋겠다 아시아 즘 (私は 何とか　アジア脱したい　アジア) →KGM1:탈 아시아(脱　アジア)	JBM2:何か　えせ オタクがね(1) JAM1:うん JBM2:アピールするから＝ →JAM1:　　＝＜@にわか@＞ JBM2:にわかが多い@
先取り	JSM4:次　中学　中学生のテストも作らなあかんから JTM3:おお JSM4:今　だから　目下　追われてるのは＝ →JTM3:　　＝テ[スト] JSM4:　　[テスト]の 採点とテストの作成	―
実質発話	KGM1:내 동생은 서부가라고 추천하고　있거든 (私の妹には西部（(アメリカの)）を進めている) →KAM2:미국은 워낙에 위험해가지구:: (アメリカは結構危ないから::)	JAM1:だれが　当日　風邪を引いてもいけるよう (1) にと かね　そういうレベルで本当に頑張ってたんだよ　おれ →JBM2:@＜@爆笑　爆笑@＞　@@@まじか
あいづち＋α	JSM4:ぼくは楽をしたい　という意味では　うん もうちょっ　と楽をしたかったかな →JTM3:はいはい　研修期間的なものがあって JSM4:うん	JSM4:だから　今日来れた JTM3:なるほど JSM4:だから　月一の二連休 →JTM3:え::::　きついな

4. ＜理解＞と＜感情・感想＞とストラテジー

相互行為の中で、会話の参加者は相手の発話を単に聞いているだけではなくて、＜理解＞を用いて相手に注意を向けていること表したり、＜感情・感想＞を表現して相手の話に興味を持って聞いていることを表したりし、相手と協力的に会話を進めようとする。これ

らの発話は、相手に関心を表示する PPS として解釈できる。以下、本節では、§4.1 で、日韓の会話における＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度について述べ、§4.2 で、実際の相互行為の中でそれぞれの表現がストラテジーとしてどのように用いられているかについて述べる。§4.3 で、日韓差の観点からこれらの発話と発話様態との相関関係に見られる類似点と相違点について述べる。

4.1　＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度

まず、相手の発話に＜理解＞を表す発話と肯定的な＜感情・感想＞を表す発話が日韓の友人同士の会話の中でどのくらいの頻度で用いられているか見てみよう。表 2 は、それぞれのパートにおける＜理解＞と＜感情・感想＞の出現数と総発話数に対するそれぞれの相対使用頻度を示したものである。

表2　総発話数に対する＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度

	JF							JM						
	ソロ					デュオ		ソロ					デュオ	
	物語	描写	評価	計				物語	描写	評価	計			
理解	286	236	69	591	34.8	396	13.6	247	187	28	462	22.4	179	10.4
感情・感想	21	18	3	42	2.5	59	2.0	28	12	8	48	2.3	26	1.5
計	307	254	72	633	37.3	455	15.6	275	199	36	510	24.7	205	11.9
総発話数	884	696	119	1699		2918		1096	787	183	2066		1727	
	KF							KM						
	ソロ					デュオ		ソロ					デュオ	
	物語	描写	評価	計				物語	描写	評価	計			
理解	59	30	10	99	8.5	122	4.5	70	35	11	116	6.7	41	2.8
感情・感想	7	1	0	8	0.7	24	0.9	11	3	1	15	0.9	4	0.3
計	66	31	10	107	9.2	146	5.3	81	38	12	131	7.6	45	3.1
総発話数	748	295	119	1162		2730		958	490	277	1725		1461	

表2からは、日韓の会話における＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度について、以下のような類似点と相違点があることが分かる。

・類似点

(a)　相手に興味を持っていることを表すストラテジーとして＜理解＞が高い頻度で用いられる。

(b)　＜理解＞は、デュオパートに比べ、ソロパートでその相対使用頻度が高い。

・相違点

(c)　韓国語の会話に比べ、日本語の会話では＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度が高く、特に、＜理解＞の場合、ソロパートでその差が大きい。

以上のように、それぞれのパートにおける＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度には、日韓男女に関わらず類似点が見られるものの、＜理解＞の相対使用頻度の差は日韓の会話で大きく、＜感情・感想＞の相対使用頻度も日本の会話の方が若干高いことが確認できる。

4.2　＜理解＞と＜感情・感想＞による関心の表示

§4.1では、それぞれのパートにおける＜理解＞と＜感情・感想＞の相対使用頻度には類似点も見られるものの、ソロパートにおける相対使用頻度には日韓差が顕著であることについて述べたが、ここでは、日韓の相互行為の中でこれらの表現がどのように用いられているかを確認しつつ、相対使用頻度に差が見られる要因について述べる。

4.2.1　＜理解＞と聞き手の役割

まず、日韓の会話で＜理解＞がどのように用いられているかについて述べる。§4.1で示した結果からも分かるように、日韓男女に関わらず、二者間の会話で＜理解＞の発話は一人の話者が発話権を維持しながら複数の発話を用いて語るソロパートにおいて、聞き手としての役割を果たしている会話の参加者によって頻繁に用いられているが、ソロパートにおける＜理解＞の相対使用頻度には日韓差が顕著である。まず、日本の友人同士の会話で＜理解＞がどのように用いられているかを見てみよう。

(3)会話FJ4【「ソロ」JMF7：仕事について】

01　JMF7:確かに　その一般事務［と］

02 →JTF8:　　［うん］

03　JMF7:まあ　受付とか電話を含む一般事務と

04 →JTF8:うん

05　JMF7:出荷とかの　まあ　いわゆる営業事務［と］

06 →JTF8:　　［うん］うんうん

07　JMF7:まあ　普通のよくある企業の

08 →JTF8:うん

09　JMF7:まあ　営業部をフォローする事務みたいなあるやんか

10 →JTF8:あ　はあはあはあ　うんうん

11　JMF7:そうゆうポジションに入ってんやんか　私

（3）は、ソロパートでJMF7が仕事について話している場面である。（3）を見てみると、聞き手としての役割を果たしているJTF8は、JMF7の発話に重なりつつ、［あいづち］を用いて＜理解＞の発話を用いたり（02、06行）、述語が発話される前にも＜理解＞していることを頻繁に表していることが分かる（04、08行）。このように、日本語の会話のソロパートで聞き手の役割を果たしている参加者は、話し手の発話の途中にも［あいづち］を用いて頻繁に＜理解＞していることを表しつつ、話し手の「語り」に注意を向けていること表示しており、話し手は、聞き手にサポートされつつ自らの「語り」を進めていく。

一方、（4）のように、韓国の友人同士の会話で、聞き手（KSF3）は、話し手（KHF4）の発話の途中より、発話が終わった後に＜理解＞表現を用いる傾向が強い。

(4)会話FK2【「ソロ」KHF4:ネイルアートについて】

01　KHF4:원래 근까 이게 그냥 네일이 아니라 젤 젤아트라　그래서 이렇게 해두면

02　　한 달은 가（元々　だから　これ　一般的なネイルではなくて　ゼリ―アートっていって　このようにしておくと　一か月はもつ）

03 →KSF3:음（うん）

04　KHF4:근까 오래가는 대신에 한 번 할때 비싼거야 글서 원래 그냥 칼라만 해도

05　　한 5만원 한대 근데 이게 반만해가지구 막 빤짝이를 뿌린거야

（だから長く続く代わりに一回する時高いんだよ　で　元々ただカラーだけだと5万ウォンくらいはするって　でも これ半分だけしてグリッターを付けた）

06 →KSF3:아（あ）

表2の相対使用頻度から分かるように、総発話数に対する＜理解＞の相対使用頻度は日本語の会話で圧倒的に高いが、日本語の会話で、聞き手は話し手の発話が終わる前にも［あいづち］を用い、＜理解＞を表現し、相手の話に注意を向けていることを表すストラテジーを頻繁に用いていることが、韓国語の会話に比べ日本語の会話で＜理解＞の相対使

用頻度が高い一つの要因として考えられる。日本語の会話で［あいづち］が相手の発話が終わる前に用いられることは大塚（2015）でも指摘されており、（3）に見られるように、日本の友人同士の会話で、聞き手は［あいづち］を用いて話し手に頻繁に＜理解＞を表現することで、会話の進行に貢献しようとする。しかし、韓国の友人同士の会話では、頻繁な＜理解＞の表現が、話し手に聞いていない印象を与え、トラブルのきっかけになっている用例が観察されている。（5）を見てみよう。

(5)会話MK3【「ソロ」KCM6:店長と人を探しに行ったことについて】

01 KCM6: >그래서< 나 홍대라고 공부하러 왔다고 끝나고 전화 드린다고 그러고 구로
02 역으로 갔어 근데 ＃＃누나랑 술 먹고: 이제 (0.2) 뻗어 있는거야 (0.6) 그 자
03 연동 공원 있자나（>それで<　私 弘大にいるって　勉強しにきたって　終わったら電話するって言って　で　九老駅に行った　＃＃姉さんとお酒飲んで:　こう（0.2）酔っぱらっている（0.6）あの 紫烟洞の公園あるでしょう)
04 →KBM5:어어(うんうん)
05 KCM6:× 나 뻗어 ［계시］길래（×私　酔っぱらって［おら］れるから）
06 →KBM5: ［어］（うん）
07 KCM6:「아::점장님」 집으로 데려다 드린다고(「あ　店長」家まで送りますって)
08 →KBM5:어（うん）
09 KCM6:오토바이 타고 데려다 드리는데 갑자기 나보고 ［찾고］
（オートバイクに乗って送っていたけど　急に私に［探し］）
10 →KBM5: ［어::］（う::ん）
11 →KCM6:싶은 사람이 생겼대: （0.6）야 듣고있냐?
（（（探し））たい人ができたって:（0.6）おい　聞いている？）
12 KBM5:아 잠깐 나 좀 （あ　ちょっと　私　ちょっと）
13 KCM6:왜?（どうした？）
14 KBM5:@<@배고파서@>（@＜@お腹空いて@＞）
15 KCM6:뭐 시켜（1.3）그래서 「누군데여? 누군데여?」 했더니 옛날에 점장님
（何か注文して（1.3）それで「誰ですか？　誰ですか？」言ったら　昔　店長が）

（5）は、KCM6が、アルバイト先の店長と人を探しに行ったことについて物語っている場面である。ここで注目したいのは、KBM5の頻繁な＜理解＞の表現（04、06、08、10行とその発話に対する話し手の反応であるが（11行）、KBM5とKCM6の全体的な会話を

視野に入れると、（5）は、KBM5が通常とは異なって＜理解＞していることを頻繁に表している場面である。KBM5が頻繁に＜理解＞していることを表しているにも関わらず、KCM6は、11行目で「おい　聞いている？」と疑いを表しているが、その発話に対して、KBM5は「お腹が空いて」と KCM6の話に集中していなかった理由を話している。KBM5の「お腹が空いて」という発話から分かるように、KBM5は、話し手の話に集中していないため、通常とは異なって＜理解＞の表現を頻繁に用いた可能性があると考えられるが、KBM5の頻繁な＜理解＞の表現を、KCM6は聞いていないと解釈している。このように、日本語の会話とは対照的に、韓国語の会話で、聞き手の頻繁な＜理解＞の表現は、むしろ集中して聞いていない行動として捉えられ、FTAとして解釈されることがある。

ソロパートで聞き手が用いる＜理解＞の多くは、日韓男女に関わらず、（3）、（4）、（5）のように話し手の発話を邪魔しない短い発話様態である［あいづち］が用いられる場合が多いが、次の（6）と（7）のように、聞き手はより積極的に＜理解＞していることを表している用例も観察される。

(6)会話MJ1【「ソロ」JBM2:高校の受験について】

01　JBM2: 中学校はほんまに　こう(1.5)　中学校はね　こう　中二病の時期やか
02 →JAM1:うん
03　JBM2:こう(1.0)　誰よりも　こう　目指すことに　こう　人生を
04 →JAM1:はいはい
05　JBM2:かけていたが　それでは　世の中よくない　いや　＃高((彼らの出身校))には
06　　ね　受かる気はなかった
07 →JAM1:あ　な［かった］
08　JBM2:　　［ただ］　何か　塾で＃＃((彼らの共通の友人A))っていう　こう　う
09　　っとい（（うっとうしい））やつが＝
10 →JAM1:　　＝うっといやつが
11　JBM2: ＃高受けるとか言い出すから　こいつ受けるんやったら　おれは
12　JAM1:＜@おれも［ＸＸＸけるやろ］@＞
13　JBM2:　　［こいつには　まあ］　いやいや　そういうわけじゃない
14 →JAM1:まあ
15　JBM2:こいつに　［いや］
16　JAM1:＜@［両方落ちる］可能性あるでしょ　こいつには負け［ないとか］@＞。
17　JBM2:　　［こいつに］　いや

18　　＃＃は　＃＃（（彼らの共通の友人B））は　もう

19 →JAM1:＜@あれは別格やろ@＞@@

20　JBM2:無理

21　JAM1:ＸＸ@@

22　JBM2:無理と@　い［や］

23 →JAM1:　　［レ］ベルが違う

24　JBM2:これはね　無理と　こいつは抜けないわと

（6）は、JBM2が高校の受験について話している場面である。ここで、JAM1の発話を見てみると、JAM1は、［あいづち］（02行、04行、14行）だけではなく、［繰り返し］（07行、10行）や［実質発話］（19行、23行）を用い、JBM2が話している内容を＜理解＞していることを積極的に表現していることが分かる。韓国語の会話においても、（7）のように話し手の話を＜理解＞していることを聞き手が積極的に表している用例が見られる。

(7)会話MK1【「ソロ」KGM1：高校の時、先生が教えてくれたことについて】

01　KGM1:중요한 건 선생님이 이제 노하우를 알려 주는거야(大事なのは先生が　こうコツを教えてくれたことだよ)

02 →KAM2:응(うん)

03　KGM1:대학교를 가서 음대 앞에 가래（大学校に行って　音大の前に行けって）

04 →KAM2:음대 앞에 응(音大の前　うん)

05　KGM1:응 음대 앞에 가있으면은 첼로 가방 큰 거 들고 온 여자애가 나온대（うん　音大の前に行ったらチェロの鞄　大きいの持ってきた女の子が出るって）

06 →KAM2:아::: 그러면 돈 많은 여자애［라고 그러면］（あ::そうだったらお金持ちの女の子［だということ］）

07　KGM1:아 들어봐 들어봐 그러면 들고 나온대(［あ　聞いて］　聞いて　だったら持って出るって)

（7）を見てみると、KAM2は［あいづち］を用いたり（02行）、先行発話の一部を繰り返したり（04行）、あるいは、あいづちと実質的な発話を用いて（06行）、KGM1の話を＜理解＞していることを表していることが分かる。

ここで、（6）のJAM1の19行の発話と（7）のKAM2の06行の発話に注目してみよう。

まず JAM1の発話「あれは別格やろ」と KAM2の発話 「あ::そうだったら、お金持ちの女の子だということ」は、話し手の話がどのような話であるかをすでに＜理解＞していることを表す発話である。このような＜理解＞の表現は、話し手の話に注意を向けて聞いていることを強く表すPPSであると同時に、話し手の話を妨げる相手のネガティブ・フェイスを侵害するFTAでもあり得る。日本語の会話の場合、JAM1の19行の発話に続くJBM2の発話に笑いが伴うことや話の進行にトラブルが見られない点で、JAM1の発話はPPSとして捉えられていると考えることができる。一方、KAM2の06行の発話に続くKGM1の07行の発話を見てみると、KGM1は、「あ　聞いて　聞いて」と発話し、邪魔されず自ら話を続けたいということを表していることが分かる。このことから、KAM2の＜理解＞を表現する発話は、KGM1の邪魔されたくないネガティブ・フェイスを侵害する行為として捉えられていると見なすことができる。このように、韓国語の会話では、話し手が発話権を維持するソロパートで、話し手の話を頻繁に＜理解＞していることを表したり、あるいは積極的に表したりすることは、話し手のフェイスを侵害するFTAになる可能性があると思われる。

以上のように、日本語の会話で、話し手は聞き手の頻繁な＜理解＞の表現にサポートされながら「語り」を進めていくが、日本語の会話に比べ、韓国語の会話で話し手は自身だけで「語り」を展開させる傾向が強いと言えよう。

4.2.2　＜感情・感想＞の受け入れの仕方

次に、＜感情・感想＞が日韓の友人同士の会話でどのように用いられているかについて述べる。§4.1で述べたように、相手の発話に対して、驚きや面白いという＜感情・感想＞を表現する頻度は日本語の会話の方が高いが[18]、＜感情・感想＞の後に見られる相互行為にも日韓差が観察される。まず、日本語の会話の用例を見てみよう。

(8)会話FJ1【「ソロ」JAF2:彼氏について】

01　JAF2:なんか　こうゆうふいんきのが好きやから「今日の服良いね」みたいな

02 →JOF1:へえ::［:］

03　JAF2:　［「も］うちょっと短いの履いて」とか

[18] ＜感情・感想＞の相対使用頻度に見られる差は、第9章で述べる直接話法の使用とも関連する。

04　JOF1:@［@@］

05　JAF2:　［@@］　ゆってくるで　普通に＝

06 →JOF1:　　＝へえ::　＜@もっと短いの履いて@＞

07　JAF2:＞そうそうそう＜

08　JOF1:@@（2.1）［もう］

09　JOF1:　　［XXX］

10　JAF2:「ちょっと短いの履くか」

11　JOF1:うん

12　JAF2:「制服着てきて」＜@やから@＞@

13 →JOF1:え::::@［@@］＜@制服@＞

14　JAF2:　　［@@@］　　制服やで　制服か

15　JOF1:うん

16　JAF2:巫女の格好が好きやねやんか　巫女はできひんやんか

17 →JOF1:え::::

18　JAF2:制服　チェックのスカート履いて

（8）は、日本語の会話におけるソロパートの一部である。ここで、聞き手であるJOF1は、音を伸ばして発話したり（02、13、17行）、話し手の発話を繰り返したりする（06、13行）ことで面白いという＜感情・感想＞を表現していることが分かる。特に、（8）の06行目と13行目のように、笑いを伴う［繰り返し］は、話し手の話あるいは特定の発話が面白いということを伝える機能を果たしている。このように、相手の話に対して自らの＜感情・感想＞を表現する行為は、相手の話に関心を持っていることを強く表すストラテジーとして解釈できる。ここで、聞き手の＜感情・感想＞に続く話し手の発話を見てみると、聞き手の＜感情・感想＞の発話を「そうそうそう」と受け入れたり（07行）、聞き手の発話をもう一度繰り返したりしていることが確認できる（14行）が、日本語の会話で、話し手は聞き手の＜感情・感想＞の発話を繰り返すことで、聞き手の＜感情・感想＞を受け入れる相互行為が多く見られる。一方、（9）のように、韓国語の会話で＜感情・感想＞は、聞き手の単発的な発話で用いられ、話し手は自らの話を続けていく相互行為が多く観察される。

(9)会話MK1【「ソロ」KGM1:同性愛者に告白されたことについて】

01　KGM1:남자도 게이고 여자도 게이라 그러고 그냥 다 통일해 그러는데 깜짝

02　　놀래가지고 게이냐고 알아보니까 게이래 걔가 깜짝 놀래가지고 「하~ 씨 왓 더

03　　퍽」 이러면서 (男性もゲイで女性もゲイって言って全部ひっくるめてそういうけどびっくりしてゲイなのって　調べてみたら　ゲイって　あの人が　びっくりして「はあ::　くそ　ワッザファック（（英語の俗語:なんじゃこれ））」って))

04 →KAM2:왓 더 퍽@@(ワッザファック@@)

05　KGM1:「쏘리」로 갔는데(「ソーリ―」（（ごめん））って言ったけど)

（9）を見てみると、聞き手であるKAM2は、KGM1の発話が面白いという＜感情・感想＞を表現しているが（04行）、話し手であるKGM1は、KGM1の発話に対して特に反応を見せず、自らの「物語」を続けていることが分かる。相手の発話に対して、反応を見せないことは相手のフェイスを侵害する行為ではあるものの、韓国語の会話のソロパートでは（9）のような用例が繰り返し観察されている。

このような傾向は、デュオパートでも見られるが、日本語のデュオパートでは、（10）のように相手の＜感情・感想＞を積極的に受け入れ、会話の参加者の二人が同様な内容の発話を繰り返し、＜感情・感想＞の発話を連鎖する相互行為が多く観察されている。

(10)会話MJ1【「デュオ」高校の時、クールな男性になりたかったことについて】

01　JBM2:高校　ほんま　何か　高校は　こう　おれは一人前の(１.0)クールな男性に

02　　なるのを目指して何もせんかった

03 →JAM1:＜@クールな男性目指してたんだ@＞@

04 →JBM2:@@クールやんな@@@　＜@爆笑@＞

05 →JAM1:＜@クール　爆笑@＞@@@

06 →JBM2:@＜@クール爆笑@＞@@

07 →JAM1:＜@爆笑＞

08 →JBM2:やあ＜@クールを目指してたからな@＞@爆笑やな　ほんま（2.9）中学校は

09　　ほんまに　こう（1.5）中学校はね　こう　中二病 の時期やから

一方、（11）のように、韓国語の会話では、二人による連鎖的な＜感情・感想＞の用例よりは、相手の＜感情・感想＞を単に受け入れる相互行為の方が多く見られる。

(11)会話MK2【「デュオ」 KDM4の彼女について】
01 KHM3:여자친군 어디 살아?(彼女はどこに住んでいる?)
02 KDM4:평촌(坪村)
03 →KHM3:존나 가깝네 씨발(すごく 近い くそ)
04 KDM4:멀진 않지(遠くはない)

以上のように、＜感情・感想＞の後に見られる二人の発話連鎖を見てみると、日本語の会話では、ソロパートでもデュオパートでも、会話の参加者は、相手の＜感情・感想＞を受け入れる相互行為が多く観察されるが、日本語の会話に比べ、韓国語の会話のソロパートでは、（9）のように聞き手の＜感情・感想＞に対する反応は特に見せず、自らの話を続けていく相互行為がより多く見られる。また、デュオパートでは、相手の＜感情・感想＞を受け入れる発話が観察されるものの、日本語の会話とは異なって、互いに＜感情・感想＞を積み重ねるよりは単に相手の＜感情・感想＞を受け入れることが多い。このように、会話の参加者の異なる相互行為パターンが＜感情・感想＞の相対使用頻度に日韓差が見られる一つの要因として考えられる。

4.3 関心を表すストラテジーと発話様態

次に、＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態の相関関係について述べる。表3は、＜理解＞、＜感情・感想＞を表現するために用いられた発話様態の使用数とその割合を示したものである。

表3　＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態

	JF				JM				日本	
	理解		感情・感想		理解		感情・感想			
あいづち	892	90.4%	40	39.6%	584	91.1%	29	39.2%	1545	85.7%
繰り返し	22	2.2%	16	15.8%	15	2.3%	14	18.9%	67	3.7%
言い換え	12	1.2%	-	-	3	0.5%	1	1.4%	16	0.9%
先取り	18	1.8%	-	-	4	0.6%	-	-	22	1.2%
実質発話	8	0.8%	24	23.8%	7	1.1%	19	25.7%	58	3.2%
あいづち＋α	35	3.5%	21	20.8%	28	4.4%	11	14.9%	95	5.3%
計	987	100%	101	100%	641	100%	74	100%	1803	100%
	KF				KM				韓国	
	理解		感情・感想		理解		感情・感想			
あいづち	190	86.0%	10	31.3%	119	75.8%	5	26.3%	324	75.5%
繰り返し	4	1.8%	5	15.6%	12	7.6%	1	5.3%	22	5.1%
言い換え	3	1.4%	-	-	5	3.2%	-	-	8	1.9%
先取り	5	2.3%	-	-	2	1.3%	-	-	7	1.6%
実質発話	1	0.5%	12	37.5%	2	1.3%	12	63.2%	27	6.3%
あいづち＋α	18	8.1%	5	15.6%	17	10.8%	1	5.3%	41	9.6%
計	221	100%	32	100%	157	100%	19	100%	429	100%

表3で分かるように、＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態は一致するわけではなく、相手に＜理解＞や＜感情・感想＞を表現する際に用いられる発話様態にはバリエーションが見られるが、日韓の会話における＜理解＞、＜感情・感想＞と発話様態の結び付きには、以下のような傾向があることが確認できる。

・類似点

(a)　［あいづち］の使用割合は、＜理解＞で最も高い割合で用いられる。

(b)　［実質発話］の使用割合は、＜感情・感想＞で最も高い割合で用いられる。

以上のように、日韓男女に関わらず、それぞれの表現と発話様態には相関関係があるように思われる。まず、＜理解＞は［あいづち］との結びつきが強い。これは、「うん」、「ほう」などといった［あいづち］は、その他の発話様態に比べ、話し手の発話を邪魔せず、相手の話に関心を持っていることを表すことができるためであろう。［実質発話］は、＜感情・感想＞と関わりが強いが、これは、相手の発話に対して驚きや面白さなどを表現するため、会話の参加者が評価的な発話を用いることが多いことが要因として考えられる。一方、それぞれの表現と発話様態の使用割合には、以下のような相違点も観察される。

・相違点

(c)　韓国語の会話に比べ、日本語の会話では［あいづち］の使用割合が約10%高い。

(d)　一方、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では［あいづち＋α］が約4%高い割合を占めており、特に、＜理解＞を表現する際の使用割合の差が大きい。

§4.2で述べたように、日本語の会話で、話し手は聞き手の頻繁な＜理解＞の表現にサポートされながら「語り」を進めていく。一方、日本語の会話に比べ、韓国語の会話で、話し手は自身だけで「語り」を展開させる傾向が強く、（12）のように韓国語の会話で聞き手は話し手の「語り」がある程度終了した所で自らの＜理解＞を［あいづち＋α］で表すことがある。

(12)会話FK3【「ソロ」　KKF6:友人の前の彼氏が他の女性に会ったことについて】

01　KKF6:그러고 그 남자애가 그 여자애 한테 크리스마스날 영화보자고 그랬대
　　（そうして　あの男の子が女の子にクリスマスに映画見ようと言ったって）

02　KYF5:어어[어](うんうん［うん］)

03　KKF6:　［근데］여자애가 나온거야（［でも］女の子が出た((会いに来た)))

04 →KYF5:오::　나왔어（お::　出た）

05　KKF6:우리가 생각해도 마음이 없지 않으니깐(私たちが考えても付き合う気がないわけではないから)

［あいづち＋α］の使用は日本語の会話でも多く観察されるが、＜理解＞を表す際の使用割合の面から見てみると［あいづち］の使用割合が90%以上を占めており、［あいづち＋α］の使用割合は約4%である日本語の会話に比べ、韓国語の会話では、［あいづち＋α］の使用割合は男女の会話でそれぞれ約8%と10%を占めている。§4.1の相対使用頻度と使用割合の差を組み合わせて考えてみると、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では、話し手が発話権を維持するソロパートで、話し手の話を＜理解＞していることを、頻繁に、また、積極的に表すことは、話し手のフェイスを侵害するFTAになる可能性がある。そのため、じっと話し手の「語り」を聞いていた聞き手は、ある程度、話し手の発話がまとまったところで＜理解＞を表す際に、より積極的に［あいづち＋α］の発話を用いて理解していることを表現することで、相手のポジティブ・フェイスに配慮していることを表していると考えられる。

4.4　分析のまとめ

本節では、関心を表示するPPSとして＜理解＞と＜感情・感想＞に着目し、相手の話に＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話が日韓の会話でどのような相対使用頻度で用いられており、それぞれのパートでどのように用いられているかについて述べ、それぞれの表現と発話様態との相関関係にはどのような日韓差が見られたのかについて述べた。本節の分析結果をまとめると以下のようである。

まず、日韓男女に関わらず、友人同士の会話に見られる類似点は次のようである。

① ソロパートでは、＜理解＞の相対使用頻度が高い。これは、聞き手が話し手の注意を向けられたい、理解されたいといったポジティブ・フェイスに配慮し、注意を向けていることを表すストラテジーを用いるためであると考えられる。

② それぞれの表現と発話様態の結びつきには、類似点が見られ、［あいづち］は＜理解＞と結びつきが強く、［実質発話］は＜感情・感想＞と結びつきが強い。

次に、日本語の会話と韓国語の会話に見られる相違点は以下のようである。

③ 日本語の会話に比べ、韓国語の会話では＜理解＞を表現する頻度が低く、理解していることを頻繁に、また、積極的に表現することはFTAとして捉えられる場合もある。

④ ソロパートで聞き手が＜感情・感想＞を表現した際、日本語の会話で、話し手はその発話を受け入れた後、「語り」を展開させるが、韓国語の会話で、話し手は聞き手の発話には触れず自らの「語り」を進めていく。

⑤ 韓国語の会話に比べ、日本語の会話では［あいづち］の使用割合が高く、韓国語の会話では［あいづち＋α］の使用割合が高い。対照的に、＜理解＞の相対使用頻度が低い韓国語の会話では、＜理解＞を表す際、［あいづち＋α］の発話様態を用いて、より積極的に自らの＜理解＞を表している。

以上のような特徴から、日本語のソロパートで、話し手は聞き手の頻繁な＜理解＞の表現にサポートされながら「語り」を進めていくが、対照的に、韓国語のソロパートでは、話し手が独自に「語り」を展開させる傾向が強い。しかし、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では、［あいづち＋α］を用いて、より積極的に自らの＜理解＞を表す傾向があると言える。

以上の分析結果を踏まえ、次節では§2.2 で挙げた研究目的ⅳ．＜理解＞と＜感情・感想＞表現の相対使用頻度や相互行為についての日韓差はどこから生じるのかについて考察

を行う。

5. 日韓の良き聞き手

分析の結果、日本語の会話の場合、水谷（1983）のいう「共話」によるソロパートの展開が見られ、聞き手は良い聞き手として頻繁に［あいづち］を用い、＜理解＞を表現して話し手の話を促している。一方、相対的に、韓国語のソロパートで話し手は自身だけで「語り」を展開させる傾向が強い。このような日韓の違いは、果たしてどこから生じるのであろうか。

その要因として、友人同士の会話では聞き手が話し手にどのように配慮して会話に参加するのかという点が大きく関与しており、日韓で聞き手に期待される役割の相違から生じると考えられる。日本語の会話のソロパートで聞き手に期待される役割は、頻繁な＜理解＞を用いて、話し手に関心を持っていることを表す PPS の使用であるが、相対的に韓国語のソロパートでは、聞き手は話し手の「語り」を自ら展開させるように、じっと聞いてあげることが期待される。そのため、韓国語のソロパートで、聞き手の頻繁な＜理解＞の表現や積極的な＜理解＞の表現は FTA に解釈されることはあるものの、聞き手の＜感情・感想＞に対しての話し手の反応のなさは FTA として解釈されることはない。このような相互行為のあり方をポライトネス理論の観点からみると、日本語の会話において、聞き手は、関心を示すストラテジーを用い、話し手のポジティブ・フェイスに配慮するが、韓国語の会話において、聞き手は話し手の邪魔されたくないネガティブ・フェイスに配慮する傾向が強いと言える。

このように、日韓の友人同士の会話では期待される会話の参加者の役割や配慮の仕方が異なっていると考えられるが、このような聞き手の配慮の仕方は、第 5 章で述べた話題管理の仕方の相違とも大きく関連する。日本語の会話で、聞き手は良い聞き手として頻繁に＜理解＞と＜感情・感想＞を表現し、話し手に関心を持っていることを熱心に伝える。このような聞き手の配慮は、話し手にとって語りやすい環境になる。そのため、第 5 章で論じたように、日本語の会話で話題が一人の参加者による「語り」で構成された場合、話題管理は話し手によって行われ、殆どの「語り」が話し手の自己開始で行われると考えられる。つまり、日本語の会話で聞き手は、話し手が語りやすい環境を作り上げることに重点

をおいて、関心を持っていることを伝える PPS を用いるため、話し手は安心して話題を管理しながら、自発的に自己呈示を行うのである。一方、韓国語の会話の場合、「語り」は聞き手の質問による他者開始が多く、話題管理は聞き手によって行われる。つまり、話し手が何について「語り」を展開させるかは、聞き手によって管理される傾向が強く、韓国語の会話において聞き手の役割や配慮の仕方は、話し手の「語り」をじっと聞いてあげた後、質問を用いて他の「語り」を要求することで関心を示すことである。そのため、韓国語の会話では、聞き手の質問による関心の示し方によって他者開始が多く見られる結果につながると考えられる。

ポライトネス理論の観点からいうと、第 5 章で述べたように話題管理においては、日本語の会話の場合、ネガティブ・フェイスに対する配慮が優勢であるが、一旦話し手が「語り」を開始すると、聞き手はポジティブ・フェイスに配慮すると言える。一方、韓国語の会話の場合、聞き手はポジティブ・フェイスに配慮し、相手の領域に踏み込み質問を用いることで、話題を管理するが、話し手が「語り」を開始すると話し手の邪魔されたくないネガティブ・フェイスに配慮していると言える。

以上のように、日本語と韓国語の友人同士の会話の相違は、相互行為の中で聞き手が話し手のフェイスに対してどのような配慮の仕方を取るかが大きく関わっており、このような配慮の仕方の背景には、日本と韓国という異なる言語・文化で聞き手に期待される役割が異なっていることが要因として考えられる。

6. 本章のまとめ

本章では、関心を表示するPPSに着目し、相手の話に＜理解＞と＜感情・感想＞を表す表現が日韓の会話でどのような相対使用頻度で用いられており、それぞれのパートでどのように用いられているかについて述べ、それぞれの表現と発話様態との相関関係にはどのような日韓差が見られたのかについて述べた。 本章の分析結果と考察をまとめると次のようになる。

（A）日本語の会話で聞き手は、話し手が語りやすい環境を作り上げることに重点をおいて、関心を持っていることを伝える PPS を頻繁に用いる。一方、韓国語の会話におい

て聞き手は、話し手の「語り」をじっと聞いてあげることが期待されるため、日本語の会話に比べ、PPS の相対使用頻度が低い。

（B）本章の分析結果は、第 5 章の結果と大きく関連するが、日本語の会話で聞き手は、関心を持っていることを伝える PPS を頻繁に用いるため、話し手は安心して話題を管理しながら、自発的に自己呈示を行うことになる。一方、話し手の「語り」をじっと聞いてあげていた韓国語の会話における聞き手は、質問を用いて他の「語り」を要求することで関心を示すことである。そのため、韓国語の会話では、聞き手の質問による関心の示し方によって他者開始が多く見られる結果につながると考えられる。このように、日本語と韓国語の友人同士の会話の相違は、相互行為の中で聞き手が話し手のフェイスに対してどのような配慮の仕方を取るかが大きく関わっており、このような配慮の仕方の背景には、日本と韓国という異なる言語・文化で聞き手に期待される役割が異なっていることが要因として考えられる。

第Ⅲ部　ジェンダー差が顕著なもの

第Ⅲ部では、日韓同様なジェンダー差が観察された会話展開の仕方と「語り」連鎖（第7章）、および、＜同意・共感＞の相互行為（第8章）を分析した結果について述べ、男性同士の会話と女性同士の会話に相違点が見られる理由は何かについて考察する。

第7章　会話展開の仕方と語り連鎖からみるポライトネス

1. はじめに

友人同士の日常的な自由会話では、話題が決まっていないため、会話の参加者は、お互いに話題を探り、友人に何らかの情報を与えたり、自らの経験を物語ったり、あるいは、共同に話し合ったりしながら会話を展開させていく。会話は基本的に参加者のターンの交替が積み重なって成り立ったものである。従来、相互行為におけるジェンダー差を探った研究では、女性同士の会話は一人一人のターンが短く共同で話すことが多いのに対し男性の場合は、ポーズと、一人のターンが長いことが指摘されている（Pilkington 1998）。

第4章で述べたように、日韓男女の自由会話は、会話の参加形式の面から一人の話者が話し手になって「語り」を展開させるソロパートと、共同に話し合いを進めていくデュオパートに分けられるが、自由会話の中でどのようなパートが展開されているかは、会話の参加者が相互行為の中で語る内容が新情報か旧情報かが大きく関わっている。つまり、会話の参加形式は、それぞれの相互行為の中で日韓の男女が友人と親密な関係を構築するため、どのような活動に重点をおいているかを反映していると言えるが、会話展開の仕方は、一つの話題の中でどのような「語り」をいかなるストラテジーとして語っているかという語り連鎖の仕方とも大きく関連する。一つの話題内で、複数の「語り」が二人の会話の参加者によって語られている場合、相手の先行する「語りa」に後続する「語りb」は、話題と関連する新情報を提供するものであったり、先行する相手の「語り」と類似な事柄を語るものであったり、相手と同様な考えや感情を持っていることを主張するために語られたりする。このように、日韓の男女が友人と親密な関係を構築するため、どのような活動に重点を置いて会話に参加しているかは、新情報と旧情報と関わる会話の参加形式と、語り連鎖の仕方に大きく関わっているのである。

そこで、本章では、日韓の女性同士の会話と男性同士の会話で、男女が友人とどのように会話を展開させているかという会話展開の仕方と、後続「語り」が相互行為の中でなぜ、いま、ここで、語られているのかに注目し、女性同士の会話と男性同士の会話展開に見られる特徴と、相互行為の中で「語り」がいかなるストラテジーとして語られているかについて述べる。以下、本章では、まず、§2で、先行研究と研究目的について述べ、§3で、

分析方法について述べる。そして、§4では、分析結果について述べ、§5で考察を行い、§6をまとめとする。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、会話展開の仕方と物語連鎖に関連する先行研究をまとめ、本章の目的について述べる。

2.1 先行研究

会話展開の仕方にジェンダーによる相違点が見られることは英語母語話者を対象とした研究で多く指摘されてきた。まず、Edelsky（1981）は、誰がフロアを持っているのかという共通の認識によってフロアの所有者が決定されるとし、フロアの種類には一人の参加者がフロアを持つF1と参加者が共同でフロアを持つF2があると述べ、男女の会話参加を観察した結果、男性は、F1に参加する傾向があるのに対し、女性はF2に参加する場合が多いと指摘している。Edelsky（1981）のフロアの観点から、親しい間柄の女性同士の会話を分析したCoates（1996）は、会話で展開される一つの話題には、出来事などについて「物語」る部分（Story）とその話題や「物語」に関して話し合う部分（Discussion）があると指摘し、女性同士の会話は、Edelsky（1981）がいうF2に近いと述べている。類似した結果は、Aries（1976）でも指摘されており、Aries（1976）によると女性はフロアを共有しようとするのに対し、男性は会話の主導権を確保しようとする。このように、会話展開の仕方には相違点が見られることが指摘されている。

次に、会話の中で「物語」がどのように連鎖されているのかを分析したSacks（1992）によると、先立つ「第1物語」と「第2物語」に見られる共通性は、偶然なものではなく、「第2物語」の話し手が「第1物語」を分析して聞き、自らの「第2物語」を産出していると指摘しており、「第2物語」を語ってみせることで、その理解を立証することになると述べている。相手の「物語」に後続する「物語」を分析したTannen（2005）とCoates（1996）では、相手の考えや感情と同様であることを表すために語られることがあると指摘されており、Coates（1996）は、友人同士の会話で会話の参加者が次々と自らの類似した経験談を語ることは、互いの繋がりを強め、連帯感を高める行為であると述べている。 以

上、Aries（1976）、Edelsky（1981）、Coates（1996）では、会話参加形式の観点からジェンダーによる会話展開の仕方に相違点があることが指摘されている。Aries（1976）、Edelsky（1981）、Coates（1996）がいうフロアという概念は、本研究で会話参加形式の観点からのパートと類似した概念であるが、Aries（1976）は、女性同士の会話では個人的な感情や自分たちの関係に関した話が話題になるのに対し、男性同士は、知識や経験などが話題の中心になり、互いに比較しながら競争的に会話を展開させると述べている。一方、ソロパートで展開される傾向が強い「物語」を、先行する「物語」との関連性の観点から分析した研究では、後続する「物語」は、相手の考えや感情と同様であることを表したり、互いの繋がりを強め、連帯感を高めたりする行為であると指摘されている（Sacks 1992、Coates 1996、Tannen 2005）。先行研究で明らかになった知見を見てみると、全体的な会話展開の仕方と後続の「語り」連鎖のあり方には、何等かの関連性があることが窺える。つまり、どのような活動に重点を置いて会話に参加しているかは、会話の参加形式と、後続の「語り」との連鎖のあり方に現れていると考えられる。

本章では、実際、日韓の男性同士の会話と女性同士の会話ではどのようなパートの展開が主に観察され、その要因は何かについて分析を行う。そして、後続「語り」連鎖が先行する「語り」とどのように関連しており、ポライトネス理論の観点から、男女は語ることで何を伝えているかを明らかにすることを目的とする。

2.2　研究目的

本章の目的は、女性同士と男性同士の会話における会話展開の仕方と後続「語り」がストラテジーとしてどのように用いられており、男性同士の会話と女性同士の会話に見られる類似点と相違点を探り、男女の配慮の仕方を明らかにすることである。具体的には、以下の3点を明らかにする。

ⅰ．女性同士と男性同士の会話における会話展開の仕方にはどのような類似点と相違点があるか。

ⅱ．話題内に二人による「語り」が含まれている場合、後続する「語り」はいかなるストラテジーとして語られているのか、また、女性同士と男性同士の会話における類似点と

相違点は何か。

iii．会話展開の仕方と後続「語り」のストラテジーの使用にジェンダーによる相違点が見られる場合、その理由は何か。

3. 分析方法

本章では、本研究の枠組みとして設定した「話題」を最も大きい単位とし、内容的な面から話題を構成する要素である「物語」と「描写」と「評価」、および、会話の参加形式の面からの単位であるソロパートとデュオパートを分析対象とする。

4. 分析結果

ここでは、分析結果について述べる。§4.1では、会話展開の仕方について述べ、§4.2では、後続「語り」がPPSとしてどのように用いられているかを分析した結果について述べる。

4.1　会話展開の仕方と参加形式

まず、女性と男性が友人同士でどのように自由会話を展開させているかについて述べる。表1は、日韓の女性同士と男性同士の会話のそれぞれのパートにおける「物語」と「描写」と「評価」の出現数と発話数を示したものである。

表1　話題内構成要素の出現数と発話数

	JF						JM					
	ソロ				デュオ	話題	ソロ				デュオ	話題
	物語	描写	評価	計			物語	描写	評価	計		
出現数	44	20	7	71	116	31	37	30	11	78	66	28
発話数	894	686	119	1699	2918	4617	1078	787	201	2066	1727	3793
	KF						KM					
	ソロ				デュオ	話題	ソロ				デュオ	話題
	物語	描写	評価	計			物語	描写	評価	計		
出現数	29	16	6	51	72	34	26	26	14	66	44	41
発話数	749	295	117	1161	2730	3891	958	490	277	1725	1461	3186

表1から分かることは、以下の3点である。

(a)　日韓どちらも男性同士の会話では、ソロパートの発話数が多く、女性同士の会話で

は、デュオパートでの発話数が多い。

(b) 日韓どちらも「物語」の出現数は女性同士の会話の方が多いのに対して男性同士の会話では「描写」と「評価」の出現数が相対的に多い。

(c) 「物語」「描写」「評価」の発話数は男性同士の会話の方が多い傾向がある。

以上の結果から分かるように、男性同士はソロパートを展開させることで会話を進めていく傾向が強いのに対し、女性同士はデュオパートで会話を展開させていく傾向がある。言い換えると、女性同士の自由会話は、主に二人の会話の参加者が共同で話し合うデュオパートによって構成されているが、男性同士の自由会話は、主に会話の参加者の一人が発話権を維持して語るソロパートによって構成されていると言える。第4章で述べたように、日韓男女に関わらず、開始と終了がある「物語」が相手にとって新情報である場合、「物語」はソロパートでしか観察されない。これは、相手の経験談が新情報であるため、「物語」の受け手は、聞き手としての役割を果たすことになるためである。一方、「描写」と「評価」の場合、会話の参加者が話す内容が新情報か旧情報かということと、受け手がどのような反応を見せるかが、それぞれの「語り」がどのようなパートで展開されるかに大きく関わっている。以下では、「描写」と「評価」に焦点を当て、男性同士と女性同士の会話の展開の仕方に相違が見られる要因について述べる。

4.1.1 「描写」の展開

まず、外的な事柄に関する内容が中心となる「描写」の場合、日韓の男性同士の会話では（1）と（2）のようにソロパートで展開されている用例が多く観察される。

(1)会話MJ1【「ソロ」 JAM1：テレビ番組のゲームについて】

01 JAM1：最近テレビ番組でヌメロンっていうフジテレビの月曜日かな　の　夜かな

02　（JBM2:は）何か　やってる番組があるんだけど（JBM2:ほうほう）そのゲーム　ま

03　あ　よくある　まあ（JBM2:ゲーム？）ボードゲーム　ボードゲームじゃないけど

04　まあ　ゲームをやる番組で（JBM2:へえ：）その数を当てるんだけど　お互いが

05　まあ　三桁の数字を　まあ　心に決めて

(2)会話MK3【「ソロ」 KCM6：北朝鮮との対立について】

01 KCM6:상황으로 봐서는 근까 우리나라도 그 확성기 중단한게 그거자나 예정된 시간
02 바로 그 시간 두 시간전에 중단했자나 >그럴꺼면은< 씨발 애초에 끄면서（KBM5:
03 아::）껐다 켰다 도발하면 되지 씨발 수시로 […] 그 ＃＃＃(（북한정치가）)이
04 이때까지 안 끄면은 포격한다고 뉴스 뉴스에 존나 떴어 근데 우리나라가 그 약정
05 된 시간까지 계속 끌다가(0.2)이제 잠깐 중단하고 그 담에 이제 저거 한거야 타협
06 을(状況をみたら　だから　韓国も　その拡声器を中断したのはあれでしょう　予定された時間　その時間の二時間前に中断したでしょう＞そうするつもりだったら＜　くそ最初から中断して（KBM5:あ::）切ったり付けたりして（（拡声器を））挑発すればいい　くそ　随時に　［…］その　＃＃＃（（北朝鮮の政治家））がこの時まで切らないと砲撃するってニュース　ニュースですごく出ていた　でも　韓国がその約定した時間　までずっと引きずって（0.2）こう　しばらく中断して　その後　もうあれやった　妥協を）

（1）は、JAM1がテレビで見たゲームについて説明している場面であり、（2）は KCM6がニュースで見た北朝鮮と韓国の対立状態について語っている場面である。（1）と（2）を見てみると、それぞれの会話で、JAM1とKCM6は複数の発話を用いてゲームと対立状況を説明しており、JBM2と KBM5はあいづちを用いて聞き手として会話に参加していることが確認できる。（1）と（2）のように外的な事柄に関する内容の説明が中心である「描写」は、日韓の女性同士の会話でもソロパートで展開されることが多いが、女性同士の会話で「描写」は、（3）と（4）のようにデュオパートで展開されている用例も観察される。

(3)会話FJ1【「デュオ」：ワンピースの内容について】

01 JAF2：ワンピース　読んど一人に聞いたら　絶対さ　「あれ泣くで」っていうねんけど
02 JOF1：まあ：：な
03 JAF2：「ワンピースめっちゃええ話やで」みたいな
04 JOF1：泣くけど　わざとらしいような気もする
05 JAF2：あ　そうなんや
06 JOF1：う：：ん　なんかな　　なんか　なんか　ある意味　ようどう
07 JAF2：ふん　仲間助けてみたいな　［仲間］と戦って

08 JOF1:　　［なんか］　　あの　だれかと別れて

(4)会話FK3【「デュオ」：テレビで歌った芸能人について】

01 KYF5:이거((카페에서 나오고 있는 노래)) ###((연예인))가 부르는 거 봤어?

（これ(（カフェで流されている歌））＃＃＃（（芸能人））が歌うの見た？）

02 KKF6:아 더러［워 이］걸 불러?(あ　気持ち悪[い　これ]を歌う？)

03 KYF5:　　［@@］　　###((연예인))있잖아 부분하는데 그만하자가 아니

04 라 「그만하좌：」@@([@@］ ＃＃＃（（芸能人））いるでしょうっていう部分歌うのに　やめようではなくて　「やめよわ:」@@(（歌う時の発音がおかしかったという意味)))

05 KKF6: 더러워::(気持ち悪い::)

06 KYF5:안 올라가서 되게 발악 하는 거 있지(高音ができなくてすごく頑張っていた)

07 KKF6:다 ××(すべて××)

08 KYF5:아 나 샤이 샤이니 춤 출때가 제일 <@진짜@>@

（あ　私　シャイ　シャイニー(（歌手））のダンスの時が一番＜@本当@＞@）

09 KKF6:아 나는 테레비 못 봐서 어때? 챙피해

（あ　私はテレビ見れなくてどうだった？　恥ずかしい）

10 KYF5:진짜 진짜 <@병신같애써@>@［@］(本当　本当＜@バカみたい@＞)

11 KKF6:　　［무］서운거야 그런 사람이 ＞만약에 진짜 그

12 런 사람이＜（0.3）난 @<@무서워@>（[怖]いことだよ　あんな人が＞もし　本当にあんな人が＜（0.3）私は@＜@怖い@＞）

13 KYF5: 걔 그래서 아나운서 실에서@@ <@많이 혼났대잖아@>@(あの人　だから　アナウンサー室で@@＜@すごく怒られたっていうでしょう@＞@)

（3）は、ワンピースという漫画について話し合っている場面であり、（4）は、テレビで歌っていた芸能人について話している場面である。（3）と（4）を見てみると、それぞれの会話で、JOF1 と KYF5 は描写される事柄についてより多くの情報を持っていることが確認できる。しかし、JAF2 の他人の発話を直接話法で表現した発話（01 と 03 行）や「仲間助けてみたいな　仲間と戦って」という推論による発話と、KKF6 の質問（08 行）や評価を表す発話（10～11 行）から分かるように、JAF2 と KKF6 は、それぞれの事柄に関するある程度の情報をすでに持っている。このように、両者が特定の事柄についてすで

にある程度の情報を持っている場合、外的な事柄について語る「描写」は、デュオパートで展開されることになり、会話の参加者は、特定の事柄について描写しつつ、その事柄に対して評価の発話を用いることが多く、このようなデュオパートの展開は女性同士の会話で多く観察されている。

以上のように、外的な事柄に関する内容である「描写」は、（1）と（2）のように話し手が提供する情報が新情報である場合はソロパートで展開されるが、（3）と（4）のように会話の参加者の二人が特定の事柄に関してすでに情報を持っている場合は、二人の参加者によって外的な事柄を説明する「描写」と自らの考えや感情を話す「評価」が混合し、デュオパートで展開される傾向が強い。この観点から、女性同士と男性同士の自由会話における外的な事柄に関する内容である「描写」の参加形式のあり方の違いを考えると、男性同士は、聞き手に新情報を提供するための「描写」が多く、女性同士は、共通の知識を基盤とした「描写」が多いということになる。このように、外的な事柄に関する内容の「描写」が展開されるとしても、「描写」を展開させる目的、つまり情報を提供するか、あるいは互いに情報を持っている事柄について話し合うことを目的とするかが会話の参加形式に影響しており、男性同士の会話では情報提供のための「描写」が多いためソロパートの展開が、女性同士の会話では共通の知識を基盤とした「描写」の展開が多いためデュオパートの参加形式が多く見られると考えられる。

4.1.2　「評価」の展開

次に、特定の事柄に関して自らの考えや感情を話す「評価」は、日韓男女に関わらず、（5）のように、デュオパートで展開されることが多い。

(5)会話FJ4【「デュオ」：数学の試験問題について】

01　JTF8:噛み砕けば意味は分かんねんけど　とにかく　ことばが難しすぎる［みたいな］

----------デュオ----------

02　JMF7:［難しいね］日本語として難し［いね］

03　JTF8:　　［そう］やねん

04　JF7:うん

05　JTF8:（0.3）とりあえず　買いかけと売りかけってことば<@からやめませんみたいな

06　＠＞＠［@］

07 JMF7:［あれ］分かへん＝

08 JTF8:　　＝＜@分からへん@＞［@@］

09 JMF7:　　［あれ］分からへん　どう　どういう

10　こっ＜@ちゃ@＞［@］

11 JTF8:　　［@］@右と左と　とかさ＝

12 JMF7:　　＝そう［そう］

13 JTF8:　　［あ］るやん［か］

14 JMF7:　　［あ］ったあった

15 JTF8:貸方借方みたいな　＜@ほかの言い方ももっと××@＞［@@］

16 JMF7:　　［「はいっ？」］みたいな

（5）の02行目からは、JMF7の簿記2級の試験問題を見た時、問題の意味が分からなかった」という「物語」の後に展開されるデュオパートであるが、02行目から16行目の二人の発話を見てみると、数学の用語が日本語として難しいと自らの評価を表す発話を連鎖してていることが確認できる。このように、自らの考えや感情を話す「評価」は、特定の事柄に関して二人の会話の参加者が自らの意見や感情を表す発話を連鎖することによって、デュオパートが構成されることが多いが、男性同士の会話で「評価」は、（4）のようにソロパートで語られる用例も多く観察される。

(6)会話MK2【「ソロ」 KHM3：仕事をやめたことについて】

01 KHM3:일단 난 내가 뭘 하고 싶은지 모르겠어(0.3)내가 근까 솔직히 더럽고 힘든

02　건 다 똑같애 뭔 일을 하든 […] 재미가 없어 일을 하는데 근까 머 솔직히 일

03　힘들고 좆 같고 머 하기 싫고 이런 거는 무슨 일 해도 마찬가진데 본인이 내가

04　재미를 더(2.3) 하다 보며는 재미가 없어 일이 근까 막 존나 힘들고 막 해도

05　재밌게 하고 뭐 그랬으면은 버티고 있었을텐데 그게 아니고 좆 같으니깐 그냥

06　맨날 일은 하는데 좆 같은거지 그냥 「아:: 씨발」 욕만 나오고 그냥 퇴근만 빨리

07　하고 싶고

（一応　私　私が何をしたいのかが分からない（0.3）私が　だから　正直　きつくて

大変なのは全部同じだよ　何をやっても［…］面白くない　仕事が　だから　まあ　正直　仕事大変だし　くそだし　まあ　やりたくないし　そういうのは何をやっても同じだけど　本人が　私が面白さをもっと（2.3）していたら面白くない　仕事が　だからすごく大変でも　面白くしていたら　まあ　そうだったら　頑張っていたと思うけどそうではなくて くそみたいから　ただ　毎日仕事はしているけど　くそみたい　ただ「あ::くそ」俗語だけ言ってしまうし　（（いらいらするという意味））　早く退勤したいし）

（6）は、KHM3が仕事をやめたことについて話している場面である。KHM3は、仕事に面白さが感じられず、大変だったと自らの考えや感情を複数の発話を用いて語っているがこのような用例は、男性同士の会話で多く観察される傾向がある。また、男性同士の会話では、（7）のように、相手の意見や感情に同意しない場合、「評価」がソロパートで展開される用例も観察される。

(7)会話MJ1【「ソロ・デュオ」アニメーションを見ていると話す人について】

01 JBM2：にわかが多い　ほんまに　「大学入って最近のアニメ事情に精通します」とか
02　言われても　おれからしたら「はい」みたいな「はい　中学高校で暇な時間にアニ
03　メとか見飽きるやろ」っていうのが通説（JAM1：＜@通説@＞@）なんか　もう
04　それはちょっと　大学に入ってアニメを　「アニメ好きです」をアピールされると
05　ちょっとさめる
----------デュオ----------
06 JAM1：あ　おれ　にわかやったわ
07 JBM2：にわかや　それはにわかや
08 JAM1：大学入ってから　見出::　まあ　パソコン買ったっていうのもあって見出した
09　から
10 JBM2：別に見出してもええんやけど「おれはオタクです」アピールする人は古い古い

（7）を見てみると、01行目から04行目にかけて、JBM2は「大学に入ってアニメーションを見出していると話す人は古い」と自らの考えを話す「評価」をソロパートで展開させていることが分かる。JBM2のソロパートの「評価」の後、JAM1の実質的な発話（06行目）

から、デュオパートの「評価」が展開されるようになるが、JAM1（08行目）の発話から分かるように、JAM1はJBM2の考えに同意せず別の意見を提示している。このように、会話の参加者が相手の考えや感情に同意あるいは同感しない場合は、会話に積極的に参加せず、相手の話を聞くという行動を中心とするため、会話の参加形式はソロパートに近い形になる。

以上、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では「描写」と「評価」がソロパートで展開される傾向があり、男性同士の会話でソロパートの展開が主に観察される要因として、男性同士の会話では新情報の提供が多いことと、相手の考えや感情に同様な考えや感情を持っていない場合、積極的に会話に参加することを避けていることが要因として考えられる。

4.2　「語り」連鎖とストラテジー

次に、相互行為の中で展開されたそれぞれの話題内に二人による「語り」が含まれている場合に注目し、先行する「語りa」に後続する「語りb」が、会話に積極的に参加していることを表したり、相手とのバランスをとったり、共通点を主張するPPSとして用いられていることについて述べる。まず、後続「語りb」が話題や先行する 「語りa」とどのように関連しているかという観点から分類すると、一つの話題内に見られる後続「語り」は以下のように3つのタイプに分けられる。

・＜関連＞：「語り」が話題になった事柄と関連する内容であるもの。
・＜類似＞：「語り」が先行する相手の「語り」と類似した情報が提供されるもの。
・＜共通＞：「語り」が先行する相手の意見や「語り」と同様な意見や感情を表すもの。

以下では、男性同士の会話と女性同士の会話で後続「語り」がPPSとして具体的にどのように用いられているかについて述べる。

4.2.1　「語り」連鎖のタイプと使用傾向

まず、話題が二人の「語り」によって構成されている場合、男性同士の会話と女性同士の会話に見られる後続「語り」がどのように用いられているかについて見てみよう。表2は、日韓男女の会話に見られる後続「語り」の連鎖タイプを整理したものである。

表2　PPSとしての語り連鎖

	関連		類似		共通		計
JF	22	63%	4	11%	9	26%	35
KF	17	63%	2	7%	8	30%	27
JM	33	89%	1	3%	3	8%	37
KM	25	93%	1	4%	1	4%	27

表2から分かることは、以下のようである。

(a)　日韓男女に関わらず、＜関連＞が最も多く観察される。

(b)　男性同士の会話に比べて女性同士の会話では、＜類似＞と＜共通＞が多く見られる傾向がある。

本研究で扱った日韓男女の自由会話データでは、以上のような傾向が見られたが、＜関連＞、＜類似＞、＜共通＞は、それぞれ会話に積極的に参加していることを表したり、相手とのバランスをとったり、共通点を主張したりするという面でポジティブ・フェイスに配慮したPPSとして解釈できる。一方、相手と異なっていることを表現する後続「語り」は、男性同士の会話で合計8例観察されているが、これについては§5で述べることにし、以下では、＜関連＞、＜類似＞、＜共通＞の語り連鎖が相互行為の中で具体的にどのようなストラテジーとして用いられているかについて述べる。

4.2.2　関連する語りの提示と寄与：＜関連＞

日韓男女に関わらず、最も多く観察されるのは＜関連＞の語り連鎖であるが、＜関連＞の語りは、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で高い割合で観察されている。＜関連＞の語りは、話題になっている事柄と関連する内容が話し手交替で提示されている場合である。表3を見てみよう。

表3　関連する語りの連鎖

話題	語り	内容	パート	話し手
消防について	物語Ⅰ	火事で友人の家が燃えたことについて	ソロ	JDM7
		家の近所に消防局があることについて	デュオ	両者
	描写Ⅱ	近所の消防局で目撃したことについて	ソロ	JYM8
		火事の時どうするかについて	デュオ	両者
	物語Ⅲ	消防局の訓練について	ソロ	JYM8

表3は、日本の男性同士の会話で展開された話題の一部を示したものである。この話題は、JDM7 の「物語Ⅰ」によって導入され、「物語Ⅰ」の後、デュオパートが展開されている。デュオパートで、二人は近所の消防局について話し合っており、話し手交替はデュオパートの後に行われる。（8）を見てみよう。

(8)会話MJ4【消防について】

----------「物語Ⅰ」----------

01 JDM7:（1.5）そういえば　なんか友達:::　なんか　去年かな　まあ　隣の家が燃えた
02　んかな　たぶん（JYM8:うそ）それ　とかで　その　自分ちのとこもちょっと焦げ
03　たりしたらしくて（0.3）とか　なんか　いろいろ（0.4）なんか　おかんとか
04　弟がいろいろえらい目にあったみたいな（0.3）話聞いてたら　［…］　火災報知機も
05　若干びびってたんやけど

----------デュオ----------

［…］

06 JDM7:でも（0.7）あれやろ　実際火出たら燃えることに変わりはないからな@
07 JYM8:まあ　せやな@
08 JDM7:@＜@いくら近いとは言え@＞
09 JYM8:まあ　来るまでのロスは
10 JDM7:［うん］

----------「描写Ⅱ」----------

11 JYM8:［半］端ないよな（0.5）でも　あれ　消防:: の所ってやっぱり　すぐ　なんか
12　その　服着れるように（JDM7:うん）もう　この　このまま　こう　が::って抜いで
13　（JDM7:うん）足出して（JDM7:うん）まあ　繋ぎみたいなやつあるやん（JDM7:お
14　う）足出して靴も一緒に「ぶわ::」って脱いで（JDM7:うん）［…］

（8）は、消防に関する話題の開始部である。この話題は、ポーズの後、JDM7の「そういえば」という発話から開始され、「火事で家が燃えた」という内容の JDM7の「物語Ⅰ」が終了した後（01～05行）、二人は、JYM8の家の近所に消防局があることについて話し合っている（06～10行）。その後に展開される「描写Ⅱ」の内容は、「消防局には、隊員が服を素早く着れるように服が用意されている」とまとめられるが、 JDM7の「物語Ⅰ」に後続する「描写Ⅱ」は、火事と消防というキーワードに関連する内容であることが分かる。

このように、一つの話題に二人による複数の「語り」が観察される場合、話題のキーワードに＜関連＞する「語り」が二人の参加者によって連鎖されることが多く、会話の参加者は話し手交替を行いつつ、話題と関わる情報を提示することで話題の展開に貢献していると言える。

4.2.3　バランスと共有としての連鎖：＜類似＞

次に、話題の中で展開された「語り」を見てみると、先行する相手の「語り」と類似した内容の「語り」が語られている用例が観察され、以下の表4のように二人の語りがバランスよく配置されている話題が見られる。

表4　バランスと共有としての連鎖

話題	語り	内容	パート	話し手
服について	物語Ⅰ	JOF1が買った服について	ソロ	JOF1
		服について	デュオ	両者
	物語Ⅱ	彼氏の趣向に服装を合わせているかについて	ソロ	JAF2
		JAF2の彼氏の趣向について	デュオ	両者
	物語Ⅲ	彼氏の趣向に服装を合わせているかについて	ソロ	JOF1
	物語Ⅳ	JOF1の彼氏の趣向について	デュオ	両者
		JAF2の彼氏の趣向について	ソロ	JAF2
		男性の趣向について	デュオ	両者

表4の服に関する話題は、JOF1が奇抜な服を買ったことについて語り出すことから始まる。「物語Ⅰ」が終わると、二人はどのような服が好きかに関してデュオパートで話し合っている。その後、（9）のように、JOF1が「やっぱ　そうゆう　彼氏に合わせてるの？（01行）」と質問することによってJAF2の「物語Ⅱ」は始まる。

(9)会話FJ1【服装を彼氏の好みに合わせているかについて】

----------「物語Ⅱ」----------

01 JOF1:やっぱ　そうゆう　彼氏に合わせてるの？

02 JAF2:どうなんやろうな　まあ　もともと　そうゆうのが好きなんってゆうのもあるけ

03　　ど（JOF1:うん）うん　でも　結構　なんか　むこう　服装のことゆってくるから

04　　（JOF1:ゆってくるの？）　ゆってくるで（JOF1:うっそ）いや::　［…］

----------デュオ----------

05 JOF1:はあ:::　変態やん@@

06 JAF2:＜@あほかっつって@＞@@　［…］

----------「物語Ⅲ」----------

07 JAF2:まあね　そうゆうのは大丈夫？

08 JOF1:そうゆう？

09 JAF2:服言われへんの？

［…］

10 JOF1:季節感（JAF2:＜@なんじゃそりゃ@＞）いや:：　なんか　だってもう秋だもん

11　って言うしかないっていう　［…］

「物語Ⅱ」の後、二人はJAF2の彼氏の好みについて話し合いを続けている。そして、JOF1の後続する「物語Ⅲ」は先行する「物語Ⅱ」の話し手であったJAF2の質問（07と09行）によって開始される。このように、一つの話題内で複数の「物語」が語られた場合、類似した経験談が次々と語られている用例が観察されるが、ここで注目したのは、JAF2とJOF1が互いに質問を用いて相手の「物語」を導き出していることである。このように、類似した「物語」と「語り」をお互いに交換し合うことは、二人の経験あるいは情報や考えを共有し合おうとする行為であり、互いのポジティブ・フェイスを満たす行為でもあると思われる。つまり、互いに質問を用いて、話し手と聞き手の役割を交代することで、相手のことについて知ることと自らのことを知らせることのバランスを取りつつ「物語」を連鎖していると言えるが、話し手と聞き手の役割のバランスと情報の共有し合いは、互いに相手のポジティブ・フェイスに配慮した結果であると考えられる。このタイプは、3つのタイプの中で最も少ないタイプではあるものの、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で高い割合を占めている。

4.2.4　共通基盤の主張としての連鎖：＜共通＞

最後に、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で高い割合を占めている＜共通＞語り

について述べる。このタイプは、後続する「語り」が先行する「語り」の内容と共通の意見や感情を表すために語られている場合であるが、まず、その例として韓国の女性同士の会話に見られた話題の一部を表5に示す。

表5　共通基盤の主張としての連鎖：「物語」

話題	語り	内容	パート	話し手
知り合いについて	物語Ⅰ	同僚の魅力について	デュオ	両者
		同僚の彼氏の病気について	ソロ	KHF4
	物語Ⅱ	同僚の魅力について	デュオ	両者
		同僚が一般的ではない話をしていることについて	ソロ	KHF4
	物語Ⅲ	一般的ではない話をする知り合いについて	ソロ	KSF3
		一般的ではない話をする人について	デュオ	両者

表5の知り合いに関する話題には複数の「語り」が含まれている。この話題は主に一人の話し手（KHF4）による「語り」が多い。話題の流れを簡略にまとめると、KHF4は同僚の彼氏を目撃したことや同僚と彼氏の外見について話すことから話題を開始し、同僚が彼氏の病気（物語Ⅰ）や一般的ではないことを周りの人に話していることについて「物語」（物語Ⅱ）っている。KHF4の「物語」に関して、二人は同僚の理解できない言動にも関わらず、彼氏がいる理由は何かについて話し合っており、同僚には何等かの魅力があるはずだと話し合いを続けている。ここで、注目したいのは、話し手の交代が行われたKSF3の「物語Ⅲ：一般的ではない話をする知り合いについて」である。KSF3の「物語Ⅲ」はKHF4の短い「物語Ⅱ」の後すぐ連鎖される。（10）を見てみよう。

(10)会話FK2【一般的ではない話をする知り合いについて】

----------「物語Ⅱ」----------

[…]

01　KHF4:야 그런 것만 얘기 한 게 아니라 자기가 모텔에 갔는데 왜 이렇게 사람이
02　　많은지 모르겠다고＝(ねえ　そういう話だけしていたのではなくて　自分がモーテルに行ったけどなんでそんなに人多いのか分からないって＝)

----------「物語Ⅲ」----------

03　KSF3:＝야 근데 난 정말 이해할 수 없는 게 그런 얘기를 그 사람은 그래도 얼굴

04　맞대면서 하잖아 근데 난 옛날에 알바할 때 얼굴 두 번 봤어 딱 두 번 만났는데
05　나한테 그런 얘기를　나한테 아무렇지도 않게 하는 애가 있는거야[…] 걔가 막
06　웃으면서 모텔을 가리켜　주는거야 와 이런 얘기를 처음 보는 사람한테도 하는
07　구나(＝ねえ　でも　私は本当に理解できないのがそういう話をその人は少なくとも顔は合わせてするでしょう　でも　私は昔バイトした時　顔二回合わせた　二回会ったのに　私にそういう話を私に平気にする子がいた[…]あの子がすごく笑いながらモーテルって教えてくれた　へえ　こういう話を初めて合った人にもするんだ)

----------デュオ----------

08　KHF4:난 이해할 수 없어(私は理解できない)
09　KSF3:다 간다고 생각하는 거겠지 주위에도
　（みんな行くって思っているよね　まわりもね(（周りの人も）))
10　KHF4:그러겠찌 자기가 가니까［남들도 간다고 생각하겠지］
　（そうだよね　自分が行くから［人も行くって思っているよね］）
11　KSF3:［일반적인 거고 그런게］없나봐（［一般的とか　そういうの］がないみたい)
12　KHF4:근까 그 언니도 약간 이상한게 자기가 그러니까 남들도 다 그럴꺼라고
13　생각하나봐（そうだからね　そのお姉さんも(（同僚）)少し変なのが自分がそうだから人もみんなそうだと思っているみたい)

（10）は、KHF4の「物語Ⅱ」の終了部であり、KHF4はモーテルに行ったことを自分に話す同僚について物語っている（01～02行）。KHF4の「物語Ⅱ」が終わって、すぐKSF3は「ねえ」と相手に呼びかけることで、発話権を確保する。そして、先行する KHF4の「物語Ⅱ」と同様な考えや感情を表すために自分の知り合いの中でもそのような人がいたことについて「物語Ⅲ」を始めている。KSF3の「物語Ⅲ」の開始の発話「私は本当に理解できないのが（03行）」と KHF4の「私は理解できない（07行）」という評価の発話から分かるように、KSF3の「物語Ⅲ」は、一般的ではないことを話す人は理解できないという二人の共通基盤を支持する内容である。

後続する「物語」の内容が相手の考えや感情と同様であることを表すため語られることは、Tannen（2005）とCoates（1996）でも指摘されている。Coates（1996）は、友人同士の会話で会話の参加者が次々と自らの類似した経験談を語ることは、互いの繋がりを強め、連帯感を高める行為であると述べている。このように、相手が出来事を語ることで、伝えようとしている考えや感情と同様な事柄を伝えるために、「物語」が自発的に語られる場

合、その「物語」は、相手との共通点を主張するためのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると考えることができる。 また、相手の語りに後続する「描写」や「評価」の場合も相手との共通点を主張するためのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして用いられる。表6は、日本の男性同士の会話で展開された一つの話題内の一部である

表6　共通基盤の主張としての連鎖：「描写」

話題	語り	内容	パート	話し手
業務について	描写Ⅰ	テストについて	ソロ	JSM4
	描写Ⅱ	授業について	ソロ	JSM4
	描写Ⅲ	仕事に関する知識について	ソロ	JTM3
	評価Ⅰ	仕事について	ソロ	JTM3

この話題は、JSM4がテストを作ることや急に授業を担当させられた状況について「描写Ⅰ、Ⅱ」することで始まり、JSM4の「描写Ⅱ」の語りは、（11）の03行で終了する。そして、04行で、JTM3は自発的に自らの仕事に関する「描写Ⅲ」を行っている。

(11)会話MJ2【仕事に関する知識について】

----------「描写Ⅱ」----------

01 JSM4:ぼくは楽をしたい（JTM3:@@）という意味では　うん　もうちょっと楽をした
02　かったか（JTM3:はいはい　研修期間的なものがあって）［…］基本的には働きたく
03　ないでござるやからね（JTM3:@@）うん

----------「描写Ⅲ」----------

04 JTM3:まあ　ほんま　でもしんどいわ　その感覚でいうと　だから　ぼく　どうなんや
05　ろうな　ほんとうに　やってって言われたけどできてないっていう感じやな
06　（JSM4:あああ）高校生の知識で戦ってる感じやから［…］ここになんぼくらいの電
07　流が働くとか（JSM4:うんうん）そうゆうのはやっぱ全部オームの法則的なやつで
08　分かるし（JSM4:うんうんうん）う::ん　けど　まあ　結構きついけどね　で　どっ
09　ちかいうと　そうゆう　ま　電気のことは（JSM4:うん）分かってて　［…］

ここで、JTM3の「描写Ⅲ」を見てみると（04～09行）、「しんどいわ」「きつい」と自らの評価の発話を用いながら仕事に関して描写していることが分かる。JTM3は、自ら

の仕事での状況を描写することで、JSM4と同様に大変な状況に置かれていることを伝えている。このように、相手の先行する語りに後続する「語り」が自発的に連鎖され、相手との共通点を主張するために「語り」が後続された場合、このタイプの「語り」は、相手のポジティブ・フェイスに配慮し、共通基盤を主張するストラテジーとして用いられていると言える。

4.3　分析のまとめ

以上、本章では、女性同士と男性同士の会話に見られる会話展開の仕方と先行する「語り」に後続する「語り」に注目し、男女の会話展開に見られる特徴と相互行為の中で「語り」がいかなるストラテジーとして語られているかについて述べた。分析結果をまとめると以下のようになる。

① 日本と韓国で同じように、男性同士は主にソロパートを展開させることで会話を進めていくが、女性同士はデュオパートで主に会話を展開させていく。
② 男性同士の会話では、女性同士の会話に比べて「描写」と「評価」がソロパートで展開される傾向があり、その要因として、男性同士の会話では新情報の提供が多いことと、相手との不同意を表しているため「評価」が語られる場合、聞き手は積極的に会話に参加することを避けることが要因として考えられる。
③ 女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で後続「語り」は話題と関連する情報を提供し、会話展開に貢献するストラテジーとして用いられる割合が高いのに対し、女性同士の会話で後続「語り」は、情報の共有し合いによるバランスのストラテジーと共通点を主張するストラテジーとして用いられる割合が高い傾向がある。

以上の分析結果を踏まえ、次節では§2.2で挙げた研究目的ⅲ．会話展開の仕方と後続「語り」のストラテジーの使用にジェンダーによる相違点が見られる理由は何かについて考察を行う。

5.　レポートトークとラポールトーク

以上のように、女性同士と男性同士が会話をどのように展開させていくかという面からは、日韓の違いよりも、ジェンダーによる違いが観察された。最も大きい相違点は、男性

同士の会話はソロパート中心で、女性同士の会話はデュオパート中心という会話の参加形式の仕方であるが、本研究の結果と類似した結果は、本章の冒頭でも述べたように、Pilkington（1998）と Coates（1996）でも指摘されている。Pilkington（1998）は、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話は一人一人のターンが短く共同で話すことが多いと指摘しており、Coates（1996）女性同士の会話を分析した結果、女性同士の会話はF2に近いと述べている。本章で日韓の女性同士の会話と男性同士の会話を比べた結果、女性同士の会話の方が二人の会話の参加者が共同で発話権を持ち、話し合うデュオパートによる展開がソロパートの展開よりその発話数が多い点で、日韓の女性同士の会話でも類似した様相が見られたと言える。

また、女性同士の会話で後続「語り」では、情報の共有し合いによるバランスのストラテジーと共通点を主張するストラテジーが高い割合で用いられているのに対し、男性同士の会話で後続「語り」では話題と関連する情報を提供し、会話展開に貢献するストラテジーが用いられる傾向が強い。では、このような結果は何によるものであろうか。

§4.1.1で述べたように、まず、女性同士の会話に比べ男性同士の会話では、「描写」と「評価」がソロパートで展開されることが多い。特に「描写」の場合、女性同士の会話ではデュオパートでの展開が多く見られるが、これらがどのパートで語られるかは、「描写」の対象になる事柄が二人にとって新情報か旧情報かに関わる。男性同士の会話で「描写」は、一方の参加者に完全な新情報を伝えるための展開が多く、女性同士の会話では二人の参加者がすでにある程度の情報を持っている事柄に関しての話し合いによる「描写」が多いことが要因である。Tannen（1990）は、男性は情報や知識などが中心であるレポートトーク（Report-talk）をするが、女性は相手と親密な人間関係を求めるラポールトーク（Rapport-talk）をすると指摘している。本章の「描写」と男女の会話の参加形式に見られる相違点や後続「語り」に見られる差も、Tannen（1990）がいうレポートトークとラポールトークを反映したものであると考えると理解しやすい。

つまり、日韓の男性の「描写」や後続「語り」は同性の友人に新情報を伝えることを目的とするが、女性の「描写」や後続「語り」は、新情報の伝達よりは、二人が共同に関心を持っている事柄に関して話し合うことや、同様な経験を語ることが目的であるため、会話の参加形式と後続「語り」に相違点が見られると考えられる。また、§4.2.2で述べたように、男性同士のソロパートにおける「評価」は、聞き手である参加者が話し手に同意していない場合、ソロパートで展開される傾向が見られるが、このような男性同士の会話の特徴は、相手の先行する発話や「語り」に対して不同意を表す後続「語り」が観察されていることとも関連する。§4.2で述べたように、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話

では共通点や情報の共有し合いのストラテジーとして後続「語り」を用いる傾向があるが、男性同士の会話ではあまり観察されず、むしろ（12）のような不同意や反論の後続「語り」が8例観察されている。

(12) 会話MK3【同性愛について】

01 KBM5:근까 그런거 아니냐 권력이 있는 사람들일수록 주위에 여자가 많고 쉬우니
02 까 이상한걸 찾는거야 애들이(だから　あれじゃないか　権力がある人こそ　周りに女が多くてしやすいから（（付き合ったりすることが難しくないという意味））変なことを探すんだよ　あの人たち)
03 KCM6:아냐 근데 뭐 그러 그런 케이스도 있다고 하고(KBM5:응) (0.8)
04 질려가지구(KBM5:근까)어렸을 때 정신적인 학대 이런 거 받았던 애들이 또
05 이제 와 어디서 책에서 읽은건데 […] 지네들 가족끼리 결혼하잖아(違う　でも　まあ　そういう場合もあると言うけど（KBM5:うん）（0.8）　飽きて（KBM5:そうだね）幼い時の精神的虐待　そういうのを受けた人が　また　もうどこか本で読んだけど　そういう […] 自分の家族同士で結婚するじゃない)
06 KBM5:근친상간？@(近親相姦？@)
07 KCM6:근친상간 그래가지고 태어날때부터(近親相姦　それで生まれながら)

[…]

08 KBM5:이상한쪽으로 간거구나(変な方向にいったんだ　だから)

（12）は、KBM5の「昔、権力のある人が同性愛になりやすかった」という「語り」の後にKCM6が KBM5の意見に反論を表す場面である。03行から始まるKCM6の反論を表す「描写」は、「違う　でも　まあ　そういう場合もあると言うけど」と「違う」というFTAとしても度合いが高い反論を「そういう場合もあると言うけど」という発話で軽減した後語られる。ここで、反論されたKBM5の反応を見てみると KCM6の「語り」を「うん」「そうだね」とあいづちを用いて支持していることを表すだけではなく、「近親相姦 」と言葉を探してあげており、笑いも観察される。KCM6の「語り」の終了部では、「変な方向にいったんだ　だから」と納得していることを表していることからKBM5は、 KCM6の「語り」を、FTAよりは受け取る価値のある新情報として捉えていると思われる。このような用例は、男性同士の会話では、不同意や反論を表す後続「語り」はFTAとして捉えられるよりは、新情報として捉えられている可能性があることを示唆する。一方、「語り」を共通点や情報の共有し合いのストラテジーとして用いる女性同士の会話では、このよう

な反論の後続「語り」は観察されておらず、女性同士の会話では、共通点やバランスがより重視されていると考えられる

以上のように、女性同士の会話はデュオパートが中心となり、共同で何かについて話し合うという相互行為を通じて親密な人間関係を維持また構築していくが、男性同士の会話の場合、ソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで親密な関係を作り上げていく傾向が強いと考えられる。これらの特徴は、後続「語り」の使用傾向にも見られ、男性同士の会話において、FTAとされる不同意や反論を表す後続「語り」は、FTAとして捉えられるよりは、新情報として捉えられる可能性があり、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で後続「語り」は、共通点を主張するストラテジーや共有し合うストラテジーとして用いられる傾向が強い。このような相違は、相互行為の中で男女が同性の友人と親身な関係を維持また構築していくために、どのような装置を用いて配慮するかというポライトネス・ストラテジーの使用に相違点が見られる可能性があることを示唆する。

6. 本章のまとめ

本章では、会話展開の仕方と後続「語り」に注目し、女性同士の会話と男性同士の会話に見られる特徴について述べた。本章の分析結果と考察は、以下のようにまとめられる。

（A）男性同士の会話の場合、ソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで親密な関係を作り上げていくのに対し、女性同士の会話はデュオパートが中心となり、共同で何かについて話し合うという相互行為を通じて親密な人間関係を構築していると考えられる。

（B）このような特徴は、後続「語り」がいかなるストラテジーとして用いられているかという面にも表れ、男性同士の会話で、後続「語り」は話題と関連する情報を提供し、会話展開に貢献するストラテジーとして用いられる傾向が強いのに対し、 女性同士の会話で後続「語り」は 、共有し合いによるバランスのストラテジーと共通点を主張するストラテジーが男性同士の会話に比べ高い割合で用いられる傾向がある。

（C）男性同士の会話では、むしろ不同意や反論を表す後続「語り」が多く観察されるが、FTAとして解釈されるよりは、新情報として捉えられているような相互行為が見られ、これは、女性同士の会話と男性同士の会話で用いられるポライトネス・ストラテジーに相違点が見られる可能性があることを意味すると言える。

第8章　同意・共感と共通基盤の主張

1. はじめに

親密な関係を構築してきた日韓の友人同士の会話では、会話の参加者が相手と同意や共感できる点を見出し、積極的に相手との一致点を強調する相互行為が観察される。ポライトネス理論の観点から見てみると、（1）のように相手の発話内容に対して積極的に同意や共感していることを表す行為は、相手との共通基盤を主張するPPSとして捉えられる。

(1)会話FJ3 【JDF5：大学院に進学することについて】

01　JDF5:「どこでもいいかな」と［思って］
02　JGF6:　　［う::ん］
03　JDF5:もう　時間稼ぎやから
04　JGF6:うん　＜@時間@＞@@［@@］
05　JDF5:　　［＜@あ］る意味な@＞@［@@］
06 →JGF6:　　［@@］＜@分かるで@＞
07　JDF5:＜@居直り@＞す［ぎやねんやけど］
08 →JGF6:　　［＜@その気持ち分かるわ@＞］
09　JDF5: 居直りすぎやねんけど
10 →JGF6:そう　分かる
11　JDF5:うん

（1）に見るように、友人同士の会話で参加者は、相手と共感できる点を見つけ出し、相手と同一な考えや感情を持つ協力者であることを強調することで、同一基盤を持った仲間であることを表示しつつ、親密な関係をより強めていく。

本章では、日韓男女の相互行為の中で、会話の参加者が相手の発話に＜同意・共感＞を示すことで相手との共通基盤を主張するストラテジーに注目し、男性同士の会話と女性同士の会話における＜同意・共感＞の相互行為にどのような類似点と相違点があるかを分析する。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、先行研究をまとめた後、本章の目的について述べる。

2.1　先行研究

相互行為におけるジェンダー差を探った多くの研究では、男性に比べ、女性は相手の発話に同意や共感あるいは肯定的な反応を示すことが多いと指摘されている。女性同士と男性同士の会話をデータとし、肯定的な反応を分析したPilkington（1998）では、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で肯定的な反応が多く用いられていると指摘している。このような結果は、Coates（1989）とEdelsky（1981）でも指摘され、Coates（1989）とEdelsky（1981）によると、男性より女性の方が相手の発話に同意を表現する発話をより頻繁に用いるとしている。また、 女子高校生の会話を分析したEckert（1990）は、女性同士の会話は協力的で、一つの話題に関して女性は様々な意見を提示しながら、共通の基盤を作り上げていると述べており、様々な場面における男女の言語使用をポライトネス理論の観点から分析したHolmes（1995）は、男性より女性の方があいづちや短い発話を用いて、相手に協力的な反応や同意を表すPPSをより多く用いると述べている。

このように、相手のポジティブ・フェイスに配慮して用いられる肯定的なコメントの使用傾向には、ジェンダーによる相違点が見られることが明らかになっている。しかし、相互行為の観点からの分析はまだ十分行われていない。すなわち、実際、親密な関係を構築してきた日韓の男性同士の会話と女性同士の会話の中で、同意や共感を表す発話はどのように用いられ、同意や共感を表すことが会話の参加者にとってどのように解釈されており、その後どのような相互行為が展開されるのかについてはまだ明らかではない。そこで、本章では、相手の発話に対して同意や共感を表すことが男性同士の会話と女性同士の会話で、ポライトネス・ストラテジーとしてどのように捉えられているかを分析しつつ、男女の＜同意・共感＞の相互行為に見られる特徴を明らかにすることを目的とする。

2.2　研究目的

本章では、会話の参加者が相手との共通基盤を主張するストラテジーとして使用する＜同意・共感＞の発話に注目し、男性同士の会話と女性同士の会話における＜同意や共感＞の相互行為に見られる特徴を明らかにすることを目的とする。具体的に本章では、以下のような点を明らかにする。

ｉ．男性同士の会話と女性同士の会話における＜同意・共感＞の使用傾向にはどのよう

な類似点と相違点があるのか。

ⅱ．男性同士の会話と女性同士の会話の中で、＜同意・共感＞はどのように用いられているのか。

ⅲ．＜同意・共感＞と発話様態にはどのような関連性があるのか。

ⅳ．＜同意・共感＞の発話による共通基盤主張ストラテジーの使用にジェンダーによる相違点が見られる場合、その理由は何か。

3. 分析方法

本章では、＜同意・共感＞の発話を分析対象とするが、以下に、＜同意・共感＞の定義と発話様態の例を示す。

・＜同意・共感＞

＜同意・共感＞を表現する発話は、相手の話を聞いてそれを理解したことを表すと同時に、それに加えて相手の意見や感情が自らの意見や感情と同様であることを言語化してはっきり表す発話であるとする。

次の表1に、本章で分析対象とする＜＜同意・共感＞と発話様態[19]の対応例を示す。

表1 ＜同意・共感＞と発話様態の対応例

＜同意・共感＞			
あいづち	JOF1:<@セレクトがいいなって@>@ →JAF2:そそそそ	**繰り返し**	JSF3:お金ないし　貧乏旅行= JKF4:=一切何も買わんかった？ JSF3:もったいない →JKF4:もったい　もったいない
言い換え	KBF2: 아마 남을 꺼 같애 내 생각에는 막 딱히 엄청 [xx] (多分残ると思う　私が思うには　何か　別に　すごく[xx]) →KAF1: [모자]를것 같진 않아 ([足り]ないとは思わない)	**先取り**	JKF4:あたし　あたし　ずっと置いとく派　忘れる　忘れる派 JSF3:だって　で　置いてたら= →JKF4:　　=忘れる JSF3:使う機会ないから JKF4:ないないない
実質発話	JSF3:ぜんぜんなかったから JKF4:ん JSF3:ゆるいなって思って →JKF4:確かに	**あいづち＋α**	KHF4:난 이해할 수 없어(私は理解できない) KSF3:다 간다고 생각하는 거겠지 주위에도 (みんな行くと思っているよね　周りの人も) →KHF4:그러겠찌　자기가 가니까 남들도 간다고 생각하겠지 (そうだよね　自分が行くから、人も行くと思っているよね)

[19] 発話様態の定義と分類基準は、第6章を参照されたい。

4.　＜同意・共感＞とストラテジー

相互行為の中で、会話の参加者は相手の意見や考えに同意していることを表したり、相手の感情に共感していることを表したりしながら、相手との共通基盤を強めていく。相手の発話内容に対して＜同意・共感＞を表す発話は、相手との共通基盤を主張するPPSとして解釈できる。まず、以下の§4.1では、日韓男女の会話における＜同意・共感＞発話の相対使用頻度について述べ、§4.2では、相互行為の中で＜同意・共感＞の発話がどのように用いられているかについて述べる。§4.3では、＜同意・共感＞の発話と発話様態との相関関係に見られるジェンダー差について述べる。

4.1　＜同意・共感＞の相対使用頻度

まず、男女の会話における＜同意・共感＞の相対使用頻度を見てみよう。表2は、男女の会話における総発話数と＜同意・共感＞の相対使用頻度を示したものである。

表2　総発話数に対する＜同意・共感＞の相対使用頻度

	JF						JM					
	ソロ					デュオ	ソロ					デュオ
	物語	描写	評価	計			物語	描写	評価	計		
同意・共感	31	19	8	58	3.4	287　9.8	25	8	6	37	1.8	87　5.0
総発話数	884	696	119	1699		2918	1096	787	183	2066		1727
	KF						KM					
	ソロ					デュオ	ソロ					デュオ
	物語	描写	評価	計			物語	描写	評価	計		
同意・共感	25	4	5	34	2.9	193　7.1	12	8	9	29	1.7	32　2.2
総発話数	748	295	119	1162		2730	958	490	277	1725		1461

表2からは、次のことが確認できる。

(a)　＜同意・共感＞の発話は、デュオパートで相対使用頻度が高い。

(b)　男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で＜同意・共感＞の相対使用頻度が高く、特にデュオパートにおける相対使用頻度の差は大きい。

以上のように、＜同意・共感＞の相対使用頻度にはジェンダー差があり、ソロパートでも、デュオパートでもその相対使用頻度は女性同士の会話で高い傾向が見られる。相対使用頻度の差は、男女が相互行為の中で＜同意・共感＞の発話をどのように用いているかと

深く関連する。§4.2では、女性同士の会話と 男性同士の会話の中で＜同意・共感＞がどのように用いられているかについて述べる。

4.2　＜同意・共感＞による共通基盤の主張

＜同意・共感＞の発話は、相手の考えや感情が自らの考えや感情と同様であることを表出するために発話される。＜同意・共感＞の連鎖パターンには、ジェンダーによる相違点が観察される。まず、男性同士の会話では＜同意・共感＞の発話は一人の話者によって単発的に発話されることが多い。一方、女性同士の会話では、一人の話者によって連鎖的に発話されたり、二人の参加者が＜同意・共感＞の発話を積み重ねたりする相互行為が多く観察される。＜同意・共感＞の相互行為に見られるジェンダー差が、相対使用頻度の差にも表れていると考えられる。以下では、男性同士の会話と女性同士の会話における＜同意・共感＞の相互行為にどのような特徴が見られるかについて述べる。

4.2.1　単発的な＜同意・共感＞

男性同士の会話では、いずれのパートにおいても＜同意・共感＞の発話は、単発的に用いられている用例が主に観察されている。以下では、男性同士の会話のそれぞれのパートにおいて、＜同意・共感＞の発話がどのように用いられているかについて述べる。

4.2.1.1　ソロパートにおける単発的な＜同意・共感＞

まず、男性同士の会話のソロパートで＜同意・共感＞の発話が用いられている用例を見てみよう。

(2)会話MK1【「ソロ・物語」KAM2：友人について】

01　KAM2:＃＃도 노력만 하면 걔 그렇게 소심한 거 아니거든 진짜(＃＃（（共通の友人））も努力さえすれば、あの子そんなに内気ではないんだよ　本当に)

02 →KGM1:안 소심해 안 소심하지(内気ではない　内気ではないんだね)

03　KAM2:근까 근데 본인이 지금까지 어차피 이랬으니까 자기의 운명의 상대가

04　　나타날때까지 기다리겠대(だから　でも　本人が今までどうせそうだったから自分の運命の相手が出るまで待つって)

（2）はKAM2が友人について話している場面である。ここで、聞き手の＜同意・共感＞の発話に先行する話し手の発話を見てみると、「あの子そんなに内気ではないんだよ本当に」と友人の性格に対する評価の発話が用いられている。その発話に対してKGM1は「内気ではない、内気ではないんだね」と先行発話を繰り返す形で＜同意・共感＞を示している。日韓男女に関わらず、ソロパートで、聞き手は、話し手の評価の発話に対する反応として、＜同意・共感＞の発話を用いて、話し手と共通の意見や感情を持っていることを主張する用例が最も多く観察されるパターンであるが、日韓の男性同士の会話でも、（2）のような単発的な＜同意・共感＞の発話が主に観察されている。

また、男性同士の会話に見られる特徴として、（3）のように話し手の評価的な発話に対して、聞き手が＜理解＞を表す用例も多く観察される。

(3)会話MJ2【「ソロ・評価」 JSM4：子供は純粋であることについて】

01　JSM4:自分が子供とかいなくてもいいかなって思うようなってくるよね　どんどん

02　　毎日大量の子供達に会ってるから　うん

03　JTM3:へ::

04　JSM4:子供は純粋でいいよね

05 →JTM3:あ　そうなんや

（3）は、JSM4が大人に比べ子供は純粋で良いと自らの考えを語る評価の部分である。ここで、JSM4は「子供は純粋でいいよね」と評価の発話を用いているが、JTM3は、「あそうなんや」と＜理解＞のみを表現していることが分かる。

このように、話し手の評価的な発話に対して、聞き手は＜同意・共感＞の発話を用いたり、＜理解＞を示す発話を用いたりする。ソロパートで話し手が評価的な発話を用いた場合、その発話に対する聞き手の反応を見てみると、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では、日韓ともに、相手の評価的な発話に対して（3）のように単に＜理解＞を表したり、＜不同意＞を表したりする相互行為が多く観察される傾向がある。これが女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で＜同意・共感＞の相対使用頻度が低い一つの要因として考えられる。

4.2.1.2　デュオパートにおける単発的な＜同意・共感＞

次に、§4.1で述べたように、＜同意・共感＞の発話は、一人の話者が語りを展開させるソロパートに比べ、会話の参加者がお互いに話し合うデュオパートでその相対使用頻度

が高いが、男性同士のデュオパートで＜同意・共感＞の発話が用いられている用例を見てみよう。

(4)会話MJ2【「デュオ」感電について】

01　JSM4:不思議よね　割と電池って　そういうことないようにできてるのにね

02 →JTM3:そう

03　JSM4:静電気かな

04　JTM3:変なやり方したんかな　分からんねんけど

（4）は、JTM3が小学生の時、電池に感電したことについて物語った後に続く部分であり、二人はなぜ感電したかについて話し合っている。02行目のJTM3の発話「そう」は、先行する01行目のJSM4の「不思議よね」に対する＜同意・共感＞を示す発話であることが分かる。 JTM3との共通基盤を確認した JSM4 は、「不思議である」という二人の共通基盤を前提とし、「静電気かな」と会話を展開させている。

（4）のように、 一人の会話の参加者によって＜同意・共感＞の発話が単発的に用いられ、共通基盤を前提として会話を展開させる用例は、韓国の男性同士の会話でも主に観察されるパターンである。（5）を見てみよう。

(5)会話MK3【「デュオ」同性愛者について】

01　KBM5:선천적인거(先天的なもの)

02　KCM6:어[어](うん［うん］)

03　KBM5:＞[그]런거는＜ 그니까 우리가 그걸 욕하면 안 되는거 아니냐 지들이

04　　좋다는데(＞［そう］いうのは＜　だから　私たちがそれを批判してはいけないんじゃないか　お互いが好きっていうのに)

----------「デュオ」----------

05 →KCM6:＞어어 그럼＜ 걔네들이 불쌍한거지 어떻게 보면

　　(＞うんうん　そうだよ＜　あの人たちがかわいそうだよ　考えてみると)

06　KBM5:근데 우리나라 기독교새끼들은 왜 그 지랄 하냐고

　　(なのに　韓国のキリスト教のやつらは何でそんなにうるさいんだよ)

07　KCM6:(0.3)성경에 안된다고 나와 있어(（0.3）バイブルにだめって書いてある)

08　KBM5:근데 어떻게 성경에 (0.3) 성경이 비씨 몇 년 전이지 그게?

　　(でも　どうやってバイブルに（0.3）バイブルがBC何年前だ　それ？)

（5）は、KBM5が「同性愛者を批判することはよくない」と自らの考えを語った（04行まで）直後に展開されたデュオパートである（05行から）。 KBM5の「評価」の語りに対して、 KCM6は「うんうん　そうだよ　あの人たちがかわいそうだよ　考えてみると」とKBM5の語りの内容に対して＜同意・共感＞していることを表現している（05行）。その後の相互行為を見てみると、共通基盤を持っていることを確認したKBM5は、同性愛者を批判する宗教人に関して話し始め、デュオパートを展開させようとしていることが分かる（06行）。

以上のように、男性同士の会話では、ソロパートでもデュオパートでも＜同意・共感＞の表現は一人によって単発的に用いられていることが多く、男性同士の会話では、相手との共通点を確認した後、共通基盤を前提として関連する事柄について話し合いを展開させる相互行為が主に観察されている。

4.2.2　＜同意・共感＞の連鎖

男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、＜同意・共感＞が連鎖的に用いられている用例が多く観察される。以下では女性同士の会話で＜同意・共感＞がどのように用いられているかについて述べる。

4.2.2.1　ソロパートにおける連鎖的な＜同意・共感＞

まず、女性同士の会話においても、ソロパートでは＜同意・共感＞が、聞き手によって単発的に用いられることが多い。（6）を見てみよう。

(6)会話FJ1【「ソロ・物語」JOF1：彼氏について】

01　JOF1:したら　なんか　あの　漫画コーナーがあって

02　JAF2:うん

03　JOF1:まあ　あだち充の漫画はええよ

04 →JAF2:うん　［まあ　それはいいよ］

05　JOF1:　　［ＸＸＸＸ］　　男の子っぽい［なと］思っ［て］見てたけど

06　JAF2:　　［うん］　［うん］

（6）はJOF1が彼氏について物語る場面である。ここで、JAF2の＜同意・共感＞の発話は、先行するJOF1の発話「あだち充の漫画はええよ」という評価の発話に対する＜同

意・共感＞を表す発話であることが分かる。このように、女性同士の会話のソロパートにおける＜同意・共感＞は、男性同士の会話と同様に聞き手によって単発的に用いられることが多い。しかし、女性同士の会話では、（7）のように聞き手が、話し手が話そうとする事柄を推測して、＜同意・共感＞を示す発話を連鎖している用例も観察される。

(7)会話FJ3【「ソロ・物語」 JDF5：就職について】

01　JDF5:なんか　その　結婚するか分からんけど
02　JGF6:うん　［てゆう］
03　JDF5:　　［てゆう］やつやね　やっぱり一回
04　JGF6:うん
05　JDF5: 離れた時に
06　JGF6:うん
07　JDF5:一般企業入っちゃうと
08 →JGF6:うん　そうやね　［分かるわ］
09　JDF5:　　［もう一回も］どんのが（0.2）やっかいやから＝
10 →JGF6:＝分かるわ
11　JDF5:めんしょ　ああ　教員免許で
12 →JGF6:いった方［がね］
13　JDF5:　　［いっ］たほうが
14 →JGF6:堅実よね
15　JDF5:すぐ戻れるからって
16　JGF6:うん
17　JDF5:それはずっとゆってるな　で　うちの母親が［もと］もと
18　JGF6:　　［うん］

（7）は、JDF5が、母親とどこに就職すればよいかと話したことについて物語っている部分である。ここで、聞き手の役割りを果たすJGF6の発話（08、10、12、14行）を見てみると、JGF6は2回のターンを取って「分かるわ」と発話を繰り返し、JDF5の発話内容に＜同意・共感＞していることを表現している。また、JGF6は、JDF5が話そうとする内容を推測し、JDF5の発話を完成させる［先取り］発話を用いて積極的に自らの意見が相手

の意見と同様であることを表示している（12、14行）。

このように、女性同士の会話のソロパートで＜同意・共感＞は、聞き手によって連鎖的に用いられている用例が多く観察されており、このような差が男性同士のソロパートに比べ、女性同士のソロパートで、＜同意・共感＞の発話の相対使用頻度が高い結果にもつながっていると言える。

4.2.2.2　デュオパートにおける＜同意・共感＞の積み重ね

表2から分かるように、＜同意・共感＞の相対使用頻度の差は、デュオパートで著しい。まず、女性同士の会話のデュオパートで＜同意・共感＞が用いられている用例を見てみよう。

(8)会話FJ1【「デュオ」ドラマについて】

01　JAF2:でも　二時間かかるやん
02 →JOF1: かかる@　あれ時間無駄やんな　あ［れ@@］
03 →JAF2:　［そ］そ
04 →JOF1:めっちゃ無駄になるもん　あ［れ］
05 →JAF2:　［そう］やねん
06 →JOF1:しかも　言う程さ　なんか(0.8)　意外な結末ってないよな
07 →JAF2:ないな　ま　でも　なんか　この女の人やろな:みたいな＝
08 →JOF1:　＝そそ　大体　なんか
09　こ　あやしい人いるよな
10 →JAF2:おるおる　一番近くにおる女の人とかな＝
11 →JOF1:　＝そそそそそそそそ　「あなただった
12　んですね　さつきさん」@@

（8）は、JAF2がドラマを録画して見ているが時間がかかるという「評価」の語りに続くデュオパートである。二人は、話題のドラマをみることは時間の無駄であり、意外な結末もないということについて話し合っている。二人は、2行目から5行目にかけて、時間が無駄であることを述べる発話と＜同意・共感＞の発話を積み重ねており、6行目から9行目では、意外な結末がないことについての＜同意・共感＞を示している。そして、10行目か

ら12行目で二人は犯人は近くにいる人であることについて＜同意・共感＞の発話を積み重ねている。このように、女性同士の会話では、二人の＜同意・共感＞の連続的な発話によって会話が進行する用例が多く観察される。このような＜同意・共感＞が連続的に用いられる用例は、（9）のように韓国の女性同士の会話でも多く見られる。

(9)会話FK1【「デュオ」旅行に持って行くものについて】

01　KAF1:어저께 그 가방때메 잠이 안 왔다고(昨日あの鞄のせいで眠れなかったよ)

02 →KBF2:나도 어제 가방 생각하다가 잠들었어(私も昨日鞄のこと考えながら眠った)

03 →KAF1:응 맞아 하다하다 잠들었어 나 순간

（うん　そう　考えながら眠った　私一瞬)

04 →KBF2:어 아 뭐 가져가 가져가서 옷은 뭐 입고 입을 게 없어@@ 하다 잠들었어

（うん　あ　何持って行く　持って行って服は　何着て着るものがない@@って考えながら眠った)

05 →KAF1:그니깐 모 입어야 될지도 모르겠어(そうだからね　何着ればいいか分からない)

（9）は、KAF1とKBF2が旅行に持って行く鞄と服がなくて悩んでいると話している場面である。KAF1の発話に対して、KBF2は「私も昨日鞄のこと考えながら眠った」と発話してKAF1に＜同意・共感＞していることを表現しており（02行）、その後、二人は同様な感情を持っていたことを連鎖して表している（03～05行）。（14）と（15）で分かるように、二人は、同様な意見や感情を持っていることを複数の発話を積み重ねて表している。このような行為は、相手と共通の意見や感情を持っていることを主張するPPSであると解釈できる。

以上のように、男性同士の会話のデュオパートに比べ、女性同士の会話のデュオパートで＜同意・共感＞が高い頻度で現れる要因は、女性同士の会話のデュオパートでは＜同意・共感＞の積み重ねが多く観察されるのに対し、男性同士の会話では観察されないことが一つの要因として挙げられる。また、男性同士の会話では、相手の評価的な発話に対して＜理解＞のみを表す場合も多く観察されるが、女性同士の会話では殆ど観察されないことがもう一つの要因として考えられる。このような結果から、女性同士の会話では、共通点を見つけ出し、その共通点を強調するというPPSを用いることで親密な人間関係を構築

していくが、男性同士の会話ではそうしたストラテジーの使用が多くないことが分かる。

4.3　＜同意・共感＞と発話様態

次に、＜同意・共感＞と発話様態の相関関係について述べる。以下の表3は、＜同意・共感＞を表現するために用いられた発話様態の使用数と割合を示したものである。

表3　＜同意・共感＞と発話様態

	あいづち	繰り返し	言い換え	先取り	実質発話	あいづち＋α	計
JF	144	92	5	10	23	71	**345**
	41.7%	26.7%	1.4%	2.9%	6.7%	20.6%	100%
KF	75	32	13	9	8	90	**227**
	33.0%	14.1%	5.7%	4.0%	3.5%	39.6%	100%
JM	56	34	1	−	10	23	**124**
	45.2%	27.4%	0.8%	−	8.1%	18.5%	100%
KM	28	10	3	−	7	13	**61**
	45.9%	16.4%	4.9%	−	11.5%	21.3%	100%

表3からは、次のようなことが確認できる。

(a)　女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では、［あいづち］の使用割合が若干高いのに対し、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、［あいづち＋α］の使用割合が高い。

(b)　女性同士の会話では＜同意・共感＞を表すために［先取り］の発話が用いられているが、男性同士の会話では観察されない。

発話様態の使用面から見られる差は、§4.2で述べた男性同士の会話と女性同士の会話に見られる＜同意・共感＞の相互行為の相違と関連して考えることができる。

まず、男性同士の会話で、＜同意・共感＞は単発的に使用されることが多く、＜同意・共感＞の受け手は、相手との共通基盤を確認した後、そのまま会話を展開させることが多い。つまり、＜同意・共感＞の発話は、共通基盤を持っていることを表す相手の反応として捉えられるため、発話様態の面からも比較的に短くて典型的な表現である［あいづち］を用いて相手との共通基盤を主張しつつ、相手の語りを促す傾向があると考えられる。

一方、女性同士の会話で、＜同意・共感＞は、聞き手によって連鎖的に用いられたり、二人の参加者が＜同意・共感＞の発話を積み重ねたりする相互行為が観察され、男性同士

の会話に比べ、女性同士の会話で＜同意・共感＞は積極的に表出される。このような特徴が発話様態の面にも表れ、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では［あいづち＋α］がより高い割合で用いられていると思われる。また、女性同士の会話では、（10）と（11）のように［先取り］が＜同意・共感＞を表す発話として用いられている用例が観察される。

(10)会話FJ2【JSF3:旅行先で買ってきたものについて話している】

01　JKF4:みんなが　ハンド　だいたいお土産ってハンドクリームやん　そんな　めっ

02　　ちゃいっぱい　なんかな　あんね

03　JSF3:＜@で　「何個あんねん」@＞

04　JKF4:そうそう　で　「何個あんねん」って　で　また　なんか　また買うやん@

05　JSF3:うん@

06　JKF4:どっか行ったら　なんか　値段的にも＝

07 →JSF3:　　＝買いやすい

（10）は、JSF3が旅行先で買ってきたものについて話している場面である。JSF3は、03行目で「で　何個あんねん」と JKF4の発話（めっちゃいっぱい）に共感していることを表現しており、07行目で「買いやすい」と「どこに行っても値段的にハンドクリームは買いやすい」というJKF4の発話を完成させる［先取り］発話を用いて積極的に＜同意・共感＞していることを表している。

(11)会話FK1【KBF2:旅行の日程について話している】

01　KBF2:그리고 정 뭐 버스 만약에 우리가 기차 놓쳐서 뭐 늦게 탔다 해서

（そして　まあ　バス　もし私達が汽車に遅れて　まあ　遅く乗ったとして）

02　KAF1:응（うん）

03　KBF2:늦게 도착했다 춘천이나 이런 데서 그럼 앞에 그[냥]

（遅くれて着いた　春川とか　こんな所で　だったら　前の　あ［の］）

04 →KAF1:　　[일] 정 잘라 먹어야지 뭐

（「日」程キャンセルするしかないね）

05　KBF2:어　어떻게（0.4）할 수 없지 그냥=（うん　どう（0.4）しようもない　まあ=）

06　KAF1:　　=그니까 어쩔 수 없지

（=そう　しょうがない）

（11）は、KAF1とKBF2が旅行の日程について話している場面である。KAF1の＜同意・共感＞を表す［先取り］発話は、03行目のKBF2の発話に重なって発話されており（04行）、KBF2の先行する発話「だったら　前の」という発話をKAF1が「日程をキャンセルするしかないね」と発話することで一つの文を完成させている。KAF1の［先取り］の発話の後の相互行為で、「前の日程をキャンセルする」という事柄に関して二人の参加者が「どうしようもない」「そう　しょうがない」と同様な意見を持っていることを表出していることからも分かるように KAF1の［先取り］発話は＜同意・共感＞を表す発話として解釈できる。このように、女性同士の会話における［先取り］の発話は、＜同意・共感＞を積極的に表す際に用いられる傾向がある。

一方、男性同士の会話で［先取り］は、（12）のように＜理解＞を表すために用いられている用例は観察されているものの、＜同意・共感＞を表すための使用は見られなかった。

(12)会話MJ2【JSM4:仕事の残業代について話している】

01　JSM4:あ　それはそうやろうね　(1.1)　うちら　そのタイムカードとかもないからさ

02　JTM3:あああああ

03　JSM4:だって仕事したい人は6時台から来て日付が変わるまで仕事してるみたいな

04　JTM3:あああ

05　JSM4:けど　一切　［残業代］は

06 →JTM3:　　［残業代］出ない

07　JSM4:出ないっていう

08　JTM3:あ　そうなんや

（12）は、JSM4が仕事の残業代について話している場面である。［先取り］の発話は、06行目で JTM3によって発話されるが、JTM3の先取り発話「残業代」は、JSM4の発話と

重なって発話され、［先取り］の発話に後行するJSM4の発話はJTM3の発話「出ない」を繰り返している（07行）。08行目の JTM3の「あ　そうなんや」という発話から、 JTM3の「残業代出ない」という発話は、単に＜理解＞を表す発話であることが分かる。このように、男性同士の会話で［先取り］は、＜同意・共感＞を表すためには使用されず、使用される場合には＜理解＞を表す際に用いられる傾向がある。

以上のように、女性同士の会話における積極的な＜同意・共感＞の表出や男性同士の会話における単発的な＜同意・共感＞の表出は、発話様態の使用傾向の面にも表れていると考えられる。

4.4　分析のまとめ

以上、共通基盤を主張するPPSに着目し、相手と共通する意見や感情を主張する＜同意・共感＞がそれぞれのパートでどのように用いられており、発話様態の使用割合の面で、男性同士の会話と女性同士の会話にどのような特徴が見られたのかについて述べた。本章の分析結果をまとめると以下のとおりである。

① ＜同意・共感＞の使用は、日韓のいずれのパートにおいても男性同士の会話に比べ、女性同士の会話でその相対使用頻度が高い。

② 女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で、＜同意・共感＞は単発的に使用されることが多く、＜同意・共感＞の受け手は、相手との共通基盤を確認した後、そのまま会話を展開させることが多い。

③ 女性同士の会話では、＜同意・共感＞が、聞き手によって連鎖的に用いられたり、二人の参加者によって＜同意・共感＞の発話が積み重ねられたりする相互行為が観察され、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で＜同意・共感＞は積極的に表出される。

④ 相互行為に見られる差は、発話様態の使用面にも表れ、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、相手の意見や感情が自らの意見や感情と同様であることをより積極的に表す［あいづち＋α］と［先取り］発話がより高い割合で用いられている。

以上のような傾向が見られることは、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話ではお互いの共通点を見つけ出し、共通の意見や感情を持っていることを強く主張するストラテジーが二人によって連続的に使用されていることが一つの要因として考えられる。また、男

性同士の会話では、話し手の評価的な発話に対して＜理解＞のみを表す用例も多く観察されるが、女性同士の会話では殆ど観察されず、話し手の発話に対して連続的に＜同意・共感＞を示している用例が多く観察されていることもその要因として考えられる。

以上の分析結果を踏まえ、次節では§2.2で挙げた研究目的ⅳ．＜同意・共感＞の発話による共通基盤主張ストラテジーの使用にジェンダーによる相違点が見られる理由は何かについて考察を行う。

5. 一致と関係構築

それでは、＜同意・共感＞の発話による共通基盤主張ストラテジーの使用にジェンダーによる相違点が見られる理由は何だろうか。＜同意・共感＞の発話は、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で高い頻度で用いられているが、女性同士の会話で＜同意・共感＞が多く用いられることは、Holmes（1995）やPilkington（1998）でも指摘されている。女性同士の会話で＜同意・共感＞の発話の頻度が高いのは、＜同意・共感＞の発話が二人の会話の参加者によってなんども積み重ねられていることが一つの要因として考えられる。日本語の初対面の会話を分析した三牧（2013）でも、相手の発話内容に対する共感を強調して示すことによるPPSは、女性同士の会話で顕著に見られると指摘されている。

以上のように、＜同意・共感＞の相対使用頻度が女性同士の会話で高い理由は、女性同士の会話では、会話の参加者が＜同意・共感＞を連続的に発話したり、互いに＜同意・共感＞を積み重ねたりするためであるが、このような女性同士の会話の特徴は、どのように理解できるのか。第7章で述べたように、Tannen（1990）によると、男性は情報や知識などが中心であるレポートトークをするが、女性は相手と親密な人間関係を求めるラポールトークをする。このような特徴は、男性同士の会話は情報のやり取りが目立つソロパートが中心となり、女性同士の会話は互いに話し合うデュオパートが中心になることと関連するが、デュオパートで用いられた＜同意・共感＞の相対使用頻度の大きな差からも同様なことが指摘できる。ソロパートが中心で新情報を伝えることに重点をおく男性同士の会話展開の仕方がデュオパートでも反映され、男性は、相手の＜同意・共感＞の発話を新情報として捉えているため、それを大げさに強調することはない。一方、デュオパートが中心で共通の知識や感情に重点をおく女性同士の会話展開の仕方はデュオパートで顕著に現れる。互いの共通性に重点をおいて会話を展開させる女性同士の会話において、相手の＜同意・共感＞の発話は、単なる新情報ではなく、互いの共通の意見や感情を強調できるポイントとして捉えられる。その結果、＜同意・共感＞の発話を互いに積み重ねて強調するこ

とにつながっていると考えられる。

相互行為の中で特定の発話をどのように捉え、その発話をどのように用いるかにジェンダー差が見られることは、Maltz & Borker（1982）でも指摘されている。Maltz & Borker（1982）によると、女性は、あいづちを「話を聞いているから、話を続けて」というシグナルとして用いるのに対し、男性は、「あなたの意見についていっている、あるいは、同意している」というシグナルとして用いているという。このように、特定の発話に対する捉え方の相違が、女性同士の会話と男性同士の会話で用いられるポライトネス装置に大きく関わっていると考えられる。

以上のように、男性同士の会話では、単なる新情報として捉えられている事柄が、女性同士の会話では、相手との共通性を主張できるポイントとして捉えられる傾向が強く、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、PPSの中でも共通基盤の主張が親密な関係の構築に最も重要な装置として用いられていると言えよう。

6. 本章のまとめ

本章では、相手に共通の意見や感情を主張する＜同意・共感＞がそれぞれのパートでどのように用いられており、発話様態の使用割合の面で、男性同士の会話と女性同士の会話にどのような特徴が見られたのかについて述べた。本章の分析結果と考察は次のようにまとめられる。

（A）ソロパートが中心で新情報を伝えることに重点をおく男性同士の会話では、相手の＜同意・共感＞の発話を新情報として捉えているため、それを大げさに強調することはない。そのため、＜同意・共感＞を表す発話は単発的に用いられることが多い。

（B）一方、共通性に重点をおいて会話を展開させる女性同士の会話において、相手の＜同意・共感＞の発話は、単なる新情報ではなく、互いの共通の意見や感情を強調できるポイントとして捉えられ、＜同意・共感＞の発話を互いに積み重ねて強調することで親密な関係を強めている。

（C）その結果、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で＜同意・共感＞の相対使用頻度が高い結果が得られていると考えられるが、このような結果は、女性同士の会話と男性同士の会話でどのような装置がポライトネス・ストラテジーとして使用されているかが異なっていることを意味する。

第Ⅳ部　日韓差・ジェンダー差の両者が認められるもの

第Ⅳ部では、日韓差とジェンダー差の両者が認められる直接話法の使用（第9章）と＜不同意＞、＜否定的評価＞の発話（第10章）を分析した結果について述べる。

第9章　直接話法による共有と協力

1. はじめに

人は人と相互行為を行い、互いの情報を知り合うことで人間関係を構築していく。第2章で述べたように、人間関係は不確実性が減少したところから生まれるが（西田 2004）、不確実性は、自分の情報を他者に与えることで減少する。日韓男女の友人同士の会話で自らの情報を与える行為は、自分の過去の経験談を語ることで行われることが多いが、自分の情報を与える行為を自己呈示（self-presentation）としたゴッフマン（1974）によると、我々は、様々な自己の側面の中でそれぞれの場にふさわしい印象を造り上げるために、意図的・非意図的に他者に与える自己のイメージを操作しており、行為者は、観客をその世界に引き込むために観客にとってリアルな演出をする必要があり、そのためには、何か劇的に表現することを行わなければならないという。

観客にとってリアルな演出は、出来事の中で発せられた発話を、あたかも今、ここで起こっているかのように発話することで実現できる。たとえば、話し手は、過去の出来事を物語る際、出来事の登場人物の声を再現したり、過去の自分の発話や出来事における自分の感情や思考をそのまま活き活きと発話したりしながら「物語」を展開させていくのである。このように、相互行為の中では、今、ここに過去の視点を取り入れ、過去の発話をそのまま活き活きさせる直接話法[20]が多く観察される。もし、コミュニケーションというのが情報伝達だけを目的とするのであれば、（1）の01と02行目の発話内容の繰り返しである04行目から10行目に見られる直接話法は必要ではないかもしれない。

(1)会話MJ4【風や人の出入りで、家の窓が音を出すことについて】

01　JYM8:たまに　@　たまに　こう（0.2）風で　こう（0.3）＞がたがた＜ってな

02　　った時も「あ　帰ってきた」ゆうて　出ていって　誰もおらん時　寂しいから@

03　JDM7:@@［@　　@　　@　　@　　@］

04　JYM8:　　［@@＜@「あれ　誰か帰ってきたんちゃうんか」つって@＞］

---

[20] 「話法」とは、「人（話し手自身をも含めて）の言葉や思考や情意の内容といったものを伝達する際の述べ方」である（北原他編1981:117)。

05　JDM7:いや　まあ　気持ちは［＜@分かる@＞@］
06　JYM8:　　［@　　@　　@］@@（0.3）ちょっと一人でこう
07　　やってぼ::っとしとってさ
08　JDM7:うん
09　JYM8:「がたがた　帰ってきた　今日さむない」　ゆうて　出ていって　「あれ
10　　誰もおらんし」と思って［@@@@@@］
11　JDM7:　　［@@@@@@］＜@ちょっと話かけるん@＞＝
12　JYM8:　　＝ちょっと寒い

しかし、聞き手であるJDM7の笑いや共感を表す発話（05行）から分かるように、直接話法による具体的な状況や心情の描写は、相手を笑わせたり共感を導いたりもする。B&L（1987）によると、過去から現在への時制が転換する迫真的現在時制（vivid present）は、描写される話の中に聞き手を引っ張り込むことができるPPSであり、話し手は、直接話法を用いて話の面白さを高めることで、その会話に貢献することに関心を持っているという熱意を強調することができる。

このように、話し手は、直接話法を用いることで話の面白さを高め、聞き手と自らの経験談を共有し合おうとしていることを強調することができるのである。相互行為を観察してみると（1）のように話し手が過去の発話を直接話法で用いる用例以外に、「物語」の内容を知るはずのない聞き手が、話し手の「物語」に登場する人物の声を直接話法で活き活きと再現している場合もある。また、日韓の友人同士の会話では（2）のように現実に起こっていない出来事の中での発話が、まさに今ここで発話されているかのように演技的に直接話法で表現されている用例も見られる。

(2)会話FJ2　【会話の内容が面白くないことについて】
01　JKF4：あ　じゃこっそり録っといて　今度しゃべった時
02　JSF3：これあかんかったら
03　JKF4：@@＜@採用されへん@＞
04 →JSF3：それの　それの不安でしょうがない　「これじゃちょっと」って
05 →JKF4：「これじゃちょっと何の役にも立たへんわ」＝
06　JSF3：　　＝ほんまや　昨日の取っとけばよかった

（2）で、二人は、会話の内容が面白くなくてデータとして筆者に採用されないことを

心配している場面であるが、04行目と05行目の発話は、会話の収録を依頼した筆者が言いそうな発話が二人によって直接話法で発話されているものであることが分かる。これらの発話は、二人が作り上げた仮想のフレームの中で成立する発話であるが、協力的に仮想フレームを構築することで同様な考えや感情を持っていることを確認し合うことができる。このように、直接話法は、参加者の間主観性[21]（intersubjectivity）の構築に寄与していると言える。

以上のように、日韓の親密な関係の友人同士の会話では、自らの経験談を語ることで自己呈示を行う際、過去の発話を述べるのに直接話法を用いたり、直接話法を使って仮想のフレームを作り上げたりする用例が観察される。本章では、今、ここでの発話や音ではないものを、活き活きと会話に取り入れる直接話法に注目し、これらの発話が日韓の友人同士の相互行為の中で具体的にどのようなストラテジーとして用いられており、日韓男女の会話にどのような類似点と相違点がみられるかを探ることを目的とする。

本章の構成は次のとおりである。まず、§2で直接話法に関する先行研究をまとめ、本稿の研究目的について述べる。§3では、分析対象について説明する。そして、§4では日韓男女の会話における直接話法の使用実態について述べ、§5では日韓差について、§6ではジェンダー差について分析した結果を述べる。§7では分析結果をまとめ、§8で考察を行う。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、§2.1で相互行為に見られる直接話法に関する研究について述べた後、§2.2で、本章の研究目的について述べる。

2.1 相互行為における直接話法

相互行為における直接話法は、その性格上、過去の出来事を語る際に多く観察されるため「物語」に関する研究で多く分析されている。まず、話し手が「物語」の登場人物のことばをどのように演じ分けてドラマ作りをしているかという観点から直接話法を分析した大津（2005）は、会話の参加者は韻律を操作することで「物語」の登場人物を演じ分けていることを明らかにしている。また、不思議な体験談を物語る際の話し手の直接話法[22]を

[21] 個人と個人の主観が向かい合って、共有化し共通理解を成立させること （フッサール 2012）。
あなたの意図がいま、ここにおいてあなたから私へと伝わるということ（鯨岡 2006:117）。

[22] Wooffitt（1992）は、active voicesという用語を用いている

分析したWooffitt（1992）によると、話し手は、その場にいた第三者の発話を直接話法で表現することで、その現象がその場にいた人にどのような反応を引き起こしたかを客観的な事実として描写することで、聞き手から怖いという反応を引き出すことができるという。「物語」における話し手の直接話法を分析したTannen（1989）は、直接話法は、聞き手の関心を引き、話し手と聞き手の感情的なかかわりを強化することを可能にすると述べており、Holt（1999）によると、話し手による直接話法は、特定の出来事に聞き手がアクセスすることを可能にするという。また、主に「I thought」という表現と共に用いられる心内の直接話法（reported thought）を分析したHaakana（2007）は、話し手は、心内の直接話法を評価装置（evaluation device）として用いていると指摘している。

次に、話し手が「物語」る際に、聞き手によっても直接話法が用いられていることも指摘されている。Tannen（1989）は、他人の語りに対して聞き手が対話を構築することがあると指摘し、これらの発話は、聞き手が話し手のパースペクティブを理解していることを示す機能を果たしていると述べている。また、山本（2013）は、「物語」の内容を知らないはずの受け手がセリフ発話[23]で相互行為に参加し、「物語」の構築に貢献していることを明らかにしている。セリフによる受け手の参加は、きわめて的確に語り手の「物語」を理解していることを示す方法になっており、セリフ発話は「物語」の構築が相互行為的に達成されていることを示す証拠となると述べている。

「物語」に限定せず、相互行為に見られる直接話法を分析した研究にはHolt（2007）とClift (2007) がある。まず、Holt（2007）は、引用マーカーが見られない実演発話（enactment[24]）を中心に、これらの発話によってどのようなことが行われているのかを記述している。Holt（2007）によると、実演発話は、仮説的なシナリオ（Hypothetical scenario）の文脈で多く用いられ、特に、冗談の文脈で多く発話される。また、これらの発話は、冗談の開始、冗談の理解、冗談の拡張のため会話の参加者によって協力的に用いられる。Clift（2007）は、相互行為の中で、「物語」が語られていない場合、直接話法がどのように用いられているかを分析している。Clift（2007）によると、直接話法は、先行する話題と関連しており、相手の評価的な発話に対する反応として用いられている。

以上のように、過去の出来事を語る「物語」における直接話法は、感情的なかかわりを強化したり、特定の出来事に聞き手がアクセスすることを可能にしたりする。また、聞

---

[23] 相互行為の中において、会話の参加者達が発話の声色の変化、身体的動作、発話の連鎖上の位置などによって、（今・ここでの自身の声としてではなく）「物語」中の声として聞かれることを示し、扱う発話（山本2013:140）。

[24] 「reported speech without an introductory clause（Holt 2007：51）」

き手による直接話法の使用は、話し手のパースペクティブを理解していることを示したり、「物語」の構築に貢献したりする。B&L（1987）は、直接話法が、話の中に聞き手を引っ張り込むことができるPPSであると述べているものの、実際の相互行為の中で直接話法がポライトネス・ストラテジーとしてもたらす効果については詳細に分析されていない。また、直接話法が、感情的なかかわりを強化したり、特定の出来事に聞き手がアクセスすることを可能にしたりする機能を果たしていることは指摘されているものの、このような機能が実際の相互行為の中で聞き手にどのような影響を与えているのかということはまだ明らかではない。

そこで、本章では、直接話法が具体的にいかなるストラテジーとして用いられ、またその使用にはどのような日韓差とジェンダー差が見られるのかを明らかにしたい。

2.2　研究目的

本章では、日韓の親密な間柄の女性同士と男性同士の会話で、話し手と聞き手がポライトネス・ストラテジーとしてどのように直接話法を用いており、直接話法による仮想フレーム構築には、どのような日韓差とジェンダー差が見られるのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の点について分析を行う。

ⅰ．日韓男女の会話における直接話法の相対使用頻度にはどのような類似点と相違点があるのか。

ⅱ．日韓男女の会話で、直接話法はどのような人物を目立たせるために用いられているのか。

ⅲ．日韓男女の会話で話し手の直接話法は、ポライトネス・ストラテジーとしてどのように用いられており、どのような類似点と相違点があるのか。

ⅳ．日韓男女の会話で聞き手の直接話法は、ポライトネス・ストラテジーとしてどのように用いられており、どのような類似点と相違点があるのか。

ⅴ．日韓男女の会話で直接話法による仮想フレーム構築に見られる類似点と相違点は何か

先に分析の結果を述べると、話し手の直接話法の使用頻度の面からは大きな差は見られないものの（ⅰ）、話し手がどのような事柄を目立たせ、いかなるストラテジーとして直接話法を用いているかという点には日韓差が観察される（ⅱとⅲ）。一方、聞き手の直接

話法の使用頻度（ｉ）と、直接話法による仮想フレーム構築にはジェンダー差があることがうかがえる（ⅳとｖ）という結果が得られた。

以下、§5では日韓差が顕著に見られた話し手が用いる直接話法に焦点を当て、ⅱとⅲを分析した結果について述べる。また、§6ではジェンダー差が窺える、聞き手が用いる直接話法と仮想フレーム構築を分析した結果について述べる。§7では分析結果をまとめ、§8では以下の2点について考察を行う。

Ⅰ．話し手の直接話法の使用傾向に日韓差が見られる理由は何か。

Ⅱ．聞き手の直接話法の使用と仮想フレーム構築にジェンダーによる相違点が見られる理由は何か。

3. 分析の対象

ここでは、本研究における直接話法の定義と分類基準について説明した後（§3.1）、直接話法の対象の分類基準について説明する（§3.2）。

3.1　直接話法の定義と分類基準

本章では、今、ここの発話や音ではない発話をあたかも今、ここでの発話や音であるかのように表現する発話を直接話法と定義し、分析を行うことにする。

今、ここでの自身の声ではない声を活き活きと会話に取り入れるために視点を操作した発話は「引用」の研究の中でも「直接引用」と呼ばれ、多く研究されている。「引用」に関する研究では、「引用」とは何かという本質的な問題を巡って議論が行われているが、「引用」の定義に関しては二つの考え方がある。

まず、「引用」というのは、元の発話の復元・再現であるという考え方と（砂川　1989、藤田　2000）、「引用」は話し手の創造であるという考え方がある（Tannen 1989、Wooffitt 1992、鎌田　2000）。前者の考え方に対して、Tannen（1989）は、元の発話を正確に再現するのは不可能であり、間接引用であれ、直接引用であれ、すべての引用発話は引用する者が構築するものであると述べ、物語における他人の心内発話や聞き手の活き活きした発話などを取り上げており、これらの発話は創作ダイアログ[25]（constructed dialogue）であると述べている。Wooffitt（1992）は、不思議な体験談を物語る際の話し手の直接話法を能

[25] 大津（2005）の訳

動発話（active voices）と呼び、実際にそのことばの通りに発せられた可能性が低く、場合によっては発せられていないこともあると述べている。鎌田（2000:18）も、直接引用といえども、元の発話・思考とは何らかの関係を保ちつつも、「再現」という域を越えた新たな場における新たな発話・思考を「表現」していると考えなければ説明のつかない言語事実があると指摘している。そして、日本語の引用表現は、元々のメッセージを新たな伝達の場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まると述べ、「引用句創造説」を提案している。

このような見方に対して、藤田（2000:121）は、「引用」を「再現」でないとしてしまうことで、引用表現の本質的なものを大きく見失ってしまうことになろうし、また、「引用」をただ「創造」だと言ったところで、つきつめれば、それは、実は極めてあたりまえのことを言っているに過ぎないことになってしまうだろうと思うと述べている。

確かに、言語を用いて発話する行為自体が「創造」あるいは「創作」であることには違いはない。しかし、元の発話の復元であれ、創造や創作であれ、相互行為において大事なのは、会話の参加者が、時空間や他者に視点を切換えてあたかもその場で発話されたことばであるかのように表現していることである。この観点から会話を見てみると、「物語」の内容を知るはずのない聞き手が登場人物の発話を活き活きと発話し、「物語」の構築に協力したり、（2）のように、元の発話があるはずのない架空の発話が、実際発話されたかのように発話されてたりする現象も見られるのである。これらの発話は、従来「引用」の研究で指摘されてきた引用マーカーを伴う場合が多い。

日本語の会話をデータとして分析を行った鎌田（2000）や加藤（2010）では、日本語の典型的な「引用」として「引用句/節＋引用動詞+述語」を分析対象としているが、非典型的なものとして「みたいな」「とか」などが観察されることが指摘されており、メイナード（2004）では、「みたいな」が引用マーカーとして機能していることが指摘されている。一方、韓国語の場合、이（1993）によると 「고（て）」 「이라고（といって）」「하고（して）」 「ゼロ形式」が引用マーカーであるが、韓国語の会話をデータとして用いた金（2013）によると、会話では、被引用部を前に置き、動詞 「그러다（そうする、そういう）」 や「이러다（こうする、こういう）」を後ろにおく場合が多く、이（1993）が指摘した引用マーカーがゼロ形式である場合は、「그러다」「이러다」の使用が多い。日本語の会話においても、引用マーカーが後続されない場合があることについては大津（2005）でも指摘されている。

相互行為の中で、直接話法で用いられる発話は、上述の研究で指摘された引用マーカーや引用動詞が見られる場合が多いが、引用マーカーが後続されない用例も多く観察される。

この場合、大津（2005）を参考に以下のような特徴を持つものを「直接話法」として分析対象とした。

・直示表現（人称、場所、時間）が調節されることなく発話される。

・スタイル切換えや感動詞が伴うことが多い。

・韻律的な調節を伴う場合が多い。

・日本語の場合、終助詞が伴うことが多い。

3.2　直接話法の対象

次に、日韓男女の会話における直接話法が、具体的にどのような人物の声を発話するために用いられているのかを分析するため、発話を次のように分類する。以下に、それぞれの定義と例を示す。

A.＜自己発話＞：今ここにおいてではない、自分の発話。

（3）JOF1:スカイプしてる時に　あ　「ローゼンメイデンまたアニメ化するらしいで」ってゆったら

B.＜自己心内＞：今ここにおいてではない、自分の心内発話。

（4）JOF1:「男の子っぽいな:」と思って見てたけど

C.＜第三者＞：今ここにおいてではない、第三者の発話。

（5）JBM2:＃＃さんが　＃＃さんに「スティールって何ですか」とか言われて

D.＜セリフ＞：アニメーションやドラマの発話などの発話。

（6）JOF1:だいたい放火や　その時は　なんか　船越英一郎が　びしっとね　「火元はお前だ」っていうねん

＜自己心内＞を分析の対象に含めるのは、過去の出来事の中で発せられた＜自己発話＞や＜第三者の発話＞と同様に、＜自己心内＞も過去の出来事の中で考えたことや感じたことを、あたかも今、ここで起こっているかのように表現されている点で、話の中に聞き手を引っ張り込むPPSとして捉えられるためである。

4. 日韓男女の会話における直接話法の使用実態

まず、日韓男女の会話で直接話法がどのくらいの頻度で用いられているかについて述べる。日韓男女の会話のソロパートにおける直接話法の発話数と総発話数に対する直接話法の相対使用頻度をまとめて示すと表1のようである。その際、話し手と聞き手どちらが直接話法を使用しているか、という点にも注目する。

表1　直接話法の発話数と相対使用頻度

		ソロ				ソロ		日本合計
		話し手	聞き手			話し手	聞き手	
JF	発話数	171	22	JM	発話数	194	6	393
		193				200		
	頻度	11.36			頻度	9.68		**10.44**
	総発話数	1699			総発話数	2066		3765
		ソロ				ソロ		**韓国合計**
		話し手	聞き手			話し手	聞き手	
KF	発話数	101	20	KM	発話数	144	1	266
		121				145		
	頻度	10.41			頻度	8.41		**9.21**
	総発話数	1162			総発話数	1725		2887

表1からは、次のような傾向性があることが確認できる。

(a)　韓国語の会話に比べ、日本語の会話の方が話し手・聞き手共に直接話法の使用頻度が高い傾向があるものの、その差は大きくない。

(b)　聞き手による直接話法の使用については、日韓共に男性同士の会話に比べ女性同士の会話で多く観察される傾向がある。

以上のような使用傾向が見られるが、話し手が用いる直接話法の使用傾向は「物語」の内容と大きく関連している。日韓差は、「物語」の登場人物の中でどのような人物を目立たせ、どのようなストラテジーとして直接話法を用いているかという質的な面に表れると考えられる。

以下、§5では、日韓の会話で話し手がどのような人物の声を活き活きさせるために直接話法を用いているか、という観点から使用実態を見る。§6では、ジェンダー差の観点から、聞き手が用いる直接話法と仮想フレームを分析した結果について述べる。

5. 日韓差：話し手の直接話法とポライトネス

本節では、日韓差が顕著である話し手の直接話法を分析した結果について述べる。具体的には、§5.1で、日韓の会話で直接話法がどのような人物の声を活き活きさせるために

発話されているかについて述べ、§5.2では、日韓の友人同士の会話で直接話法がいかなるストラテジーとして用いられているかについて述べる。

5.1　直接話法の対象と割合

まず、日韓の友人同士の会話で、直接話法が「物語」の中でどのような人物の声を活き活きさせるために発話されているかという観点から整理すると次の表2のようである。

表2 直接話法の対象

	自己発話	自己心内	第三者	セリフ	計
JF	47	51	91	4	193
	24%	26%	47%	2%	100%
JM	36	67	82	15	200
	18%	34%	41%	8%	100%
日	83	118	173	19	393
	21.1%	**30.0%**	**44.0%**	**4.8%**	**100%**
KF	43	57	20	1	121
	36%	47%	17%	1%	100%
KM	69	15	61	0	145
	48%	10%	42%	0%	100%
韓	112	72	81	1	266
	42.1%	**27.1%**	**30.5%**	**0.4%**	**100%**

表2からは、以下のような日韓差があることが確認できる。

(c)　日本語の会話では、＜第三者＞の発話が直接話法で用いられる割合が最も高い。

(d)　韓国語の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられる割合が最も高い。

以上のように、「物語」の中でどのような人物の声を目立たせるために直接話法が用いられているかという点には日韓差が見られる。

§5.2では、直接話法が、実際の相互行為の中でPPSとしてどのような働きをしているかについて述べ、日韓の友人同士の会話で、（c）と（d）のような差が見られる要因について述べる。

5.2　直接話法とストラテジー

ここでは、日韓の相互行為の中で話し手が直接話法をPPSとしてどのように用いているかについて述べるが、まず、直接話法がPPSとしてどのような働きをするのかについて述べる。表1から分かるように日韓男女に関わらず、直接話法はソロパートで話し手によっ

て発話されることが多い。つまり、話し手は「物語」を展開させる際、今、ここではない発話や様態を活き活きさせることが多いということである。ゴッフマン（1974）によると、ストーリーを語る時には何か劇的に表現することを行わなければならない可能性があり、とすれば、話し手の「物語」は単なる報告ではなく、聞き手を楽しませる劇的な要素を備えたものであると言える。上述したようにB&L（1987）では、活き活きさせた直接話法は話の中に聞き手を引っ張り込むことができるPPSに相当すると述べられている。すなわち、話し手の直接話法は聞き手に対する配慮を表す装置として捉えられる。それでは、実際、相互行為の中で直接話法がPPSとして聞き手にどのような働きをしているのだろうか。まず、（7）を見てみよう。

(7)会話MJ4【公園で花火をした時、警官に怒られたことについて】

01　JYM8:で　また別のクラブで

02　JDM7:うん

03　JYM8:花火やった時に　あの::　布施

04　JDM7:お［お］

05　JYM8:　［分］かる？ 布施で（0.2）近くで　公園やっと　公園でやっとってんやん

06 →　ほな　また警官来て「おまえら」［ゆうて　めちゃくちゃ怒鳴られた ＠＠［＜＠

07 →　「えええ::と」＠＞＠＠］

08　JDM7:［＠＠＠＠＠＠＠＠］＜＠全然違う＠＞＠

09　JYM8:＠＠みんな逃げたもん　ぶ::あ::［ゆうて＠＠］

10　JDM7:　［＠＠＠＠］

11 →JYM8:で　一人捕まって　「おい　おまえら集まれ　聞いてるやろう」［みたいな］

12　JDM7:　［＠＠＠］

＠＠＜＠こわ::＠＞＠

13 →JYM8:「今度やったら　おまえしょっぴくからな　覚えとけよ　おまえ　おまえだ

14 →　け名前聞いといたるわ」［みたいな］

15　JDM7:　［＠＠＠］　＜＠こわ:＠＞

16 →JYM8:「名前と電話番号ゆえ」みたいな

［…］

17　JYM8:で　みんなおのおのの所から出てくんねやん　［這って］

18　JDM7:　［うん］

19 →JYM8:「不運やったな」ゆうて　「いや　おま＜＠えら＠＞　＠いや　おまえら裏

20 →　切り［すぎやろう」ゆうて］

21　JDM7:［@　@　@　@　@　@］@@

（7）は、JYM8が花火をして警官に怒られた経験談を物語っている場面の一部である。話し手であるJYM8は、かなり長いターンを維持しながら自らの経験談を詳細に語っているが、ここで、JYM8の発話に注目してみると、JYM8は「物語」の登場人物である警官の発話（06、11、14，15、17行）や過去の自己発話や友達の発話（07、20、21行）を直接話法で用いていることが確認できる。

（7）に見られるように、JYM8は「物語」に登場するすべての人物の発話を直接話法で発話している。（7）の経験談は、「布施の公園で花火をした時、友人の一人が捕まって怒られた」と発話しても「物語」の内容は十分伝わる。しかし、JYM8は、「物語」に登場するすべての人物の発話を直接話法で発話することで、警官がどのように怒ったか、自分はどのような感情を持っていたか、捕まった友人はどのように反応したかを聞き手であるJDM7に知らせるために活き活きと「物語」とを展開させている。

日韓男女に関わらず、直接話法の最も基本的な機能は、相手が経験していないことを詳細に提示することで相手の想像力を刺激することであると考えられるが、これは、聞き手であるJDM7の笑い（10、12、16、22行）や話し手の直接話法に対する「こわ」という評価的な発話（13、16行）が場面の具体的な想像なしでは発話できないものであることからもよく分かる。つまり、JDM7はJYM8の直接話法による発話を聞いて、「物語」の場面や登場人物を具体的に想像しながら話を聞いているということである。相手のことを理解したり、相手に共感したりする行為は、想像なしでは不可能なことである。B&L（1987）がいう聞き手を引っ張り込むことができるストラテジー、Tannen（1989）がいう聞き手との感情的なかかわりの強化、Holt（1999）がいう特定の出来事に聞き手がアクセスすることを可能にするというのは、直接話法が相手の想像力を刺激する機能を果たしているためであると考えられる。その面で、話し手の直接話法は、参加者の間主観性の構築に大きく寄与する装置であると言える。

このように、日韓男女に関わらず、話し手は自分の経験を聞き手と円滑に共有し合おうとするストラテジーとして直接話法を用いていると言える。しかし、§5.1で述べたように、どのような人物の発話を活き活きさせているかについては日韓差が見られ、このような差は日韓の友人同士の会話で、何が語られているのかという「物語」を語る意図と内容が大きく関わっていると考えられる。以下では、日韓の相互行為の中で直接話法が具体的にいかなるストラテジーとして用いられており、「物語」の登場人物の中で目立たせる人

物に日韓差が観察される要因は何かについて述べる。

5.2.1　日韓差（1）：＜第三者＞を目立たせた笑い合い

§5.1 で述べたように、＜第三者＞の発話を直接話法で用いる割合は、日本語の会話で高い割合を占めているが、日本の友人同士の会話を観察してみると、＜第三者＞の発話が直接話法で用いられ、聞き手の笑いを生み出している用例が多く見られる。まず、日本の男性同士の会話の用例を見てみよう。

(8)会話MJ2【人の骨の数に個人差があることについて】

01　JSM4:なんか（0.4）骨の話したとき［とかもさ］
02　JTM3:　　［うんうん］
03　JSM4:別の子が（0.2）「人間の体の骨って何個あんの」みたいな
04　JTM3:うん
05　JSM4:で　大体（0.4）「まあ　100 個::ぐらいなんかな」ってゆう話してて
06　JTM3:うん
07　JSM4:で（0.5）その質問を
08　JTM3:［うん］
09　JSM4:　［別］の（0.3）子の親に
10　JTM3:うん
11　JSM4:回答を求めるという
12　JTM3:@@@@
13 →JSM4:じゃ「割と個人差があるよ」みたいな回答が返ってきて
14　JTM3:@［@@］
15　JSM4:　［＜@「らしいよ」@＞］みたいな　@［@@@@］ °っていう°
16　JTM3:　　［@@@@］　　@@＜@個
17　　人差があるよって@＞@@
18　JSM4:うん　らしいよ::
19　JTM3:へえ:::

（8）は、小学校の先生であるJSM4が生徒の質問に答えるため、医者の保護者に質問して、その回答を学生に教えてあげたことについて物語っている場面の一部である。（8）に見られるように、JSM4は、「物語」に登場する生徒の発話（03行）、自分の発話（05、

15行）、保護者の発話（13行）を直接話法で用いながら「物語」を展開させている。「物語」の終了後のデュオパートで、JSM4が骨の数に個人差があるという回答に関して「不思議やなと思って」と発話していることから、医者の保護者に不思議な回答をもらったことがこの「物語」のクライマックスであることが分かる。つまり、13行目の「割と個人差があるよ」という医者の発話がこの「物語」の落ちであるが、ここで、聞き手である JTM3の反応に注目してみると、16行目で聞き手であるJTM3は、笑いながら 「個人差があるよって」と直接話法の発話をそのまま繰り返して話し手の「語り」の登場人物である＜第三者＞の発話が面白いことを積極的に表している。＜第三者＞の発話が笑いを生み出す用例は、（9）のように、日本の女性同士の会話でも観察される。

(9)会話FJ3【大学院に進学することについて】

01　JGF6:なんその：（0.4）「教頭とか校長とかになりたくなるかもしれん」みたいな
02　　［ゆう］
03　JDF5:［うん］
04 →JGF6:たら　あの　「ぜひなれや」って言われて@［@@］
05　JDF5:　　［@@］@＜@うん@＞
06 →JGF6:＜@「いってもいいよ」みたいな言われてんけど@＞
07　JDF5:@@＜@あ　そうなん@＞
08　JGF6:「まじか」みたいな
09　JDF5:うん
10 →JGF6:「出世はしてほしい」みたいな
11　JDF5:あ　なるほどね
12　JGF6:＜@そう@＞@
13　JDF5:うん＜@うん@＞@@めっちゃ＜@おもろいやん@＞　なんかな　　親御さん
14　　めっちゃ@
15　JGF6:＜@うん@＞@
16　JDF5:@一瞬で　手のひら　［ひっくり返したな］
17　JGF6:　　［一瞬で手のひら］そうそう

（9）の前の文脈で、JGF6は両親が大学院の進学に反対していると話しており、（9）は、JGF6が「教頭とか校長とかになりたくなるかもしれん」と両親に話したら（01行）、両親が進学しても良いと話した（04、06，10行）と物語っている部分である。この「物語」

で＜第三者＞である母親の「進学しても良い」という内容の発話は、3回繰り返されている（04、06，10行）。その発話に対する JDF5の反応を見てみるとあいづちとともに笑いが生じていることが分かる（05、07行）。また、JDF5は、13、14、16行目で聞き手は「めっちゃおもろいやん　親御さん　めっちゃ　一瞬で手のひらひっくり返したな」とJGF6の両親が面白いことを表現しており、話し手である JGF6は、JDF5の発話の一部を繰り返して共感を示している（17行）。二人の参加者の相互行為から、参加者は＜第三者＞である母親の面白い言動に注目していることが分かる。

（8）と（9）のように、日本語の会話では、「物語」の登場人物の中で＜第三者＞を主人公として取り上げ、＜第三者＞の声を活き活きと直接話法で表現することで聞き手を楽しませ、笑いを生み出している用例が多く観察されている。

一方、韓国語の会話では、「物語」の中で＜第三者＞を主人公として取り上げ、面白さを伝えている用例は殆ど見られないが、韓国の男性同士の会話で（10）のように＜第三者＞から聞いた面白い話を聞き手に伝えようとする用例が観察されている。

(10)会話MK1【高校の時、先生に聞いた面白い話について】

01　KGM1:선생님이 하는 말이 첼로가방 들고 온 애 아 첼로나 비올라가 좋데 최대한
02　　비올라(先生が話したのが、チェロのかばんを持ってきた子　あ　チェロか　ビオラがいいって　できるだけ　ビオラ)
03　KAM2:하여튼 큰거 큰거(とりあえず　大きいもの　大きいもの)
04　KGM1:큰거 갖고 온 애가 있데 그러면은
　　（大きいもの持ってきた子がいるって　そうだったら）
05　KAM2:응응(うんうん)
06　KGM1:가서 막 걔가 막 힘들어하면서 내려올꺼래 계단을 그러면은 니가 가서 무
07　　심한듯이 들어주래 그러면［은］（行って　あの子が大変そうに降りてくるって階段を　だったら　あなたが行って何の興味もないふりして持ってあげてってそうした［ら］）
08　KAM2:　　［어］무심한듯이(［うん］　何の興味もないふりして)
09　KGM1:근데 거기서 포인트가 있대(で　そこにポイントがあるって)
10　KAM2:응(うん)
11 →KGM1:선생님이 근까 하는 말이 「왜 플룻도 아니고 바이올린도 아니고 비올란줄
12 →　아니?」이러는거야(先生が　だから　話したのが「何でフルートでもなくバイオリンでもなくてビオラか分かる？」って)

13　KAM2:응「うん」

14 →KGM1:「선생님 모르겠어여」 이러니까 하는 말이 「잘 들어봐　##아 여자애가

15　쪼끄만 여자애가 비올라든지 첼로 가방을 들고 과 건물에 나왔다는 의미는 본인

16　차가 있는 거야@@」(「先生　分かりません」って言ったら（（先生が））話したのが「よく　聞いて　＃＃（（KGM1の名前（呼びかけ））女の子が小さい女の子がビオラか　チェロかばんを持って、専攻の建物（（大学の））から出たっていうのは自分の車があるっていうことだよ」@@)

17　KAM2:아:::아::아:(あ:::あ::あ:)

[…]

18　KGM1:그러면은 「이제 자연스럽게 니가 말 [을 <@걸래] @>@] (で　「こう自然にあなたが声を<@かけて」って@>)

19　KAM2:　[야 근게 그거] ([おい　でも　あれ])

20　KGM1:나 그거 듣고 진짜 깜짝 놀랬 [어 진짜]

（私この話聞いて本当にびっくりした　本当)

21　KAM2:　[근데 현실] 이 시궁창인게 그러면 저새끼 도

22　둑이야 이렇지 않나? (でも　現実がくそなのが　そうすると　あいつ　泥棒だって言うじゃない？)

23　KGM1:아 도와주는 척 하래 그냥(あ　手伝うふりしろって)

24　KAM2:어: 도와주는 척(う:ん　手伝うふり)

25　KGM1:근데 그거를 일반 남자 선생님이 말한 게 아니라 진짜 이쁜 여자 선생님이 하니까 너무 웃긴거야(でも　それを一般の男性の先生が話したのではなくて、本当にきれいな女性の先生がしたからすごく面白いんだよ)

26　KAM2:고등학교때 진짜 이쁜 선생님 있었는데(高校の時本当に綺麗な先生いたけど)

（10）は、 KGM1が高校の時、女性の先生に聞いた面白い話（大学でお金持ちの女子学生をどのように誘うか）を語っている場面であるが、クライマックスは、11行目から16行目に見られる話し手の＜第三者＞の発話である。これは、16行目の発話で初めて話し手の笑いが観察されていることと、25行目で話し手が「それを一般の男性の先生が話したのではなくて、本当にきれいな女性の先生がしたからすごく面白いんだよ」と語った意図を明確に示していることからも分かる。25行目の発話は、聞き手がクライマックスの部分で内容を理解していることのみを示していたり（17行目）、21行目では、KGM1が女性の先生から聞いた話は、現実では不可能ではないかと疑問を表したりしているため、25行目で

話し手は語る意図を明確に発話していると考えられる。

（10）のように、韓国の友人同士の会話でも＜第三者＞の声を目立たせることで面白さを伝えようとする用例が観察されているが、韓国語の会話では、＜第三者＞を主人公として取り上げ、面白い「物語」を語る用例は少なく、むしろ、（11）のように、聞き手の笑いは、話し手が＜自己発話＞を直接話法（05行）で表現した後に見られることが多い（07行）。

(11)会話MK1【「同性愛者に告白されたことについて】

01　KGM1:그러고 있는데 내가 이제 친구한테 물어봤지 걔 어떤애냐 그러니까 「헤이
02　　쉬스 게이」이러는［거야 그래가지고 내가］(そうしていたけど　私が　こう友達に聞いてみた　あの子　どういう子なのって　だったら「ヘイ　シェズ　ゲイ」［って　それで　私が］)
03　KAM2:　　［쉬스 게이 레］즈가 아니고 게이야?
　　(［シェズ　ゲイ　レ］ズではなくて　ゲイなの？)
04　KGM1:남자도 게이고 여자도 게이라 그러고 그냥 다 통일해 그러는데 깜짝 놀래
05 →　가지고 게이냐고 알아보니까 게이래 걔가 깜짝 놀래가지고 「하:: 씨 왓 퍽」
06　　이러면서(男性もゲイで女性もゲイって言って全部ひっくるめてそういうけど びっくりしてゲイなのって　調べてみたら　ゲイだって　あの人が　びっくりして「はあ::　くそ　ワッザファック（（英語の俗語:なんじゃこれ））」って)
07 →KAM2:왓 더 퍽@@(ワッザファック@@)
08　KGM1:「쏘리」로 갔는데(「ソーリ―」（（ごめん））って言ったけど)
09　KAM2:응(うん)
10　KGM1:그 담에 한 두달있다가 걔가 이성친구가 남자친구가 생긴 걸 알고 있었어 근데 걔가 또 여자였었어(その後　二カ月ぐらい立ってから　あの子が異性の友達が　彼氏（恋愛相手）ができたって　でも　あの子がまた女だった)

（11）は、KGM1がアメリカに留学した時、女性の両性愛者に告白された出来事について物語っている部分である。07行目で、聞き手は、話し手の英語の俗語を繰り返して笑うことで話し手の直接話法を面白く捉えていることを示していることが分かる。このように、韓国の友人同士の会話では、＜自己発話＞が聞き手を笑わせる傾向があるが、これは「物語」の主人公として＜自己＞を取り上げていることが要因として考えられる。つまり、話し手は、「両性愛者に告白された自分」に焦点を当て「物語」を展開させているため、聞

き手は話し手の感情に注目することが多いという結果に繋がっていると考えることができる。

一方、日本の友人同士の会話の「物語」の中で＜自己発話＞が多く観察される場合も＜第三者＞が主人公となり、聞き手の面白いという反応を引き起こしている用例が見られる。（12）を見てみよう。

(12)会話FJ4【下がり目の外国の株や米ドルを買わせる銀行マンについて】

01　JTF8:で　なんか　「米ドルも買［え］って］

02　JMF7:　　［うん］

03　JTF8:言われたけど

04　JMF7:うん

05 →JTF8:「お父さん　今米ドルあかんってゆうから＜@やめとき@＞」

06　JMF7:うんうん［うん］

07 →JTF8:［＜@［「ま］た下がるねで::」て　ほんで　ガンって下がってんやんか@＞

08　JMF7:そりゃ民主党の時代に買っときゃ［まあまあ＜@良かった@＞］

09　JTF8:　　［そうそう　××］

10　JMF7:＜@かもしれんけど@＞

11　JTF8:民主党よりも前の［自民党の時］に

12　JMF7:　　［@あ：:］

13　JTF8: なんか　買おうとしてたから＝

14　JMF7:　　＝はいはいはいはい

15　JTF8:なんかね　90何年とか80何年とか 確かに ちょっと その時から下がり気味か

16　　［なって］

17　JMF7:［あ:::］

18 →JTF8:ゆうところではあったんやけど　＜@「やめとき」て［ゆって］@＞@

19　JMF7:［＜@あ::@＞］　買い時ではない@@@

20 →JTF8:うん　「違うと思う」てゆうて　もう「素人目に見ても違うと思いますよ:」っ

21　　てゆって@@@

22　JMF7:え::::　そんな銀行マンもいるん［や］

23　JTF8:　　［そう］そう　ばかやで　＜@ほんまに@＞@

24　JMF7:絶対営業業績悪いよな

25　JTF8:＜@そう@＞　アウットやろう　お前＜@みたいな@＞

26　JMF7:へえ::::@［@］

27　JTF8:　　［@］@ほんなんあったわ

28　JMF7:面白い

（12）は、JTF8が、父に下がり目の外国の株や米ドルを買わせる銀行マンについて物語っている場面である。話し手は、出来事時の＜自己発話＞を活き活きと表現している（05、07、17、19行）。話し手の＜自己発話＞に対する聞き手の反応を見てみると、「そりゃ民主党の時代に買っときゃまあまあ＜@良かったかもしれんけど（08、10行）」、「＜@あ::@＞買い時ではない@@@（19行）」、「え::::　そんな銀行マンもいるんや（22行）」と＜第三者＞の言動に対する評価の発話を用いていることが分かる。また、22行目から28行目の二人の相互行為を見てみると、話し手と聞き手は銀行マンの実力のなさを面白く捉えていることが分かる。

以上のように、日本の友人同士の会話では＜自己発話＞を目立たせた場合も「物語」は＜第三者＞に焦点が当てられ、聞き手に面白さを伝えるために語られる傾向がある。特に、話し手は＜第三者＞を「物語」の主人公として取り上げ、聞き手を楽しませ、笑いを生み出すストラテジーとして直接話法を用いる傾向が強く、参加者は互いに笑い合える面白い経験談を共有し合うことで親密な関係を構築する傾向があると考えられる。このような傾向は、第6章で述べたように、韓国の友人同士の会話に比べ、日本の友人同士の会話で＜感情・感想＞の発話がより頻繁に用いられていることとも関連する。

5.2.2　日韓差（2）：＜自己発話＞を目立たせた情緒的共感

次に、＜自己発話＞を目立たせる場合を詳しく見てみよう。§5.1と§4.2.1で述べたように、韓国語の会話では＜自己発話＞が直接話法で用いられる割合が最も高く、韓国の友人同士の会話では、＜第三者＞を主人公として取り上げ、面白さを伝える「物語」はほとんど観察されず、＜自己発話＞を目立たせ、自分と他人との人間関係を語り、聞き手の共感を導いている用例が多く観察される。韓国の女性同士の会話の用例を見てみよう。

(13)会話FK3【前の彼氏との関係について 】

01　KKF6:한 시간 반 동안 앉아서 이러고 있었다니깐(一時間半座ってこうしていた)

02　KYF5:아무말도 안 하고?(何もしゃべらないで？)

03 →KKF6:한 이십 마디는 했겠지 「어 저거 봐」 또 「우와 저거봐」 이런거 근데 난 ×××지(少しは話したと思う 「え あれ見て」また「うわ あれ見て」みたいな でも 私は×××)

04　KYF5:힘들었겠다(大変だったよね)

（13）は、 KKF6が前の彼氏とカフェに行ったことについて話している場面である。KKF6は、前の彼氏とは会話ができず、大変であると話しており、03行目で前の彼氏といる時、自らの発話を直接話法で発話している。KKF6が直接話法で用いた＜自己発話＞「えあれ見て」と「うわ あれ見て」という発話は、前の彼氏とどのような関係であったかを抽象的に伝えつつ、KKF6が会話を展開させるために話題を取り上げていたことを表していると思われるが、これは、KYF5の「大変だったよね」という共感を示す反応からも分かる。このように、韓国語の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられ、聞き手は話し手の感情や考えに理解を示したり、同調したりする相互行為が多く観察されている。

また、面白さを伝えるために＜自己発話＞と＜第三者＞の発話が連鎖的に直接話法で用いられている日本語の会話の用例 （8）と（9）とは対照的に、韓国語の会話では聞き手の共感を導いている用例が観察されている。この場合も、（14）のように人間関係に関する内容が語られる傾向がある。

(14)会話MK3【過去の好きな人との出来事について】

01　KCM6:내가 말했잖아 한 명 마음에 드는 애 있었다고 (0.3)

02　（私が話したでしょう 一人気に入った子いたと（0.3））

03　[…]

04　그때 이제 퇴근하고 6월 1일에 학교로 넘어 갔어 그 담에 이제 애들 보고

05 →「술 한 잔 하자」 이렇게만 얘기 해 놨어 생일인거 안 말 하고 「그냥 소소하게

06 → 술이나 한 잔 먹고 싶어서」 그랬더니 (0.3) ##이 （（KCM6이 좋아하는 이

07 → 성））가 (0.4) 존나 막 「컨디션 안 좋다 피곤하다」 이러길래 「°아:: 알았

08 → 다° ＞내일 보자＜ 내일 피씨방이나 가던가 하자」 이러고 갔어 [근데]

（その時 もうバイト終わって6月1日に学校に行った その後 こう 友達に「お酒飲みに行こう」って話しておいた（（KCM6の））誕生日なのは言わずに「軽く一

杯したくて」って言ったら（0.3）＃＃（（KCM6が好きな異性））が（0.4）すごくなんか「体調が悪い　疲れた」っていうから「ºあ::　分かったº　＞明日会おう＜　明日PCルームでも行こう」って言って行った　［でも］）

09　KBM5:［응］불쌍한 새끼(［うん］かわいそうなやつ)

10　KCM6:작년에 존나 좋아하다가 얘는 감당 안되겠다 싶어서 내가 포기했어

（去年すごく好きだったけど　この子は手に負えないと思って私があきらめた）

（14）は、KCM6が、片思いをしていた女性との出来事について物語っている場面である。（14）で、話し手は＜自己発話＞（05、06、07、08行）と＜第三者＞（07行）のやりとりを連鎖的に直接話法で表現することで、「物語」の展開させている。直接話法で表現されているやりとりの内容は、KCM6の誘いと＜第三者＞の断りであるが、聞き手の反応は、07行目で話し手が「あ　分かった　明日会おう　明日PCルームでも行こう」と＜自己発話＞を直接話法で表現した後に見られる。話し手の「物語」を黙って聞いていた KBM5が、「かわいそうなやつ」と話し手に対して同情を表現していることから分かるように、韓国語の会話では、＜自己発話＞を目立たせることで、「物語」の主人公として自分を取り上げる傾向があり、直接話法は、話し手がその出来事をどのように捉えているのかという態度を示す装置として用いられる。

このように、日本の友人同士の会話に比べ、韓国の友人同士の会話では、物語る際、＜第三者＞の発話は背景になる傾向が強く、話し手が主人公になって自分と相手との人間関係を語ることで、聞き手と情緒的に共通基盤を形成する「物語」が語られる用例が多く観察される。一方、韓国の友人同士の会話に比べ、日本の友人同士の会話では、＜自己発話＞を目立たせ、他人との人間関係を物語っている用例はあまり観察されず、§5.2.1で述べたように面白いことを伝える「物語」の方が多く見られる。他人との人間関係を物語っている場合も、日本の女性同士の会話では、＜第三者＞の発話を直接話法で用いたり（15）、＜自己発話＞を用いたりし（16）、面白さを伝え、聞き手の笑いを生み出しながら物語っている用例が多く観察される。

(15)会話FJ1【彼氏について】

01　JAF2:なんか　こうゆうふいんき（（雰囲気））のが好きやから「今日の服良いね」

02　　みたいな

03　JOF1:へえ::［:］

04 →JAF2:　　［「も］うちょっと短いの履いて」と

05　JOF1:@［@］

06　JAF2:　［@］@　ゆってくるで　普通に

07　JOF1:＝へえ::＜@もっと短いの履いて@＞

08　JAF2:＞そうそうそう＜（JOF1:@@）（2.0）［もう］

09　JOF1:　　［×××］

10 →JAF2:「ちょっと短いの履くか」

11　JOF1:うん

12 →JAF2:「制服着てきて」＜@やから@＞@

13　JOF1:え::::@［@@］

14　JAF2:　　［@@］

15　JOF1:＜@制服@＞

16　JAF2:制服やで　制服か

17　JOF1:うん

（15）は、JAF2が自分の服装に関して意見を話してくる彼氏について物語っている場面であるが、話し手は、04、10、12行目で＜第三者＞の発話を直接話法で表現しており、聞き手は、笑いながらJAF2の彼氏の発話を面白く受け取っていることを示している（05、13、15行）。また、＜自己発話＞を目立たせている場合も、二人の参加者は笑い合っている用例が観察される。（16）を見てみよう。

(16)会話JF3【最近あまり写真を撮らなくなったことについて】

01　JGF6:いや　でも　なんか　あんまり　写真も

02　JDF5:うん

03　JGF6:１回２回の時は一所懸命撮りよってんけど

04　JDF5:うん

05　JGF6:なんか　最近（0.3）カメラほこりかぶってるよね［@@］

06　JDF5:　　［@@］

07　JGF6:最近 もういいかなってなってるよね

08　JDF5:あ　なるほど

09　JGF6:もう　でも ＃＃さんとかめっちゃ　なんかゆってくる人ゆってくるんやんか

10　JDF5:「写真どうなん」みたいな［感じで］

11　JGF6:　　［そうそう］そう　なんか　「あれはどういう意図で

12 →　撮ったの」みたいな「あ　なんか　まあ　きれいかなおもて」＜@みたいな@＞
13　JDF5:@@＜@「特に意味は［ないけどね」やな］@＞
14　JGF6:　　＜@［そう　「特に意味はない］けど」みたい@＞@
15　JDF5:＜@うん@＞
16　JGF6:＜@感じやん@＞

（16）は、JGF6が最近写真を撮らなくなっており、自分が撮った写真について語っている場面であるが、12行目で話し手は、「あ　なんか　まあ　きれいかなおもて」と＜自己発話＞を直接話法で表現しており、笑いながら「みたいな」と発話している。その発話に対して、聞き手は、笑いを伴って話し手の発話を言い換えており（13行）、14行目の話し手の発話を見ると、聞き手の発話を笑いながら繰り返していることが確認できる。このように、日本の友人同士の会話では、他者との人間関係が語られる「物語」の場合も、話し手は面白く語り、聞き手と笑い合うことに重点を置く傾向がある。

以上のように、日本の友人同士の会話では、相手の笑いを生み出すストラテジーとして直接話法が用いられる傾向が強いと思われるが、このような傾向は、話し手が自己呈示を面白く語る形で行っていることが要因であると考えられる。一方、＜自己発話＞を目立たせている場合でさえも＜第三者＞に焦点が当てられた日本語の会話の用例（12）とは反対に、韓国の友人同士の会話では、＜第三者＞の発話を目立たせている場合でも話し手は聞き手の共感を導くストラテジーとして直接話法を用いている用例が観察される。（17）を見てみよう。

(17)会話MK3【友人について】
01 →KCM6:## 맨날 그래 하여튼 (0.5) 내가 그래서 ##한테 맨날 (0.3) 막 그래 「아
02 →　##아 맥주 한 잔 할래?」「아 별로 (0.3) 안땡기는데」 (0.4)「아: 그냥 옆에만
03　　있어줘 혼자 맥주 빨게」「아 그럴까?」 그럼 술맛 떨어지잖아 안 먹지 또
　　（＃＃はいつもそう　とにかく（0.5）私が　それで　＃＃にいつも（0.3）こういう「あ　＃＃ビール飲みに行く？」「あ　別に（0.3）飲みたくないけど」（0.4）「あ::じゃあ　隣にいてくれ　一人でビール飲むから」「あ　そうしようか？」って言われたら　お酒飲　みたくなくなるじゃない　飲まない　また）
　　[…]
04 →KCM6: (4.0) ##이 맨날 「별론데 안 끌리는데」 (0.5) 「아 나 딱히 나 술 안 먹
05　　잖아」（（4.0）＃＃がいつも「別に飲みたくないけど」（0.5）「あ　私　別に

私　お酒飲まないでしょう」）

06　KBM5:아 존나 듣기 싫어 （あ　すっごく聞きたくない）

07　KCM6:누가 술을 맛으로 먹어（誰がお酒を味で飲むんだよ((お酒が好きで飲むわけではなく、人との関係で飲むという意味))

（17）は、KCM6がお酒を一緒に飲んでくれない友人について話している場面である。注目したいのは01行から04行で用いられているKCM6の直接話法であるが、KCM6は自分と友人との普段のやりとりを直接話法で発話している。やりとりの内容はKCM6の誘いと友人の断りの発話であるが、友人の発話「あ　別に（0.3）飲みたくないけど」は、02行と04行で二回も発話されている。発話の繰り返しは、話し手が強調したい部分であると言える。ここで、聞き手の反応に注目してみると、KCM6と友人とのやりとりを具体的に提示されたKBM5は「あ　すっごく聞きたくない（06行）」と KCM6の友人の発話に対する評価的な発話を用いている。後続するKCM6の発話が友人に対する不満であることからも分かるように、KCM6はお酒を一緒に飲んでくれない友人に不満を持っており、友人に対する不満の話は（17）の後の相互行為でも続いている。つまり、KCM6は＜第三者＞の友人に対する感情をKBM5に共感してほしいと思い、友人とのやりとりを直接話法で具体的に提示することで聞き手の共感を導いていると言える。Drew & Walker（2009）によると、話し手は、他者に対する否定的な態度を断定的な表現を用いて表すよりは、語りを進行させながら徐々に明らかにしていくという。（17）でも、KCM6が明確に友人に対する不満を表明しているのは、聞き手が「あ　すっごく聞きたくない（06行）」と反応を得たその後である。このように、韓国語の会話で、話し手は「物語」に対する自らの態度を示す装置として直接話法を用いる傾向があり、話し手の態度の表示が聞き手の共感の誘導となっていると言える。このような相互行為をポライトネス理論の観点から考えると、聞き手が共感できそうな側面を目立たせて語る行為は、相手と同様な価値観を有する仲間であることを主張するPPSとして捉えられる。

以上のように、聞き手を楽しませるために＜自己発話＞と＜第三者＞のやりとりを連鎖的に直接話法で用いたり、＜第三者＞の発話を目立たせたりする傾向が強い日本語の会話とは異なり、韓国語の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられ、あるいは話し手が主人公になり、聞き手の共感を導くというストラテジーの使用が主に観察される。また、＜第三者＞の発話を目立たせている場合であっても、聞き手は話し手の考えや感情に共感を示すことが多い。韓国の友人同士の会話では、話し手は、聞き手と共感し合える側面を直接話法で強調することで、互いの考えや感情を分かち合える「物語」を語る傾向が強く、

このような傾向が韓国の友人同士の会話で＜自己発話＞を目立たせる割合が高い要因となっていると思われる。

5.2.3　日韓の類似点：＜自己心内＞と共感の場

次に、話し手が＜自己心内＞の発話を直接話法で表現している場合について述べる。話し手が＜自己心内＞の発話を直接話法で用いる割合には、大きな日韓差は観察されていないが、韓国の女性同士の会話でその使用割合が著しく高い。相互行為の中で話し手が＜自己心内＞発話を直接話法で発話した場合、日韓男女に関わらず、これらの発話は、聞き手の共感を導くことが多い。まず、韓国の女性同士の会話の用例を見てみよう。

(18)会話FK3 【KYF5に告白した男性について 】

01　KYF5: (2.0) 근까 나도 착한 거는 나도 알겠고 근까 성격 좋은 것도 알겠고

02　　여자한테 잘하는 것도 알겠고 그니까 다 알겠는데 (0.5) 아 근 >근데 진짜<

03　　감정이 안 생기는 거는 이걸 말로 표현하기도 솔직히 좀 뭐한데 그니까 아

04 →　　머리속에서는 「아 >다 좋아 다 좋아<」 근데 「아 >남자로선 아니야

05 →　　남자로서는　아니야<」［그런게 좀］

（（2.0）だから　私も優しいことは私も分かるし　だから　性格がいいのも分かるし　女性に優しいのも分かるし　だから　全部分かるけど（0.5）あ　で＞でも本当＜（（異性としての））感情がないのは　これを言葉で表現するのも　正直　ちょっと　あれだけど　だから　あ　頭の中では「あ＞全部いい＜」でも「あ＞男としてはだめ　男としてはだめ＜」［そういうのが　ちょっと］）

06　KKF6:［그거 야］ 무슨 소린지 알아([それ　ねえ]　何言っているのか分かる)

［…］

07　KKF6: (0.4)그니까 사람으론 좋은데 남자로서는 아니다 그거（（0.4）だから　人としてはいいけど男としてはだめだということ）

08　KYF5: 어어(うんうん)

（18）は、KYF5が、自分に告白した男性について話している場面である。KYF5は、その男性が性格も良くて良い人であると思っているが、04と05行目で「男としてはだめ」と心内の発話を直接話法で表現している。ここで聞き手の反応を見てみると05行目のKYF5の直接話法の直後の発話「そういうのが　ちょっと」に重なって、KKF6は、「それ　ね

え　何言っているのか分かる」と積極的に共感していることを表しており、07行目で、「だから　人としてはいいけど　男としてはだめだということ」とKYF5の＜自己心内＞発話の一部を繰り返した発話を用いることで自らの理解を積極的に話している。

＜自己心内＞の使用割合が最も低い韓国の男性同士の会話でも（19）のように＜自己心内＞は、聞き手の共感を導いている用例が多く観察される。

(19)会話MK1 【男性同士でレストランに行くことについて】

01　KGM1:테이블이 여덟 개 있었나? 다섯 개정도가 테이블이 있었어 아 근까 여덟

02　　개 테이블정도 쪼그만한 음식점이였는데 테이블이 다섯 개 정도 찼었어 근데

03　　남녀커플이 네 개 여자커플이 두 갠가 있었어 여여 커플이

（テーブルが八つあったかな?　五つくらいのテーブルがあった　あ　八つくらいのテーブルがある小さいレストランだったけど　五つくらいのテーブルに人がいた　男女カップルが四ペア　女性同士ペアが二つだったよ　女性同士が）

04　KAM2:어（うん）

05 →KGM1:그거 보고선 남자 네명이서 아 씨발 이러고 나와가지고

（それ見て　男性四人で　「あ　くそ」って出てきて）

06　KAM2:여여커플은 진짜 괜찮은데（女性同士は本当に大丈夫なのにね）

（19）は、韓国の男性同士の会話で、KGM1が3人の男性の友人とレストランに行ったことについて話している場面である。01行から03行目で、KGM1はレストランの中にカップルと女性同士のペアがいたことについて説明している。ここで注目したいのは、05行目の「あ　くそ」という発話であるが、この発話は KGM1の続きの発話「って」からも分かるように、出来事時の感情を直接話法で強く表している発話である。後続するKAM2の発話「女性同士は本当に大丈夫なのにね（06行）」を見てみると、KGM1の「あ　くそ」という発話を KAM2は、「男性同士でレストランに行くのは大丈夫ではない」と解釈している。（19）の後の相互行為で、「男性同士でカフェに行くことも変である」と二人が話し合っていることから、話し手の出来事時の＜自己心内＞は、聞き手との共感の場を作り上げるストラテジーとして用いられていると言える。

日本の友人同士の会話でも、＜自己心内＞は、聞き手との共感の場を作り上げるストラテジーとして用いられている。（20）を見てみよう。

(20)会話FJ1【アニメーションに対する彼氏の反応】

01　JOF1：まあ　それに対するあの反応あんまりうすい　結構　その　結構うすいねや
02　　んか
03　JAF2：うん
04　JOF1：うすいんやけど（0. 3）なんか（0. 7）この前　そのスカイプしてると［きに］
05　JAF2：　　［うん］
06　JOF1：「あ　ローゼンメイデンまたアニメ化するらしいで」［って］ゆったら
07　JAF2：　　［うん］
08　JOF1：＞「うそ」みたいな＜　「ほんま？」とか言って　＞「え　ちょっと待って
09　　ソースどこ？」@みたいな@＜@@　めっちゃ反応よくて
10　JAF2：あかん　ソースどことかいう時点でもうあかんわ@@
11 →JOF1：＞@「なんやねん」って@＜　「その反応の良さどこからきてん」＞@と思
12　　う@＜
13　JAF2：あ　なんなん　ＸＸＸＸＸＸＸけど　もっとクールで　なんか　シャイな感
14　　じなんやと［思ってたら］
15　JOF1：　　［そそそそ］
16　JAF2：う：：わ

（20）は、JOF1が、「ローゼンメイデン」という漫画のファンである彼氏が、他の漫画やアニメーションに対する反応は薄いと話している場面である。06行目のJOF1は、「あローゼンメイデンまたアニメ化するらしいで」は、後続する「ってゆったら」で分かるように、過去の＜自己発話＞を用いている発話である。物語の登場人物であるJOF1の彼氏の声は、その後すぐ発話される。「うそ」「ほんま」「え　ちょっと待って　ソースどこ？」などの発話が、JOF1の過去の発話（06行目）に対する彼氏の発話であることは、01行目の「反応があんまりうすい」という対象がJOF1の彼氏であることから分かる。ここで注目したいのは、「物語」が終了する11行目のJOF1の＜自己心内＞発話「なんやねんって　その反応の良さどこからきてん」であるが、聞き手である13行～14行目のJAF2の「もっとクールでなんかシャイな感じなんやと思ってたら」という発話から分かるように、JAF2は、JOF1の彼氏が意外であることに注目している。この後で展開されるデュオパートで、二人はJOF1の彼氏の意外性について話し合っている。Haakana（2007）によると、主に「I thought」という表現と用いられる心内の直接話法（reported thought）は、話し手がその出来事をどのように捉えているのかという評価装置（evaluation device）として用いられるという。

このように、＜自己心内＞は、話し手が「物語」に対する態度を示す表示として利用されることが多く、ここで重要なのは、話し手のこういった直接話法の使用が、会話の参加者の共感の場を作り上げていることである。つまり、話し手は単に報告として自らの経験談を語るわけではなく、その場で何についてどのような考えや感情を持っていたかを目立たせて語ることで、聞き手の共感を得て共通基盤を作り上げる。その後、二人は語られた経験談に関して、同様な考えや感情を持つ仲間同士であることを主張しつつ会話を展開させる。このような相互行為は、双方のポジティブ・フェイスを立てることになり、会話の参加者はお互いのフェイスを立てることで親密な関係をより強めていると言えよう。

以上のように、日韓男女に関わらず、相互行為の中で話し手が＜自己心内＞を直接話法で表現した場合、これらの発話は出来事に対する話し手の態度を示す表示として用いられており、話し手は自らの＜自己心内＞発話を活き活きと表現することで、聞き手との共感の場を作り上げ、二人は同様な考えや感情を持った仲間であることを主張しつつ親密な関係を構築していくと言える。

6.　ジェンダー差：直接話法による協力とポライトネス

次に、本節ではジェンダー差が観察された聞き手の直接話法の使用（§6.1）と仮想フレーム構築（§6.2）について述べる。

6.1　聞き手の直接話法と共同作業

§4で述べたように、聞き手の直接話法の使用は、日韓ともに男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で多く観察される。ソロパートにおける聞き手の直接話法の使用に焦点を当て、聞き手の直接話法の相対使用頻度を示すと表3のようである。

表3　聞き手の直接話法の発話数と相対使用頻度

	発話数	頻度	総発話数
JF	22	**1.29**	1699
KF	20	**1.72**	1162
JM	6	**0.29**	2066
KM	1	**0.06**	1725

ソロパートで話し手が「語り」を展開させる際、聞き手の役割を果たす参加者は短い発話を用いて話し手を支持していることを示す場合が多いが、表3に示したように聞き手が直接話法を用いて話し手の「語り」の構築に積極的に関わっている用例も観察されており、

その使用頻度は日韓ともに女性同士の会話の方が高い。

聞き手が用いる直接話法は三つのタイプに分けられる。まず、§6.1.1では、聞き手が話し手の心内発話を直接話法で用いて共感を表している場合について述べ、§6.1.2では、聞き手が語りの登場人物の声を演技的に発話することで、語りを具体化している場合について述べる。§6.1.3では、聞き手が話し手の発話を推論して直接話法を用いることで語りの展開に貢献している場合について述べる。

6.1.1　聞き手が話し手の心内発話として発話する場合：推論による共感

まず、話し手が語りを展開する際、提示された状況で話し手が持ちそうな考えや感情をあたかも出来事時の話し手の心内発話であるかのように聞き手が発話する用例について述べる。韓国の女性同士の会話の用例を見てみよう。

(21)会話FK2【 一般的ではない話をしてくる知り合いについて】

01 KHF4:근데 난 그런 말 듣고 있으면 아 나 진짜 미치겠네 이거 뭐라 말해야 돼 막

02　　근데 막 미치겠는거야(私はそういう話を聞いていたら　あ　私本当に変になりそう「これ何と言えばいい」なんか　でも　なんか　変になりそう)

03 →KSF3:「뭐라고 맞장구를 쳐줘야 되지?」(「何とあいづちを打ってあげればいい?」)

04　KHF4:어＝(うん＝)

05 →KSF3:＝「좋[으시겠네요] 이래야 되나?」(「い［いですねって言えばいいか?」］)

06　KHF4:　　[아니 이걸]　　=어 그 느낌

　　(［「いや　これを」］　　＝うん　そういう感じ)

07 →KSF3:「뭐라고 해야 되지?」(「何と言えばいい？」)

08　KHF4:「내가 뭐라 그래야 되지? 아니 나는 모른다고 그냥 솔직하게 말해야되나?

09　　아니 뭐라 그래야되지?」그러면서@@(「私は何と言えばいい?　いや　私は知らないって正直に言わなければならないか?　私何といえばいい?」＜@って思いながら@＞)

（21）は、KHF4が知り合いの言動に関しての不満を話している場面である。KHF4は、知り合いに個人的な話を聞かされて困っていると話しており、「これ何と言えばいい」とどのように反応すればいいか困っていることを直接話法で表現している。注目したいのは、03、05、07行目のKSF3の発話である。これらの発話は、まるで話し手であるKHF4の心内

発話であるかのように直接話法で発話されている。07行目の発話は01と02行目の話し手の発話の繰り返しであり、03行目の発話は「これ何と言えばいい」という話し手の直前の発話の言い換えであるが、05行目の発話は、聞き手の推論による発話であることが重要である。「いいですねって言えばいいか」という話し手の心内発話を推論した聞き手の直接話法を、06行目で話し手が「うん　そういう感じ」と同意をしていることから、聞き手の05行目の発話は、話し手の考えや感情を正しく推論した発話であることが分かる。

このように、聞き手は話し手の語りを単に理解しているだけではなく、話し手の立場に立ち、話し手が思いそうな、または感じそうなことを直接話法で自ら提示することで、話し手と共通基盤を持った協力者であることを積極的に示していると言える。

6.1.2　聞き手が登場人物の発話として発話する場合：語りの具体化

次に、話し手が語りを展開させる際、聞き手が語りの登場人物の声を直接話法で発話している場合について述べる。まず、韓国の女性同士の会話の用例を見てみよう。

(22)会話FK2【赤ちゃんのお世話をすることについて】

01　KSF3:근데 애기는 말을 못할 때가 이뻐(0.3) 진짜야 난 딱 고때까지만 이뻐

02　　애가 말을 하면서 자기의 의사를 표현할때부터 나는 하아=（でも　赤ちゃんはことばができない時がかわい（0.3）本当だよ 私はちょうどその時までがかわいい赤ちゃんが話し始めて自己の意思を表現すると私は「はあ（（ため息、お世話するのが大変であるという意味））」＝

03 →KHF4:＝「왜:왜:왜:[왜:]」@@(＝「どうして:どうして: どうして:［どうして:］」@@（（赤ちゃんのように声を変えて発話している））

04　KSF3:　　［어］ 안 돌봐줘 >@그래가지구@<말 못하고 애가 아직 자아

05　　가 없을 때는 나를 되게 좋아해@@ （［うん］　お世話しない＞@だから@＜ことばができなくて赤ちゃんがまだ自我がない時は私をすごく好む@@（（ことばができない時期までは、KSF3 は赤ちゃんを可愛がるため、赤ちゃんが KSF3 になついてくるという意味））

06　KHF4: >@아 진짜?@<=（＞@あ　本当？@＜＝）

07　KSF3:=>@애기들이@< @ 근데 이제 쪼끔 자아가 생기면서(0.4) 자기의［뭐라

08　　그러지?］（＝＞@赤ちゃんが@＜@　でも　こう　ちょっと自我ができて（0.4）自分の［何っていうんだ？］＝）

09 →KHF4[「쟤는 나를］싫어해@@」=（＝［「あの人（（ KSF3））は私］を嫌がっている」@@＝）

10　KSF3: =>@응@< 그런 거를 자꾸 표현하기 시작하면 나를 별로 안 좋아해（＝＞@うん@＜そういうのを表現し始めると私になつかない（（お世話するのが嫌いであることを表現すると、赤ちゃんがなついてこないという意味））

（22）は、KSF3が、話すことができない赤ちゃんはかわいいが、自分の意思を表現し始めたらかわいくないと話している場面である。ここで注目したいのは、聞き手であるKHF4の03行目と09行目の発話であるが、この発話は赤ちゃんの声を演技した発話である。まず、03行目の「どうして」という疑問表現が KSF3に対するものではないことは、05行目のKSF3の発話が答えになっていないことからも分かる。「どうして」という発話は、先行するKSF3の発話「自己の意思を表現すると私ははあ」に後続する発話であるが、KSF3のため息の発話からも分かるように、KSF3は赤ちゃんが言葉で何かを表現すると大変であることを伝えている。それを聞いたKHF4は、一般的に幼児がよく言うとされる「どうして」という発話を赤ちゃんのような声で何回も発話している。次に、09行目の「あの人は私を嫌がっている」という発話も赤ちゃんの発話であることは、後続するKSF3の発話「うん　そういうのを表現し始めると」で分かる。つまり、KSF3が07行目で言及した「自我」ができ、KSF3が赤ちゃんを嫌がっていることを赤ちゃんが気づいたら赤ちゃんはこういうだろうということを聞き手であるKHF4があたかも赤ちゃんであるかのように演技しているのである。類似した用例は、日本の女性同士の会話でも観察される。

(23)会話FJ3【撮った写真にコメントをする人について】

01　JGF6:1 回 2 回の時は一所懸命撮りよってんけど

02　JDF5:うん

03　JGF6:なんか　最近（0.3）カメラほこりかぶってるよね［@@］

04　JDF5:　　［@@］

05　JGF6:最近「もういいかな」ってなってるよね

06　JDF5:あ　なるほど

07　JGF6:もう　でも　＃＃さんとかめっちゃ　なんかゆってくる人ゆってくるんやんか

08 →JDF5:「写真どうなん」みたいな［感じで］

09　JGF6:　　［そうそう］そう　なん「あれはどういう意図で撮

10　　ったの」みたいな　「あ　なんか　まあ　きれいかなおもて」＜@みたいな@＞

11 →JDF5:@@＜@「特に意味はない［けどね」　やな］@＞

12　JGF6:　　＜@［そう　「特に意味はない］けど」みたい@＞@

13　JDF5:＜@うん@＞

14　JGF6:＜@感じやん@＞

15　JDF5:うん

（23）は、写真部であるJGF6が写真を撮った時、それに関してコメントをしてくる人がいると話している場面である。まず、11行目で、聞き手は、「特に意味はないけどね」と話し手が思いそうな発話を直接話法で自ら提示しているが、これは§6.1.1で述べた共通基盤を持った協力者であることを積極的に表すストラテジーとして捉えられる。ここで注目したいのは、08行目の「写真どうなん」という聞き手の直接話法である。この発話は、先行する JGF6の発話に登場する「ゆってくる人」の発話であるが、これは、後続する JGF6の「そうそう」「あれはどういう意図で撮ったの」と、より具体化された＜第三者＞の発話が直接話法で用いられていることからも分かる。このように、聞き手はあたかも自分が話し手の「語り」の登場人物であるかのように直接話法を用いて、「語り」の内容を具体化させることがある。

以上のように、聞き手は直接話法を用いて語りの登場人物の声を活き活きさせることによって、話し手の語りをより具体化させているが、このような発話は、聞き手が話し手の語りを支持していることと関心を持っていることを強く主張するストラテジーとして用いられていると考えられる。

6.1.3　聞き手が話し手として発話する場合：推論による展開

聞き手が「物語」の具体的な状況に応じて話し手の立場に立ち、直接話法を用いることで会話の展開に積極的に参加している用例も観察される。（24）は、日本の女性同士の会話で、聞き手が話し手の「物語」から推論できる状況を直接話法で提示している用例である。

(24)会話FJ3【高校の時太ったことについて】

01　JDF5:私 71 あってん＝

02　JGF6:　　＝まあまあ太ったな＝

03　JDF5:　　＝やばかった

04　JGF6:14［か］

05　JDF5:　［制］服なんかも入れへんから

06　JGF6:＜@うん［うん］@＞

07　JDF5:　　［スカ］ート　パカ::ンみたいな＜@ままやし@＞

08 →JGF6:＜@パカ: : ン@＞@@@　＜@「でもとまる」みたいな@＞

09　JDF5:＜@＞そうそうそう　とまるねん＜　二個あるから@＞

10　JGF6:@@すごいな

（24）は、JDF5が高校の時に太ったことについて話している場面である。注目したいのは、08行目の JGF6の「でもとまる」という発話であるが、この発話はJDF5の「パカ::ン」というスカートがとまらない様子の描写の発話を繰り返した後に発話されている。JGF6の「とまる」という発話の直前の「でも」が示しているように、「とまる」の対象はスカートであるが、聞き手であるJGF6は提示された状況から推論可能な面白い状況を直接話法で提供している。09行目の JDF5の笑いを伴った同意の発話と「とまるねん　二個あるから」という発話から分かるように、直接話法を用いた推論の発話を話し手は楽しく受け取っている。このことから、話し手は、聞き手の推論による語り構築への参加を楽しんでいることが分かる。このように、聞き手は、話し手が提示した特定の状況で起こりそうなことを提示しつつ、積極的に「語り」の構築に貢献している。「物語」の受け手のセリフ発話を分析した山本（2013）は、セリフ発話による受け手の参加が、きわめて的確に語り手の「物語」を理解していることを示す方法でになっており、セリフ発話は「物語」の構築が相互行為的に達成されていることを示す証拠となると述べている。このような現象をポライトネス理論の観点からみると、聞き手の直接話法による積極的な参加は、話し手の語り構築の協力者であることを表すPPSとして捉えられる。

以上のように、聞き手は直接話法を用いて話し手の語り構築に積極的に関わっており、これらの発話は、話し手に共感または関心を持っていることを表すストラテジーや話し手の協力者であることを主張するストラテジーとして用いられていると言える。

6.2　仮想フレーム

次に、現実に起こっていない出来事があたかも今・ここで起こっているかのように会話の参加者が直接話法を用いて仮想フレームを構築している用例を見てみよう。仮想フレームは、二人の参加者が共同で話し合うデュオパートで構築されている。以下の表4は、男女の会話で仮想フレームが構築された数を示したものである。

表4　仮想フレームの出現数

	単独	共同	計
JF	-	9	9
KF	-	8	8
JM	2	2	4
KM	-	-	-

表4から分かるように、仮想フレームは女性同士の会話で多く観察されており、女性同士の会話では、単独で構築された用例は観察されていない。一方、韓国の男性同士の会話では1例も観察されておらず、日本の男性同士の会話では一人の参加者によってフレームが構築される用例が観察されている。以下では、女性同士の会話と男性同士の会話でフレームがどのように構築されているかについて述べる。

6.2.1　一人による仮想フレーム構築

まず、 仮想フレームが一人の話者によって単独で作り上げられている場合について述べる。日本の男性同士の会話で参加者は特定の状況における＜第三者＞の声を用いて仮想フレームを構築している用例が観察されているが、用例をみてみよう。

(25)会話MJ1【カードゲームを話題としたことについて】

01　JBM2:ハートキングをスティール（（カードゲームの用語:相手のミスで勝てない
02　　カードが勝つこと））あ　これ言ったらあかんかな　＜@ブリッジトークか@＞
03　JAM1:う:ん　微妙　まあ（0.4）　あんまりよくないかな
04 →JBM2:＃＃A さんが（（言いよどみ））　＃＃A さん（（会話の参加者と筆者の知り
05　　合い））に「スティールって何ですか」とか言われて＝
06　JAM1:＝そう　結局　何か（0.3）　ブリッジの話や　［私たち］
07 →JBM2:　「［こいつら］カスだから　ブリ
08　　ッジトークしか＜@できま［せん」@＞@@@］
09　JAM1:［@@＜@ありそうや@＞］

（25）の会話の参加者の二人は、ブリッジというカードゲームのサークルに参加しており、その友人であるA（筆者の知り合い）も二人と同様のサークルで活動している。Aは、筆者に二人を紹介していたが、筆者はカードゲームについては完全な部外者である。

（25）の前の文脈では、ブリッジに関する内容が話題となり、01行目の発話のような専

門用語がかなり用いられている。02行目のJBM2の発話「これ言ったらあかんかな」と03行目のJAM1の「あんまりよくないかな」で分かるように、二人は、部外者は分かるはずがないブリッジに関する話は避けようとしていたが、つい話題としてしまったことを（25）で気付いている。ブリッジに関する話題は、分かりにくい話であると二人が想定していることは、05行目と07行目のJBM2の発話から分かる。05行目の「スティールって何ですか」という発話は、部外者である筆者の発話を想定した発話であり、07行目の発話は、筆者の発話に対するAの発話であると解釈できるが、これは筆者を除いた会話の参加者二人と共通の知り合いがブリッジ部員であることからも分かる。

つまり、ブリッジを話題としてしまうと筆者が内容を理解できなくなり、筆者が専門用語の意味についてAに聞くことになるであろうという特定の状況を想定した仮想のフレームの中で、JBM2の05行目と07行目の発話は成立する。これらの発話が、筆者がAに専門用語の意味について質問するという仮想のフレームにおける筆者（05行）と A（07、08行）の発話であることは、09行目のJAM1の「ありそうや」という発話からも分かる。仮想のフレームで成立する＜第三者＞の発話を想定して活き活きと発話することで、JBM2は相手の笑いを生み出している（09行目）。このように、仮想のフレームの中で用いられる直接話法の多くは、笑いを生み出すことが多い。この用例では JBM2だけが仮想フレームでの発話を行っており、（25）のように会話の参加者の一人によって仮想フレームが構築された場合は「冗談」としての働きをしていると考えられる。

6.2.2　二人による仮想のフレーム構築

次に、仮想フレームを二人の参加者が協力して作り上げている場合について述べる。日韓共に女性同士の会話では、二人の参加者が協力してフレームを構築している用例しか観察されておらず、男性同士の会話の用例（25）と類似した文脈でも、女性同士の会話では、（1）のように二人の会話の参加者によって仮想フレームが構築されている。

男性同士の会話で観察された二人による仮想フレーム構築の用例を見てみると、類似した内容のフレームが2回構築されている用例が見られたが、1回目のフレームは、一人の参加者によって構築されており、2回目のフレームは、二人によって構築されている。その用例を見てみよう。

(26)会話MJ4【火事の時、家の近くの消防局に電話することについて】

01　JYM8:(0.8）火事な　火事　火事もせやけどな　まあ　でも　うち火事なっても　お

02　　れの家　マンションの隣が消防局やからな

03　JDM7:あ　強いな　ちょっとな

04　JYM8:うん

05　JDM7:でも＝

06 →JYM8:　　＝＞で　す　電話したらたぶんすぐくんで＜　「もしもし」ゆうて

07 →　「火事です」「住所どこですか」「お宅の横です」ゆうた［たぶんすぐ来る］

08　JDM7:　　［あ　でも］

09　　あれちゃん　あの:

［…］

10　JDM7:あ　やっぱ速さ大事に＜@してんねんな@＞　すげ：な　あ　でも　そうや

11　　ったら呼びに行った方が速いな　絶対［な］

12 →JYM8:　　［「あ］　すみません」

13 →JDM7:「火事です@」

14 →JYM8:「来て::」＜@ゆうて@＞@

15 →JDM7:@@「はあ」ってなるやろうな　＜@たぶんな@＞

（26）は、JYM8が、自分の家の近くに消防局があるため、火事の時は便利であると話している場面である。火事の時、消防局に電話することを想定した1回目の仮想フレームは、06行と07行目でJYM8が＜自己発話＞と＜第三者＞の発話を直接話法で用いることによって構築されている。その後、12行目から15行目では、電話ではなく呼びにいくことを想定したフレームが構築されているが、1回目のフレーム構築には参加していなかった JDM7が、13行目で１回目のフレームで JYM8が用いた発話「火事です」という発話を繰り返すことでフレーム構築に貢献している。

一方、女性同士の会話におけるすべての仮想フレームは、二人の参加者の協力によって構築されている。まず、韓国の女性同士の会話の用例を見てみよう。

(27)会話KF1【デビカードを使うことについて】

01　KBF2：요즘엔 그 다 되고 요즘엔 체크카드를 더 많이 쓰[잖아]

（最近は全部使えるし　最近はデビカードもっと使うん［でしょう］）

02　KAF1：　　[응]([うん])

03　KBF2：신용카드 보다가（1.5）그리고 신고하면[되]

（クレジットカードより（1.5）そして　届ければ［いいよ］（（警察に））

04　KAF1：　　[맞아]（そう）

05　KBF2:카드거부했[다고](カード拒否し［たと］)

06 →KAF1:　　[어](0.5)「>카드 안 받으실거에요?< 저희 <@신고할께요@>」@@(［うん］（0.5）＞「カード受け取らないんですか？＜　私たち警察に＜@届け出します@＞」@@)

07　KBF2:<@어@> @@(＜@うん@＞@@)

08　KAF1:<@쌍욕 먹고 이제@>@@(＜@すごく怒られて　もう@＞@@)

09 →KBF2:@@「<@여기 지금 카드 거부당했거[든요] @>」@(@@「＜@ここで今カード拒否され［ましたんですが@＞@@@］」)

10　KAF1:　　[<@어@>@@](［＜@うん@＞@@］)

11 →KBF2:「<@어린애들이라 아저씨 얕잡아보시나　본데@>@<@사진찍어@>」@@(「＜@若い者だから　おじさん　甘く見ているようですけど@＞@　＜@写真撮って」（（インタネットに載せる意図で））@＞」@@)

12　KAF1:<@아 웃겨 @>@(＜@あ　面白い@＞@)

13 →KBF2:<@나쁜가게@> 해가지고(「＜@悪い店@＞」って（（インタネットに載せるという意味））

14　KAF1:<@아 웃겨@>(＜@あ　面白い@＞)

（27）で、二人は旅行先でデビカードを使うことについて話しており、二人は、旅行先の店で、もしデビカードを受け取ってくれなかったら、カードを拒否したことを警察に届けようと話している場面である。「警察に届けよう」という意見はKBF2によって発話される（03と05行）。この発話に対してKAF1は、すぐ「カード受け取らないんですか？私たち警察に届け出します」と笑いを伴いながら、仮想フレームを作り上げている（06行）。デビカードが拒否された状況という仮想フレームは、＜自己発話＞を用いたKAF1の演技的な発話に対して KBF2も「ここで今カード拒否されましたんですが」 「若い者だからおじさん　甘く見てるようですけど」「 写真撮って」と＜自己発話＞を直接話法で演技的に用いて仮想フレームの構築に参加することによってより拡張される（09、11行）。06行目から14行目までの二人の発話に笑いが伴っていることや12行目と14行目のKAF1の発話から分かるように、二人は仮想フレームを作り上げることを楽しんでいることが分かる。

また、会話の参加者が、ドラマの＜セリフ＞を直接話法で発話することで仮想フレームを構築している用例も観察されている。（28）を見てみよう。

(28)会話JF1【サスペンスドラマの内容について】

01　JOF1:大体　なんか　こ　あやしい人いるよな

02　JAF2:おるおる　一番近くにおる女の人とかな＝

03 →JOF1:　　＝＞そそそそそそそそ＜「あなた

04 →　だったんですね（0.4）さつきさん」@@

05 →JAF2:@@「十年前に弟が::」みたいな

06　JOF1:「＜@もう良いよ@＞　過去は::　過去捨てて<u>てよ</u>::」みたいな@@

07　　＞御涙頂戴したらええ＜と思ってるんやろうが」

08　JAF2:ほんま　それやろ　最後は自分で　こう＝

09 →JOF1:　　＝「自分で::」みたいな　「やめ

10　　て下さい」みたいな

11　JAF2:＞そそそ＜

12　JOF1:断崖絶壁で

13　JAF2:＞そそそそ＜

（28）は、二人が普段から観ているサスペンスドラマについて話している場面であり、ドラマに意外な結末がないと話している。ここで注目したいのは、ドラマのセリフを直接話法で発話している03、04、05、09行目の発話であるが、まず、03行目の発話に先行する02行目のJAF2の発話を見てみると、JAF2は、「一番近くにおる女の人とかな」と発話し、01行目のJOF1「あやしい人いるよな」という発話に同意していることを表していることが分かる。二人の連鎖は、「一番近くにいた人が犯人」という話になるが、ここで、JOF1は真剣な音調で「あなただったんですね　さつきさん」とドラマの登場人物であるかのように具体的な名前まで発話している。それに対してJAF2は、ドラマフレームに積極的に参加し、「 十年前に弟が::」と犯人であることが明らかになった後の犯人のセリフを発話することでドラマフレームを展開させている。その後に見られる JOF1の演劇的な発話も、ドラマを展開させている犯人の＜セリフ＞やその周りの人の＜セリフ＞である。（28）で、二人のターン交替や発話のスピードは普段より速く、笑いも観察されることから、会話の参加者がドラマフレームの構築に積極的であることが分かる。

以上のように、デュオパートで見られる直接話法の発話は、仮想フレームを作り上げるために用いられている場合があり、会話の参加者は仮想フレームの中で成立する発話を単独で用いることで相手の笑いを生み出す「冗談」として用いたり（25）、お互いに協力し

て作り上げていく相互行為を「遊び」として楽しんだりしている用例が観察される（26～28）。類似した現象は、Holt（2007）の研究でも指摘されており、Holt（2007）によると、実演的発話（enactment）は、冗談の開始、冗談の理解、冗談の拡張のため、会話の参加者によって協力的に用いられるとしている。日韓男女の友人同士の会話でも類似した現象が見られるが、このような用例は男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で多く観察される。特に、協力的に仮想フレームを構築している用例は、日韓同様に女性同士の会話で主に観察されており、女性同士は、協力的に仮想フレームを構築していく相互行為を通じて、共通基盤を確認しつつ親密な関係を構築していく傾向が強いと思われる。

7. 分析のまとめ

本章では、日韓の女性同士の会話と男性同士の会話で直接話法がいかなるストラテジーとして用いられており、日韓男女の相互行為にどのような日韓差とジェンダー差が見られたかについて述べた。本章の分析結果は以下のようにまとめられる。

まず、日韓男女に関わらず、友人同士の会話に見られる類似点は次のようである。

① 話し手は、直接話法を用いて自分の経験を聞き手と円滑に共有しようとしており、直接話法は、参加者の間主観性の構築に大きく寄与している。

② 話し手は、出来事時の＜自己心内＞を直接話法で表現することで、聞き手の共感を得て共通基盤を作り上げる。その後、二人は語られた経験談に関して、同様な考えや感情を持つ仲間同士であることを主張しつつ会話を展開させる。このような相互行為は、双方のポジティブ・フェイスを立てることになり、会話の参加者はお互いのフェイスを立てることで親密な関係をより強めていると言えよう。

次に、日本語の会話と韓国語の会話に見られた相違点は、以下のようである。

③ 日本語の会話では、＜第三者＞の発話が直接話法で用いられる割合が最も高い。これは、日本の友人同士の会話で、「物語」は聞き手を楽しませ、面白さを伝えるために語られる傾向が強いことと関連する。特に、話し手は＜第三者＞を「物語」の主人公として取り上げ、聞き手を楽しませ、笑いを生み出すストラテジーとして直接話法を用いることが多く、日本の友人同士は互いに笑い合える面白い経験談を共有し合うことで親密な関係を構築する傾向が強い。このことが＜第三者＞の発話が直接話法で用いられる割合が高い要因となっていると思われる。

④　韓国語の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられる割合が最も高い。韓国の友人同士の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられ、話し手が主人公になり、聞き手の共感を導くストラテジーの使用が主に観察される。また、＜第三者＞の発話を目立たせている場合も、聞き手は話し手の考えや感情に共感を示すことが多く、韓国の友人同士の会話で、話し手は、聞き手と共感し合える側面を直接話法で強調することで、お互いの考えや感情を分かち合える「物語」を語る傾向が強い。このような傾向が韓国の友人同士の会話で＜自己発話＞を目立たせる割合が高い要因となっていると思われる。

最後に、女性同士と男性同士の会話に見られた相違点は以下のようにまとめられる。

⑤　男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では聞き手は直接話法を用いて話し手の語りに共感を示したり、語りをより具体化させることで話し手を支持したり、語りの展開に貢献したりすることが多いという傾向が見られる。

⑥　仮想のフレーム構築は、日韓同様に女性同士の会話で主に観察される。特に、会話の参加者が互いに協力して作り上げていく相互行為は、女性同士の会話で多く観察されている。

8. 考察

以上の分析結果を踏まえ、ここでは、§2.2で挙げた以下のⅠとⅡ について考察を行う。

Ⅰ.　話し手の直接話法の使用傾向に日韓差が見られる理由は何か

Ⅱ.　聞き手の直接話法の使用と仮想フレーム構築にジェンダーによる相違点が見られる理由は何か

まず、§8.1では、分析のまとめ③、④を中心にⅠについて考察を行い、§8.2では、⑤、⑥を中心にⅡ について考察する。

8.1　日韓差：自己呈示の相違

日韓の友人同士の会話で、話し手が用いる直接話法は、聞き手を楽しませたり、共感の場を作り上げたりするストラテジーとして用いられ、話し手は自分の経験を聞き手と円滑に共有しようとする。その面で、直接話法は、参加者の間主観性の構築に寄与していると言えるが、日韓差は、話し手が、「物語」の中でどのような人物の声を目立たせているか

という点に表れる。

このような日韓差が見られる要因としては、日韓における自己呈示の相違が考えられる。まず、日本の友人同士の会話では、＜第三者＞を主人公として取り上げて聞き手に面白さを伝える自己呈示が行われ、互いに笑い合うことで親密な関係を強めている傾向が強い。一方、韓国の友人同士の会話では、出来事時の＜自己発話＞を直接話法で表現することで、話し手が主人公になり、話し手の感情に聞き手が共感できそうな側面を取り出して自己呈示を行うことで、親密な関係を強化している傾向が強い。親密な人間関係の構築に自己呈示は、必要不可欠なものであるが（西田 2004）、Brown & Rogers（1991）によれば、素直な自己開示は違いを生み出して一体性を妨げる要因ともなる。このように、自己呈示は、不確実性を減少させ、親密な人間関係の構築に必要なものであると同時に、相手との違いを生み出し一体性を妨げる危険性もある。上述したように、我々は、様々な自己の側面の中でそれぞれの場にふさわしい印象を与えるため、意図的・非意図的に他者に与える自己のイメージを操作している（ゴッフマン 1974）。こう考えると、日韓の友人同士の会話で、参加者がどのような自己呈示がふさわしいと捉えているかが日韓で異なっていると考えられる。Barnlund（1994）によると、どの程度の自己呈示が適切とされるかは文化によって異なる。日本と韓国の初対面の会話に見られる自己開始を分析した全（2010）によると、日本語話者に比べ、韓国語話者は、自分の感情・感想・評価などに関する自己開始が多い。また、日本人と韓国人に量的なアンケート調査を行った中川（2011）によると「自己開示の相手の資質」の問いで、日本人は「自分の話を聞いてくれたうえで、何らかの助言を与えてくれる」といった人を望む傾向が顕著であるのに対し、韓国人は「自分と共有するものがあり、信頼できる人物に話したい」という特徴が窺えている。このように、どのような人に自己呈示を行うかにも日韓差が観察されるが、どのような自己呈示を行うかは、第5章で述べた日韓の友人同士の会話における話題構成のあり方や日韓の踏み込む度合の相違とも大きく関連する。まず、相手の領域に踏み込む度合いが低い日本の友人同士の会話では、自己呈示においても、比較的、自らの考えや感情に触れる度合いが低い＜第三者＞を主人公とした面白い話を語り、また人間関係を語る際にも「語り」の面白さを目立たせることで、深刻な雰囲気をつくることを避けることが期待されていると考えられる。一方、相手の領域に踏み込む度合いが高い韓国語の会話では、自己呈示においても異性や

友人との関係のように、より私的レベルが高い語りが行われ、その際には、＜自己発話＞を目立たせ、自らの考えや感情に触れる度合いが高い自己呈示が行われ、また、聞き手との情緒的共感ができるような自己呈示が期待されると考えられる。

以上、日韓同様に直接話法は自らの情報や経験談を相手と上手に共有し合うために用いられているが、どのような人物の声を目立たせて語っていくかには日韓差が見られ、どのような自己呈示を行っているかが直接話法の使用にも大きく関連していると考えられる。このように、どのような自己呈示が友人同士の会話で適切とされるかには、 日本と韓国という異なる言語・文化的な要因が関わっていると考えられる。また、自己呈示の差は、相手の領域に踏み込む度合いの違いとも大きく関連しており、これらの相違が、経験談を語る際、話し手が用いる直接話法にも表れていると思われる。

8.2　ジェンダー差：協力関係の構築

次に、分析の結果、男性同士の会話に比べて女性同士の会話では、聞き手は直接話法を用いて話し手の語りに共感を示したり、語りをより具体化させることで話し手を支持していたり、語りの展開に積極的に貢献したりすることが多いという傾向が見られる。また、女性同士の会話では、協力的に仮想フレームを構築していく相互行為を通じて、共通基盤を確認しつつ親密な関係を構築していく傾向が強いと言える。このような差が見られる理由は以下のとおり解釈することができる。

従来、多くのジェンダー研究では、女性同士は協力的に会話を進行させることが特徴であると指摘されてきた（Coates 1988、Holmes 1995）。女性同士の会話をデータとし聞き手の短い反応、重なりなどを分析したCoates（1988:118）では、女性同士の会話において「会話の参加者は互いに協力し合って共通の意味を作り上げる」と指摘されている。本章で分析を行った聞き手の直接話法の使用と仮想フレーム構築の相互行為の面からも、同様なことが指摘できる。第7章で述べたように、男性同士の会話に比べ、共通性に重点をおいて会話を展開させる傾向がある女性同士の会話では、＜同意・共感＞の発話を互いに積み重ねて強調する相互行為が多く観察されている。このような特徴は、直接話法の使用面にも表れ、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では聞き手が話し手の「物語」構築に積極的に参加して話し手との共通基盤を主張したり、仮想フレームを協力的に構築したりすることで共通基盤を持った協力者であることを主張する相互行為が観察されやすいと考えられる。つまり、日韓の女性同士の会話でも、Coates（1988）が指摘したように、協力

し合って共通の意味を作り上げることが親密な関係構築に重要な装置として用いられていると言える。

一方、そもそも共通点を主張することが相対的に少ない男性同士の会話では、直接話法を用いて話し手の「物語」構築に積極的に関わる相互行為はあまり観察されず、仮想フレームでも一人の話者によって「冗談」として用いられる用例が観察されている。つまり、共通点を主張したり、共通の意味を作り上げたりする行為が大事な女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では、相手と共通の意味を作り上げることより、相手を笑わせることが対人関係の構築により大事な装置として作用している可能性があると思われる。このような男性同士の会話に見られる特徴は、第10章で分析を行う＜不同意＞と＜否定的評価＞による言い争いのような「冗談」の相互行為に、男性が協力的に参加していることからも確認できる。

以上、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、直接話法は話し手と協力者であることを主張したり、仮想フレームを協力的に作り上げたりする装置として用いられており、女性同士はこのような相互行為を通じて親密な人間関係を強めていると言える。

9. 本章のまとめ

本章では、日本と韓国の女性同士の会話と男性同士の会話双方において、直接話法が親密な人間関係を構築するためのストラテジーとして用いられているが、直接話法の使用傾向には日韓差とジェンダー差が見られることについて述べた。本章の結果は、以下のようにまとめられる。

（A）日韓男女に関わらず、直接話法は自らの情報や経験談を相手と上手に共有し合うために用いられているが、どのような人物の声を目立たせて語っていくかには日韓差が見られる。日本の友人同士の会話では、＜第三者＞の発話を直接話法で用いて、相手を楽しませ、相手と笑い合えるような出来事を呈示する傾向が強いのに対し、韓国の友人同士の会話では、＜自己発話＞を直接話法で用いて、自分と他人との関係を呈示することで、自らの考えや感情を相手と共感し合うことを重視する傾向が強い。このような差は、どのような自己呈示が友人同士の会話で適切とされているかということが日韓で異なっているためであると考えられる。

（B）聞き手の直接話法の使用傾向と仮想フレーム構築にはジェンダー差が見られる。女

性同士の会話で、聞き手は直接話法を用いて話し手の語りに共感を示したり、語りをより具体化させることで話し手を支持したり、語りの展開に貢献したりすることが多い。また、協力的に仮想フレームを構築していく相互行為を通じて、共通基盤を確認しつつ親密な関係を構築していく傾向が強いと言える。これは、女性同士の会話では、協力し合って共通の意味を作り上げることが親密な関係構築に重要な装置として用いられていることを示唆する。

第10章　対立と冗談からみるポライトネス

1. はじめに

相手の発話に対する＜不同意＞の表明や相手の思考や行動に対するけなしや非難のような＜否定的評価＞の発話は、言い争いによく見られる発話行為で、あからさまな＜不同意＞や＜否定的評価＞は相手との「対立」関係を形成する。B&L（1987）のポライトネス理論の観点からみると、＜不同意＞や＜否定的評価＞は、侵害されたくないネガティブ・フェイスと好ましく思われたいというポジティブ・フェイスの両方を侵害するFTA（Face Threatening Act）であり、インポライトな行為として捉えられる。しかし、親密な関係を構築してきた友人同士の会話では、（1）のように相手の意見や感情に対して不同意を表したり、相手の思考や行動に対して否定的な評価を行ったりすることがしばしばある。

(1)会話MK3【日本に就職するKBM5が韓国に帰ってくることについて】

01　KBM5:나는 외국으로 취업을 하기 때문에 남은 나머지 시간을 한국에서 보내고

02　　싶어@ （2.0） 만나야 될 사람들이 많어 유럽으로 가면 그것도 그렇고 가족하

03　　고 지낼 시간이 없단 말야(私は外国に就職するから残った時間は韓国で過ごしたい@（2.0）会わなければならない人が多い（（旅行で））ヨーロッパに行くとそれもそうだし　家族と過ごす時間がないんだよ)

04 →KCM6:<u>존</u>나 가깝잖아 맨날 오면 되지 주말마다(（<u>すご</u>く近いんでしょう　しょっちゅう帰ってきたらいいでしょう　毎週末)

05 →KBM5:그래도 해외에서 많아 봤자 일년에 세네번이야 많아 봤자(でも　海外からしょっちゅうっていっても一年に3、4回だよ　しょっちゅうっていっても)

06 →KCM6:에유: 니가 시간만 있으면 올 수 있어 돈이 많이 나가서 그렇지＝(はあ:あなたが時間さえあれば来れるよ　お金がかかるのがあれだけど＝)

07 →KBM5:＝돈 아껴야지 그러니까 뭐 저가항공 저번처럼 18만원 하면 올 수 있지 올 수 있기야(＝お金貯めないと　だから　まあ　格安航空　前みたいに18万ウォンなら来られるけど)

（1）のように、相互行為の中で＜不同意＞や＜否定的評価＞が相手との一時的な「対立」関係を形成した場合、会話の参加者は「対立」を解決するためのストラテジーが必要となる。一方、（2）のように、表面上インポライトに見える＜不同意＞や＜否定的評価＞が、実は相手のフェイスを傷つけることを目的とせず、友人同士の会話で参加者は「対立」を「冗談」として捉え、親密さを表すストラテジーとして用いる場合もある（Culpeper 2011、Pilkington 1998、大津 2004、今田 2015）。

(2)会話MJ4【花火について】

01　JDM7:なんも気にせずに
02　JYM8:なるほ［どな　じん］
03　JDM7:　　［「そっち行っちゃ］だめですよ:」みたいな　こっちでっつって（0.3）
04　　めっちゃよか［った］
05 →JYM8:　　［まあ］　でも　ちょっとびくびくしながら花火すんのも　まあ
06　　夏の風物詩っちゃ［風物詩やろ］
07 →JDM7:　　［@　@　@　@］でも　もう　なんか　そこ通り過ぎた＜@感じや
08　　ねん@＞　@　＜@もうそのへんは　なんか@＞　中高生あたりやろ@
09　JYM8:「は::い」みたいな　もう今やったら「は:い　ごめんなさい」で終わるけどな

（2）のように＜不同意＞や＜否定的評価＞が笑いを生み出す「冗談」として用いられているのであれば、これらの発話は相手のポジティブ・フェイスに配慮したPPSに相当する。また、相手のフェイスを傷つけることを目的としない見せかけのインポライトネス（mock impoliteness）としても捉えられる（Culpeper 2011）。このように、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は相互行為の中で「対立」関係を形成したり「冗談」として用いられたりする。

以上のように、友人同士の会話における＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は両面性を持っている。本章では、日韓の友人同士の会話における＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話に着目し、「対立」と「冗談」の相互行為にはどのような類似点と相違点があるかを明らかにすることを目的とする。具体的には、日韓の男性同士の会話と女性同士の会話における＜不同意＞と＜否定的評価＞に焦点を当て、①これらの発話の相対使用頻度と、②＜

不同意＞と＜否定的評価＞の対象になる事柄、③「冗談」の合図とフレーム構築にはどのような類似点と相違点があるのかを分析する。また、これらの発話が会話の中で、④一時的な「対立」を形成した場合の相互行為、⑤「冗談」の相互行為に見られる類似点と相違点を明らかにする。

本章の構成としては、まず、§2で会話における「対立」と「冗談」に関する研究をまとめ、本章の研究目的について述べる。次いで、§3では、分析の対象について説明し、§4では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の使用実態について述べる。§5は日韓差が顕著にみられる現象について、また§6はジェンダー差が顕著にみられる現象について述べる。§7では分析結果をまとめ、§8で考察を行う。§9で本章のまとめを行う。

2. 先行研究と研究目的

ここでは、まず、§2.1で＜不同意＞や＜否定的評価＞に関する先行研究について述べた後、§2.2で、本章の研究目的について述べる。

2.1 先行研究

会話は基本的に「質問 - 応答」「依頼 - 受諾/拒否」などのような第1ペア部分と第2ペア部分という「隣接ペア（adjacency pair）」によって構成される（Schegloff & Sacks 1973）。第1ペア部分に対する第2ペア部分のあり方は一つではない場合が多く、たとえば、「依頼-受諾」と「依頼-拒否」という二つの連鎖があり得る。この場合、「受諾」は選好（preferred）される応答であるのに対し、「拒否」は、選好されない（dispreferred）応答である（Levinson 1983）。Levinson（1983）によると、選好されない応答が発話される場合に見られる特徴には、沈黙や前置き、なぜ選好されない応答をするのかに関する説明、第1ペア部分に応じた間接的な拒否がある。本稿で取り上げる＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は、＜同意＞と＜肯定的評価＞と対になる選好されない応答であり、これらの発話は相手のフェイスを侵害し「対立」関係を形成する場合がある。

「対立」に関する研究は、大きく三つの観点から行われてきた。まず、論争や討論の場面における対立行為を分析し、そこで用いられる表現形式に焦点を当てた研究（Maynard 1985、本田 1999）、 ジェンダーと日韓差の観点から不同意や反論を表明する発話を分析した研究（Goodwin 1980、Holmes 1995、Pilkington 1998、 林 2010bなど）、また、会話の中で「対立」が「冗談」になる場合を分析した研究（Schiffrin 1984、 Straehle 1993、

大津 2004、今田 2015）であるが、ジョーンズ（1993）によると、論争や討論の場面での「対立」とは異なって、日常的な会話では遊びとしての「対立」が観察されることが多い。以下、§2.1.1で、相互行為の中で「対立」を形成する不同意や反論また否定的評価の発話を分析した研究についてまとめ、§2.1.2で、「対立」を表す発話が相互行為の中でどのように「冗談」として捉えられるのかを分析した研究を中心にまとめる。

2.1.1　会話における対立

まず、ポライトネス理論の観点から様々な場面における男女の言語使用を分析したHolmes（1995）では、女性に比べ、男性は相手に対する不同意や反論を表現することが多いと指摘されている。このような傾向は、子供の会話でも観察され、Goodwin（1980）によると女児同士の会話に比べ、男児同士の会話では、相手にあからさまな反論を表したり、相手を脅したりすることが多いという。このように相手に不同意を表す発話にもジェンダーによる差が見られる。Maltz and Borker（1982）によると、男性に比べ女性は不同意を表す発話を弱める傾向が強い。Pilkington（1998）は、男性同士の会話では、俗語の使用やあからさまな反論が多いと指摘しており、男性同士の会話におけるあからさまな反論は、親密感を表すストラテジーとして用いられる場合もあると述べている。男性のラグビーチームの会話を分析したKuiper（1992）でも、性的な侮辱はグループの連帯感を強めるストラテジーとして用いられていることが指摘されている。また、会話における俗語の使用を分析したDaly et al.（2004）は、特定の文脈では攻撃的だと捉えられる俗語の使用は、男性同士の会話では親密な人間関係の証拠として現れると指摘している。

次に、日韓の否定的評価の話し方やFTA補償行為を分析した林（2010b）は、「相手の第一印象について」、「相手のくせについて」という話題を提供して行われた友人同士の会話を分析している。林（2015）によると、相手に対して否定的評価を行った後、どのようなFTA補償行為を行っているかに日韓の違いが見られ、日本語母語話者は、相手の否定的評価の後、自身がへりくだることで相手のフェイスを補償しているが、韓国語母語話者は、相手の他の側面を褒めることで補償を行う。また、林（2010b）は、会話の中で否定的評価を発話する際の話し手のストラテジーとして、「韻律操作」、「感情や程度の誇張」、「笑い」を挙げており、これは相手に冗談・遊びであることを示すものであると指

摘している。

以上のように、俗語を用いて攻撃的な態度を示したり、相手に反論を表したりする行為が逆に連帯感を強めたり、親密感を表す冗談になることは、自由会話における「対立」を分析したSchiffrin（1984）でも指摘されている。Schiffrin（1984）によると会話の参加者は互いに「対立」して反論したりするが、それは深刻な言い争いではなく、親密感を表す方法である。このように、インフォーマルな場面における「対立」は、相手のポジティブ・フェイスに配慮した冗談として用いられる場合もあるのである。同様の現象は多くの先行研究で指摘されている。たとえば、日本語のフォーマルな座談会やテレビ番組の討論会における対立表明のストラテジーと、日常的な日本語の会話で見られる対立表明のストラテジーを比較したジョーンズ（1993）は、実際の会話では、フォーマルな場面で用いられた対立表明のストラテジーが使われることはまれであり、日常的な会話の参加者は「遊び」のように話し合うふりをして反論するストラテジーが見られると指摘している。また、自由会話における「対立」を分析したSchiffrin（1984）も、会話の参加者は互いに「対立」し反論したりするが、それは深刻な言い争いではなく、親密感を表す方法であると指摘している。 以上のように会話における対立表明の発話は、二つの種類がある。ひとつは、「対立」の発話が相手のフェイスを侵害する場合で、もうひとつは「冗談」として用いられている場合である。§2.1.2では、会話の中で「対立」がどのようにして「冗談」になるのかを分析した研究について述べる。

2.1.2　対立が冗談になる場合の要因

会話における「対立」がどのような場合に「冗談」になるのかという現象を説明するためStraehle（1993）と大津（2004）は、フレームの概念を採用している。フレームは、Bateson（1972）による概念である。Goffman（1973:21）は、フレームとは、無意味な出来事の流れから、何等かの意味のあるものへ変化させる働きをもつものであり、連続する出来事の中で一部を組織立てて経験する際の一種の原理であるとしている。また、Tannen & Wallat（1993）はフレームを次のように定義している。

The interactive notion of frame, then, refers to a sense of what activity is being engaged in, how speakers mean what they say.　（Tannen & Wallat 1993:60）

Tannen & Wallat（1993:60）によると、発話を理解するために聞き手（話し手）はいかなるフレームが意図されたかを理解する必要がある。たとえば、ある発話が冗談であるか、攻撃（fighting）であるかもそうである。冗談として用いた発話が侮辱に解釈された場合は喧嘩の原因になる。会話における意味は、それぞれの発話の情報的あるいは指示的内容だけではなく、メタ・メッセージまた会話の参加者が互いに対する態度や参加者が話している場面によって伝わる（Tannen 1986）。メタ・メッセージとは、会話の参加者の相手に対する気持ちや相互行為についてのメッセージである。Bateson（1972）は、メタ・メッセージを考慮しなければ、いかなるメッセージも解釈できないと指摘している。

Straehle（1993）は、メタ・メッセージとフレームは、会話の参加者が発するコンテキスト化の合図（contextualization cues）を通じて理解されると指摘しており、またGumperz（1982）によると、コンテキスト化の合図は、相互行為の中でフレーム化を可能にしたり、個人の発話が何であるか（冗談か真剣かなど）を理解できるようにしたりする要素であるとし、具体的な例として「コード・スイッチング」、「韻律的現象」、「定型表現」などを挙げている。

Straehle（1993）と大津（2004）は、「対立」を形成する発話を「冗談」のフレームに移行させるため、話し手は「これは遊びだ」という「メタ・メッセージ」を発すると指摘している。まず、会話の中でからかい（teasing）を分析したStraehle（1993）は、からかいに見られるコンテキスト化の合図として「韻律」、「笑い」、「代名詞」、「定型、パターン化（繰り返される）」を挙げており、日本語の会話の場合は、大津（2004、2007）によると、「発話の繰り返し」、「韻律の操作」、「感動詞の使用」、「スタイル・スイッチング」、「笑い」が「冗談」であることを伝えるコンテキスト化の合図である。また、提案に対して反対表明が行われる際の発話を分析した椙本（2004）では、反対表明の発話を「冗談」のように伝えるため、笑いながら発話したり、極端にくだけた表現を用いたりすることが指摘されている。「冗談」を発する側は、これらのコンテキスト化の合図を用いることで会話における「対立」が「冗談」であることを相手に伝え、相手もそれを認めたとき「冗談」フレームが構築されることになる。千々岩（2013）では、申し出や助言などの手続きを借用したからかいは、笑いによってその発話がからかいであることが示されており、受け手側に主に拒否する行為スペースを与えている点で、からかいは組織化され

た相互行為であると指摘されている。

以上のように、相手に対する「対立」の表明は、相手のフェイスを侵害する場合もあれば、コンテキスト化の合図を伴って「冗談」として用いられ、（2）のように会話の参加者が「対立」を楽しんでいる場合もある。相互行為におけるジェンダー差を探った研究では、相手の発話に対する不同意や否定的評価の発話の使用においては相対的なジェンダー差はあること、また男性同士の会話では反論や俗語の使用が連帯感を強めていることなどが明らかにされているものの、不同意や反論または否定的評価が相手と「対立」を形成した場合、男女が「対立」をどのように解決していくのかという観点からはまだ分析されておらず、これらの発話が「冗談」として相互行為の中でどのように用いられているかというプロセスまでは詳しく分析されていない。また、日韓男女の会話で、どのような事柄が＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の対象になっており、これらの発話が「冗談」として用いられた場合、相手に「冗談」であることを伝えるコンテキスト化の合図の使用にはどのような類似点と相違点があるのかという点についてはまだ明らかではない。

2.2　研究目的

本章では、日韓の女性同士と男性同士の会話における＜不同意＞と＜否定的評価＞に注目し、これらの発話の相対使用頻度、および＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になる事柄についての類似点と相違点について分析した後、二つの相互行為に焦点を当て分析を行う。まずは、＜不同意＞と＜否定的評価＞が「対立」関係を形成した場合、会話の参加者が互いのフェイスにどのように配慮し「対立」を解決していくかという観点からその相互行為を分析する。そして、これらの発話が「冗談」というPPSとして用いられた場合の相互行為に注目し、日韓の女性同士と男性同士の会話に見られる類似点と相違点は何かを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の点である。

ⅰ．日韓男女の会話で＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は、どのくらい用いられているのか。

ⅱ．日韓男女の会話でどのような事柄が＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になっているのか。

ⅲ．＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が「対立」を形成する場合、日韓男女は「対立」を解決するため、どのようなストラテジーを用いるか。

ⅳ．＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話を「冗談」としてどのように用いており、日韓男女の相互行為にはどのような類似点と相違点が見られるのか。

ⅴ．日韓男女の会話における＜不同意＞と＜否定的評価＞による「冗談」フレーム構築の方法には、どのような類似点と相違点があるのか。

先に分析結果を述べると、ⅰ、ⅲ、ⅳを分析した結果、ジェンダーによる相違点があることが確認できた。一方、ⅱとⅴにおいては、日韓差が見られた。§4では、まず、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の使用実態について述べ、§5では、日韓差が顕著であるⅱとⅴの分析結果について述べる。§6ではジェンダー差が顕著であるⅰ、ⅲ、ⅳの分析結果について述べる。§7では分析結果をまとめ、§8では以下の2点について考察を行う。

Ⅰ．「冗談」フレーム構築の仕方や「冗談」の対象に見られる日韓差は、どこから生じているのか。

Ⅱ．「対立」を解決するための相互行為と「冗談」の相互行為にジェンダーによる相違点が見られる理由は何か。

3.　分析の対象

本章では、友人同士の会話の中で用いられた「対立」を形成する発話として＜不同意＞と＜否定的評価＞に注目し、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が会話の中で一時的な「対立」関係を形成する場合と「冗談」として用いられている場合のそれぞれの相互行為を分析対象とする。

まず、本研究における＜不同意＞と＜否定的評価＞の定義と分類基準について説明した後（§3.1）、＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象の分類基準について説明する（§3.2）。本研究で「対立」と「冗談」をどのように認定したかについて述べる（§3.3）。

3.1　＜不同意＞と＜否定的評価＞の定義と分類基準

本研究における＜不同意＞と＜否定的評価＞の定義と分類基準は以下のとおりとする。

・＜不同意＞

＜不同意＞の発話は、相手の先行発話について、同様な意見あるいは感情を持っておらず、反対あるいは納得していないことを表す発話であるとする。＜不同意＞は、先行する相手の発話に対するものであるため、＜不同意＞の対象になる相手の先行発話が必ず必要になる。（（3）の不同意の02行目の発話は、先行する01行目の発話に対するものである）

(3)会話FJ1【ドラマのセリフについて】

01 →JAF2:かっこいい:

02 →JOF1:＜@かっこよくないよ　別に@＞　@　＞＜@好きなの?@＞＜

03　JAF2:＜@決めゼリフ?@＞

椙本（2004）によると、反対の伝え方には、（3）のように断定的な発話で反対を表すもの、「いや、でも」のような談話標識が伴うもの、自らの発話を繰り返し強調するもの、反対の理由を述べるもの、「気がする」などの表現や問いかけることで意見の押し付けを弱めるものがあるが、＜不同意＞の発話には、このような特徴が見られ、Levinson（1983）が指摘したように、選好されない応答であるため、沈黙が観察されることも多い。

・＜否定的評価＞

林（2015）は、否定的評価を「会話の相手と、相手に属する人/モノ/コトに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけ、それを表現すること」と定義し、けなしや批判、冗談（批判的な内容を含むもの）、ツッコミ等の発話行為すべてを含み、否定的評価の発話として認定している。本稿でも、＜否定的評価＞は、相手の思考や行動あるいは性格や所有物などについて、マイナス評価を表す発話であるとするが、＜否定的評価＞の発話は、＜不同意＞とは異なって相手の先行発話に対して反対を表すものではなく、相手の性格や発想あるいは行動や所有物などに対して低く価値づけて否定的に評価する発話であるとする。（（4）は、相手の行動（寝たという行動）に対する否定的評価の発話である。）

(4)会話FJ2【映画について】

01　JKF4:アメリ　アメ［リとか見た］ことないん?

02　JSF3:　　［あ　アメリ］　　アメリ見たけど寝た

03 →JKF4:@@　＜@あ::　本当あかんな@＞

04　JSF3:@@　アメリって　あれ　＜@声　あんまない感じだけ?@＞

以上のような発話を＜不同意＞と＜否定的評価＞に分類し、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話後の会話の参加者の相互行為を分析対象とする。

3.2　＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象

＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が具体的にどのような事柄に対するものであるかを分析するためには、＜不同意＞と＜否定的評価＞発話の対象がどのようなものであるかを分類する必要がある。会話における悪態の対象を分析した研究には、関崎（2009）がある。以下に、関崎（2009）の各分類と定義を示す。

表1 対象の分類

悪態の対象	定義
①所有物	相手が持っている、または身に着けている物理的な物。
②外見	外から見た人の姿・容貌のうち、変わらない、うまれつきの顔や体型などの容貌。
③外見の変化	外から見た人の姿・容貌のうち、一時的に変化した顔や体型などの容貌。
④才能	ある個人の一定の素質、または訓練によって得られた能力そのもの。
⑤遂行	素質や才能を用いて何かに達し、成功するために実行する過程や結果。
⑥性格	各個人に特有の、ある程度持続的な、感情・意思の面での傾向や性質そのもの。行動を伴わないもの。
⑦行動	性格から現れるような行い、あるいは性格が分かるような振る舞い。
⑧思考	実験の会話における当該の発話の中に現れた相手の信念や想像。動作を伴わないもの。
⑨その他	①～⑧に該当しないもの。

（関崎 2009:77）

関崎（2009）の分類は、「ほめ」を分析した金（2005）の「ほめ」の対象の定義に改変を加え、そこに「思考」という分類を加えたものである。関崎（2009）は「ほめ」は悪態と同じく相手を評価する言語行動であり、その評価が肯定的であるという点において悪態と対極に位置づけられると述べている。本稿で分析を行う＜不同意＞と＜否定的評価＞も、肯定的な評価の発話ではないという点で、関崎（2009）の言う悪態と通じると考え、関崎

（2009）の分類に従って分析を行うことにする。

3.3　「対立」と「冗談」の認定

§2.1.2で述べたように、相互行為の中で＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は、「対立」を形成したり、「冗談」として用いられたりする。これらの発話が「冗談」として用いられている場合には、笑い、音の伸ばしや声の大きさと速さを調整した音律の操作、発話の繰り返しや感動詞の使用による感情や程度の誇張といったコンテキスト化の合図が観察されることが多い。「冗談」を言う側は、コンテキスト化の合図を用いることで「対立」が「冗談」であることを相手に伝えるが、Straehle（1993）が指摘したように、これらの発話が「冗談」であるかどうかは、受け手側が相手の発話を「冗談」として認めているかどうかが大きく関わる。受け手側が＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話を真面目に捉えた場合、これらの発話は「対立」関係を形成することになるが、これらの発話を受け手が「冗談」として認める場合は「冗談」フレームが構築されることになる。

このように、＜不同意＞と＜否定的評価＞が「対立」関係を形成するか「冗談」として認められるかは、会話の参加者の共同作業で行われるのである。

本研究では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の相互行為に注目し、受け手側が＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話に何の反応も見せなかったり、その発話を真面目に捉えたりする場合の発話は「対立」を形成した発話として分類する。笑いが生じたり、その発話を深刻に捉えていないような態度を示したりする場合は「冗談」の発話とする。

4.　＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の使用実態

ここでは日韓男女の会話において＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の使用実態について述べる。表2は、一人の話者が発話権を維持して語るソロパートと二人の会話の参加者が共同で話し合うデュオパートにおける＜不同意＞や＜否定的評価＞の使用数を示したものである。

表2 それぞれのパートにおける＜不同意＞と＜否定的評価＞

	JF		JM		日本
	ソロ	デュオ	ソロ	デュオ	
不同意	-	10	5	35	50
否定的評価	2	6	9	19	36
計	18		68		86
	KF		KM		韓国
	ソロ	デュオ	ソロ	デュオ	
不同意	-	9	11	32	52
否定的評価	1	19	3	26	49
計	29		72		101

表2によって、＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話の使用傾向を見てみると、以下のことが確認できる。

(a) ＜不同意＞や＜否定的評価＞は、会話の参加者間の発話数に大きな差が見られず、互いに意見や感情を話し合う、デュオパートで発話されることが多い。

(b) ＜否定的評価＞に比べ、＜不同意＞が若干多く観察されている。

(c) 日本語の会話に比べ、韓国語の会話で＜不同意＞や＜否定的評価＞が多く観察されており、特に＜否定的評価＞は韓国語の会話で多く用いられている傾向がある。

(d) ＜不同意＞や＜否定的評価＞は、女性同士の会話に比べて男性同士の会話で多く観察される。

(e) 女性同士の会話で＜不同意＞の発話は、デュオパートでしか観察されないのに対し、男性同士の会話では、ソロパートでも観察される。

以上のように、日韓男女の会話における＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話の使用傾向には類似点が見られる一方で、日韓差とジェンダー差も見られる。

以下、§5では日韓差の観点から、また§6はジェンダー差の観点からその相違点を詳しく述べる

5. 日韓差：冗談フレーム構築と冗談の種類

ここでは、まず、§5.1で日韓差が顕著に見られたコンテキスト化の合図の使用、「冗談」フレーム構築の仕方について述べる。§5.2では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の対

象になる事柄と「冗談」の種類にどのような日韓差が観察されるかについて述べる。

5.1　冗談フレーム構築：日韓による相違

＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話が相手を笑わせ、会話を盛り上げようとして発話された場合、それは「冗談」という「メタ・メッセージ」を含んだ発話として解釈できる。＜不同意＞と＜否定的評価＞が「冗談」として用いられている場合、コンテキスト化の合図が観察される。以下では、「冗談」であることを表すコンテキスト化の合図の使用（§5.1.1）と「冗談」フレーム構築の仕方（§5.1.2）にどのような日韓差が見られたかについて述べる。

5.1.1　冗談とコンテキスト化の合図

日韓共に、友人同士の自由会話で＜不同意＞と＜否定的評価＞が笑いを生み出す「冗談」として用いられている場合、これは「冗談」だということを伝えるため、コンテキスト化の合図が観察される。日韓共に観察される「冗談」の合図には、笑い、音の伸ばし、声の大きさや速さを調整した音律の操作、発話の繰り返しや感動詞の使用による感情や程度の誇張があるが、以下では、日韓差の観点から日本語の会話と韓国語の会話で見られた相違点を中心に述べる。

5.1.1.1　日本語の会話における「冗談」の合図

まず、韓国語の会話では観察されず、日本語の会話で特徴的に観察された合図について述べる。

・スタイル・シフト

日本語の会話に見られた「冗談」の合図には、普通体から丁寧体へのスタイルシフトがある。（5）を見てみよう。

(5)会話FJ1【漫画作家について】

01　JOF1:私やったら飽きるわ＝

02　JAF2:＝飽きるわ　てゆうか　おち考えてないんちゃう　もう　む［しろ］

03　JOF1:　　［@］@いや

04 →　　おち＜@考えてるやろ@＞　［いや］　そこはあれですよ

05　JAF2:　　［@@］

06 →JOF1:芸術家ですから　考え［てますよ］

07　JAF2:　　［でも　コナンと］か読んどったら　これ　絶対おちもうな

08　　いわと思ってるもん

09　JOF1:あ　そう

（5）の04と06行目の JOF1の発話を見てみると、「それはあれですよ」「考えてますよ」と待遇レベルをシフトした表現が用いられていることが確認できる。日本語の会話でスタイルシフトが「冗談」であることを表すことは、大津（2004、2007）でも指摘されている。大津（2007）は、会話の参加者は話し方を変えることで、相手の笑いを引き出そうとすると述べている。

・定型的な表現

また、日本語の会話では、（6）のように「なんでやねん」という発話が笑いとともに発話され、「冗談」であることを伝えている用例が多く観察される。

(6)会話MJ1【高校の思い出について】

01　JAM1:なんか　高校の思い出って大日本青年体操くらいしかない

02 →JBM2:なにそれ　あ　@@@@　＜@なんでやねん　なんでやねん@＞

03　JAM1:あれ　＜@＃（（高校名））校の特徴でしょう@＞　最大の特徴だと思って

小矢野（2004）によると、相手をつっこむ「なんでやねん」という発話には、相手の発話内容に対して、非難しつつも驚嘆し、かつあきれるといった複合感情が託されている。本研究で扱っている会話の参加者である関西出身の20代の話者にも友人の話につっこみを入れるような大阪的な談話特徴が観察されており、「なんでやねん」という発話が「冗談」

を表す定型的な表現として用いられている。

5.1.1.2　韓国語の会話における「冗談」の合図

次に、韓国語の会話に見られた特徴について述べる。

・ 人称代名詞シフト

韓国語の会話では、（7）のように、＜否定的評価＞を発話する際、相手を三人称で言及して「冗談」であることを表す用例が観察された。

(7)会話MK2【大統領の投票について】

01　KDM4:해야지 나 ＃＃＃ 할건데

（するよ　私＃＃＃（（政治家の名前））に投票するけど）

02 →KHM3:아 씨발 ＞하지마 하지마＜(あ　くそ　＞するな　するな＜)

03　KDM4:우리 정치랑 안 맞잖아 @@@(私たち政治とは合わないんじゃない@@@)

04 →KHM3:이 사람 안되겠네 왜 또 ＃＃＃야 거기는

（この人だめだね　何で＃＃＃（（政治家の名前））だ　そっちは）

（7）のように、韓国語の会話では、相手に対する否定的評価が「冗談」であることを伝えるコンテキスト化の合図として、相手を「この人」と距離を置く表現を用いている用例が見られる。

・合図の不使用

日本語の会話とは異なって、韓国語の会話では合図の使用が観察されないものの、＜不同意＞や＜否定的評価＞を受け手が「冗談」として受け入れている用例が多く観察される。

(8)会話MK2【彼女について】

01　KDM4:능력자라고 할 수 있지（2.0）잘나가는거지@@(能力のある人っていえる（2.0）すごいっていえる@@））

02 →KHM3:꼭 그러더라 근데 씨발 맨날 내가 좀 여자친구 좀 소개시켜주라고 좀 친

03　　하게 지내자고 막 만나자고 그러면은 꼭 씨발 깨져가지고(いつもそうだね　で

も　くそ　いつも私がちょっと彼女紹介してくれって　ちょっと仲良くしようって会おうって言ったら　必ず　くそ　別れてて)

04　KDM4:아@@＜@그러네@＞@(あ@@　＜@そうだね@＞@)

05　KHM3:@@지랄 맨날 씨발 아주 (1.1) 어? (2.0) 일부러 일부러 그러는거 아니지?
(@@ふざけている　いつも　くそ (1.1)　ねえ (2.0)　わざと　わざと　そうするんじゃないよな？)

06　KDM4:타이밍이 안 좋은거지@@(タイミングが悪いんだよ@@)

07　KHM3:@@

(8) の02と03行目の発話を見てみると、KHM3はKDM4が女性を紹介してくれないことについて批判していることが分かる。KHM3の発話には、笑いが観察されておらず、むしろ深刻な音調で発話されているが、KHM3の批判をKDM4は笑いながら受け入れている（04行）。その後、 KHM3とKDM4は、互いに笑いながら KHM3の批判が深刻なものではなく、「冗談」であることを認めているような相互行為が行われている（05～07行）。韓国語の会話では、(8) のように「冗談」を言う側の発話に通常と異なった合図が観察されないことがある。

以上、日本語と韓国語の会話を比較した結果、「冗談」であることを伝えるために、日本語の会話では、普通体から丁寧体へのスタイルシフトや「なんでやねん」という定型的な発話が用いられていること、韓国語の会話では、人称代名詞のシフトがコンテキスト化の合図として用いられる一方、(8) のようにコンテキスト化の合図が観察されず、普通に発話され、その発話を聞き手が「冗談」として認めているような用例が多く観察されることがわかった。この結果は、日韓の「冗談」フレームの仕方に差があることを示唆する。以下では日韓の「冗談」フレーム構築の方法の違いについてさらに詳細に述べる。

5.1.2　フレーム構築プロセス

会話の参加者が「冗談」フレームを構築しているかどうかは、＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話後の参加者の相互行為に笑いが伴い、互いにこれらの発話を「冗談」として認めているかどうかが問題になる。つまり、この発話は攻撃ではなく「冗談」であることを表すため、「冗談」を用いる側は上述したようなコンテキスト化の合図を用いるが、受け手がそれを「冗談」として受け入れた場合のみ「冗談」フレームが構築されることになる。

「冗談」は、相手を面白がらせることが目的となるため、「冗談」フレームの中のどこ

かで笑いが生じることが特徴である。Norrick（1993）によると笑いは、冗談や冗談に対する反応として用いられるだけではなく、深刻ではないことを表すマーカーとして用いられる場合がより一般的であると指摘している。もちろん、「冗談」の種類は様々であり、笑いを伴わない「冗談」もありうるが、相手のフェイスを侵害する＜不同意＞や＜否定的評価＞が「冗談」として用いられる際には、この発話が深刻ではないことを伝えるため、笑いを伴う用例が多く見られる。また、「冗談」フレームが構築された場合、笑いはそのフレームのどこかで生じることが多い。会話の参加者がどこで笑い、どこで「冗談」であることを認めるかという「冗談」フレーム構築のプロセスには日韓差が見られる。以下では、日本語と韓国語の会話における「冗談」フレーム構築プロセスに見られる特徴について述べる。

5.1.2.1　日本語の場合：明確な合図の使用による構築

日本語の会話で＜不同意＞や＜否定的発話＞が「冗談」として発話される場合、「冗談」を発する側の発話は二つに分けられる。一つは笑いながら「冗談」を言う場合と「冗談」の発話前後すぐに笑いが伴う場合である。

(9)会話FJ1【アニメーションの内容について】

01　JAF2:ふん　仲間助けてみたいな［仲間］と戦って

02　JOF1:　　［なんか］　　あの　だれかと別れて

03　JAF2:あ::

04　JOF1:「ありがとうございます」@@

05 →JAF2:@＜@ちょっと今ばかにしてた感じの@＞

06　JOF1:そ　そ　そんなことないよ@@　そんなことないで　う：ん

（9）は、＜否定的評価＞が「冗談」として用いられている用例であるが、（9）のように日本語の会話で見られる「冗談」フレームは、「冗談」を行う側つまり「対立」を表す側が、発話と共に笑うことで始まる。「冗談」を発する側の参加者は、笑うことで明確に今の＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話は「冗談」であるというメタ・メッセージを伝え、笑う所であることを明示する。そして、誤解することなくタ・メッセージを受け取った相

手は、「冗談」の発話に対して笑いと共に反応することで、「冗談」フレームが構築される。このように、日本語の会話では「冗談」する側が明確に笑いを伴ったメタ・メッセージを伝え、受け手も誤解することなく「冗談」を認めている用例が殆どである。

以上のように、日本の友人同士の会話では、冗談する側は、自らの＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話が攻撃ではなく、PPSであることを明確に表し、攻撃として解釈されるのをできる限り避けようとした結果、受け手もそれを誤解なく受け取り、「冗談」フレームが構築されている。

5.1.2.2　韓国語の場合：曖昧な合図と受け手からの構築

一方、韓国語の会話では、「冗談」する側が笑いを伴なわず、真面目に＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話を「冗談」として用いる用例が見られる。まず、（10）を見てみよう。

(10)会話FK2【遠い所まで歩くことについて】

01　KHF4:23살 아이는 그냥 걸어서 다녀도 되는 아이야
　　(23歳の子は歩いて行ってもいいよ)

02 →KSF3:웃기고 있네（0.8）걸으면 얼마나 걸리냐? 분당까지(ふざけている（0.8）
　　歩いたらどのくらいかかるの　盆唐まで)

03　KHF4:@몰라 ＜@야 미쳤나 해보겠어?@＞(@分からない＜@ねえ　狂ってるの
　　歩いてみるか@＞（（歩くはずがないという意味））)

04　KSF3:반나절@ 넘게 걸리겠지?(半日@　以上かかるよね)

05　KHF4:＜@알아나 보겠어?@＞(＜@調べてみるか@＞（（歩けない距離なので、調
　　べるわけがないという意味））)

06　KSF3:@@@

（10）を見てみると、02行目でKSF3は、「ふさけている」と自らの感情を誇張しているが、笑いを伴っておらず、音律の面からも、真面目に批判しているように聞こえる。しかし、その受け手であるKHF4は笑いを伴った反応を返している（03行）。つまり、受け手であるKHF4は、これらの発話を「冗談」として受け取っているということであり、そ

の後の二人の相互行為には笑いを伴う発話の連鎖が観察される点で、参加者は「冗談」フレームを構築していると言える。

日韓で異なる点は、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では＜不同意＞や＜否定的評価＞が真面目に発話され、（10）のように「冗談」の受け手がその発話を「冗談」として認めることで、「冗談」フレームが構築されるという点である。

しかし、真面目に＜不同意＞をしたり、＜否定的評価＞をしたりするのは、誤解を招く危険性が高く、発話する側は「冗談」として＜不同意＞や＜否定的評価＞を用いたとしても、受け手がそれを「冗談」として認めないこともありうる。そのため、韓国語の会話では、（11）と（12）のような＜否定的評価＞に言い訳が続くといった用例も観察されている。

(11)会話MK1【Facebookに乗せた内容について】

01　KGM1:나 쓴게 이거야 아까 글 쓴거 아까 빡쳐가지고(私乗せたのこれだよ　先書いていたの　先腹立って)

02 →KAM2:통합 시작한지（3.0）（（읽는중））　간장된장은 머야? 좀 더 획기적인거

03　　없어? 획기적인거(統合を始めて（3.0）（（読んでいる））　くぞぐそ（（くそと類似した発音））ってなんだ　もっと画期的なものない　画期的なもの（（画期的な書き方））)

04 →KGM1:（2.0）이번엔 뭐 획기적으로 똥 싼 거 아니[였어 그냥]（（2.0）今回はなんか　画期的に書いたわけ［ではない　ただ］）

05　KAM2:　　[그래 이런] 것도 똥을 확실하게 싸

06　　야한다 확실하게＝([そう　こんな]ものもちゃんと書かないとだめ　ちゃんと＝)

07 →KGM1:　　＝아냐 나 그거 아냐 그냥 하소연이야 하소연(＝違う　私　それじゃない　単なる嘆きだよ　嘆き)

(12)会話MK2【彼女が出来たことを周りの人にあまり話していないことについて】

01　KDM4:근까 나도 지금 누구한테 내（1.0）주변사람한테 사귄다고 처음 얘기해@（私も今誰かに私の（1.0）周りの人に付き合ってるって初めて話しているんだよ@）

02　KHM3:다들 헤어지면 못 만나는 거 아냐? 그면(皆　別れたら会えないんじゃない

の？　だったら（（KDM4とKDM4の彼女を含んだグループの仲間に会えなくなるのではないかという意味））

03　KDM4:그건 아니지(それは違う)

04 →KHM3:나는 왜 몰라 씨발(何で私は知らない　くそ（（彼女が出来たことを他の人には話していて、どうして自分には話してないかという意味））

05 →KDM4:그건 왜냐하면은(それはなぜかというと)

06　KHM3:어(うん)

07 →KDM4:최[근에](最［近］)

08　KHM3:　[어](［うん］)

09 →KDM4:형이랑 ##이랑 같이 합창이 있어가지고 말을 많이 했어 그러다(兄と＃＃と一緒に合唱があってよく話をしていた　話しながら)

（11）と（12）では＜否定的評価＞が、真面目に発話され、＜否定的評価＞の受け手も真面目に答えていることが分かる。ここで、＜否定的評価＞の受け手の発話を見てみると、（11）でKGM1は、KAM2の＜否定的評価＞に対して、その意図で書いたわけではないと話しており（04と07行）、（12）でKDM4は、他の人はすでに知っている理由を話している（05、07、09行）。ここで、受け手の言い訳を見てみると、（11）の場合、相手の＜否定的評価＞をFTAとして捉え、自らのフェイスを守るための言い訳であることが分かる（04行と07行）。一方、（12）の場合、「何で私は知らない」という相手に対する批判は、「友達なのに何で私には話してくれなかったのか」という言外の意味がある。この場合、＜否定的評価＞の受け手側のKDM4の言い訳（05、07、09行）は、相手のポジティブ・フェイスに配慮した言い訳として解釈できる。このように、受け手が＜否定的評価＞の発話を「冗談」として解釈しない場合、その後に見られる相互行為は、＜否定的評価＞をされた参加者が言い訳をすることで展開される。しかし、これらの＜否定的評価＞も受け手が「冗談」として認めた場合、（13）のように「冗談」フレームが形成される可能性も十分あると思われる。

(13)会話MK2【KDM4の彼女とお酒を飲むことについて】

01 →KHM3:술 취해 갖고 여자친구 먼저 델꼬 간다 그러면 또

（酔っ払って　彼女と先に帰るって言いだすと　また）（（録音の当日の夜、友達とKDM4の彼女とお酒を飲むことにしている））

02 →KDM4:존나 싫어 하겠지?@(すごく嫌がるよな?@)

03　KHM3:@@ 머 잘되라 그래[야지@@]

（@@まあ　うまくいくよう［にっていうしか　@@］）

04　KDM4：　［@　@　@　@］

05　KHM3:존나 싫어해서 머 어떡＜@할꺼야@＞（2.0）　여자친구 술 잘 마셔?

（すごく嫌がって　まあ　どう＜@しようもない@＞（2.0）彼女はお酒飲める？）

このように、日本語の会話に比べ、韓国語の会話における＜不同意＞や＜否定的評価＞は、真面目に発話される場合が多く、これらの発話をどのように受け取るかは、受け手の解釈に任せているような相互行為が観察される。

以上のように、日本語の会話で「冗談」を発する側は、できる限り誤解を避け、自らの発話がPPSであることを明確に伝えるが、韓国語の会話の場合、「冗談」と「批判」の境界が曖昧で、受け手がその発話をどのように受け入れるかが「冗談」フレームの構築に大きく影響しているように思われる。そのため、＜否定的評価＞と言い訳（11、12）のような相互行為が韓国語の会話に見られるのではないかと考えられる。

5.2　冗談の対象とフェイス侵害度

次に、日韓の友人同士の会話でどのような事柄が「冗談」の対象になっているかに注目してみよう。表3は、日韓男女の友人同士の会話で＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になっている事柄を整理したものである。

表3　＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象

	思考	行動	性格	遂行	才能	外見の変化	計
JF	12	4	1	-	1	-	18
JM	56	4	1	6	1	-	68
日本	68　79%	8　9%	2　2%	6　7%	2　2%	0　0%	86
KF	8	10	9	1	-	1	29
KM	50	15	5	2	-	-	72
韓国	58　57%	25　25%	14　14%	3　3%	0　0%	1　1%	101

表3からは、以下のことが確認できる。

(a)　日韓同様に、［思考］が最も高い割合を占めている。

(b)　日本語の会話に比べ、韓国語の会話では［行動］と［性格］が占める割合が高い。

(c)　韓国語の会話に比べ、日本語の会話では［遂行」が占める割合が高く、［才能］が対象になっている用例が観察されているが、韓国語の会話では、［才能］は観察されず、［外見の変化］が対象になっている用例が観察される。

以下では、日韓の会話で「冗談」の対象になる事柄に見られる類似点（§5.2.1）と、相違点（§5.2.2と§5.2.3）について述べる。

5.2.1　日韓の類似点

表3で分かるように、日韓同様に最も高い割合で＜不同意＞や＜否定的評価＞の対象になっているのは［思考］である。これらに分類されている多くの用例は、（14）のように相手の考えや感情に＜不同意＞を表す発話である。

(14)会話FJ1【ドラマのセリフについて】

01　JAF2:かっこいい:

02 →JOF1:＜@かっこよくないよ　別に@＞　@　＞＜@好きなの?@＞＜

03　JAF2:＜@決めゼリフ?@＞

04　JOF1:うん

05　JAF2:＞いや＜@私別に好きじゃない@＞＜　@（2.0）あ　だれやったっけ　なんか

（14）の01行目で JAF2は、ドラマのセリフについて「かっこいい」と自らの考えや感情 を表す評価の発話を用いている。JAF2の発話に対してJOF1は「かっこよくないよ」と＜不同意＞を表明している。05行目の発話で JAF2が自らの意見を取り消していることからも分かるように、［思考］は、［遂行］や［才能］などのような事柄に比べ、相対的に変えやすい事柄であるため、FTAの度合いも低いと言える。このことが＜不同意＞や＜否定的評価＞の対象として［思考］が多く観察されている結果につながっていると考えられる。

5.2.2　日韓差（1）：つっこみとしての冗談

次に日韓差が観察された項目を見てみよう。まず、韓国語の会話に比べ、日本語の男性同士の会話では、何かを達成するための過程や結果である［遂行］が占める割合が高く、ある個人の一定の素質、または訓練によって得られた能力そのものの［才能］が対象になっている用例も観察されている。これらの殆どの用例は、相手の発話内容に対して不合理、非常識などを指摘するいわゆるつっこみ的な「冗談」の発話として用いられている。（15）と（16）を見てみよう。

(15)会話MJ3【［遂行］歴史の勉強について】

01　JKM5:うん　室町時代の足利 なんちゃらは　なんか　家系図さ　教科書に載ってる
02　　やん
03　JNM6:あるある
04　JKM5:あれ　全部覚えて
05 →JNM6:頭悪そう@@@
06　JKM5:@@××ちょっと　ちょっとのやつやで　ちょっとのやつ
07　JNM6:え::

（15）は、 JKM5が高校の時、どのように歴史の勉強をしたかについて話している場面であり、JKM5は教科書の家系図を全部覚えたと話している。ここで、「全部覚えた」という発話がつっこみの対象になり、JNM6は「頭悪そう」と＜否定的評価＞を用いることで笑いを生み出している。

(16)会話FJ2【［才能］映画について】

01　JSF3:誰が出てる？
02　JKF4:ニコール・キッドマンとユアン・マクレガー
03　JSF3:え　面白い系?　な［く系?］
04　JKF4::　　［いや］　違う違う　ミュージカル
05　JSF3:ふ::ん
06 →JKF4:@知らないんすか　なんですか
07　JSF3:@名前は聞いたことある

また、（16）は、相手が知らないことに対して＜否定的評価＞を表すことでつっこみ的な発話が用いられ、笑いを生み出している用例である。

小矢野（2004）によると、ぼけた相手に対して適切につっこみを入れるのが大阪的談話の常識となっており、ぼけとつっこみは大阪的談話の展開において話し手と聞き手双方に了解された暗黙の約束事であるという。日本語の会話で観察された［遂行］と［才能］に対する＜不同意＞や＜否定的評価＞はすべて、（15）と（16）のようにいわゆるつっこみとして用いられ、双方に笑いが見られる相互行為が観察されている。

一方、韓国語の会話では［遂行］の場合、（11）のように聞き手が「冗談」として受け入れず、言い訳をするような用例も観察されている。

5.2.3　日韓差（2）：本質に触れる冗談

次に、日本語の会話に比べ、韓国語の会話で多く観察された［行動］と［性格］の用例を見てみよう。まず、日本語の会話で［行動］と［性格］が対象になっている場合を見る。（17）のように相手が過去の経験談を面白く語る際、相手の非常識な面（01～03行）をつっこむような用例が主に観察される。

(17)会話MJ4【［行動］マンションで非常ベルが鳴ったことについて】

01　JDM7:で　妹に（0.4）「ジュース飲みたない？」っつって　まあ　ちょっと下に降
02　　りる口実を作ってん　おれ10階やねんけど　なんか　わざわざ　なんか　その
03　　「見に行くだけいややな」と思って＝
04 →JYM8:＝＜@普通に行ったらええがな@＞@@
05　JDM7:@@　＜@なんか　分かれへんけど@＞　まあ
06　JYM8:@@　＜@まあ　ちょっと言い訳作［って］@＞
07　JDM7:　　＜@［まあ］　「降りるから　ついでにちょ
08　　っとジュース買ってきたろかな」っつって@＞
09　JYM8:@@@

一方、韓国語の会話では、［行動］の場合、（18）のように相手が今・ここで行った行動が対象になっている（02行）用例が観察される。

(18)会話FK4【［行動］相手の反応について】

01　KCF7:이거 색깔 별로 해 놓으면 이쁘겠따（これ色別に飾っておくときれいよね）

02　KDF8:응（うん）

03 →KCF7:그렇게 성의없게 대답하지마（そんなに適当に答えるな）

04　KDF8: @@ ［@@@］

05　KCF7:　　［@@@］

06　KDF8: ＜@아니@＞ 까는게 힘들어 보여서 （＜@いや@＞むくのか大変そうで）

07　KCF7: ＜@어@＞ @@ （＜@うん@＞@@）

また、韓国語の会話に見られる［性格］の用例の中では、（19）のように現在も続いている相手の本質的な事柄が対象になり、複数のターンにかけて「冗談」フレームの中でやりとりが続いている用例が観察される。

(19)会話FK3【［性格］ KKF6の性格について】

01　KKF6:그럼 지가 만나［던지］（だったら自分が付き合ったら）

02　KYF5: ［@@］@@<@난 니가 그렇게 말하는게 너무 웃겨@>@@@
（［@@］@@＜@私はあなたがそのように話すのがすごく面白い@＞@@@）

03　KKF6:왜::? ×（どうして：：？×）

04 →KYF5:@@＜@아니@＞ 니는 무조건 니가 싫다고 그랬다고 <@남들은@＞ 좋게

05 →　생각하면 <@안돼?@>@(@@＜@いや@＞　あなたは無条件にあなたが嫌いって話したからって言って＜@他の人は@＞いいと考えては＜@だめなの？@＞)

06　KKF6: @@××(@@××)

07　KYF5:어? 사람마다 다 눈이 ＜@틀리잖@＞ 저기 다르잖아(ねえ?　人によって好み＜@ちが@＞　あの　異なるでしょう)

08　KKF6: @＜@내 의지야@＞@(@＜@私の意志だよ@＞@)

09 →KYF5: 그래서 너랑 똑같이 않았다고 ＜@「그럼 지가 만나던가」@＞@@@ ＜@

10　너무 극과 극이야 넌 ［진짜@＞@@@］（それであなたと同じではないっていって＜@「だったら自分が付き合ったら」@＞@@@＜@あまりにも極端的だよあなたは［本当@＞@@@］）

11　KKF6:　　［@@@］

12　KYF5: 근데 누가 너한테 그렇게 얘기 하면@@ 기분 나쁘＜@잖아@＞ ［@@］

（でも人があなたにそう言ったら@@　気に触る＜@でしょう@＞［@@］）

13　KKF6: ［응］　나쁘지@ 난 그런사람 안 만나

（［うん］気に障る@　私はそんな人に会わない）

14　KYF5: @@［@@］

15　KKF6:　　［그래］서 내 주위에 사람이 없잖아

（だから私の周りに人がいないんでしょう）

16 →KYF5: @@지가 당하는 건 ＜@싫고@＞@@ ＜@지가 말하는건 괜찮아@＞@@

（@@自分が言われるのは＜@いやで@＞@@＜自分が言うのは大丈夫@＞@@）

17　KKF6: 그래서 고릴라가 그랬잖아@@

（だからゴリラ（（元彼氏のあだ名））が言ったでしょう@@）

（19）の前の文脈で、KKF6は、自分が好きでない男性に関して、友人が良い人であると話したことについて話している。友人の意見に対して、KKF6は01行目で「だったら自分が付き合ったら」と発話している。それに対して、KYF5は02行目で「私はあなたがそのように話すのがすごく面白い」と大きく笑いながら話している。その後に見られる相互行為を見てみると、KYF5は、「 他の人はいいと考えてはだめなの？（04～05行）」、「あまりにも極端的だよ　あなたは（10行）」、「自分が言われるのはいやで　自分が言うのは大丈夫（16行）」とKKF6の本質的な事柄に関わる性格に対して、笑いながら直接的に＜否定的評価＞の発話を用いている。本質的な事柄に対する＜否定的評価＞は、相対的にフェイス侵害度が高いが、受け手側のKKF6の反応に注目してみると、「私はそんな人に会わない」「だから私の周りに人がいないんでしょう」とKYF5の批判をそのまま受け入れており、17行目からは、自分の性格のせいで前の彼氏とは上手くいかなかったと自己呈示も行っている。KKF6の性格に関わる話題は、KYF5とKKF6が「友達のような人と付き合えばいい」と 結論付けることで終了している。

（18）と（19）に見られるように、韓国語の友人同士の会話では、本質的な事柄に触れる＜否定的評価＞は、親密な関係を壊しそうな行動として捉えられておらず、むしろ（19）のように素直な自己呈示のきっかけになったり、（18）のように笑いを生み出す「冗談」として捉えられたりする傾向が強いと言える。

以上のように、日本語の会話では、相手につっこむような「冗談」が主に観察されている。一方、［行動］や［性格］が対象になっている場合の用例を見てみると、日韓で質的

な差が見られ、韓国語の会話では、相手の本質的な事柄に触れる「冗談」が多く見られている。

6. ジェンダー差：「対立」と「冗談」の相互行為

ここでは、ジェンダー差が顕著である＜不同意＞と＜否定的評価＞の相互行為について述べる。§4で述べたように、＜不同意＞と＜否定的評価＞の使用傾向にはジェンダー差が大きく、これらの発話は男性同士の会話で多く観察される傾向がある。男性同士の会話ではソロパートでも＜不同意＞の発話が用いられているが、女性同士の会話では観察されないという結果が得られている。ここで、日韓男女の会話で、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が相互行為の中で一時的な「対立」を形成した場合と「冗談」として用いられた場合をまとめて示すと表4のようになる。

表4　対立と冗談として用いられた＜不同意＞と＜否定的評価＞

	対立		計		冗談		計		計
	不同意	否定的			不同意	否定的			
JF	5	0	5	**28%**	5	8	13	**72%**	18
KF	5	2	7	**24%**	4	18	22	**76%**	29
JM	25	0	25	**37%**	15	28	43	**63%**	68
KM	26	15	41	**57%**	17	14	31	**43%**	72

表4からは、以下のことが確認できる。

(a) 韓国の男性同士の会話を除いては、＜不同意＞と＜否定的評価＞は「冗談」として用いられる割合が高い。

(b) 女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では＜不同意＞と＜否定的評価＞が「対立」を形成する割合が高い。

以上のような使用傾向は、会話の参加者が＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話を相互行為の中でどのように用いているかということと大きく関連する。以下の§6.1と§6.2では、実例を挙げ具体的に男性同士と女性同士の会話において「対立」と「冗談」の相互行為にどのような特徴が見られたかについて述べる。

6.1　対立後の相互行為

相手に対する＜不同意＞の発話が「冗談」として用いられていない場合、この発話は相手のフェイスを侵害する行為になる。この場合、会話を円滑に進行させるためにFTAを遂行した参加者とフェイスを侵害された参加者の双方が交渉をすることになる。＜不同意＞の発話の後に見られる交渉の相互行為には、大きく二つのパターンがある。まずは、異なる意見を一致させた後、会話を展開させるパターンと、もう一つは異なる意見を一致させず、会話を進行させるパターンである。女性同士の会話では１例を除いては前者のパターンしか見られないが、男性同士の会話では、後者のパターンが多く観察される。以下では、女性同士の会話と男性同士の会話における＜不同意＞の発話後の相互行為にどのような特徴が見られるかについて述べる。

6.1.1　女性同士の会話の場合：交渉による展開と一致

＜不同意＞の発話は、相手と同様な考えを持っていない場合、相手の考えと自らの考えが異なっていることを表すために発話され、＜不同意＞の発話によって会話の参加者は一時的に「対立」することになる。まず、「対立」を解決するため会話の参加者が交渉を行い、二人の異なった意見を一致させるパターンについて述べる。日本の女性同士の会話の用例を見てみよう。

(20)会話FJ2【飛行機が落ちることについて】

01　JKF4::私も倹約しよ　どこ行っていつか何があるか分からん（2.6）　ええ　ＸＸに

02　　私本当に飛行機で死ぬのいややな

03 →JSF3:死なへんって

04 →JKF4:＞落ちたら死ぬやん＜＝

05　JSF3:　　＝落ちたら死ぬけど　よ::言う［やろ］

06　JKF4:　　［@@］

07　JSF3:宝くじが当たる［より］

08　JKF4:　　［あ::］

09　JSF3:落ちにくいって

10　JKF4:え?　宝くじが当たる（0.8）より

11　JSF3:宝くじが当たるより飛行機乗って落ちる方が＝

12 →JKF4:　　＝確率低いか（1.2）そうやんな::

13　　そのためにみんなチェックしてんねん［XXな］

14　JSF3:　　［まあ］怖い思いをするのはあるかもしれ

15　　へんけど

（20）は、飛行機の事故について話している場面である。「対立」は、JSF3の＜不同意＞の発話（03行）から始まるが、＜不同意＞の発話の対象になるのは、先行するJKF4の「飛行機で死ぬのいややな」（02行）である。JSF3の＜不同意＞の発話（03行）に対して、JKF4が＜不同意＞を表す（04行）ことによって二人は一時的に「対立」するが、JSF3が積極的に自らの意見の根拠を話し（05～9行）、JKF4がそれに同意する（12～13行）ことで「対立」は終了している。韓国の女性同士の会話でも（21）のような用例が見られる。

(21)会話FK2【一般的ではない話をする同僚と同僚の彼氏に会うことについて】

01　KHF4:나 마주친다고 만난다고 그럼 내가 얼마나 뻘쭘하냐(私ばったり会うんだって　会うんだって　だったら　私すごく気まずいでしょう)

02 →KSF3:뭐 뻘쭘할건(まあ　気まずいことまでは)

----------ソロパート----------

03　KHF4:아니 그런거 말고도 그것만 얘기한게 아니라[…] 그 남자의 그런 중요한

04　　비밀 비밀이잖아(いや　そんなことだけではなくて　それだけ話したわけではなくて[…]その男のそんな大事な秘密　秘密でしょう)

05　KSF3:그치(そうだよね)

06　KHF4:그런 비밀까지 다 얘기하지 그리고[…] 내가 이런 얘기를 듣고 그 남자친

07　　구랑 마주쳤을때 되게 순순한 마음으로 「어머 안녕하세여 언니 남자친구세

08　　여?」이럴 수 있겠냐(そんな秘密まで全部話す　そして　[…]　私がこんな話を聞いてその男と会った時純粋な気持ちで「あら　こんにちは　お姉さんの彼氏ですか？」って言えるか)

09 →KSF3:그러게(そうだね)

（21）の前の文脈でKHF4は、同僚が彼氏の個人的な事柄まで話していて困ると話している。01行で、KHF4は同僚の彼氏に遭遇する時もあるが、同僚から様々な話を聞かされているため、彼氏に合うと気まずいと話している。ここで「対立」は、01行目の「彼氏に会ったら気まずいでしょう」という発話に対して、KSF3が＜不同意＞を表すことから始まる（02行）。KSF3の＜不同意＞発話はトラブルになり、その後に見られる相互行為でKHF4は、同僚の彼氏に会ったら気まずくなるしかない理由として、その同僚が話したことをより具体的に物語っている（03～04行、06～08行）。 KHF4が気まずくなるしかない理由を語ることからも分かるように、KHF4が伝えたかったのは「同様に彼氏の個人的な事柄まで聞かされるのが嫌だ」ということであるが、より具体的な話を聞いたKSF3は、自らの意見を修正し、KHF4に同意していることを表している（09行）。

（20）と同様に（21）も、会話の参加者は互いの異なった意見を一致させることで「対立」を終了させている。このように、女性同士の会話で＜不同意＞の発話は、単なる意見の提示として捉えられることはなく、解決すべきトラブルになる。そして、＜不同意＞の発話に続く女性同士の相互行為は、FTA を遂行した参加者あるいはフェイスを侵害された参加者の一方が、そのような考えや感情を持つようになった経緯や理由などについて積極的に話し、一方がそれに同意するというパターンが観察されている。

6.1.2　男性同士の会話の場合：交渉の失敗と展開

次に、男性同士の会話では、相手との意見差を縮め、一致させようとする交渉は見られるものの、意見の一致までは達成されず、曖昧な反応を見せ「対立」を緩和する用例（§6.1.2.1）と、相手の＜不同意＞に触れず会話を展開させていく用例（§6.1.2.2）が見られる。

6.1.2.1　曖昧な反応：同意も不同意もしない

男性同士の会話では、交渉は行われているものの、意見の一致点が見つからない場合、曖昧な反応を見せ、「対立」を緩和しようとするストラテジーが見られる。まず、日本の男性同士の会話の用例を見てみよう。

(22)会話MJ1【演劇にかかった費用について】

01　JAM1:あれ　でもめっちゃお金かけたでしょ　たぶん

02　JBM2:西部劇？

03　JAM1:西部劇じゃない　剣とか作るのにさ

04　JBM2:あ　あっち?

05　JAM1:そう

06　JBM2:あ　そうなん?

07　JAM1:え?

08 →JBM2:木ってそんなかかるん?

09 →JAM1:（4.0）え　あれ　結構　おれお金かかってると思ってたんだけど

10　JBM2:まじか

11　JAM1:実際は知らない［んだ］

12　JBM2:　　［お金］取られたっけ　徴収された　あ＝

13　JAM1:＝けっ　そんな　なんか　う::ん　ちょっとは　された かもしれないけどあ

14　　んまりめちゃく［ちゃされ］

15 →JBM2:　　［そんな］金かかるもんなん?

16 →JAM1:（5.0）剣は結構かかったと思っていた＝

17 →JBM2:　　＝木にアルミホイル貼って「はい」やろ

18 →JAM1:そうそう　木にアルミホイル貼って　だって　それ練習用に　まあ　同じの

19　　ではないけどさ

20 →JBM2:あ::

21 →JAM1:練習用を買って　もう一回　なんか　本番用作って　なんか　二度手間じゃ

22　　ね:かこれとか思ってたら本当に何か本番で折れて　お::　折れるのかこれとか思

23　　ったもん@

24　JBM2:@@いや::　文化祭はおもろかったな::　高三に限っては@@

（22）は、高校の時、演劇で使われた剣について話している場面である。JAM1は、剣を造るために多くの費用がかかったと話しているが（01行）、JBM2はそれについて納得していないことを表現している（08、15、17行）。それぞれのJBM2の＜不同意＞の発話とJAM1の反応の間に見られる長いポーズ（09、16行）は、JAM1が答えに迷っていることを表していると考えられるが、選好されない応答である＜不同意＞が真面目に発話される場合、ポーズが観察されることが多く（Levinson　1983、Pomerantz　1984）、JAM1は、

二回も「お金が結構かかったと思っていた」とJBM2の＜不同意＞に反する意見を話している（09、16行）。JBM2は、お金を徴収されたかどうかと木の作り方を「木を作るのに費用はかかっていない」根拠として話している（12行と17行）。18行目で、JAM1は「そうそう」と同意を表しているが、その続きの発話「だって　それ練習用に　まあ　同じのではないけどさ」で分かるようにJAM1の「そうそう」の発話は、木にアルミホイルを貼るという意見に対する同意であり、費用に関する意見に対する同意ではないことが分かる。また、「だって　それ練習用に　まあ　同じのではないけどさ」に対するJBM2の発話「あ::」は、同意も不同意も表さない発話である。この「対立」は、JBM2が「あ::」と曖昧な反応を見せた後、JAM1が話題を変更することによって終了する（21～23行）が、このような曖昧な反応は韓国の男性同士の会話でも見られる。

(23)会話MK2【喧嘩した人について】

01　KDM4:근데 지가 다행히 또 잘 받아들이고 사과도 하더라고 미안하다고(でも
　　あいつが幸いにちゃんと受け入れて謝った　ごめんって)

02 →KHM3:미안할 건 없지(謝ることはない)

03　KDM4:아 근데 난 그날 되게 짜증났었어（9. 0）오늘도 봐봐[…] 결국 형이

04　　나한테 연락을 하게 만들잖아(あ　でも　私はあの日すごくいらいらしていた
　　（9.0）今日もそう[…]結局お兄さんが私に連絡するようにするじゃない)

05 →KHM3:난 모르겠다（4.3）오늘 말 할꺼야? 다 있을때
　　（私には分からない(4.3）今日話すつもりなの？みんないる時（（会話収録の後、
　　KHM3とKDM4は一緒に他の友人に会う予定であり、その時KDM4に彼女ができたことを話かどうか聞いている））

06　KDM4:어어 다 모이면 （うんうん　みんな集まったら）

（23）は、KDM4が知り合いと喧嘩したことについて話している場面である。02行でKHM3はKDM4の意見に＜不同意＞を表明していることを明確に表現している。KDM4は、会話収録の当日の出来事を取り上げ、自らの意見を正当化して、意見差を縮めようとしているが（03～04行）、KHM3は「私には分からない」と発話し、自らの意見を明確に表さない曖昧な反応を見せている。この「対立」は、前の文脈で言及されたKDM4の彼女のことについてKHM3が質問することによって終了する（05行）。

以上のように、男性同士の会話では、二人の意見差が縮まらない用例が見られ、その場合、自らの意見をはっきり表さない曖昧な反応を見せることによって「対立」を緩和しよ

うとするストラテジーが観察される。

6.1.2.2　一方的な展開：不同意に触れない

次に、韓国の男性同士の会話では、交渉を行わず会話を展開させる用例も観察される。これらは、相手の＜不同意＞の発話に触れず、自らの話を続ける場合である。（24）を見てみよう。

(24)会話MK2【オーストラリアに行くことについて】

01　KHM3:그냥 호주 가서 살까 이런 생각도 @@@ 근데［일단］
　　（オーストラリアに行って住もうかという考えも@@@　でも［一応］）
02 →KDM4:　　［그건］아니고（［それは］違う）
03　KHM3:일단［가보고］（一応［行ってみて］）
04 →KDM4:　　［살진 말고］（［住むのはやめて］）
05　KHM3: 일단 가보고（1.0）　왜 씨발 거 그건 있어 나도 돈 존나게 벌어가지구
　　（一応行ってみて（1.0）何だ　くそ　あれはある　私も　お金いっぱい稼いて）

（24）は、KHM3がオーストラリアに移民する意向があると話している場面であるが、KDM4は、KHM3の意見に同意していないことを表現している（02と04行）。KHM3は、自らの発話とKDM4の発話が重なっているため、自らの発話を繰り返してはいるものの、KDM4の＜不同意＞の発話には触れず自らの話を展開させている。会話全体を視野に入れれば、この場面はKHM3のソロパートで、KDM4は聞き手としての役割を果たしている場面であるが、話し手であるKHM3は自らの話を続けることを優先とし、KDM4の＜不同意＞の発話に触れず、話を展開させている。このように、韓国の男性同士の会話のソロパートで、聞き手が＜不同意＞の発話を用いた場合、話し手は＜不同意＞の発話を問題とせず、自らの話を展開させていくパターンが観察されている。

聞き手の＜不同意＞の発話に触れず、自らの話を展開させるパターンは日本の男性同士の会話でも観察されているが、日本の男性同士の会話でのソロパートで見られる＜不同意＞は、（25）のように§4.3.1で述べたつっこみ的な発話として用いられているようにも思われる。

(25)会話MJ4【お風呂に入ろうとし掃除したことについて】

01　JYM8:洗い終わって俺が寝たからしめしめ思て　そのままお湯入れて入ったやつお

02　　んねやん

03　JDM7: @@@@

04　JYM8:（0.4）ほんま ＞びびった「とっちめたし　「ほんま＜　だ［れや」ゆうて］

05　JDM7:　［@　@　@］

06　　@@@いや＝

07　JYM8:　　＝「そうゆう場合は入ったらあかんやろう」ゆうて

08 →JDM7:@@（0.4）いいやんか　入れ［たれよ］

09　JYM8:　［「次の］日ちょっと濯いで（0.3）お湯張った

10　　すぐ入れたのに」ゆうて

11　JDM7:@@

12　JYM8:（0.4）もう冷た:なった　もう　お湯が　［もう］

13　JDM7:　［ああ］

14　JYM8:結構いっぱい張っててさ　ズボ:ゆうて抜いて

（25）は、JYM8がお風呂に入ろうとして一所懸命にお風呂の掃除をしたが、疲れて寝てしまった出来事について物語っている部分である。次の日、お風呂に誰かが入った跡を見つけたJYM8は、07行目で「そうゆう場合は入ったらあかんやろう」と怒りの感情を表現している。08行目で、JDM7は笑った後「いいやんか　入れたれよ」と「入ったらあかんやろう」という JYM8の発話に＜不同意＞していることを表現しているが、 JYM8は、JDM7の発話に重なって自らの物語をそのまま続けていることが分かる（09～10行）。

以上のように、男性同士の会話では、交渉に失敗する用例が多く見られるが、交渉に失敗した場合、「対立」を緩和するため、二人は曖昧な反応を見せるストラテジーを用いたり、相手の＜不同意＞の発話に触れず、自らの話を展開させたりする相互行為が観察されている。

6.2　冗談の相互行為

次に、＜不同意＞や＜否定的評価＞が「冗談」として用いられている場合について述べる。＜不同意＞と＜否定的評価＞が「冗談」として用いられている場合、§5で述べたように、笑い、スタイルシフト、音調の調節などといったコンテキスト化の合図が観察されることが多く、そのあり方には日韓差があることを指摘した。ここではジェンダー差という観点から別の角度で「冗談」の相互行為について考える。

「冗談」の相互行為は大きく二つの種類に分けることができる。一つは＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話が笑いとともに発話され、相手をからかうようなパターンであり、もう一つは相手の＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話に対して、さらに＜不同意＞や＜否定的評価＞を積み重ね、互いに言い争う形で「冗談」を言い合うパターンである。 以下の表5は、前者のパターン（単独）と後者のパターン（相互）が男性同士と女性同士の会話でどのくらい観察されたかをまとめたものである。

表5　冗談としての＜不同意＞と＜否定的評価＞

	単独		相互		計
	不同意	否定的	不同意	否定的	
JF	5	8	–	-	13
KF	3	17	1	1	22
JM	3	23	12	5	43
KM	1	7	16	7	31

表5で分かるように、相手を一方的にからかうようなパターン（単独）は男女の会話で多く観察されるが、二人の参加者がお互いに＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話を積み重ねて言い争うようなパターン（相互）は、男性同士の会話で多く観察される。女性同士の会話では、相手の＜否定的評価＞の発話に対して＜不同意＞を表現する用例は1例しか見られず、男性同士の相互行為とはまた異なった相互行為が観察されている。以下では、それぞれのパターンについて述べる。

6.2.1　一方的な冗談：からかい

まず、女性同士の会話では、「冗談」を発する側が笑いを伴って＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話が「冗談」であることを伝えつつ、一方的に「冗談」を言うパターンが主に

観察される。（26）を見てみよう。日本の女性同士の会話である。

(26)会話FJ3【JGF6がカメラを持っていることについて】

01　JDF5:一眼ってやつ持ってんの？

02　JGF6:持ってる

03　JDF5:うわ

04　JGF6:うん@

05 →JDF5:＜@カメラ女子［や　今はやりのカメラ女子や］@＞

06　JGF6:　　［@@@@］　　＜@やめろや@＞［@@@］

07　JDF5:　　［@@@］

08　JGF6: ＜@あれやろう@＞

09 →JDF5:＜@うん　［カメラ女子　ぶらさげて歩く］@＞

10　JGF6:　　［ぶら下げて京都歩くみたいな］＜@やつやろう@＞@

11 →JDF5:＜@カメラ女子やん@＞

（26）は、JGF6がカメラを持っていることについて話している場面である。JGF6が一眼レフを持っていることを確認したJDF5は（01～04行）、笑いながら「カメラ女子」と発話を繰り返すことでJGF6をからかっている（05、09、11行）。ここで、「冗談」の受け手であるJGF6の反応を見てみると、笑いを伴って「やめろや」と発話することから「カメラ女子」という事柄を肯定的に捉えておらず、からかいとして捉えていることが分かる。JDF5のからかいに対してJGF6は、10行目で笑いながら「ぶら下げて京都歩くみたいなやつやろう」と積極的に「今はやりのカメラ女子」のイメージを具体的に描写することで、JDF5のからかいを受け入れていることを示している。

韓国の女性同士の会話でも、（27）のように発話を繰り返すことで一方的に相手をからかうような相互行為が観察されている。

(27)会話FK2【同僚と同僚の彼氏を目撃したことについて】

01　KHF4:이렇게 했는데 분명히 남자는 ＜@애써서 팔을 더 뻗었는데@＞ 여기까지

02　　밖에 안오는거야 요만큼이 남는거야(こうしたけど　確かに　男は＜@頑張っ

て腕をもっと伸ばしたけど@＞　ここまでしか届かない　このくらいが残る）

03 →KSF3:＜@너 되게 좋아한다@＞ 너 되게 악마　같애 @@@@(＜@あなたすごく面白がっている@＞　あなたすごく悪魔みたい@@)

04　KHF4:@@@그래서 막 보면서 「하하하하하」막 이럼서 @@@(@@@それで見ながら「ははははは（（笑い声））」って@@@（（嘲り笑ったという意味））

05 →KSF3:＜@너 되게 악마［같다］@＞(＜@あなたすごく悪魔［みたい］@＞)

06　KHF4:　［＜@그랬겠어?@＞］@(［＜@そうしたと思うの@＞］@)（（はははははって笑ったわけではないという意味））

07 →KSF3:＜@되게　악마같다@＞ @@@(＜@すごく悪魔みたい@＞@@@)

08　KHF4:그랬겠어？＜@[설마]@＞(そうしたと思うの?＜@［まさか］@＞)

09 →KSF3:@＜@[완전] 마녀같애@＞@@@(@＜@［本当に］魔女みたい@＞@@@)

10　KHF4:설마 그랬겠어? 그냥 속으로(まさかそうしたと思うの？内面でね)

11　KSF3:응@(うん@)

（27）は、KHF4が同僚と同僚の彼氏を目撃したことについて話している場面である。01行目で、KHF4は同僚の彼氏が同僚の腰を抱こうとしたが、その様子が不自然だったと話している。KHF4は、笑いながら同僚と同僚の彼氏の様子を描写しているが、それを聞いていたKSF3は、KHF4の様子を悪魔にたとえ大げさに話している（03行）。悪魔にたとえるのは、相手に対する否定的な評価であるが、KHF4は笑いながら発話することでこの発話が「冗談」であることを伝えている。KSF3の＜否定的評価＞の発話（03行）を聞いたKHF4は、04行で悪魔のような笑い声を出し「冗談」であることを認めている。その後、KSF3はからかいの発話を4回も繰り返して発話しており、09行ではKHF4を魔女ともたとえている。大津（2004）でも指摘されているが、このような発話の繰り返しは、感情を強調し、おおげさに表現することで、これは「冗談」であることを表す合図である。ここで、「冗談」の受け手に注目してみると、受け手であるKHF4は、「そうしたと思うの」と何回も発話し、自らの発話（04行）も冗談であったことを積極的に表現している（10行）。

このように、女性同士の会話では、受け手が「冗談」の対象になった事柄を否定したり、「冗談」をそのまま受け入れたりするパターンが繰り返し観察され、「冗談」を言う側が

一方的に友人をからかうような相互行為が主に観察される。

6.2.2　相互的な冗談：言い争い

次に、男性同士の会話では、＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話に対して、また＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話を返し、お互いにそれを「冗談」として認め、楽しんでいる用例が見られる。まず、日本の男性同士の会話の一部を見てみよう。

(28)会話MJ1【話題になった知り合いについて】

01　JAM1:まあ　泉南 では＜@話題の@＞

02 →JBM2:え　まじ？　そんな　そんなん話題になってる？＜@なってる？@＞

03 →JAM1:@@　＜@おまえ　泉南にいね:: ［じゃん］@＞＝

04 →JBM2:　［おれ］　＝＜@泉南におるおるおる@＞

05 →JAM1:＜@おまえ　泉南［にいね::じゃん］@＞

06 →JBM2:　＜@［おるおる］@＞　おれは泉南民やから

07　JAM1:下宿してるから知らないんでしょう　何か

08　JBM2:まじ

（28）は、JAM1は地元で話題になっている同級生について話している場面である。会話の参加者の二人は、同じ地元（泉南）の出身であるが、JBM2は大学に進学してから下宿をしている。「冗談」は、02行目でJBM2がJAM1の発話に納得していないことを表すことで始まるが、JBM2は「なってる」と繰り返し発話しており、二回目の発話は笑いを伴っている。笑いを伴うことで、この発話は真面目な「対立」を表すのではなく、「冗談」であることを相手に伝えている。「冗談」の受け手であるJAM1は、笑いを伴って音律を操作しながら発話することで「冗談」であることを認めており（03行）、その後、二人は互いに相手の発話に対して笑いながら＜不同意＞の発話を積み重ねている（04～06行）。このように、男性同士の会話に見られる相手に対する＜否定的評価＞や＜不同意＞を表す発話の積み重ねは、深刻な「対立」を形成するよりは「冗談」としての言い争いである場合が多く、類似した用例は韓国の男性同士の会話でも見られる。

(29)会話MK2【誘いを断ったことについて】

01　KHM3:아:: 존나 오랜만이다 근데(あ::　すごく久しぶりだね)

02　KDM4:근까(そうだね)

03 →KHM3:맨날 뺀찌 둔 게 몇 번이야 너

（いつも断ったのが何回か　あなた（（誘いに対する断り））

04 →KDM4:야 뭘 내가 야 씨발 너도 뺀찌 많이 놨거든(おい　何　私が　おい　くそ

あなたも断ったこと多いんだよ)

05 →KHM3:@@내가 언제(@@　私がいつ)

06 →KDM4:내가 전화했을 때 너 막 집에 있을 때 도 있고 회사하고 사람 만날 때도

07　있었고 그거 말고도 몇 번 있어 내가 존나 전화했을 때 <@물론 내가 더 뺀찌

08　를 많이 놓긴 했지@>(私が電話した時　あなた家にいる時もあったし　会社の

人と会っている時もあったし　それじゃなくても何回かあったよ　私すごく電話した時<@もちろん私の方がもっと多く断った@>)

09　KHM3:@@@@@

（29）は、二人が久しぶりに会ったことについて話している場面で、「冗談」はKHM3がKDM4の行動を批判することで始まる（03行）。批判に対し、KDM4はKHM3も同様であったと俗語を用い感情を誇張しながら批判するが（04行）、KHM3は笑った後、それに同意していないという反応を見せている（05行）。KDM4は、過去の事を言い出し反論するが、最終的に笑いながらKHM3の批判を受け入れている（07～08行）。それを聞いたKHM3は大きな声で笑いながら「冗談」として捉えていることを表している。

以上のような＜否定的評価＞や＜不同意＞の積み重ねは、男性同士の会話で繰り返し観察されるパターンであるのに対し、女性同士の会話で類似した用例は、韓国語の会話で1例観察されているだけである。しかも、女性同士の会話で観察された＜否定的評価＞や＜不同意＞の積み重ねの相互行為は、（30）のように＜否定的評価＞を受けた参加者が一つのターン内で＜不同意＞の発話を用いた後、すぐ自らの発話を取り消すような相互行為が観察されている。

(30)会話FK4【恋愛について】

01　KCF7:알바오빠들도 다 제정신이 아니야 근데 다 거기서 여자 사귀고 그래 왜 사

02　　귀는지 모르겠어(バイト先のお兄さんもみんな変だよ　でも　みんなそこで彼女ができたりする　何で付き合うのか分からない)

03　KDF8:@@ ×× 눈 맞는거지 뭐(@@××惚れたんだよね　まあ)

04　KCF7:응（0.5）아무래도 그런 경우가 많지(うん（0.5）そういう場合が多いね)

05　KDF8:니네는 시간이 많다보[니까](あなたたちは（（KCF7と彼氏））　時間多い［から］)

06 →KCF7:　　[너도]잖아(［あなたも］でしょう)

07　KDF8:어(うん)

08 →KCF7:아닌척 하지<마@>@@(（（時間が））ないふりす＜@るな@＞@@)

09 →KDF8:아니 <@너보단@＞[@@＜@야아:::아아@＞@@]

（いや＜@あなたよりは@＞［@@＜@ねえ:::ええ@＞@@（（愛嬌のある呼びかけでやめてほしいことを表す））］

10　KCF7:　　[@　@　@　@　@]

（30）は、恋愛について話している場面である。KCF7が彼氏と付き合うことになった経緯をすでに知っていたKDF8は、05行目でKCF7がアルバイト先で彼氏と出会って付き合うことになったのは時間が多かったためであると話している。それに対して、KCF7は06行目と08行目で「あなたもでしょう　時間がないふりするな」とKDF8を批判するように発話している。受け手であるKDF8の09行目の発話を見てみると、KDF8は「いや　あなたよりは」と笑いながら＜不同意＞を表しているが、すぐ女性の愛嬌とされる音を伸ばした呼びかけ「야아:::아아（ねえ:::ええ）」を用いることで批判をやめてほしいことを表現している。このように、女性同士の会話で観察された＜否定的評価＞や＜不同意＞の積み重ねの「冗談」は、男性同士の会話で観察された言い争いのようなパターンとは性質が違った相互行為である。

以上のように、＜否定的評価＞や＜不同意＞の積み重ねによる言い争いのような「冗談」は男性同士の会話では繰り返し観察されるパターンであるものの、女性同士の会話では見られない。男性同士の言い争いのような「対立」は、（12）と（13）のように「冗談」で

ある場合が多く、相手に自らの意見を貫こうとし、真面目に言い争っているというよりは、親密な関係作りに貢献する装置として解釈できる。

7. 分析のまとめ

以上、日韓の女性同士の会話と男性同士の会話に見られた類似点と相違点をまとめると、以下のようである。

まず、日韓男女に関わらず、友人同士の会話に見られる類似点は次のようである。

① ＜不同意＞と＜否定的評価＞は、デュオパートで発話されることが多い。

② ＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になりやすいのは、［思考］である。

③ ＜不同意＞と＜否定的評価＞によって「対立」が形成された場合、「対立」を解決するための交渉が行われる。

④ 日韓同様に観察される「冗談」の合図には、笑い、音の伸ばしや発話の大きさや速さを調整した韻律の操作、発話の繰り返しや感動詞の使用による感情や程度の誇張がある。

一方、日本語の会話と韓国語の会話に見られた相違点は、以下のようである。

⑤ 日本語の会話では、普通体から丁寧体へのスタイルシフトと定型的な表現が「冗談」であることを表すコンテキスト化の合図として用いられているのに対し、韓国語の会話では、人称代名詞のシフトが合図として用いられており、また、合図の使用が見られない場合もある。

⑥ 日本語の会話では、「冗談」を言う側が笑いを伴うことで、できる限り明確に「冗談」であることを伝えており、受け手も誤解することなく「冗談」フレームを構築する相互行為が見られるが、韓国語の会話では、「冗談」を言う側が笑いを伴わず真面目に発話しているため、「冗談」と批判の境界が曖昧で、受け手がその発話をどのように受け入れるかが「冗談」フレームの構築に大きく影響している。

⑦ 日本語の会話では［遂行］や［才能］を対象とした「冗談」が観察されており、主につっこみとして用いられる。一方、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では［行動］や［性格］が対象になる場合が多く、本質的な事柄に触れる度合いの高い「冗談」が

多く観察される。

また、女性同士と男性同士の会話に見られた相違点は以下のようにまとめられる。

⑧ ＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話は、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察される。

⑨ ＜不同意＞が「対立」を形成する場合、「対立」を解決するための相互行為やストラテジーの使用には、男女差が見られ、女性同士の会話では、一致点を見つけてから会話を展開させる相互行為が主に観察されるのに対し、男性同士の会話では、「対立」を回避して会話を展開させる相互行為が多く観察される傾向がある。

⑩ 「冗談」の相互行為を見てみると、女性同士の会話では、一人の参加者が一方的にからかうようなパターンが多く、男性同士の会話では、二人の参加者が互いに言い争うようなパターンが多く観察される。

8. 考察

ここでは、§2.2で挙げた以下のⅠとⅡ について考察を行う。

Ⅰ. 「冗談」フレーム構築の仕方や「冗談」の対象に見られる日韓差は、どこから生じているのか。

Ⅱ. 「対立」を解決するための相互行為と「冗談」の相互行為にジェンダーによる相違点が見られる理由は何か。

まず、§8.1では、分析結果のまとめの⑤から⑦を中心にⅠについて考察を行い、§8.2では、分析結果⑧から⑩を中心にⅡ について考察する。

8.1 日韓差：フェイス侵害の許容度

日韓差は、言外の意味を伝えるコンテキスト化の合図の使用、「冗談」フレーム構築の仕方、「冗談」の対象になる事柄と種類に顕著に表れている。日本語の会話と韓国語の会話の大きな相違点は、まず、日本語の会話で「冗談」を言う側は、笑いという合図を用い、受け手側に誤解されることをできるかぎり避けているが、韓国語の会話で「冗談」を言う側は、真面目に発話を行い、「批判」と「冗談」を明確にしていないことである。また、

日本語の会話では、［遂行］や［才能］が＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になりやすく、相手の話につっこみを入れるような「冗談」が主に観察されるのに対し、韓国語の会話では、その場で行った［行動］や現在も続く相手の本質的な事柄に触れる度合いが高い事柄が対象になった「冗談」が多く観察されることである。このような相違点は、どこから生じているのであろうか。

その要因としては、「フェイス侵害の許容度」が日本語の会話と韓国語の会話で異なっていることが考えられる。まず、日本語の会話の場合、＜否定的評価＞が「冗談」として解釈されていない用例は見られず、［才能］や［遂行］が対象になっているすべての発話は「冗談」として受け入れられている。これは日本語の会話で冗談を言う側が笑いを伴って、明確に言外の意味があることを伝えているからである。そのため、受け手は特に言外の意味があるかどうかを推論することもなく、「冗談」として受け入れるのである。つまり、日本語の会話では、相手の誤解によって、自分の＜否定的評価＞がフェイスを侵害する発話として捉えられることをできるだけ避けようとするのである。これを逆に解釈すると、日本語の会話では、誤解された場合友人のフェイスを侵害する行為になる可能性が高いため、明確に「冗談」であることを伝えていると言える。

一方、韓国語の会話の場合、＜否定的評価＞が真面目に発話され、＜否定的評価＞が「冗談」か「対立」かは、受け手の推論によって解釈される場合が多い。ここで注目したいのは、受け手が「冗談」として解釈しても「対立」として解釈してもその後に見られる相互行為に誤解が生じたり、トラブルが見られたりする用例は観察されないことである。つまり、韓国の友人同士の会話で、話し手は自らの＜否定的評価＞が「対立」に解釈されても、「冗談」として解釈されても相互行為に問題がなく、対人関係も壊れないため、特にコンテキスト化の合図を用いていない場合が多いのである。不満表明を分析した林（2007）でも、韓国人に比べ、日本人の方がFTAの度合が低いストラテジーを用いると指摘しているが、このような結果を逆にいうと、韓国の友人同士の会話において＜否定的評価＞は、フェイスを侵害する行為として捉えられる可能性が低いとも解釈できる。これは、韓国の友人同士の会話で、参加者は今まで親密な人間関係を構築してきたので、「対立」を表す＜不同意＞や＜否定的評価＞が、攻撃するために発話されるはずがないという共通の認識が会話の参加者に共有されているためであると考えられる。このような傾向は、＜不

同意＞や＜否定的評価＞の対象が［性格］や［行動］である場合、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では相手の本質的な事柄に触れる度合いが高いことにも表れている。

このように、日本語の友人同士の会話に比べ、韓国語の友人同士の会話では、相手の本質的な事柄に触れる度合いの高い発話が、相手のフェイスを侵害する行為として捉えられる可能性が低いため、コンテキスト化の合図の明確さにも日韓差が見られる要因として考えられる。日本人に比べ、韓国人のほうが、親しい間柄の友人が行うフィスを侵害する行為に対して許容度が高いことは、所有物を借りる行動にも現れる。生越（2008）は、日本人と韓国人に相手が何も言わずに自分の所有物を使ったり、食べたりするとどのように感じるかを調査した。その結果、日本人に比べ、韓国人は家族と友達に対しては、無言行動を通常の行動とみなす人が多い。このことから、韓国では親しい間柄でなら相手の物を使うときなどに事前に了解を得なくてよいのに対し、日本人は、相手が親しい間柄であろうと、事前の了解を必要とすると指摘している。物を借りる際の無言行動からも見られるように、日本人に比べ、韓国人は親密な人間関係の間柄では、フェイス侵害の許容度が高く、その結果、韓国の友人同士の会話では、明確に合図が使用されず、相手の本質的な事柄に触れる度合いが高い発話が「冗談」として用いられていると考えられる。

本章の結果は、第5章で述べた韓国語の会話の相手の領域に踏み込む度合の高さとも関連するが、フェイス侵害の許容度は、相手の領域に踏み込む度合と比例すると考えられる。つまり、フェイス侵害の許容度が高ければ高いほど、フェイスの侵害の危険さは小さくなるため、相手の領域に踏み込む度合が高いPPSを用いて配慮していることを示すことが相対的に多くなりやすい。これと反対に、日本語の会話ではフェイスを侵害する行為に対する許容度が低いため、相手の領域に踏み込む度合が高いPPSを用いた配慮の仕方は、相対的にとりにくくなると考えられる。このように、日韓の友人同士という人間関係におけるフェイス侵害の許容度の程度には差があると言えよう。

8.2　ジェンダー差：冗談関係の構築

ジェンダー差は、「対立」と「冗談」の相互行為に著しく現れているが、男性同士と女性同士の会話に見られる「対立」と「冗談」の相互行為の差はどこから生じるのであろうか。従来、相互行為とジェンダーの関係を探った多くの研究では、男性同士の会話に比べ、

女性同士の会話では、相手に同意していることや共感していることを表すことが多いと指摘されている（Edelsky 1981、 Holmes 1995、 Pilkington 1998）。また、第8章で論じたように、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、相手に同意や共感を表す発話の積み重ねが多い。つまり、女性同士の会話では、相手と共通の意見や感情を主張することが、親密な関係構築に重要なPPSの装置として用いられており、相手との一致が親密な人間関係を維持するのに重要な要素であると解釈できる。そのため、相手との「対立」は当然解決しなければならないトラブルと捉えられ、その後に見られる女性同士の交渉の相互行為は一致点を探ることが目的となり、共通の目的を達成させるため一致点を見つけ出すことになる。一致点を探っていく相互行為は親密な関係を強化する結果にも繋がると考えられる。このような女性同士の相互行為に見られる特徴は、男性同士の会話で観察される言い争いのような「冗談」の相互行為と異なり、女性同士では、参加者の一方が相手をからかい、受け手がその発話を否定したり、受け入れたりする相互行為が主に見られることとも関連する。Yedes（1996:418）によると、からかいは衝突をやわらげ、友好関係を深め、対等な関係を励ますが、女性同士の会話で表面的には相手のフェイスを侵害する＜不同意＞や＜否定的評価＞が相手との親密な関係を強める「冗談」として用いられた場合、女性は「冗談」としても相手との「対立」は避ける傾向があり、相手をからかうような相互行為を行うことで親密さを表していると言える。

一方、 女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では、共通の意見や感情を主張する行為は、そもそも親密な関係の構築に重要なPPSの装置として用いられていないため、「対立」は解決すべきトラブルにはならない。そのため、相手の＜不同意＞に触れなくても、交渉に失敗して意見が異なっていても、特に友人との関係に問題は生じないのである。相手に対するあからさまな＜不同意＞の表明や意見の不一致は、配慮が欠けているようにも思われるが、 Leech（1987:210）によると、丁寧さの不足は本質的に親密性のしるしになりうる。また、Culpeper（2011）が指摘したように、見せかけのインポライトネスは、相手との連帯感を強める機能を果たす。このような現象は、Pilkington（1998）でも指摘されており、Pilkington（1998）は、男性同士の会話におけるあからさまな反論は、親密感を表すストラテジーであると述べている。むしろ、男性同士の会話では、＜不同意＞や＜否定的評価＞の積み重ねによる言い争いのような「冗談」を通じて、表面的には攻撃とも

解釈されるかもしれない態度をお互いに示しつつ、親密な関係であることを表現していると思われる。

このように、親密な人間関係を構築また維持するために用いられる装置がジェンダーによって異なっていると考えられるが、一致が大切な装置として用いられる女性同士の会話とは異なって、男性同士の会話では、あからさまな＜不同意＞や＜否定的評価＞の表明やそれらの発話の積み重ねによる言い争いのような「冗談」が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていると考えられる。＜不同意＞や＜否定的評価＞という相手との関係を壊してしまいそうな発話が、男性同士の会話では逆に親密さを表すストラテジーとして解釈できることは、Kuiper（1991）とDaly et al.（2004）でも指摘されている。まず、男性のラグビーチームの会話を分析したKuiper（1992）によると、性的な侮辱はグループの連帯感を強めるストラテジーとして用いられる。また、会話における俗語の使用を分析したDaly et al.（2004）は、特定の文脈では攻撃的だと捉えられる俗語の使用は、男性同士の会話では親密な人間関係の証拠として現れると指摘している。相互行為のレベルに見られる男性同士の＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話の積み重ねによる言い争いのような「冗談」が親密な人間関係を強めるストラテジーとして用いられていることと同様に侮辱的な発言や俗語の使用が親密な関係を強めるストラテジーとして用いられていると言える。

以上のように、相手との一致が関係構築に重要な要素である女性同士の会話では、＜不同意＞と＜否定的評価＞は解決すべきトラブルとして捉えられる傾向が強く、言い争うような「冗談」の相互行為よりは、相手をからかうような相互行為を通じて親密な関係を強めている。一方 、男性同士の会話で＜不同意＞と＜否定的評価＞は、親密な関係を壊す行為として捉えられておらず、必ず解決すべきトラブルとも捉えられることはなく、むしろ言い争いのような「冗談」は、親密な人間関係を構築また維持するためのストラテジーとして用いられていると考えられる。このようなストラテジーの使用や相互行為にジェンダーによる相違が見られる背景には、どのような装置を用いて友人に配慮し、親密な関係を構築していくかという親密な関係作りの仕方の相違が要因としてあると言える。

9. 本章のまとめ

本章では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の相対使用頻度と対象、これらの発話が「対立」

関係を形成する場合と「冗談」として用いられている場合の相互行為と「冗談」フレームの構築プロセスを日韓差とジェンダー差の観点から分析した結果について述べた。本章の分析結果と考察は、以下のようにまとめられる。

（A）「冗談」フレーム構築プロセスには、日韓差が見られる。日本語の会話で「冗談」を言う側は、自らの＜不同意＞や＜否定的評価＞が明確に「冗談」であることを表すが、韓国語の会話では、真面目に発話される場合があり、その発話をどのように受け入れるかは聞き手の解釈に任せているような相互行為が観察される。また、日本語の会話では、相手の話につっこみを入れるような「冗談」が主に観察されるのに対し、韓国語の会話では、相手の本質的な事柄に触れる度合いが高い事柄が対象になった「冗談」が多く観察される。これは、日韓の親密な関係の間柄で、フェイスを侵害する行為に対する許容度の違いから生じていると考えられる。

（B）＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話は、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察され、これらの発話が「対立」関係を形成する場合の相互行為と「冗談」として用いられている場合の相互行為にジェンダーによる相違点が見られる。これらの相違は、どのような装置を用いて、友人に配慮し、親密な関係を構築していくかという親密な関係作りの仕方の相違が要因としてあると考えられる。男性同士の会話では、＜不同意＞や＜否定的評価＞を用いた言い争いのような「冗談」の相互行為が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていると考えられる。

第Ⅴ部　総括

第Ⅴ部では、本研究で明らかになったそれぞれの分析結果をまとめ、日本と韓国、女性同士と男性同士の会話に見られるポライトネスのあり方が、日韓の対人関係の捉え方、ジェンダーと社会化とどのように関連しているのかについて総合的な考察を行う。また、異なる言語・文化とジェンダーという要因が、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのかについて考察を加える。

第11章　日韓男女の会話におけるポライトネスのあり方

1. はじめに

本稿では、第Ⅱ部から第Ⅳ部にかけ、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士が日常的な自由会話でいかなる装置を用いて親密な関係を構築しているかをポライトネス理論の観点から分析し、日韓男女にかかわらず友人同士の会話に見られる類似点と、日韓およびジェンダーによる相違点について述べてきた。本章では、本稿のまとめとして、第4章で述べた以下の課題に対する分析結果と考察をまとめ、日韓の会話と、男女の会話に見られる特徴について総合的な考察を行う。

ⅰ．日本人と韓国人の、それぞれ友人同士の会話におけるポライトネスのあり方にはどのような類似点と相違点があるのか。

ⅱ．女性同士と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方にはどのような類似点と相違点が観察されるのか

ⅲ．日本人と韓国人の友人同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

ⅳ．女性同士の会話と男性同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

ⅴ．異なる言語・文化とジェンダーという要因は、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのか。

本章の構成としては、まず§2で、日韓差を中心に分析結果をまとめ、日本語と韓国語の友人同士の会話の特徴について考察を行う（ⅰとⅲ）。§3では、ジェンダー差の分析結果をまとめ、男性同士の会話と女性同士の会話の特徴について考察する（ⅱとⅳ）。§4では、異なる言語・文化とジェンダーという要因が、日韓男女の友人同士の会話のどのような部分に影響を与えているのかについて考察を加える　（ⅴ）。

2.　日韓の友人という対人関係とポライトネス

本節では、日韓差を中心に分析結果をまとめ、日本語と韓国語の友人同士の会話の特徴について考察を行う。

2.1　日韓の友人同士の会話に見られる特徴

まず、第Ⅱ部と第Ⅳ部で述べた日韓の会話における類似点と相違点をまとめて示すと表1のようである。

表1　分析結果のまとめ：日韓

分析項目	類似点	相違点	考察
第5章 ・話題構成のあり方 ・「語り」開始の仕方	① 話題が二人による「語り」によって構成されている場合、「語り」は自己開始によるものが多い。	② 韓国語の会話に比べ、日本語の会話では、共通知識を規範とした話題が多く観察されるのに対し、韓国語の会話では個人に関わる内容が話題として取り上げられる傾向が強く、その結果、一人の「語り」による話題構成が多く観察される。 ③ 一人の話者の「語り」によって話題が構成されている場合、韓国語の会話では、他者開始が多い。一方、日本語の会話では自己開始による連鎖が多く、日韓で話題管理の仕方が異なる。	**話題管理と日韓の踏み込み度合** 日本より韓国の方が相手の領域に踏み込む度合いが高い。
第6章 ・＜理解＞の発話 ・＜感情・感想＞の発話 ・発話様態との相関関係	① ソロパートでは、＜理解＞の使用頻度が高い。これは、聞き手が話し手の注意を向けられたい、理解されたいといったポジティブ・フェイスに配慮し、注意を向けていることを表すストラテジーを用いるためであると考えられる。 ② それぞれの表現と発話様態の結びつきには、類似点が見られ、［あいづち］は＜理解＞と結びつきが強く、［実質発話］は＜感情・感想＞と結びつきが強い。	③ 日本語の会話に比べ、韓国語の会話では＜理解＞を表現する頻度が低く、頻繁な＜理解＞の表現と積極的な＜理解＞の表現はFTAとして捉えられる場合もある。 ④ ソロパートで聞き手が＜感情・感想＞を表現した際、日本語の会話で、話し手はその発話を受け入れた後、「語り」を展開させるが、韓国語の会話で、話し手は聞き手の発話には触れず自らの「語り」を進めていく。 ⑤ 韓国語の会話に比べ、日本語の会話では［あいづち］の使用割合が高く、韓国語の会話では［あいづち＋α］の使用割合が高い。相対的に、PPSの使用頻度が低い韓国語の会話では、＜理解＞を表す際、［あいづち＋α］の発話様態を用いて、より積極的に自らの＜理解＞を表している。	**日韓の良き聞き手** 日本語の会話のソロパートで、聞き手に期待される役割は、頻繁な＜理解＞を用いて、話し手に関心を持っていることを表すPPSの使用であるが、相対的に韓国語のソロパートでは、聞き手は話し手の「語り」を自ら展開させるように、じっと聞いてあげることが期待される。
第9章 ・直接話法（話し手） ・対象になる人物	① 話し手は、直接話法を用いて聞き手と自分の経験を聞き手と円滑に共有しようとしており、直接話法は、参加者の間主観性の構築に大きく寄与している。 ② 話し手は出来事時の＜自己心内＞発話を活き活きと表現することで、聞き手との共感の場を作り上げ、同様な考えや感情を持った仲間であることを主張しつつ親密な関係を構築していく。	③ 日本語の会話では、＜第三者＞の発話が直接話法で用いられる割合が最も高く、日本語の会話に見られる＜第三者＞や＜自己発話＞を目立たせた直接話法の使用は、聞き手を楽しませ、笑いを生み出すストラテジーとして用いられる傾向がある。 ④ 韓国語の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられる割合が最も高く、韓国語の会話で多く観察される＜自己発話＞や＜第三者＞を目立たせた直接話法は、聞き手の共感を導き出すストラテジーとして用いられる傾向がある。	**直接話法と自己呈示の日韓差** 自己呈示は、相手の領域に踏み込む度合いと大きく関連しており、どのような自己呈示が友人同士の会話で適切とされるかに日韓差が見られる。日本語の会話では、＜第三者＞を主人公として取り上げて聞き手に面白さを伝える自己呈示が行われ、互いに面白い印象を互いに与えつつ、親密な関係を強めている傾向が強いが、韓国語の会話では、出来事時の＜自己発話＞と＜心内発話＞を直接話法で表現することで、話し手が主人公になり、話し手の感情に聞き手が共感できそうな側面を取り出して自己呈示を行うことで、親密な関係を強化している。
第10章 ・＜不同意＞の発話 ・＜否定的評価＞の発話 ・コンテキスト化の合図 ・フレーム構築の仕方 ・対象になる事柄	①＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象になりやすいのは「思考」である。 ②＜不同意＞と＜否定的評価＞が「冗談」として用いられている場合、コンテキスト化の合図として、音律の操作、感情や程度の誇張、笑いが観察される。	③ ＜不同意＞と＜否定的評価＞の数は韓国語の会話の方が多い。 ④「冗談」であることを表すコンテキスト化の合図には、日韓差が見られ、日本語の会話では、普通体から丁寧体にスタイルシフトが観察されるのに対し、韓国語の会話では、人称代名詞のシフトが観察されており、合図の不使用も多く観察される。 ⑤「冗談」フレーム構築の仕方には、日韓差が見られ、日本語の会話では、「冗談」を言う側が笑いを伴うことで、明確に「冗談」であることを伝えており、受け手も誤解することなく「冗談」フレームを構築する相互行為が見られる。一方、韓国語の会話では、「冗談」を言う側が笑いを伴わず真面目に発話しているため、「冗談」と「批判」の境界が曖昧で、受け手がその発話をどのように受け入れるかが「冗談」フレームの構築に大きく影響している。そのため、韓国語の会話では、＜否定的評価＞と言い訳という相互行為が多く観察される。 ⑥ 日本語の会話では［遂行］や［才能］を対象とした「冗談」が観察されており、主につっこみとして用いられる。一方、日本語の会話に比べ、韓国語の会話では［行動］や［性格］が対象になる場合が多く、本質的な事柄に触れる度合いの高い「冗談」が多く観察される。	**フェイス侵害の許容度と日韓差** 日本人に比べ、韓国人は親密な人間関係の間柄では、フェイス侵害の許容度が高く、その結果、韓国の友人同士の会話では、明確に合図が使用されず、相手の本質的な事柄に触れる度合いの高い発話が「冗談」として用いられていると考えられる。

表1の分析結果に見られる日本語と韓国語の特徴を整理すると次のようである。

（A）日本の友人同士の会話の特徴

日本の友人同士の会話では、会話の参加者が共通知識を持っている事柄が話題になる傾向が強い。話題が一人の参加者の語りによって構成されている場合、聞き手は、友人のネガティブ・フェイスに配慮し、友人の領域に踏み込んで自己呈示を要求することは避けているものの、話し手が語り始めると、聞き手は、話し手のポジティブ・フェイスに配慮し、積極的に話し手の語りを理解していることや面白く聞いているということを頻繁に表すことで話し手が話しやすい環境を作ることに重点をおく。このような聞き手の行動は、話し手が自発的に次々と自らの話を語りやすくする効果を出しており、話題管理は、話し手によって行われる結果にも繋がっている。次に、日本の友人同士の会話では、第三者を主人公として、相手と一緒に笑えるような出来事を活き活きと語ることで自己呈示が行われる傾向が強く、「冗談」は、相手の発話につっこみを入れるような形で行われる傾向がある。また、「冗談」を言う側が自らの発話が「冗談」であることを明確に表すことで「冗談」フレームが構築されており、自らの発話がFTAとして誤解されることをできるだけ避けようする傾向が強い。このような特徴から、日本の友人同士は、相手に押し付けない形で友人に配慮し、親密な関係を構築していると言えよう。

(B)　韓国の友人同士の会話の特徴

韓国の友人同士の会話では、会話の参加者の一人に関わる個人的な事柄が話題として取り上げられる傾向が強く、その多くは他者開始によって行われている。このような特徴は、韓国の会話で話題管理が、聞き手によって行われることにも表れているが、聞き手は、話し手の語りが終了すると、友人の領域に踏み込み、次々と質問することで興味を持っているということを表し、友人のポジティブ・フェイスに配慮する。しかし、話し手が語り始めると、聞き手は、話し手のネガティブ・フェイスに配慮し、友人の語りを邪魔せずに聞いてあげることに重点をおく。次に、韓国の友人同士の会話では、自分を主人公として、他人との関係などのように友人と共感し合える出来事を語ることで自己呈示が行われている。また、韓国の友人同士の会話で「冗談」は、真面目に発話される場合もあり、冗談を

発する側は、自らの発話がFTAとして誤解されることを恐れておらず、その発話をどのように受け入れるかは聞き手の解釈に任せるような相互行為が多く観察される。このような特徴は、韓国の友人同士の会話では、相手の本質に関わる事柄が「冗談」の対象になることが多いこととも関連する。このように、韓国の友人同士は、さりげなく相手との距離を縮めていく親愛的な形で友人に配慮することで親しい関係を強めていると言えよう。

以上のような日本語と韓国語の友人同士の会話に見られる特徴は、次のようなことが要因となる。

ⅲ. 日本人と韓国人の友人同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

a. 踏み込み度合

b. 良き聞き手

c. 自己呈示の程度

d. フェイス侵害の許容度

まず、日韓の会話で期待される聞き手の役割から考えてみよう。任・李（1995）によると、日本の場合、目上の人と話す際、頻繁にあいづちを用いて会話を進行しやすい雰囲気を作り出すことが丁寧さに繋がるが、韓国人の場合はその逆である。目上の人に対する配慮の仕方が、友人同士の会話にも表れていると考えれば理解しやすく、日韓の会話で聞き手に期待される役割が異なることが聞き手のふるまいに影響していると考えられる。

日韓の聞き手の行動の相違は、全般的な会話スタイルに影響を及ぼすが、特に、話題管理の仕方と大きく関連する。まず、友人のネガティブ・フェイスに配慮して、語りを黙って聞いてあげていた韓国の聞き手は、危険性は高いものの、友人の領域に踏み込んで次々と自己呈示を要求することで、友人のポジティブ・フェイスに配慮していることを積極的に表す。一方、話し手が語る際、友人のポジティブ・フェイスに配慮していることを表していた日本の聞き手は、友人の領域に踏み込んで自己呈示を要求するような危険性の高いPPSを用いることは避ける傾向が強い。

このような特徴は、日韓の友人同士がどのような自己呈示を行っているかという面に強く表れている。相対的に相手に触れる度合いの高い韓国の友人同士で、話し手は、物語る際、＜自己発話＞を目立たせ、家族、異性、友人などとの人間関係の悩みや不満などのよ

うに私的レベルの高く、自らの考えや感情に披露する度合いが高い自己呈示を行い、お互いの考えや感情を分かち合える「物語」を語る傾向が強い。一方、相対的に相手に触れる度合いが低い日本の友人同士では、物語る際にも、私的レベルの高い自己呈示よりは、自らの経験談に登場する＜第三者＞の発話を目立たせ、友人と笑い合えるような面白い経験談を語ることで自己呈示が行われる傾向が強い結果に繋がる。

このように、韓国の友人同士の会話に比べ、日本の友人同士の会話では、相手の領域に踏み込むことは避ける傾向があり、悩みを打ち明け、否定的な感情に触れるような自己呈示は避けている傾向が強いが、このような特徴は「冗談」を言う際にも表れる。まず、日本の友人同士の会話では、「冗談」を言う際、自らの発話が誤解されることを避けるため明確なコンテキスト化の合図が用いられる。一方、友人の領域に踏み込む度合いの高い韓国の友人同士の会話の場合、明確なコンテキスト化の合図を用いず、聞き手の解釈に任せるような相互行為も見られる。つまり、相対的に相手のフェイスを侵害する可能性の高い行為は避けようとする日本の友人同士の会話の特徴が、明確なコンテキスト化の合図の使用にも表れていると言える。一方、韓国の友人同士は相手に誤解されることを恐れていない。これは、韓国では親密な間柄であれば、「対立」を表す発話が真面目に発話されても、フェイスを侵害する行為として捉えられる可能性が低いことが要因として考えられる。

コンテキスト化の合図の使用有無からも分かるように、友人同士の会話におけるフェイス侵害の許容度は日韓で異なっているが、フェイス侵害の許容度は、相手の領域に踏み込む度合と比例すると言える。韓国の場合、親しい間柄であれば、フェイス侵害の許容度が高いため、相手の領域に踏み込む度合が高いPPSが頻繁に用いられやすく、相手の本質に触れるような「冗談」や個人的な情報に関わる話題や語りが要求されたり、語られたりしやすいと考えられる。これと反対に、日本の場合、フェイスを侵害する行為に対する許容度が低いため、相手の領域に踏み込んで相手のフェイスを侵害する可能性が高いPPSの使用は少ない。その代わりに相手が語りやすい雰囲気を作り出したり、お互い知識を持っている事柄を話題として取り上げたり、つっこみのような定型的な「冗談」を用いて親密さを示していると考えられる。

以上のように、日韓でどのように友人に配慮して、親密な関係を維持また構築していくかは異なっており、聞き手の役割、踏み込む度合、自己呈示の種類、フェイス侵害の許容

度の相違が日韓のポライトネスのあり方に影響を及ぼす要因として考えられる。

2.2　日韓の友人同士という関係とポライトネス

それでは、上述した日韓差はどこから生じているのであろうか。

第2章で述べたように、日韓同様に友人同士という人間関係は、ウチと우리の世界に属する人間関係であると言えるが、 Hall（1959）によると、個人間の距離の遠近には型があり、その距離は民族や言語社会によって異なる。日韓のウチと우리の関係について、任・李（1995）は、日本のウチに比べ、韓国において우리は、結束性が強い関係であると指摘している。また、大崎（1998）によると、日本人は親しくなっても、相手に迷惑をかけないことが相手に対する配慮であるのに対し、韓国人は、親しくなると、相手に迷惑をかけることができ、またそれを受け入れることのできる間柄である。このように、ウチと우리に属する友人同士という人間関係の捉え方と、友人に対する行動が日韓でそもそも異なっていることが、日韓の友人同士の会話に見られるポライトネスのあり方に大きな影響を与えていると考えられる。

日韓の対人関係行動を分析した서（2012）によると、韓国の場合、親愛的相互協力の行動（気安さ、感情表現、積極的な関与）の面の数値が高いく、日本の場合、配慮的相互協力の行動（格式、否定的表現の抑制、自己主張の抑制）の数値が高い。このような対人関係行動は、家族意識から生まれ、家族の凝集力は対人関係にも大きな影響を与えているとされている（채 2004）。日韓の夫婦を対象に家族の志向意識を分析した김（1996）は、日本の夫婦に比べ、韓国の夫婦が、家族の情緒的な結束や家族の一体的生活をより志向すると述べている。このように、社会を構成する最も小さな単位である夫婦において人間関係の捉え方と志向する人間関係が日韓で異なっており、日本に比べ、韓国の方がより相手との情緒的な結束を志向する傾向が強い。

서（2012）によると、家族の凝集力が強いと、友達も家族と同様にみなし、気安すく積極的に関与するが、この観点から考えてみると、日本に比べ、韓国の方が友達を家族扱いする可能性が高いということになる。逆に言うと、日本における友人同士という人間関係は、韓国の友人同士という人間関係より相対的に遠い関係であると言えるが、韓国の友人同士の関係に比べ、友人との関係を遠く捉えている日本の友人同士の会話で、ポライトネ

スは、相手の領域には踏み込まず、話しやすい雰囲気を作り出し、面白い経験談を語って友人と笑い合い、冗談を言う際には誤解がないように配慮して伝えるといった形で表れる。一方、友人を家族のような関係として捉えている韓国の友人同士の会話で、ポライトネスは、相手の領域に踏み込んで、自己呈示を要求したり、悩みなど感情に触れる経験談を語って友人と共感し合ったり、フェイスを侵害することを恐れず、本質に触れる「冗談」を言うような親愛的な形で表れる。

このように、日韓における友人との距離の差が、ポライトネスのあり方に大きな影響を及ぼしており、距離を大事にしている日本の友人同士の会話では、相手に押し付けない形で友人に配慮して親密な関係を構築していくのに対し、距離を縮めようとする韓国の友人同士の会話は、親愛的な形で友人に配慮することで親しい関係を強めていくと言える。

以上のように、友人という対人関係をどのように捉えるか、友人とどのような関係になろうとするかということの違いが、日本と韓国の友人同士の会話にみられるポライトネスのあり方の相違の背景にあると言えよう。

3. ジェンダーとポライトネス

ここでは、ジェンダー差を中心に分析結果と考察をまとめ、女性同士の会話と男性同士の会話に見られる特徴について考察を行う。

3.1 男女の会話に見られる特徴

まず、第Ⅱ部と第Ⅳ部で述べた男女の会話における類似点と相違点をまとめて示すと表2のようである。

表2　分析結果のまとめ：ジェンダー

分析項目	類似点	相違点	考察
第7章 ・会話展開の仕方 ・後続「語り」	① ＜関連＞の語りが後続語りとして最も多く用いられており、＜関連＞の語りを提示することで話題展開に積極的に貢献している。	② 男性同士はソロパートを主に展開させることで会話を進めていくが、女性同士はデュオパートで主に会話を展開させていく。 ③ 男性同士の会話では、女性同士の会話に比べて「描写」と「評価」がソロパートで展開される傾向があり、その要因として、男性同士の会話では新情報の提供が多いことと、相手との不同意を表しているため「評価」が語られる場合、聞き手は積極的に会話に参加することを避けることが要因として考えられる。 ④ 後続「語り」はPPSとして用いられており、男性同士の会話に比べて女性同士の会話で「語り」は、情報の共有し合いによるバランスのストラテジーと共通点を主張するストラテジーとして用いられることが多い。	**レポートトークとラポールトーク** 女性同士の会話はデュオパートが中心となり、共同で何かについて話し合うという相互行為を通じて親密な人間関係を維持また構築していくが、男性同士の会話の場合、ソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで親密な関係を作り上げていく傾向が強い。
第8章 ・＜同意・共感＞の発話 ・発話様態との相関関係	① ＜同意・共感＞はデュオパートでその使用頻度が高い。	② ＜同意・共感＞の使用は、いずれのパートにおいても男性同士の会話に比べ、女性同士の会話でその使用頻度が高い。 ③ 女性同士の会話では、相手の意見や感情が自らの意見や感情と同様であることを積極的に表すため、［先取り］発話が用いられるが、男性同士の会話では、話し手の「語り」を確実に＜理解＞していることを表すために用いられる傾向が強い。	**一致と関係構築** 男性同士の会話では、単なる新情報として捉えられている事柄が、女性同士の会話では、相手との共通性を主張できるポイントとして捉えられる傾向が強く、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、共通基盤の主張が親密な関係の構築に最も重要な装置として用いられている。
第9章 ・直接話法（聞き手） ・仮想フレーム	① 聞き手は直接話法を用いて話し手の「語り」構築に積極的に関わっている場合がある。	② 聞き手が直接話法を用いて「語り」の構築に参加する用例は、女性同士の会話で多く観察される。 ③ 仮想のフレームは、日韓同様に女性同士の会話で主に観察される。特に、会話の参加者が互いに協力して作り上げていく相互行為は、女性同士の会話で多く観察されている。	**協力関係の構築** 女性同士の会話で、直接話法は話し手と協力者であることを主張したり、仮想フレームを協力的に作り上げたりする装置として用いられており、このような相互行為を通じて女性同士は親密な人間関係を強めていると言える。
第10章 ・＜不同意＞の発話 ・＜否定的評価＞の発話（「対立」と「冗談」の相互行為）	① 「対立」を解決するため交渉が行われることが多い。	② 女性同士の会話で「対立」は必ずトラブルになり、女性同士の会話では交渉を通じて一致点を探すことで「対立」を解決する。 ③ 男性同士の会話ではトラブルにならない場合もあり、交渉に失敗し、二人の意見の差が縮まらないまま会話を展開させる相互行為も観察される。 ④ 女性同士の会話で、「冗談」は一方的なからかいといった相互行為で行われる。 ⑤ 男性同士の会話では、「冗談」として言い争いのような相互行為が行われる。	**冗談関係の構築** 女性同士の会話とは異なって、男性同士の会話で＜不同意＞と＜否定的評価＞は、親密な関係を壊す行為として捉えられておらず、解決すべきのトラブルとも捉えられることはなく、むしろ言い争いのような「冗談」は、親密な人間関係を構築また維持するためのストラテジーとしても用いられている。

以上の分析結果に見られる女性同士の会話と男性同士の会話の特徴を整理すると次のとおりである。

（A）女性同士の会話の特徴

女性同士の会話は日韓共に、デュオパートが中心となり、会話の参加者は共同で何かについて話し合う相互行為を通じて親密な人間関係を構築していく傾向が強く、ソロパートで話し手が語る際にも、聞き手は直接話法を用いて話し手の「語り」に共感を示したり、「語り」をより具体化させることで話し手を支持したり、「語り」の展開に貢献したりすることが多い。また、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話では、後続「語り」は、互いに情報を共有してバランスをとろうとするストラテジーと共通点を主張するストラテジーをもって語られる傾向が強く、お互いに＜同意・共感＞の発話を積み重ねることで、共

通の意見や感情を主張することが多い。このような特徴は、会話の参加者が直接話法を用いて協力的に仮想フレームを構築していく相互行為を通じて、共通基盤を確認することにも表れる。また、相互行為の中で「対立」関係が形成された場合、「対立」を形成した発話はトラブルとなり、交渉を通じて一致点を探ることで「対立」を解決することが施行される。「冗談」でも、お互いに言い争うような「冗談」を言い合う相互行為は見られず、「冗談」を言う側が一方的に相手をからかう形で行われていることにも表れる。このような特徴から、女性同士の会話では、日韓共に、相手との一致と協力の相互行為が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていると言えよう。

（B） 男性同士の会話の特徴

男性同士の会話では、ソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで親密な関係を作り上げていく傾向が強い。相手の先行する「語り」に後続する「語り」は話題と関連する情報を提供することが多く、不同意や反論を表す後続「語り」も観察されるが、これらの「語り」は、FTAよりは、新情報として捉えられる。また、男性同士の会話では、＜同意・共感＞を積み重ねることによって共通の意見や感情を強調するような相互行為は多くは見られず、話し手が語る際に、聞き手が直接話法を用いて話し手の語りに共感を示したり、語りの展開に参加したりすることも少ない。また、男性同士の会話で、仮想フレームは一人の話者によって構築され、相手を笑わせる「冗談」として用いられる傾向が強く、＜不同意＞や＜否定的評価＞は解決すべきトラブルとして捉えられず、「対立」関係が生じた場合でも、一致点を探らないまま、会話を展開させる相互行為が多く観察される。男性同士の会話で、会話の参加者がお互い協力的な態度を見せるのは、「冗談」フレームが構築された場合であるが、男性同士は、お互いに＜不同意＞の発話を積み重ねて言い争うように「冗談」を発し合うことで、親密な人間関係を強める。このように、男性同士の会話は、新情報の提供と「冗談」の相互行為が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていると言える。

以上の女性同士と男性同士の会話に見られる相違点は、以下のようなことが要因として考えられる。

ⅳ. 女性同士の会話と男性同士の会話に相違点が見られる場合、その理由は何か。

a. レポートトークとラポールトーク

b. 一致と関係構築

c. 協力関係の構築

d. 冗談関係の構築

まず、女性同士と男性同士の会話展開の仕方に見られる相違は、語られる内容が新情報か旧情報かが大きく関わる。男性同士の会話では、新情報を相手に伝えることで会話を展開させる傾向があり、女性同士の会話は、二人が共有している知識を基盤として共同で会話を展開させる傾向が強い。これは、男性同士の会話では後続「語り」は話題と関連する情報の提供を目的とすることが多いのに対し、女性同士の会話では相手の先行「語り」に後続する「語り」は、互いに情報を共有してバランスをとろうとするストラテジーと共通点を主張するストラテジーをもって語られることが多いこととも関連する。このような特徴は、Tannen（1990）が指摘したReport-talkをする男性とRapport-talkをする女性という主張を支持する。

新情報を伝えることが中心である男性同士の会話の特徴は、相手の発話に対する態度に表れている。男性同士の会話では、相手の＜同意・共感＞の発話は新情報として捉えられる傾向が強いため、その発話に対して大げさな反応を見せることはないと考えられる。一方、女性同士の会話では、友人の＜同意・共感＞の発話をお互いの共通の意見や感情を強調できるポイントとして捉えられる。そのため、＜同意・共感＞の発話を積み重ねて大げさに共感し合う関係であることを強調するような相互行為が多く見られるものと考えられる。このような女性同士の会話の特徴は、話し手と協力して「語り」を構築したり、共同で仮想フレームを構築したりする相互行為を通じて、お互いに協力的な関係にあることを強調することにも表れる。

また、男性同士の会話では、相手による反論の「語り」を楽しく聞いたり、相手の＜不同意＞の発話も解決すべき問題として捉えられなかったりすることもある。＜不同意＞の発話がトラブルになった場合も、交渉は行うものの、一致点を見つけないまま会話を展開させることもある。これは、男性同士の会話では、反論の「語り」や＜不同意＞の発話が単なる情報として捉えられている傾向があることを示唆すると考えられる。一方、相手の＜不同意＞の発話が問題として捉えられる傾向が強いのは、女性同士の会話であるが、これは、女性同士の会話で＜不同意＞の発話が男性同士の会話に比べて少ないことと、友人の＜不同意＞の発話の殆どは解決すべき問題ととなり、交渉を通じて一致点を見つけてか

ら会話を展開させることからも分かる。

このように、男性同士の会話では情報として捉えられる傾向が強い同意の発話や反論、不同意を表す発話が、女性同士の会話では、共通の意見や感情を強調できるポイントとして捉えられたり、トラブルとして捉えられたりする。これは、女性同士の会話では、一致が親密な関係構築に大きな装置として作用していることを意味する。そのため、女性同士の会話で「冗談」は、相手をからかうような形で表れるものの、「冗談」としても相手と対立して言い争うような相互行為は見られないものと考えられる。一方、 相手との一致が親密な関係構築にそれほど大きく作用しない男性同士の会話では、「冗談」が親密さを表す大きな装置として用いられていると考えられる。これは、仮想フレームは「冗談」として用いられる傾向があることと、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が「冗談」として用いられることが多いことから分かる。また、男性同士の会話で、男性はお互い協力的に＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話を積み重ねて言い争うように「冗談」し合うことが多い。このことから、男性同士の会話では「冗談」し合える関係であることを確認することが親密な関係構築に大きな装置として用いられていると考えられる。

以上のような特徴から、女性同士の会話では、相手との一致や協力が親密な関係構築に大きな装置として用いられていると言える。一方、男性同士の会話では、相手との一致や協力よりは、情報の提供と「冗談」が親密な人間関係の構築に大きな装置として作用していると言える。このように、女性同士の会話と男性同士の会話に見られるポライトネスの装置には相違点が見られ、相手の発話をどのように捉えており、どのような装置を用いて親密さを表すかという違いが女性同士の会話と男性同士の会話に相違が見られる要因として考えられる。

3.2　ジェンダー役割とポライトネス装置

異なる言語・文化に属する日韓の男女に、同様なジェンダー差が観察される要因は何であろうか。ジェンダー差に関する研究は、生物学、進化学、脳科学、心理学、社会学など様々な分野でなされているが、社会的な動物である人間にとって社会的に期待されるジェンダー役割が、それぞれの個人のふるまいに大きな影響を及ぼすことは確かである。

従来、言語とジェンダー差を探った研究では、かなり異なる言語文化においても男性に比べ、女性の方が、柔らかく、ポライトであると指摘されてきた（Holmes 1995、鈴木 1993、 井出 1979、1982、 宇佐美 2006、이 2000など）。言語使用におけるジェンダー差を異文化コミュニケーションという観点から捉えた Tannen（1990）は、男性と女性は異なる目的を持って会話をしているため、異性間の会話では誤解が生じることになると指摘しており、なぜ男性と女性は異なる目的を持って会話をしているのかという問いに対して、Tannen（1990）は、男性と女性は異なる下位文化を持っているためであるとしている。つまり、一つの文化の中には、男性の文化と女性の文化という異なった下位文化が存在するということであるが、男性と女性の異なった下位文化は、児童期から友達と関わり会うことで形成されるようになる。アメリカの子供の遊びを観察したGoodwin（1980）では、男児同士は、命令形を用いて相手に何かをさせるのに対し、女児同士は、提案をしながら遊びを決める過程に全員が参加していることが観察されている。また、Maccoby（1990）によると、男児は相互行為の中でより競争的であるのに対し、女児は社会的な関係を維持するため、協力と親密さに基づいた行動をする。

このような男女のふるまいに見られる差は、ジェンダー役割の習得という観点から解釈できる。まず、日本の保育室の先生と子供たちの相互行為を分析した Burdelski & Mitsuhashi（2008） では、評価を表す「かわいい」と「かっこいい」という形容詞は、それぞれ一方の性別に関連させた形で発話され、ジェンダーの社会化と、ジェンダーと結びついた感情スタンスの社会化を促進させる資源として用いられていると指摘されている。また、Keenan & Shaw（1997）によると、社会化の過程で親と教師また同年の集団は、男児には攻撃的な行動を、女性には恥ずかしさや依存的な行動により受容的な態度を見ることで、ジェンダー役割の類型化された行動が調整また強化される。このような過程を通じて、男児と女児は、社会が期待しているジェンダー役割やジェンダーアイデンティティに一致する方向に態度と行動を調節していくと考えられる。좌（2011）では、それが女児と男児のなかで固定観念になっていることが指摘されている。また、このような社会化された行動は、遊びのなかにも現れる。たとえば、小学校の児童を対象にアンケート調査を行った 粟原・熊澤（2002）によると、男性に好まれやすい遊びは、「ゲーム」遊びや「つり」に偏りが見られるのに対し、「おしゃべり」「お絵かき」は女性のみに偏っている。

男性は、達成感、勝負に勝つなどの遊びにおける目的が明確で、その目的によって遊びそのものや対象物が決定されるタイプの遊びが中心であるのに対し、女性は、人形遊び、虫草花遊びなど対象物を中心とした遊びが多い。

以上の先行研究が指摘しているように、社会が期待する女性と男性という役割やイデオロギーは、家庭や保育室、友達との遊びなどの日常的な相互行為の中で習得され、女性と男性はお互いに異なった役割の社会化の過程を進んできたと言える。このような社会化の過程を進んできた結果、親密な間柄の女性同士の会話と男性同士の会話のポライトネスのあり方に相違が見られるのであると考えられる。3歳から5歳の幼児の遊びを統計学的に分析した丕（2003）では、一般的に男児が好むとされている身体を使った喧嘩遊び、粗野な遊び、喧嘩のような遊び（Rough-and-Tumble Play）は、男児が好む遊びではなく、社会性と活動性の気質が高い幼児が選考すると指摘し、粗野な遊びを単に男女差として捉えず、全ての幼児に見られる一般的な遊びとして捉える必要があるとしている。

幼児の粗野な行動や喧嘩遊びは、日韓の男性同士の会話に見られる言い争うような冗談と非常に類似している。このような行動は、丁寧さの不足が本質的に親密性のしるしになりうることや（Leech 1987:210）、見せかけのインポライトネスが相手との連帯感を強める機能を果たすこと（Culpeper 2011）とも関連して考えることができるが、丕（2003）が指摘したように、通常粗野な行為と見なされる行動は、身体的な接触とコミュニケーションを誘導する肯定的な面を持っており、幼児に観察される一般的な遊びである。それにも関わらず、女性同士の会話で反論や＜不同意＞、＜否定的評価＞の発話は多く用いられず、言い争いのような冗談も観察されない理由は、Keenan & Shaw（1997）が指摘したように、社会化の過程において、男児と女児が粗野な行動を行った場合、男児には受容的な態度を見せるが、女児にはそうではなかったのがその原因として考えられる。つまり、一見インポライトな粗野な行為や喧嘩のような遊びは、男女に関わらず親密な人間関係の構築に有効な装置であるものの、これらの行為は、社会的に男性には容認されやすいのに対し、女性には容認されにくいため、男性同士の会話と女性同士の会話でポライトネスのあり方がジェンダー化された形で表れていると考えられる。

このように、社会的に容認される文脈で、男性同士の会話では、友人に反論したり、不同意を表明したり、言い争いのように冗談を述べ合う行為が相互行為の中で新情報や遊び

として参加者同士に捉えられ、親密さを表す一つの有効な装置として用いられていると言える。一方、インポライトな粗野な行為や言い争いのような冗談の行為が社会的に容認されにくい女性の場合、社会的に期待される女性らしさを基に一致や協力の装置を親密さを表す有効な装置として用いていると考えられる。多くの文化圏で、表面上の言語行動を捉えた範囲では、このような結果は、女性は、男性より、より丁寧・ポライトであるという報告と関連して考えることができる（宇佐美 2006b）。

以上のように、言語文化は異なっても、それぞれの文化内で期待されるジェンダー役割の類似性が、日韓の男性と女性の相互行為におけるポライトネスのあり方に大きな影響を与えていると考えられる。その結果、日韓の女性同士の会話と、日韓の男性同士の会話に見られるポライトネス装置は、ジェンダー化された形で表れていると思われる。

4. 友人同士の会話に見られる日韓差とジェンダー差

上述したように、日韓の女性同士の会話と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方には、日韓の友人関係の捉え方の相違と、ジェンダー役割が大きな影響を及ぼしているが、ここでは、日韓の友人関係の捉え方の相違とジェンダー役割が友人同士の会話のどのような部分に表れているかについて述べる。

まず、日韓差は、次のような点に顕著に表れる。

(a) 会話における話し手と聞き手の役割

(a-1) 話題管理の仕方（話題構成のあり方と語り開始の方法）

(a-2) 聞き手の言語行動（＜理解＞と＜感情・感想＞）

(b) どのような自己呈示をどのように行うか

(b-1) 話題内容と語りの内容（直接話法）

(c) どのような事柄を対象とするか

(c-1) 直接話法の対象

(c-2) ＜不同意＞と＜否定的評価＞の対象

(d) どのように伝え、どのようにフレームを構築するか

(d-1) コンテキスト化の合図の使用

(d-2)「冗談」フレーム構築の仕方

日韓差は、友人同士の会話で、話し手と聞き手としてどのようなふるまいをすればよいか、親密な関係構築に不可欠である自己呈示はどのように行えばよいか、また、どのような事柄を対象にするのが適切であり、「冗談」であることをどのように伝え、フレームはどのように構築すればよいのかという面に表れるが、会話で期待される役割、自己呈示の種類、話題の内容、特定の発話の対象になりやすい事柄、伝達やフレーム構築の仕方は、会話の全体に関わるマクロ的な部分であると言える。

次に、ジェンダー差は、次のような点に表れている。

(e) どのように会話に参加しているか

(e-1) 会話展開の仕方（ソロ中心とデュオ中心）

(e-2) 聞き手の直接話法の使用と仮想フレーム構築

(f) どのような「語り」と発話を連鎖しているか

(f-1) 後続「語り」のタイプ

(f-2) ＜同意・共感＞発話の積み重ね

(f-3) ＜不同意＞と＜否定的評価＞発話の積み重ね

上のようなジェンダー差は、どのようなパートを主に展開させているか、どのように「語り」と発話を連鎖して親密な関係であることを強調しているのかという会話のミクロ的な発話連鎖の仕方に著しく表れていると言える。

以上のように、友人同士の会話で、日韓差は会話のマクロ的な部分に表れ、ジェンダー差は会話のミクロ的な部分に表れていると考えられる。Clancy（1986:213）は、「ある文化の中で言語が使用され理解される方法」をコミュニケーション・スタイルと定義し、コミュニケーション・スタイルは、言語と文化が最も著しくかかわり合っているものであると指摘している。Clancy（1986）によると、スタイルとは、文化の中で人々や人々のかかわり合い方に関して共有される信条から生じるものである。つまり、それぞれの文化で人間関係を構築するに当たって、期待され、また適切とされる方法を反映しているものがコ

ミュニケーション・スタイルであると考えられる。

このコミュニケーション・スタイルという観点から見たとき、上述したように、友人という対人関係の捉え方が異なる日韓の友人同士の会話において、差が著しく表れる部分であり、異文化間コミュニケーション場面で誤解が生じやすい部分であると考えられる。たとえば、お互い親密な関係であると認識している日本語話者と韓国語話者がコミュニケーションを行う際、相手の語りを黙って聞いていた韓国語話者がいきなり自己呈示を要求したり、相手の本質に関わる事柄についての＜否定的評価＞を冗談の合図なしで言ったりすると日本語話者は無礼だと誤解される危険性がある。逆に、自己呈示も要求せず、控えめである日本語話者に対して韓国語話者は距離を感じ、冷たい人と感じるかもしれない。日韓のコミュニケーション・スタイルの差は、初対面の会話における疑問表現を分析した任・井出（2004）でも指摘されている。任・井出（2004）によると、日本人は「待ち」手法を好むのに対し、韓国人は「攻め」手法を好むため、日本人の目に韓国人はストレートで攻撃的と捉えられ、韓国人には日本人は時として心を開いていない印象を与えてしまうようである。このように、日韓差は、メッセージをどのように表現して相手に送るかというエンコーディングと、相手から送ってきたメッセージをどのように解釈するかというディコーディングの問題に大きく関わっている。南（2009）によると、エンコーディングとディコーディングは、文化特有のスキーマでできあがっているため、同じ文化間の人同士では伝達規則についていちいち考えなくてもうまく行えるようになるという。この観点から考えてみると、日韓差は、親密な関係であれば、友人にどのようなメッセージをどのように送るべきか、また、友人から送られてきたメッセージをどのように解釈すべきかという親密な対人関係の構築における一定の行動様式に関わるマクロ的な部分を支配していると言える。

次に、ジェンダー差は、会話参加形式の観点からどのようなパートを主に展開させているか、どのような装置を用いて親密な関係であることを強調するかという会話のミクロ的な発話連鎖に表れる。フィッツジェラルド（2010:100）によると「コミュニケーション・スタイル」とは、各自が築き上げたこれらの特徴と、インタラクションを通じて社会的に身につけた特徴とか混ざり合って作られるものである。しかし、このようなスタイルは社会的場面の中で幼い頃から習得するものであるため、各人のスタイルの選択の余地はその

人が育った集団の中で一般的に認められているものに限られる傾向がある」という。すなわち、§3で述べたジェンダー役割は、日韓という違ったマクロ的な文化の中で、男女のスタイルの選択に影響を与えている一つの要因と解釈できる。異文化コミュニケーションの観点からジェンダー差を説明したMaltz & Borker（1982）とTannen（1990）によると、特定の文化内に男性文化と女性文化という社会言語学的に異なる下位文化（subculture）が存在し、下位文化の中での相互行為を通じて人は社会化され、発達するという。日韓差が表れるマクロ的な部分に比べ、ジェンダー差が表れる＜同意・共感＞や言い争いのような「冗談」などといった発話連鎖の仕方というミクロ的な部分は、接触場面のコミュニケーションにおいて大きな誤解を発生させる危険性が比較的に低いことからもジェンダー差という要因は日韓という違いよりは大きくないと言える。つまり、ジェンダー差は、日本と韓国というマクロ的な差の中で、ミクロ的な部分に影響を与えていると考えられる。

以上のように、人は常にマクロとミクロの部分への対応をしながら、対人コミュニケーションを行っていると言える。そして、その結果、日韓の女性同士の会話と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方には、日韓というマクロ的な文化差と、ミクロ的なジェンダー差が同時に影響を及ぼしていると考えられる。

5. 本章のまとめ

本章では、第Ⅱ部から第Ⅳ部にかけて述べてきたポライトネスのあり方に見られる日韓差とジェンダー差をまとめ、日韓の会話と、男女の会話に見られる特徴について総合的な考察を行った。本章で述べたことは、以下のようにまとめられる。

Ⅰ．友人という対人関係をどのように捉えるか、友人とどのような関係になろうとするかということの違いが、日本と韓国の友人同士の会話にみられるポライトネスのあり方の相違の背景にあると考えられる。

Ⅱ．それぞれの文化内で期待されるジェンダー役割の類似性が、日韓の男性と女性の相互行為におけるポライトネスのあり方に大きな影響を与えており、日韓の女性同士の会話と、日韓の男性同士の会話に見られるポライトネス装置は、ジェンダー化された形で表れていると思われる。

Ⅲ．日韓の女性同士の会話と男性同士の会話におけるポライトネスのあり方には、日韓

というマクロ的な文化差と、ミクロ的なジェンダー差が同時に影響を及ぼしており、日韓の男女は、常にマクロとミクロの部分への対応をしながら、親密な関係を構築していると言える。

6. 今後の課題

本稿では、ポライトネスの研究において重要なのは、それぞれの相互行為においてどのような装置が、参加者の関係構築に寄与しているかという人間関係構築に果たす影響であると考える。したがって、いかなる発話や行為が日韓の同性間の相互行為において親密な関係を構築する装置となっているかという観点からポライトネスのあり方を実証的に探求してきた。そして、ポライトネスのあり方に日韓という異なる言語・文化とジェンダーという要因がどのように関わっているのかについて論じてきた。

一方、次のようなことを問題として残した。

(a) 調査協力者について、本研究では、日本の関西地方の20代の男女と、韓国の京畿地方の20代の男女の親密な間柄の同性間の自由会話といったごく一部の地域の男女の会話を分析データとして用いているが、全ての日本と韓国の男女が本研究の結果と同様なふるまいをしているとは限らない。第1章で述べたように、異なる言語・文化やジェンダーという要因以外にも、同じ言語・文化内にも様々な要因あるいは下位文化（年齢、地域、宗教）があり、それがポライトネスのあり方と密接に関わっているかもしれない。さらに、同様な下位文化に属しても、個人差がもちろん存在することが予想される。また、日韓の同性間の会話と異性間の会話を分析した張（2013、2015）でも指摘されているように、男女は互いが異なるルールを持っていることに気付き、相手のフェイスに配慮しようと努力する流動的な存在として会話に参加していることも忘れてはいけない。本研究の結果から言えることは、ポライトネスのあり方には、それぞれの言語・文化における対人関係の捉え方の相違がポライトネスと深く関わっており、文化的集団内に見られるジェンダーという社会的なイデオロギーが、日韓男女のポライトネスあり方に影響を及ぼしているということである。今後は、日韓の対人関係の捉え方とジェンダー以外の要因も視野に入れ（上下関係や地域など）ポライトネスのあり方の多様性を探っていきたい。

(b) ジェンダー差について、本研究では、日韓で同様に観察されるジェンダー差のみ

に焦点を当て分析を行ったため、日韓で違った形で表れるジェンダー差までは分析が至らなかった。今後は、日韓のそれぞれの言語・文化におけるジェンダーによる違いも分析していく必要がある。

（c）分析について、本研究では、会話の参加形式という観点からソロパートとデュオパートを分析の枠組みとして設けたが、それぞれのパートの展開の仕方は今回の分析に含めなかった。今後は、ソロパートとデュオパートの展開の仕方に焦点を当てて、ソロパートで話し手が「語り」をどのように展開させており、ソロパートの終了後、会話の参加者がどのようなデュオパートを展開させているか、また、次の話題にはどのように展開されているかを詳細に分析していく必要があると考えている。

（d）また、本研究では、日韓男女の自由会話に見られるポライトネスのあり方を探求していくことを目的とし、会話の参加者がどのような発話をいかなるストラテジーとして用いており、それらの発話を受け手がどのように捉えているかという相互行為のレベルに重点を置いてポライトネスのあり方を探ってきた。そのため、特定の機能を果たす発話を発する際、どのような表現形式が用いられているかという面からの詳細な分析まではできていない。たとえば、＜不同意＞を表明する際、（1）のように「いや　まあ　そうやけどさ」と部分的な同意を表しつつ、疑問表現を用いることで発話や陳述を弱めて＜不同意＞を表明している場合もあれば、（2）のようにあきらさまに＜不同意＞を表明している場合もある。

(1)会話MJ3

01　JNM6:＞本　本とか読んで「あ　こいつら　このゆうのいたな:」とかは＜なるけ［ど］

02 →JKM5:［いや］　まあ　そうやけどさ　それってどうなん

(2)会話MK3

01　KBM5:나 중고등학교때니까 십년전이지 근까

（私が中高校生の時だから　10年前だよ だから）

02 →KCM6:아니 우리 초등학교때 나왔어(いや　私たちが小学生の時出たよ)

また、「かもしれない」、「みたいな」、「같다」、「보다」 などのように断定を避

け、発話内容をやわらげる文末表現はポライトネスと大きく関連していると考えられるが、これらに関しても分析を積み重ねていく必要があると考えている。

今後、本研究をさらに深めていくために以上のような点を追及していきたい。

参考文献

生田少子（1997）「ポライトネス理論」『言語』26-6:66-71.

李善姫（2006）「日韓の<不満表明>に関する一考察 －日本人学生と韓国人学生の比較を通して－」『社会言語科学』8-2:53-64.

井出祥子（1979）『女のことば男のことば』 日本経済通信社.

井出祥子（1982）「言語と性差」『言語』11-10:40-48.

今田恵美（2015）『対人関係構築プロセスの会話分析』大阪大学出版会.

林始恩（2010b）「親和的関係における否定的評価－日・韓の話者の話し方と FTA 補償行為に注目して－」『筑波応用言語学研究』17:99-109.

林始恩（2015）『親和的関係における否定的評価の研究－日韓母語話者の言語行動の比較－』筑波大学博士論文.

林河運（2010a）「日韓友人同士会話におけるポライトネス・ストラテジー －オーバーラップ会話に注目して－」『島根大学外国語教育センタージャーナル』5:43-59.

任炫樹（2004）「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6-2:27-43.

任榮哲･李先敏（1995）「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』5:239-251 国際交流基金日本語国際センター.

任榮哲･井出理咲子（2004）『箸とチョッカラク－ことばと文化の日韓比較－』大修館書店.

李麗燕（1999）「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」－発話順番のやり取りとの関係を中心に－」『世界の日本語教育』9:221-239.

宇佐美まゆみ（2006a）「ジェンダーとポライトネス－女性は男性よりポライトネスなのか？－」『日本語とジェンダー』 pp.21-37.

宇佐美まゆみ（2006b）「談話研究におけるロール分析とグローバル分析の意義」『現互除法学研究報告13　自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」 pp.229-243.

宇佐美まゆみ（2008）「ポライトネス理論研究のフロンティアーポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネスー」『社会言語科学』11-1:4-22.

大崎正瑠 （1998）「日韓異文化コミュニケーション」『大妻女子大学紀要』30:107-146 大妻女子大学.

大滝世律子（2006）「集団における幼児の性自認メカニズムに関する実証的研究」『教育社会学研究』79:105-125.
大津友美（2004）「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネスー「「遊び」としての対立行動に注目してー」『社会言語科学』6-2:44-53.
大津友美（2005）「親しい友人同士の雑談におけるナラティブー創作ダイアログによるドラマ作りに注目してー」『社会言語科学』8-1:194-204.
大津友美（2007）「会話における冗談のコミュニケーション特徴ースタイルシフトによる冗談の場合ー」『社会言語科学』10-1:45-55.
大塚容子（2015）「日・英語の初対面3人会話におけるあいづち」『日・英語談話スタイル対照研究』 pp.169-189　ひつじ書房.
粟原知子・熊澤栄二(2002)「「子どもの遊び」にみる「生きた環境」の意味に関する研究ー遊びの志向性と遊び場所の関係についてー」『日本建築学会計画系論文集』558：175-181.
奥山洋子（2000）「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話ー質問及び自己開示の時間帯による分析を中心にー」『日本學報』45:117-132.
奥山洋子（2005）「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較ー日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心にー」『社会言語科学』8-1:69-81.
生越直樹（2008）「相手の所有物を使う際の言葉の有無に関する日韓比較」『対人行動の日韓対照研究ー言語行動の基底にあるものー』pp.31-59　ひつじ書房.
加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現ー引用標識に注目してー』くろしお出版.
鎌田修（2000）『日本語の引用』ひつじ書房.
カメロン･デボラ（2012）林宅男訳『話し言葉の談話分析』ひつじ書房（Cameron, D.(2001) Working with spoken discourse. London: Sage.）.
河内彩香（2003）「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究 』3:41-55 早稲田大学大学院日本語教育研究.
関崎博紀（2009）「日本語の自然会話における悪態の対象」『国際日本研究』1: 71-93. 筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻.
関崎博紀（2010）「日本語の会話における否定的評価の表現を含む発話の機能ー発話のきっかけに注目してー」『筑波大学地域研究』31:45-63.
北原保雄他 （1981）『日本文法辞典』 有精堂出版.
金庚芬（2006）『「ほめの談話」に関する日韓対照研究―日・韓大学生の会話データを用いて―』桜美林大学大学院国際学研究科環太平洋地域文化専攻博士学位論文.
金珍娥（2003）「韓国語と日本語のturnの展開から見たあいづち発話」『朝鮮学』191:

1-28.
金珍娥（2013）『談話論と文法論』くろしお出版.
金鍾美（2010）「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究－内容の分類からみる自己開示の特徴－」『社会言語科学』13-1:123-135.
串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析－「話し手」と共－成員性」をめぐる参加の組識化－』世界思想社.
串田秀也・好井裕明（2010）『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社.
鯨岡峻（2006）『ひとがひとをわかるということ－間主観性と相互主体性－』ミネルヴァ書房.
熊谷智子・石井恵理子（2005）「会話における話題の選択－若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から－」『社会言語科学』8-1:93-105.
木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり－母語場面と接触場面の会話について－」『日本語科学』11、国立国語研究所　pp.115-134.
ゴッフマン・E（1974）石黒毅訳『行為と演技－日常生活における自己呈示－』誠信書房（Goffman,E.（1959）The Presentation of Self in Everyday Life. Doubleday.）.
小矢野哲夫（2004）「大阪的談話の特徴－ボケとツッコミ－」『日本語学』23-11:45-52.
齊藤明美（2005）『ことばと文化の日韓比較－相互理解をめざして－』世界思想社.
作野友美（2008）「2歳児はジェンダーをどのように学ぶのか」『子ども社会研究』14:29-　44.
ザトラウスキー･ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』くろしお出版.
張允娥（2015）「同性間・異性間の会話における＜理解＞と＜同意・共感＞－ポライトネスの観点からみる日韓差と男女差－」『日本語学研究』45:65-83.
張允娥（2013）『自然談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの日韓対照研究－同性間・異性間の談話における聞き手の言語行動を中心に－』大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻日本語学修士論文.
ジョーンズキンベリー（1993）「日本人のコンフリクト時の話し合い－アメリカ人研究者から見た場合－」『日本語学』12-4:68-74.
鄭在恩（2009）「日韓の勧誘ストラテジーについて」『言葉と文化』10:113-132 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.
全鍾美（2010）「初対面の相手に対する自己開始の日韓対照研究－内容の分類からみる自己開始の特徴－」『社会言語科学』13-1:123-135.
椙本総子 （2004）「提案に対する反対の伝え方－親しい友人同士の会話データをもとに

してー」『日本語学』23-8:22-33.
鈴木睦　(1997)「女性語の本質ー丁寧さ、発話行為の視点からー」井出洋子編『日本語の世界』 pp.59-73 明治書院.
鈴木香子（1995）「内容区分調査による対話の「話段」設定の試み」『国文目白』34: 76-84.
砂川有理子（1989）「引用と話法」『講座日本語と日本語教育4』pp.355-387 明治書院.
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社.
滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店.
千々岩宏晃(2013)「「からかい」の相互行為的達成ー「あなたに関する知識」を用いた発話の一用法ー」『日本語・日本文化研究』23:129-141　大阪大学大学院　言語文化研究科.
筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版.
中川典子（2011）「日本人と韓国人ビジネスパーソンの自己開示に関する異文化比較調ー面接調査法による質的調査の結果からー」『流通科学大学論集ー人間・社会・自然編ー』23-2:25-44.
中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』勁草書房.
西坂仰・串田秀也・熊谷智子（2008）「特集「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」について」『社会言語科学』10-2:13-15.
西田司（2004）『不確実性の論理』創元社.
朴承圓（2007）「韓国人日本語学習者の不満表明行為の特徴ー非言語行動を含む不満の表し方を中心にー」『Foreign　Languages Education』14-3:367-383.
藤田保幸（2000）「日本語の引用研究・余論ー鎌田修への啓蒙的批判ー」『滋賀大学教育学部研究紀要（人文科学・社会科学』49:118-130.
フッサール・エドムンド・G（2012）浜渦辰二、山口一郎訳『間主観性の現象学』筑摩書房(Husserl, E.G.A.（1929）　Zur Phänomenologie des Intersubjektivität.).
フィッツジェラルド・ヘンリ（2010）村田泰美監訳『文化と会話スタイルー多文化社会・オーストラリアに見る異文化間コミュニケーションー』ひつじ書房(Fitzgerald, H. 2002）*How different are we? : Spoken discourse in intercultural communication.* Multilingual Matters.).
堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64:13-26.
堀口純子（1997）　『日本語教育と会話分析』くろしお出版.
本田厚子（1998）「テレビ討論における発話順番取り（turn-taking）システムとコンフリ

クト表現の相互関係」 『大阪大学言語文化学』7:129-146.
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法　改訂版』くろしお出版.
水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』7-13:4-11.
南雅彦（2009）『言語と文化－言語学から読み解くことばのバリエーション－』くろしお出版.
南不二男（1972）「日常会話の構造－とくにその単位について－」『言語』1-2:28-35.
三牧陽子（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー大学生会話の分析」『日本語教育』103:49-58 日本語教育学会.
三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析』くろしお出版.
三牧陽子・難波康治（2009）「社会人初対面会話における話題選択－日米中韓のデータをもとに－」JSAA-ICJLE 2009 発表要旨.
三宅和子（1994）「日本人の言語行動パターン－ウチ・ソト・ヨソ意識－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9:29-39.
宮崎あゆみ（1991）「学校における「性役割の社会化」再考」『教育社会学研究』48:105-123.
ミルズ･サラ（2006）熊谷滋子訳『言語学とジェンダー論への問い－丁寧さとはなにか－』明石書店(Mills,S. (2003) Gender and politeness. Cambridge: Cambridge University Press.).
メイナード･K･泉子（1992）『会話分析』くろしお出版.
メイナード･K･泉子（2004）『談話言語学－日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究－』くろしお出版.
山根智恵（1993）「発話機能から見た日本語の会話の構造」『岡大国文論稿』21:108-116 岡山大学文学部言語国語国文学会.
山本真理（2013）「物語の受け手によるセリフ発話」『社会言語科学』26-1 :139-159.
柳慧政（2012）『依頼談話の日韓対照研究－談話の構造・ストラテジーの観点から』笠間書院.
김은미（1996）「부부의 가족지향의식에 관한 한일 비교」『대한가정학회지』（「夫婦の家族志向意識に関する韓日比較」『大韓家庭学会誌』）34-1:1-14.
박선용（2006）『한국어교육을 위한 한국어 맞장구 어사 기능 분석』경희대학교 교육대학원 외국어로서의 한국어교육전공 석사논문(『韓国語教育のための韓国語あいづち語詞機能分析)』慶熙大学教育大学院外国語としての韓国語教育専門修士論文).
배인자（1986）『유아의놀이활동에 기초한 성유형화 행동에 관한 연구』이화여대교육대학원 석사학위 논문(『幼児の遊び活動に基礎した性類型化行動に関する

研究』 梨花女大教育大学院修士論文).
서보윤 (2012) 「대인관계 행동에서의 한·일 문화차와 그 규정요인」『한국교육』(「対人関係行動における韓・日文化さとその規定要因」『韓国教育』) 29-3:107-130.
이창숙 (2000)「국어의 여성어 연구 (国語の女性語研究)」『江南大学国語国文学科論集』10:211-236.
이필용 (1993) 『국어의 인용구문 연구 (国語の引用構文研究)』탑출판사.
조은숙 (2003) 『유아의 기질에 따른 놀이성향과 놀이 행동에 관한 연구』수원대학교 석사학위 논문』(『幼児の気質による遊び性向と遊び行動に関する研究』水原大学修士論文).
좌현숙 (2011) 「성역할 고정관념 발달궤적의 성차와 예측요인 -아동・청소년기를 중심으로-」『청소년학연구』 (「性役割と固定観念発達奇跡の性差と予測要因―児童・青少年期を中心に」『青少年学研究』) 19-9:237-263.
채유경 (2004) 「청소년이 지각한 가족 응집성 및 적응성,자아 존중감과 대인관계간의 관계」『청소년상담연구』 (「青少年が自覚した家族凝集力及び適応性、自我尊重感と対人関係間の関係」『青少年相談研究』12-2:136-144.
Aries, E. (1976) Interaction patterns and themes of male, female and mixed groups. *Small group behavior* 7: 7-18.
Barnlund, L. (1994) Communication in a global village. In Samovar, L. and Porter, R.E.(eds.) *Intercultural communication: A reader* (7th edn). Belmont, CA: Wadsworth.
Bateson, G. (1972) *Steps to an ecology of mind.* Chicago: The University of Chicago Press.
Beebe, L. (1995) Polite fictions: Instrumental rudeness as pragmatic competence. *Georgetown university roundtable on language and linguistics.* pp.154-168.
Bousfield, D. (2008) *Impoliteness in interaction. Amsterdam*: John Benjamins.
Brown, J. & Rogers, E. (1991) Openness, uncertainty and intimacy: An epistemological reformulation. In Coupland, N., Giles, H., Wiemann, J. (eds.) *Miscommunication and problematic talk.* London: sage. pp.146-165.
Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language use*. Cambridge: C ambridge University Press. (田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス―言語使用におけるある普遍現象―』研究社.)
Bultler, J. (1990) *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York: Routledge.
Burdelski, M. & Mitsuhashi, K. (2008) Socializing gender and stance: Japanese assessments with kawaii and kakkoii. *Journal and Proceedings of the Gender and Awareness in Language*

education (GALE) Special interest group of the Japan association for language teachings 1-1: 88-99.

Burdelski, M. & Mitsuhashi, K. (2010) “She thinks you’re kawaii”: Socializing affect, gender, and relationships in a Japanese preschool. *Language in society* 39-1: 65-93.

Cameron, D. (1998) “Is there any ketchup, Vera?”: Gender, power and pragmatics. *Discourse and society* 9-4: 435-455.

Clancy, P. (1986) The acquisition of communicative style in Japanese. In Scheffelin, B. and Ochs, E. (eds.) *Language socialization across cultures.* Cambridge: Cambridge University Press. pp.213-250.

Clift, R. (2007) Getting there first: Non-narrative reported speech in interaction. In Holt, E. and Clift, R. (eds.) *Reporting talk: Reported speech in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.120 -149.

Coates, J. (1988) Gossip revisited: Language in all-female groups. In Coates, J. and Cameron, D. (eds.) *Women in their speech communities*. London: Longman. pp.94-122.

Coates, J. (1996) *Women talk: Conversation between women friends*. Blackwell.

Coates, J. (2003) *Men talk: Stories in the making of masculinities*. Blackwell.

Culpeper, J. (2011) *Impoliteness: Using language to cause offence.* Cambridge: Cambridge University Press.

Daly, N., Holmes, J., Newton, J., Stubbe, M. (2004) Expletive as solidarity signals in FTAs on the factory floor. *Journal of pragmatics* 36: 945-964.

Drew, P. & Walker, T. (2009) Going too far: Complaining, escalating and disaffiliation. *Journal of pragmatics* 41:2400-2414.

Du Bois, J. W., Schuetze-Coburn, S., Cumming, S., & Paolino, D. (1993) Outline of discourse transcription. In Edwards, J. A. & Lampert, M. D. (eds.) *Talking Data: Transcription and Coding in Discourse Research*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum, pp. 45-89.

Eckert, P. (1990) Cooperative competition in adolescent girl talk. *Discourse processes* 13: 92-122.

Eckert, p. & McConnell-Ginet, S. (1992) Think practically and look locally: Language and gender as community-based practice. *Annual review of anthropology* 21: 461-490.

Edelsky, C. (1981) Who’s got the floor*? Language in society* 10-3: 383-421.

Eelen, G. (2001) *Critique of politeness theories*. Manchester: St Jeromes Press.

Fairclough, N. (1995) *Critical discourse analysis: The critical study of language*. Longman.

Fishman, P. (1983) Interaction: The work women do. In Thorne. B. et al.（eds.）*Language, gender, and society*. Longman. pp.89-100.

Goffman, E. (1967) *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior.* Chicago: Aldin.

Goffman, E. (1974) *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Boston: Northeastern university press.

Goodwin, M. H. (1980) Directive-response speech sequences in girls' and boy' task activities. In Meconnel-Ginet, S. & Borker, R. & Furman, N. (eds.) *Women and language in literature and society*. Praeger. pp.157-173.

Gumperz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haakana, M. (2007) Rported thought in complaint stories. In Holt, E. and Clift, R. (eds.) *Reporting talk: Reported speech in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.150-178.

Hall, E. T. (1959) *The silence language*. Doubleday.

Holmes, J. (1995) *Women, men and politeness*. New York: Longman.

Holt, E. (1999) Just gassing: An analysis of direct reported speech in a conversation between employees of a gas supply company. *Text* 19-4: 505-537.

Holt, E. (2007) 'I`m eyeing your chop up mind': reporting and enacting. In Holt, E. and Clift, R. (eds.) *Reporting talk: Reported speech in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.47-80.

Keenan, K. & Shaw, DS. (1997) The development of aggression in toddles: A study of low income families. *Journal of abnormal child psychology* 22: 53-78.

Keinpoinetner, M. (1997) Varieties of rudeness: types and functions of impolite utterances. *Functions of language* 4-2: 251-287.

Kuiper, K. (1991) Sporting formulae in New Zealand English: Two models of male solidarity. In Cheshire, J. (ed.) *English around the world*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.200-209.

Labov, W. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Lakoff, R. (1975) *Language and women`s place*. New York: Harper & Row.

Leech, G. (1983) *Principle of pragmatics*. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳（1987）『語用論』紀伊国屋書店.)

Levinson, S. C. (1983*) Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Maccoby, EE. (1990) Gender and relationships: A developmental account. *The American psychologist* 45-4: 513-511.

Maltz, D. & Borker, R. (1982) A cultural approach to male-female miscommunication. In Gumperz, J. J. (Ed.) *Language and social identity*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.196-216.

Maynard, D. W. (1985) How children start arguments. *Language in Society* 14: 1-30.

Norrick, N. R. (1993) *Conversational joking: Humor in everyday*. Indiana University Press.

Okamoto, S. (1995) Tasteless Japanese: less “feminine” speech among young Japanese women. In Hall, K. & Bucholtz, M. (eds.) *Gender articulated*. London and New York: Routledge. pp.35-51.

Parsons, T. & Bales, R.F. (1956) *Family: Socialization and interaction process*. London: Routledge & Kegan Paul.

Pilkington, J. (1998) Don't try and make out that I'm nice! The different strategies women and men use when gossiping. In Coates, J. (ed.) *Language and gender: A reader*. Blackwell. pp.254-269.

Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In Atkinson, M.J & Heritage, J. (eds.) *Structure of social action: Studies in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 57-101.

Sacks, H. (1992) *Lectures on conversation: Volume2*. Cambridge: Blackwell.

Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50: 696-735.

Schegloff, E. A. (2007) *Sequence organization in interaction: Volume1: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973) Opening up closings. *Semiotica* 7: 289-327.

Schiffrin, D. (1984) Jewish argument as sociability. *Language in society* 13: 311-355.

Scollon, R. & Scollon, S. W. (1995) *Intercultural communication: A discourse approach*. Oxford: Blackwell.

Straehle, C. A. (1993) “Samuel?” “Yes, dear?”: Teasing and conversational rapport. In Tannen, D. (ed.) *Framing in discourse*. New York: Oxford University Press. pp.210-230.

Svennevig, J. (1999) *Getting acquainted in conversation: A study of initial interactions.* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Tannen, D. (1984) *Conversational style: Analysing talk among friends*. Ablex Norwood.

Tannen, D. (1986) *That's not what I meant!: How conversational style makes or breaks relationships*. New York: Ballentine.

Tannen, D. (1989) *Talking Voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tannen, D. (1990) Gender difference in topical coherence: Creating involvement in best friends’ talk. *Discourse processes* 13-1: 73-90.

Tannen, D. (2005) *Conversational style: Analysing talk among friends. Revised edition*. New York:

Oxford University Press.

Tannen, D. & Wallat, C. (1993) Interactive frames and knowledge schemas in interaction: Example from a medical examination interview. In Tannen, D. (ed.) *Framing in discourse*. New York: Oxford University Press. pp.57-76.

Van Dijk, T. A. (1993) Principles of critical discourse analysis. *Discourse and society* 4-2: 249-283.

Wooffitt, R. (1992) *Telling tales of the unexpected: The organization of factual discourse.* Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.

Yedes, J. (1996) Playful teasing: kiddin' on the square. *Discourse and society* 7-3: 417-438.

Zimmerman, D. H. & West, C. (1975) Sex roles, interruptions and silences in conversation. In Thorne, B. and Henley, N. (eds.) *Language and sex: difference and dominance.* Mass: Newbury house. pp.105-129.

付録―会話収録同意書―

調査へのご協力のお願い（同意書）

本研究を次のとおりにて実施いたします。研究の目的、データの扱いや公表をご理解いただき、本調査にご参加いただける場合は、本書にご署名をお願いいたします。

調査の目的

この研究は、日本語と韓国語の友人同士の会話を対照してそれぞれの会話にみられる特徴を明らかにすることを目的として、実施いたします。

談話データの扱い

収録いただいた会話データは研究目的以外に用いることはなく、守秘をお約束いたします。また、個人情報を保護するため、お名前などは研究データから取り除き、符号に置き換えて管理いたします。

調査結果の公表

調査結果は、学会報告、論文、報告書のデータとして使用させて頂きます。

研究内容に関するご質問は、以下の連絡先までご連絡ください。

張 允娥（ジャン　ユナ）
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程
E-mail:willyoubehere@gmail.com

参加に同意していただける場合は、下記にご署名をお願いいたします。

本研究に関する説明事項を理解し、会話収録への参加に同意します。

_____年　_____月_____日

署名_____